えんがるちょう
遠軽町

栄野（さかえの）1遺跡・新野上（しんのがみ）2遺跡

―社名淵瀬戸瀬（停）線（Ｂ７－10）局改工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成 16 年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

えんがるちょう
遠軽町

栄野（さかえの）1遺跡・新野上（しんのがみ）2遺跡

―社名淵瀬戸瀬（停）線（Ｂ７－10）局改工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成 16 年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

口絵

栄野１遺跡　出土土器

新野上２遺跡　Ｐ－３出土遺物

例　　言

1．この報告書は、道道社名淵瀬戸瀬（停）線（Ｂ７-10）局改工事に伴い、平成16年度に財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施した、遠軽町栄野１遺跡・新野上２遺跡の埋蔵文化財発掘調査に関するものである。

2．本書の作成は、第１調査部第３調査課が行った。執筆は髙橋和樹、鈴木宏行、直江康雄が分担し、各項目の文末に括弧で文責を示した。

3．作業の一部および年代測定・分析などは、下記の機関または個人に依頼した。

測量・基準杭設置：㈱オホーツク設計

石器実測：㈱トラスト技研

遺物写真撮影：㈲写真事務所クリーク（佐藤雅彦）

放射性炭素年代測定：㈱加速器分析研究所

炭化植物種子：㈱パレオ・ラボ

4．現地の写真撮影は調査員が随時行った。

5．出土遺物は、遠軽町教育委員会が、写真・実測図などの記録類は財団法人北海道埋蔵文化財センターが保管している。

6．調査にあたっては、下記の機関および人々の指導や協力を得た。（順不同・敬称略）

北海道教育委員会、遠軽町教育委員会、遠軽町先史資料館、遠軽町役場、白滝村教育委員会、北海道開拓記念館、常呂町埋蔵文化財センター、北見市北網圏文化センター、網走市立郷土博物館、紋別市立郷土博物館、美幌町立博物館、斜里町立知床博物館

木村英明、松村愉文、瀬下直人、宇田川　洋、福田正宏、武田　修、熊木俊郎、天野哲也、右代啓視、山田悟郎、川口嘉一郎、本吉春男、吉川文雄、加藤　碌、秋葉　實、寒河江洋一郎、瀬川拓郎、友田哲弘、向井正幸、太田敏量、松田　功、佐藤和利、小林　敬、小野　基、高畠孝宗、涌坂周一、北澤　実、山原敏朗、氏江敏文、鈴木邦輝、杉浦重信、澤田　健、椙田光明、福士廣志、内山真澄、西谷榮治、和田英昭、米村　衛、葛西智義、長谷山隆博、西　幸隆、松田　猛、石川　朗、豊原熙司、山本文男

記号等の説明

1．調査区域図、調査範囲・発掘区設定図、遺構位置図、遺物分布図などの縮尺は任意であり、全てスケールを付した。

2．発掘区の一辺は５ｍである。方位記号は平面直角座標の北を、レベルは標高（単位はｍ）を示す。

3．基本土層図や柱状模式図、土層断面図の縮尺は、1：40である。

4．土層の表記は、基本土層についてはローマ数字で、遺構の覆土についてはアラビア数字で示した。攪乱層等についてはアルファベットを用いた部分がある。

5．土色の説明には『新版　標準土色帖24版』（小山・竹原2002）を利用した。

6．遺構等の表示には、土壙：P、フレイク集中：Fc の省略記号を使用し、原則として確認順に番号を付した。遺構図の縮尺は基本的に１：40である。

7．遺構の規模については、以下の方式で計測値を示した。なお、一部破壊されているものについては現存長を（　）、不明のものは―で示した。

確認面での長軸長×短軸長／底面での長軸長×短軸長／確認面からの最大深（単位ｍ）

8．掲載した遺物の実測図・拓本、写真図版等の縮尺は、土器、石器ともに基本的に１：２である。

9．遺物分布図では、以下の記号を用いた。

▲：土器　　●：石器

10．石質は掲載遺物一覧表に示したが、黒曜石については、以下の５種類に分けて示した。

黒曜石１：黒色　　黒曜石２：梨肌（黒色）　　黒曜石３：黒色に茶色が混じる（黒＞茶）

黒曜石４：茶色に黒色が混じる（茶＞黒）

黒曜石５：黒色に紫がかった茶色が混じる（黒＞紫・茶）

11．黒曜石以外の石質については下記の略号を用い、実測図番号の下にそれぞれの石質を略号で示した。

珪質頁岩：Si-Sh　　めのう：Ag　　泥岩：Mu　　片岩：Sch　　砂岩：Sa　　碧玉：Ja

珪岩：Qu　　凝灰岩：Tu　　安山岩：An　　粘板岩：Sl

目　　次

口絵（巻頭カラー図版）
例言・記号等の説明
目次・挿図目次・表目次・図版目次

Ⅰ　調査の概要 …… 1
1　調査要項 …… 1
2　調査体制 …… 1
3　調査に至る経過 …… 1
4　調査概要 …… 2
(1)　発掘区の設定 …… 2
(2)　調査の方法 …… 4
(3)　整理・報告書の作成 …… 8
(4)　遺構・遺物の分類 …… 10
(5)　調査結果の概要 …… 13
Ⅱ　遺跡の位置と周辺の環境 …… 15
1　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 15
2　遺跡周辺の地形と地質 …… 20
3　基本土層 …… 23
Ⅲ　栄野１遺跡の調査 …… 25
1　調査の概要 …… 25
2　遺構と出土遺物 …… 27
3　発掘区出土遺物 …… 27
(1)　土器 …… 27
(2)　石器 …… 31
(3)　分布 …… 38
Ⅳ　新野上２遺跡の調査 …… 45
1　調査の概要 …… 45
2　遺構と出土遺物 …… 51
3　発掘区出土遺物 …… 73
(1)　土器 …… 73
(2)　石器 …… 86
(3)　分布 …… 99
Ⅴ　自然科学的分析等 …… 115
1　放射性炭素年代測定結果 …… 115
2　新野上２遺跡から出土した炭化種実 …… 118
Ⅵ　まとめ …… 121
1　遺構 …… 121

2　土器 ……122
3　石器 ……123
引用・参考文献 ……127
写真図版

挿図目次

図Ⅰ－1　調査範囲・発掘区設定図 …… 3
図Ⅰ－2　調査区の表示 …… 5
図Ⅰ－3　新野上２遺跡における調査範囲の変更と地区割 …… 5
図Ⅰ－4　石鏃・石核細分類、計測の基準 …… 11
図Ⅱ－1　遺跡の位置 …… 17
図Ⅱ－2　遠軽町内の遺跡 …… 19
図Ⅱ－3　遺跡付近の地形・地質 …… 21
図Ⅱ－4　基本土層模式図 …… 23
図Ⅲ－1　基本土層・断面図 …… 26
図Ⅲ－2　発掘区域地形図・Fc－１平面図・土層・遺物 …… 28
図Ⅲ－3　発掘区出土土器(1) …… 29
図Ⅲ－4　発掘区出土土器(2) …… 30
図Ⅲ－5　発掘区出土石器(1)　石鏃・石槍 …… 32
図Ⅲ－6　発掘区出土石器(2)　ナイフ・つまみ付きナイフ・石槍またはナイフ・両面調整石器 …… 33
図Ⅲ－7　発掘区出土石器(3)　両面調整石器・スクレイパー・掻器 …… 35
図Ⅲ－8　発掘区出土石器(4)　掻器・石核 …… 36
図Ⅲ－9　発掘区出土石器(5)　石核 …… 37
図Ⅲ－10　発掘区出土遺物の器種別分布図(1) … 39
図Ⅲ－11　発掘区出土遺物の器種別分布図(2) … 40
図Ⅲ－12　発掘区出土遺物の器種別分布図(3) … 41
図Ⅳ－1　土層柱状図(1) …… 46
図Ⅳ－2　土層柱状図(2) …… 47
図Ⅳ－3　土層断面図(1) …… 48
図Ⅳ－4　土層断面図(2) …… 49
図Ⅳ－5　発掘区域地形図・遺構位置図 …… 52
図Ⅳ－6　Ｐ－１・２平面図・土層・遺物 …… 53
図Ⅳ－7　Ｐ－３平面図・土層・遺物(1) …… 54
図Ⅳ－8　Ｐ－３遺物(2) …… 55
図Ⅳ－9　Ｐ－４平面図・土層・分布図 …… 58
図Ⅳ－10　Ｐ－４遺物 …… 59
図Ⅳ－11　Ｐ－５平面図・土層・分布図・遺物… 60
図Ⅳ－12　Ｐ－６～８平面図・土層・遺物 …… 61
図Ⅳ－13　Ｐ－９・10平面図・土層・遺物 …… 64
図Ⅳ－14　Ｐ－10分布図・遺物 …… 65
図Ⅳ－15　Ｐ－11平面図・土層・分布図・遺物… 66
図Ⅳ－16　Ｐ－12～15平面図・土層・遺物 …… 68
図Ⅳ－17　Fc－１～３平面図・土層・分布図 … 70
図Ⅳ－18　Fc－３遺物、Fc－４平面図・遺物… 71
図Ⅳ－19　発掘区出土土器(1) …… 74
図Ⅳ－20　発掘区出土土器(2) …… 76
図Ⅳ－21　発掘区出土土器(3) …… 78
図Ⅳ－22　発掘区出土土器(4) …… 80
図Ⅳ－23　発掘区出土土器(5) …… 82
図Ⅳ－24　発掘区出土土器(6) …… 83
図Ⅳ－25　発掘区出土土器(7) …… 85
図Ⅳ－26　発掘区出土石器(1)　石鏃・石槍 …… 87
図Ⅳ－27　発掘区出土石器(2)　石槍 …… 88
図Ⅳ－28　発掘区出土石器(3)　ナイフ・石槍またはナイフ・つまみ付きナイフ・両面調整石器 …… 90
図Ⅳ－29　発掘区出土石器(4)　両面調整石器・スクレイパー …… 91
図Ⅳ－30　発掘区出土石器(5)　スクレイパー … 92
図Ⅳ－31　発掘区出土石器(6)　スクレイパー・掻器・錐形石器・楔形石器 …… 93
図Ⅳ－32　発掘区出土石器(7)　石核 …… 94
図Ⅳ－33　発掘区出土石器(8)　石核 …… 96
図Ⅳ－34　発掘区出土石器(9)　石刃核・石斧 … 97
図Ⅳ－35　発掘区出土石器(10)　石斧・砥石・原石・台石 …… 98
図Ⅳ－36　発掘区出土遺物の器種別分布図(1) …101
図Ⅳ－37　発掘区出土遺物の器種別分布図(2) …102
図Ⅳ－38　発掘区出土遺物の器種別分布図(3) …103
図Ⅳ－39　発掘区出土遺物の器種別分布図(4) …104
図Ⅳ－40　発掘区出土遺物の器種別分布図(5) …105

表　目　次

表Ⅰ－１　遺構・遺物一覧 …… 12
表Ⅱ－１　遠軽町の遺跡一覧 …… 18
表Ⅱ－２　地質図凡例 …… 22
表Ⅲ－１　栄野１遺跡出土遺物 遺構・層位・石質別一覧 …… 42
表Ⅲ－２　栄野１遺跡　掲載土器一覧 …… 43
表Ⅲ－３　栄野１遺跡　掲載単品一覧 …… 44
表Ⅳ－１　新野上２遺跡遺構一覧 …… 72
表Ⅳ－２　新野上２遺跡出土遺物 遺構・層位・石質別一覧……106・107
表Ⅳ－３　新野上２遺跡　掲載土器一覧…108・109
表Ⅳ－４　新野上２遺跡　掲載単品一覧…110～113

図版目次

図版１　空中写真
栄野１・新野上２遺跡
図版２　遺跡遠景
１　遺跡遠景（南西から）
２　遺跡遠景（北から）
図版３　調査状況(1)
１　包含層調査（東から）
２　包含層調査（北東から）
図版４　調査状況(2)・土層断面・遺構
１　包含層調査（Ｊ12区、南から）
２　調査終了（北西から）
３　Ｋ12区東壁（西から）
４　Fc－１検出状況（Ｌ16区、南東から）
５　Fc－１断面（Ｌ16区、北東から）
図版５　遺物出土状況
１　木根検出状況（Ｋ・Ｌ12区、北から）
２　木根断面（Ｋ・Ｌ12区、北から）
３　木根土器出土状況（Ｋ・Ｌ12区、北から）
４　木根土器出土状況（Ｋ・Ｌ12区、北から）
５　木根完掘（Ｋ・Ｌ12区、北から）
６　Ⅰ層土器出土状況（Ｊ13区、東から）
７　Ⅰ層石槍出土状況（Ｋ14区、西から）
８　台風18号による倒木（東から）
図版６　発掘区出土土器
土器
図版７　Fc－１・発掘区出土石器(1)
石鏃・石槍・ナイフ・つまみ付きナイフ・石槍またはナイフ・両面調整石器
図版８　発掘区出土石器(2)
両面調整石器・スクレイパー・掻器・錐形石器・石核
図版９　調査状況(1)
１　調査前（西から）
２　調査前（50ライン以東、西から）
３　Ⅰ層調査（50ライン以東、東から）
４　北電水路部調査（西から）
５　東側包含層調査（43～50ライン、西から）
図版10　調査状況(2)
１　調査終了（43～50ライン、北西から）
２　Ⅰ層調査（33～40ライン、西から）
３　最終面検出状況（33～40ライン、西から）
４　Ⅰ層調査（22～31ライン、東から）
５　遺構調査（西から）
６　Ⅰ層遺物採集状況（北東から）
７　Ⅰ層遺物採集状況（東から）
８　栄野会館解体作業（北から）
図版11　調査状況(3)
１　最終面検出状況（22～31ライン、南東から）
２　最終面検出状況（29～42ライン、西から）
３　調査終了（西から）
４　埋め戻し終了（西から）
図版12　土層断面・遺構(1)
１　Ｋ40区北壁（南から）
２　Ｍ46区北壁（北から）
３　調査区西端露頭（西から）
４　Ｐ－１断面（Ｍ43区、南から）
５　Ｐ－１完掘（Ｍ43区、南東から）
６　Ｐ－２断面（Ｌ44区、西から）
７　Ｐ－２完掘（Ｌ44区、南西から）
図版13　遺構(2)
１　Ｐ－３検出状況（Ⅰ24区、東から）
２　Ｐ－３検出状況（Ⅰ24区、東から）
３　Ｐ－３完掘（Ⅰ24区、北から）
４　Ｐ－３石器出土状況（Ⅰ24区、北東から）
５　Ｐ－３断面（Ⅰ24区、東から）
６　Ｐ－３壙底（Ⅰ24区、北から）
７　Ｐ－４断面（Ｐ28区、西から）
図版14　遺構(3)
１　Ｐ－４土器出土状況（Ｐ28区、西から）
２　Ｐ－４完掘（Ｐ28区、東から）
３　Ｐ－５断面（Ｋ25区、北から）
４　Ｐ－５完掘（Ｋ25区、西から）

5　Ｐ－６断面（Ｉ30区、北から）
6　Ｐ－６完掘（Ｉ30区、北から）
7　Ｐ－７断面（Ｌ35区、西から）
8　Ｐ－７完掘（Ｌ35区、東から）
図版15　遺構(4)
1　Ｐ－８断面（M35区、西から）
2　Ｐ－８完掘（M35区、東から）
3　Ｐ－９検出状況（O29・30区、北から）
4　Ｐ－９完掘（O29・30区、北から）
5　Ｐ－10断面（Ｉ30区、西から）
6　Ｐ－10完掘（Ｉ30区、東から）
7　Ｐ－11断面（Ｋ・Ｌ30区、南から）
8　Ｐ－11完掘（Ｋ・Ｌ30区、東から）
図版16　遺構(5)
1　Ｐ－12～15検出状況（M・N33区、北から）
2　Ｐ－12断面（N33区、北から）
3　Ｐ－13断面（M33区、北から）
4　Ｐ－12・13完掘（M・N33区、東から）
5　Ｐ－14断面（M33区、西から）
6　Ｐ－14完掘（M33区、北から）
7　Ｐ－15断面（M33区、北から）
8　Ｐ－15完掘（M33区、北から）
図版17　遺構(6)・遺物出土状況
1　Ｐ－12～15完掘（M・N33区、北から）
2　Fc－１検出状況（M46区、南から）
3　Fc－２検出状況（M46区、南西から）
4　Fc－３石斧･石核出土状況（N47区、北から）
5　Ⅱ層土器出土状況（H23区、北西から）
6　Ⅱ層ナイフ出土状況（H23区、南から）
7　遠軽町親子体験発掘
8　台風18号による倒木（北から）
図版18　遺構出土土器(1)
Ｐ－１・５・10・11出土土器
図版19　遺構出土土器(2)
Ｐ－４出土土器
図版20　遺構出土石器(1)
Ｐ－１～４出土石器
図版21　遺構出土石器(2)
Ｐ－５・６・９～11･14、Fc－３・４出土石器
図版22　発掘区出土土器(1)
土器
図版23　発掘区出土土器(2)
土器
図版24　発掘区出土土器(3)
土器
図版25　発掘区出土土器(4)
土器
図版26　発掘区出土土器(5)
土器
図版27　発掘区出土石器(1)
石鏃・石槍
図版28　発掘区出土石器(2)
ナイフ・石槍またはナイフ・つまみ付きナイフ・両面調整石器・スクレイパー
図版29　発掘区出土石器(3)
スクレイパー・掻器
図版30　発掘区出土石器(4)
掻器・錐形石器・楔形石器・石核
図版31　発掘区出土石器(5)
石刃核・石斧・砥石・原石・台石

Ⅰ　調査の概要

1　調査要項

事 業 名　　道道社名淵瀬戸瀬（停）線（Ｂ７－10）局改工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
委 託 者　　北海道網走支庁
受 託 者　　財団法人北海道埋蔵文化財センター

遺 跡 名	道教委登載番号	所 在 地	調査面積	備　　考
栄 野 1 遺 跡	Ⅰ－18－29	紋別郡遠軽町栄野402	600m²	
新野上２遺跡	Ⅰ－18－10	紋別郡遠軽町栄野411	（変更後）2,140m²	当初計画2,200m²
			計2,740m²	

調査期間　平成16年５月21日～平成17年３月31日
（現地調査　平成16年７月２日～平成16年９月30日）

2　調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター
理　事　長　森重　楯一
専 務 理 事　宮崎　　勝
常 務 理 事　佐藤　俊和
総 務 部 長　佐藤　英一
第１調査部長　千葉　英一

第１調査部第３調査課
課　　長　髙橋　和樹（発掘担当者）
主　　任　鈴木　宏行（発掘担当者）
主　　任　直江　康雄（発掘担当者）

3　調査に至る経過

道道社名淵瀬戸瀬（停）線は、遠軽町瀬戸瀬東町で国道333号から分岐し、JR 石北本線沿いに湧別川左岸を延びたあと、JR 新栄野駅付近で山側に折れ、隠沢、若松地区を経由して遠軽町社名淵地区と結ばれている。この道道社名淵瀬戸瀬（停）線において、カーブを緩和し、アップダウンを解消するなどの総合的な線形改良と歩道の設置を目的とする道路改良工事が計画され、平成７年11月、網走土木現業所（以下「土現」と略称）遠軽出張所長から北海道教育委員会（以下「道教委」と略称）教育長あてに埋蔵文化財保護のための事前協議書が提出された。

平成８年６月には道教委文化課によって、路線にかかる埋蔵文化財包蔵地の所在確認調査が行われ、平成９年９月には湧別川右岸の瀬戸瀬１遺跡（Ⅰ－18－11）や、新たに所在が確認された対岸の栄野５遺跡（Ⅰ－18－46）において、本線部分における範囲確認のための試掘調査が実施された。JR の踏

切にかかる一部の範囲確認調査については、遅れて平成11年９月に行われた。それらの結果、両遺跡にかかる工事区では、既存の道路や畑等によって包含層が著しく破壊され、遺物量も少ないことが判明し、工事に際しては、遺物収集のための工事立会が必要と判断された。この協議回答を受けて、湧別川を挟む地区では、救世橋の架け替え工事を伴う大掛りな道路改良工事が進められ、工事立会範囲については、遠軽町教育委員会が平成15年６月から７月にかけて立会を実施し、ここでの道路改良工事は既に終了している。

工事はさらに北東へと移り、新野上１遺跡や新野上２遺跡、栄野１遺跡が所在する段丘上に迫ってきた。新野上１遺跡は、1940年代には地元でその存在が知られており、1950年代には明治大学による学術発掘調査が行われたという。さらに昭和63年度には遠軽町教育委員会によって、道道社名淵瀬戸瀬（停）線の凍雪害防止工事に伴う600m² 程の発掘調査が実施されている（米村1989）。JR 石北本線の線路を挟んだそのすぐ南側には、今回の調査対象地となった新野上２遺跡や栄野１遺跡が分布することが比較的古くから知られており、栄野１遺跡では、昭和53年度に遠軽町教育委員会による範囲確認調査が実施され、段丘平坦部の全域が続縄文文化期初頭を主体とする遺跡であることが確認されている（米村1979）。

道路改良工事のルートは、この栄野１遺跡、新野上２遺跡を貫通する計画であり、平成15年５月文化課による範囲確認のための試掘調査が行われた。その結果、栄野１遺跡では、かつての耕作によって遺物包含層の大部分が攪乱されているものの、山林のため遺物の散逸は少ないこと、新野上２遺跡でも耕作による包含層の破壊は大きいが、遺物量は数十万点と予測され、東部の盛土下には包含層も残存することなどが判明し、工事に際しては記録保存のため事前の発掘調査が必要と判断された。土現側からは、道路改良工事は継続して進行中で、路線変更などの計画変更は困難であり、発掘調査が必要ならば、平成16年度中に実施してほしいとの要望が提示された。

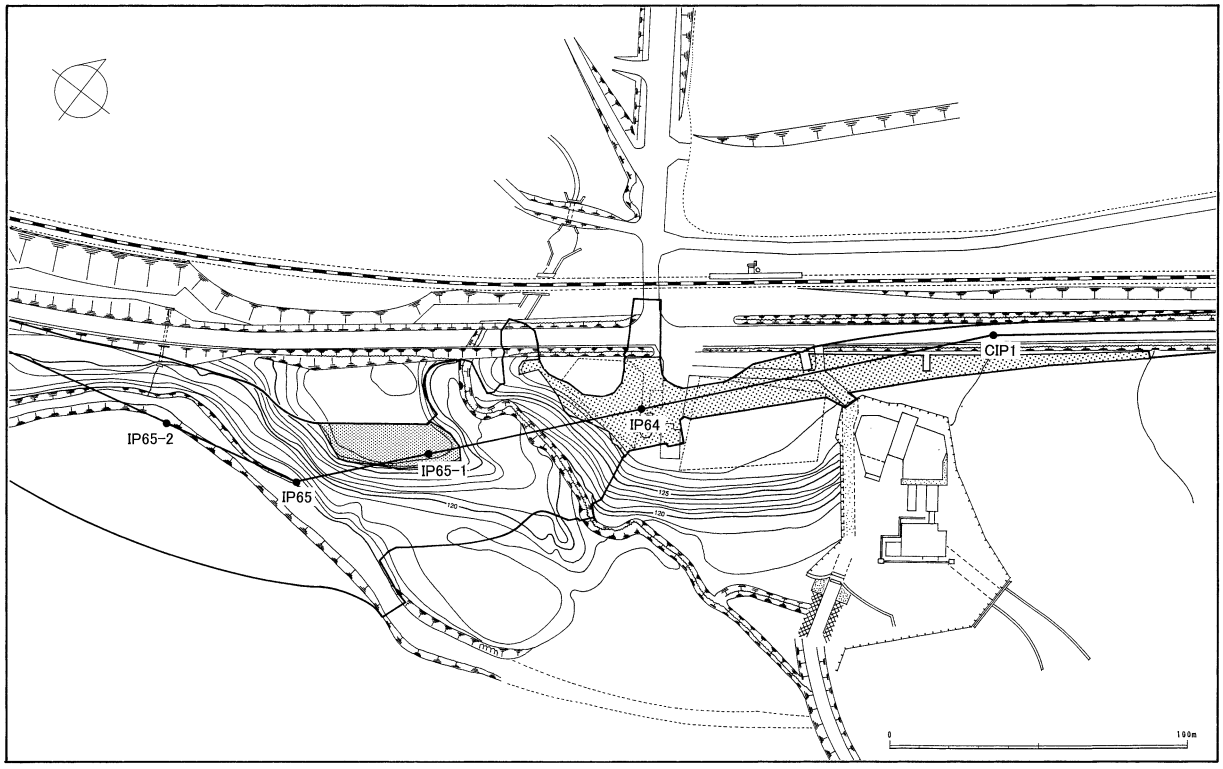
発掘調査については、遠軽町教育委員会には専門職員が配置されておらず、独自には調査体制が組めないため、㈶北海道埋蔵文化財センターが受託することになった。現地調査については、栄野１遺跡における落葉松林の伐採、搬出、新野上２遺跡内に建つ栄野会館の解体など、時間的な調整を要する問題があり、調査の開始は７月まで待つことになった。また、北海道電力㈱（以下「北電」と略称）湧別川発電所に北隣する一帯は未買収の北電用地であり、埋設送水管や通路が調査区内を横切っているため、それらの保全に配慮し、北電と打合せを重ねながら調査を進める必要があった。

なお、新野上２遺跡については、当初2,200m² の調査を予定していたが、調査開始後に佐藤川に面するＩ－23区を主体とするあたりの調査区西端部分35m² 程が、前年度のボックス・カルバート工事によって削土、破壊されていることが判明し、さらに、Ｋ・Ｌ－41区およびＭ・Ｎ－49区にかかる２カ所では電柱や控え線があって計25m² が調査できなかった。そのため、調査面積は合計で60m² 減の2,140m² となった（図Ｉ－３）。（髙橋和樹）

４　調査概要

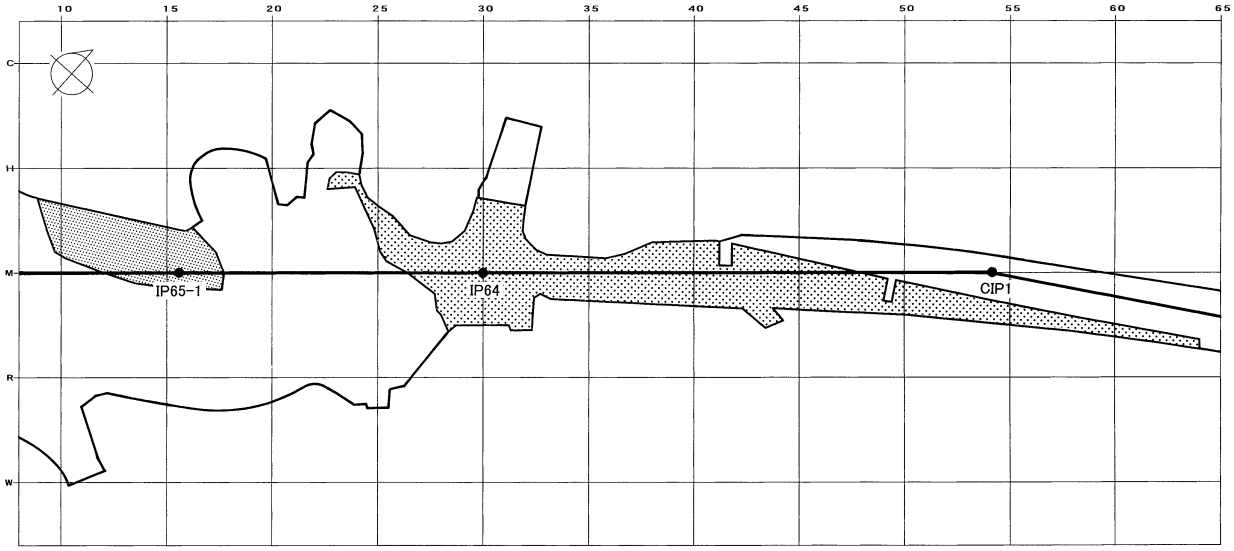
（１）　発掘区の設定

栄野１遺跡の西端から新野上２遺跡の東端まで、今回の発掘調査対象地は延長約280m に及ぶ細長い区域であり、ここに発掘区として共通のメッシュをかけるため、１：1000工事用平面図の IP No.64 を基準点とし、IP No.64 と IP No.65 を結び、町道 IP No.1 とも連なる直線を基軸とする５×５ｍ規格の方眼を設定した。方眼の北（北東）―南（南西）方向には、基軸を通る直線をＭとするアルファベッ



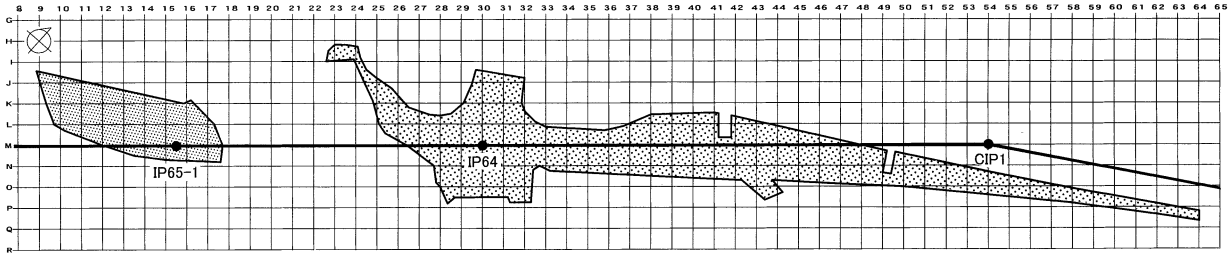
調査範囲・周辺の地形図

栄野1遺跡　新野上2遺跡



発掘区設定図(1)

栄野1遺跡　新野上2遺跡　0　(1:1800)　50m



発掘区設定図(2)

栄野1遺跡　新野上2遺跡　0　(1:1800)　50m

図Ⅰ－1　調査範囲・発掘区設定図

トの大文字を５ｍ毎に北から順に付し、東（東北）―西（西南）方向には、IP No.64 を通る直線を30とするアラビア数字を５ｍ毎に西方から順に付した。各調査区の名称は、５×５ｍメッシュの北西隅の交点におけるアルファベットとアラビア数字を組み合わせた記号によって表示した（図Ｉ－１・２）。東―西方向での８～17の範囲内に栄野１遺跡の調査区が入り、22～63の範囲内に新野上２遺跡の調査区がおさまる。基準点や代表的なグリッド杭の座標値は、以下の通りである。

IP No.64	X＝2605.594	Y＝96726.134	
IP No.65	X＝2516.239	Y＝96684.607	
町道 IP No.1	X＝2696.585	Y＝96841.080	
M－12	X＝2537.614	Y＝96703.153	
M－13	X＝2541.391	Y＝96706.430	
M－14	X＝2545.168	Y＝96709.706	
M－15	X＝2548.944	Y＝96712.983	
M－16	X＝2552.721	Y＝96716.260	
M－17	X＝2556.498	Y＝96719.537	
M－29	X＝2601.817	Y＝96758.857	
M－34	X＝2620.701	Y＝96775.241	
M－39	X＝2639.584	Y＝96791.624	
N－44	X＝2655.190	Y＝96811.785	
N－49	X＝2674.073	Y＝96828.169	
O－54	X＝2689.681	Y＝96848.328	（平面直角座標系　第ⅩⅡ系）

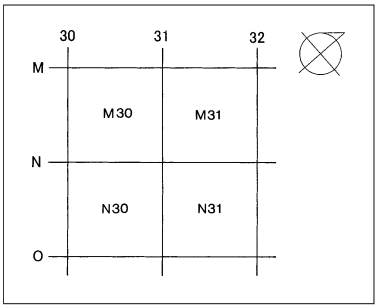
また、真北に対する発掘区基軸の角度（方位角）は41°47′05″東偏しており、殆ど45°に近く傾いているが、本報告書中では便宜的に、発掘区基軸を水平に据えたときの上方を北、下方を南、右側を東、左側を西と、呼び慣わしている。（髙橋和樹）

（２）　調査の方法

調査の方法は、発掘開始時の現況や包含層の残存状況、優先的に調査を進める必要がある地区の存在等によってそれぞれ異なったため、以下に栄野１遺跡、新野上２遺跡の順で個別に説明する。

栄野１遺跡には樹齢30年を超える落葉松が植林されて、鬱蒼たる山林をなしていた。この落葉松材は旧土地所有者らが伐木、利用するということで、その伐採、搬出の終了を待って、調査の準備に着手した。栄野１遺跡については、昭和53年度に遠軽町教育委員会が実施した範囲確認調査により、遺物の出土層位は全て第１層（黒色腐植土）下部とされ（米村1979）、平成15年度の文化課の試掘調査結果でも、遺物は植林以前の耕作によって攪乱された表土層中に遺存しており、プライマリーな遺物包含層は殆ど消失していることが判明していた。また、遺物は続縄文時代の土器片が少量で、大部分が黒曜石製の石器や剝片類であることも予測されており、これらの遺物の採集が発掘調査の主眼とされた。

落葉松伐採後の用地には大きな切株が多数残されており、調査開始以前にまずこれらを除去する必要があった。包含層が殆ど破壊されていると判断された上述の状況から、抜根には重機（バックホー）を利用した。重機導入に先立って、調査区の基軸を通る基準杭と調査範囲を示す境界見出し杭を打設



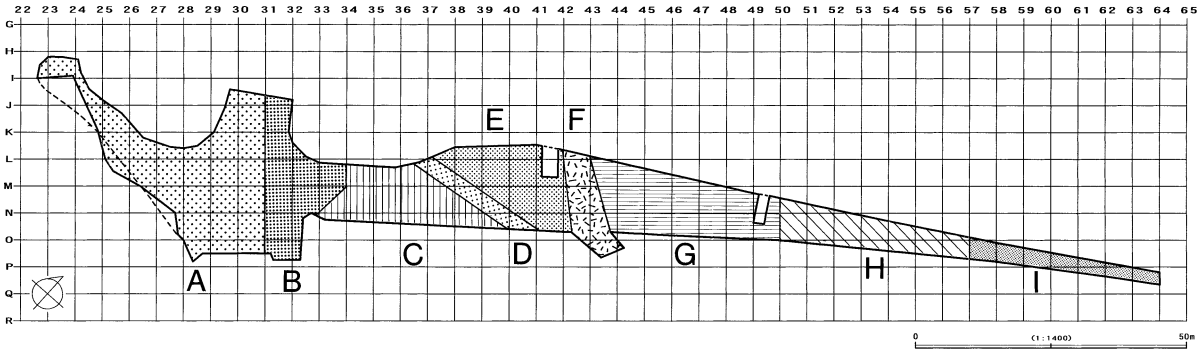
図Ⅰ－2　調査区の表示

する測量調査を委託し、区画が判明した調査区内の切株を重機によって除去し、キャリアダンプに積んで調査区外に搬出、集積した。この抜根作業によっても落葉松の支根・細根や下生えの笹根などが多量に残って、人力による掘開に大きな支障があったため、さらに重機に除礫用バケットを装着して上土を掬いとり、その場でふるい分けて、これらの根を除去する作業を行った。

抜根作業が一段落してから、改めて調査区内に５×５ｍの方眼杭を打ち、グリッド単位で人手による発掘調査を開始した。調査の手順としては、基本的に、まず25％調査の実施を進めたが、600m² と調査面積が狭いため、すぐに全面的な展開に移行した。土層については、Ｌライン、13ラインをそれぞれメインセクションラインに設定して、堆積状況を観察し、土層断面図を作成した（図Ⅲ－１）。また、発掘調査終了面については、１ｍ毎に全域の水準測量を実施し、50cm コンタで最終面の地形図を作成した（図Ⅲ－２）。

遺物の出土層位はⅠ層が主体であり、Ⅰ層の遺物はグリッド毎に一括して取り上げた。部分的に残存するⅡ層の遺物についても、出土状態を観察のうえ、遺構に関連しない場合は、Ⅱ層としてグリッド毎に一括して取り上げた。栄野１遺跡における遺構はFc－１のみの検出であったが、遺物の出土範囲やレベルを図化、計測のうえ、フレイク類を土ごと一括して採取し、水洗処理した。

新野上２遺跡の調査区は、東西210m にわたる狭長な範囲であり、遺跡の保存状況も一様ではなく、現況も荒蕪地、栄野会館敷地、道路敷、北電用地、畑地など様々であった。調査に関わる条件にも地区別にいろいろな制約を伴ったケースがあり、最終的には調査区を９カ所に分割して、優先順位に従って発掘を進めた。その分割した９カ所を西から順にＡ～Ｉ地区と仮称し（図Ⅰ－３）、それぞれにおける調査方法について以下に説明する。調査に先立って、地籍境界杭や調査区境界の見出し杭を打設する測量調査を委託し、通路以外に繁茂する草木については、伐開工事を委託して、調査区の設定や重機の導入に備えた。土層については、Ｍライン、30・40・50・60ラインのそれぞれをメインセクションラインに設定して、堆積状況の観察に努め、土層断面図を作成したが（図Ⅳ－１～４）、土層の大部分は表土や盛土主体のⅠ層であり、セクションベルトは残さずに重機による掘開を進めた所も多く、殆ど断面実測を省略して、地表面および最終面のレベル測定値に基づいて、断面図を図化したケース



当初計画調査範囲　2,200m²

変更後の調査範囲　2,140m²

図Ⅰ－３　新野上２遺跡における調査範囲の変更と地区割

が多い。ただ、５ｍ毎の柱状図の大部分は、グリッド杭の周囲に残された土層の観察、実測に基づいて作成した。発掘調査終了面については、栄野１遺跡と同様、１ｍ毎に全域の水準測量を行い、50cmコンタで最終面の地形図を作成した（図Ⅳ－５）。調査終了後の調査区は、Ａ地区の南西部を除いて埋め戻し、通路部には砂利を敷くなど、必要な復旧工事を行った。また、Ｐ－３の埋土など、遺構に関連する土壌の一部については、現場で平面・断面図等の記録を作成したうえ、層ごとにビニール袋に試料を採取し、自然乾燥させたのち、フローテーション法（浮遊物を0.425mmと２mmメッシュで、沈殿物を１mmメッシュの土壌分析用の篩で選別）による選別作業を行い、微細遺物を抽出した。そのうちの炭化材については年代測定に利用し、炭化植物種子については種の同定を依頼したものがある。

Ａ地区：31ラインより西の新野上２遺跡西端部、640m²。現況は雑草や笹、灌木等におおわれた荒蕪地。試掘調査結果から、遺物包含層はかつての耕作により殆ど破壊されているが、耕作土主体のＩ層は50～60cmと厚く、石器･石片類を主体に大量の遺物を含むことが知られており、今回の調査では最も遺構、遺物の検出が期待された地区である。Ｉ層は耕作等によって攪乱された土層であり、遺物の回収には、重機を併用する方法を採用し、省力化を図った。まず７月中旬に、草木や笹の根を除去するため、重機によって表層土５cm程をすき取った後、５×５ｍの調査区方眼杭を打設した。また、栄野会館西方前庭の花壇に盛られた庭土には、黒曜石片など多数の遺物が混在しており、この盛土についてはそっくり調査区外に搬出し、遺物回収の対象とした。さらに、Ｊ－24区には高圧電柱の控えワイヤーが埋設されていて、調査に支障があったため、北電に移設を要請し、移設工事は７月22日に行われた。これらの準備工程を経て、７月末に再度重機を導入して、グリッド単位で順次Ｉ層を掘開、キャリアダンプに積み込んで、それぞれ調査区外に搬送、山積み、仮置きした。山積みしたＩ層は、人手で崩しながら遺物を探したが、このＩ層の遺物回収作業には、８月初旬から９月中旬までの期間を要した。これに併行してＡ地区では、調査区内最終面のクリーニング作業を行い、遺構の検出、精査に努めるとともに、Ｈ－23・24区南側などに残存したⅡ層の包含層調査を行った。さらに、危険防止のため幅50cm程度のクリアで地表面から掘り残していた調査区西縁部についても、崖沿いに少なからず遺構、遺物の遺存が予測されたため、安全に配慮しつつ、人手によって掘開調査を敢行した。

Ｂ地区：31から33ラインにかけての栄野会館敷地や通路部分を主体とする地区で、240m²。Ｎ～Ｏ－31区には地域住民が集う栄野会館が建っており、調査直前まで利用されていたが、７月13～14日、会館の解体、撤去工事が実施された。Ｂ地区およびＥ地区以東は、試掘調査結果により、Ｉ層は攪乱盛土が主体で、遺物の混在は少なく、下にⅡ層がどの程度分布し、遺構、遺物がどの程度残されているのかを確認するのが、調査のねらいであるとされた地区である。８月初旬、重機によってＩ層を掘開、立会によって、遺物回収作業の必要は殆どないと判断し、この地区のＩ層はダンプカーに積んで搬出した。層厚は南半部では40～50cm、通路側の北半部ではより厚く50～60cm程に達した。北側の調査区境界線付近を主体に、層厚10cm程度のⅡ層の分布がみられたが、不用意に重機によって削平されてしまった部分もあったりして、人手によるⅡ層の調査は殆ど実施できなかった。しかし、重機作業の過程における観察などでも、この地区のⅡ層における遺物の包含はごく僅かなものに過ぎないことが知られたし、遺構の検出も全くなかった。栄野会館周辺やその前庭部の通路部分では、道路工事などのため、大正年間から簡易な宿泊施設や、作業小屋などの建物が少なからず建てられたようであり、クリーニング後の調査終了面には、数多くの攪乱穴や溝などが残されていた。

Ｃ地区：33ライン付近から北電水路までの中央部西寄りの地区、210m²。試掘調査の結果では、Ａ地区に次いでＩ層の遺物量が多いと判断された地区であり、基本的にＡ地区と同じ調査方法をとった。ただ、大半は栄野会館と北電発電所を結ぶ道路部分にあたっており、草根等の除去作業は必要なく、

５×５ｍ方眼杭の打設後、７月末に重機によって層厚40cm内外のⅠ層を地表面からグリッド単位で掘開し、キャリアダンプで調査区外に搬出、山積みした。人手による遺物回収作業は７月末から８月中旬過ぎにかけて実施した。併行して、終了面のクリーニング作業を行い、遺構を確認、精査した。Ｂ地区同様、北側の調査区境界線付近を主体に、層厚10cm程度のⅡ層の分布がみられたが、調査区内での分布は狭い範囲にとどまっており、Ⅱ層における遺物の包含も殆ど認められなかった。

Ｄ地区：約1.7km上流の湧別川ダムから続く、北電の発電用送水管が埋設されている地区で、60m²。送水管は大正13年に建造されたコンクリート製の古いもので、どの程度強度があるか覚束ないため、送水管上での重機作業は管を破損する危険があり、禁止すると北電側から予め通告されていた。埋土にどのくらい遺物が混在しているものか、確かめる必要があり、北電が発電所の検査のために送水を止めるという７月８日に合わせて、即日調査することで合意し、1：1000工事用平面図から現地表面上における大凡の水路の位置を割り出すなど、準備作業を進めた。当日は、北電、土現立会のもと、重機が送水管の上に乗らないよう安全に注意を払いつつ、傍らからアームをのばして送水管上部の埋土を掘開した。送水管は地表下130cmに埋設されているとされるが、遺物を含む耕作土混じりの表層の埋土は厚さ40～50cm程で、その下の砂礫混じりの汚れた粘土主体層には、殆ど遺物が含まれていないことを確認し、それ以上の掘削は中断した。表層の埋土はキャリアダンプに積んで調査区外へ搬送、仮置きし、後日、人手で遺物の回収作業を実施したが、遺物量はそう多いものではなかった。

Ｅ地区：水路北側、236m²。湧別川発電所に北隣するＥ～Ｇ地区は、やや低く窪んだ地形がみられる一帯で、比較的よくⅡ層が残っていたが、昭和40年代まで北電の宿舎が建っていたり、井戸があったり、大正年間から発電所の建設や送電、維持管理に関連した諸施設が繰り返しつくられたようで、さまざまな攪乱がみられる土地だった。近年これらの跡地が、廃棄物とともに粘土層などで埋め立てられたようで、厚い盛土がⅠ層の主体をなしている。Ｅ地区におけるⅠ層は、８月初旬に重機によって除去し、ダンプカーに積んで搬出した。その下のⅡ層のうち、Ｌ～Ｍ－39～41区にかけて東西方向に帯状に残っていたⅡ層は、南縁が水路に切られていたほか、少なからぬ攪乱が刻まれおり、重機によって大凡のグリッド単位で掘りあげ、それぞれ調査区外に仮置きして、人手による遺物回収作業を行った。Ｋ～Ｍ－41区あたりのⅡ層は、やや窪んだ地形に沿って分布するもので、残存状態も良く、層厚も厚めで、人力によって掘り下げた。遺物は点在する黒曜石片が主体で、とくに個々に出土位置は記録せず、グリッド単位で一括して取り上げた。なお、電柱（51）と控えが配備された部分は、調査期間内における電柱移設の計画がなく、調査できなかった。

Ｆ地区：湧別川発電所通路部、115m²。当初、緊急車両の通行が可能なように、片側ずつ調査するよう要請があったが、調査を先行したＧ地区の１ｍもの盛土がおおう状況からみて、掘削深度は1.5m以上に及ぶことが予想され、安全な法面の傾斜角度を維持しながら片側ずつ掘ることは、とうてい困難と判断された。一気に掘ってしまう方法について北電側は難色を示したが、１日で掘開、調査を終え、現状復元するという条件で、また雨や増水がないこと、緊急事態対応が可能なことの２条件付きで、７月30日ならばよいという許可を得た。当日は幸い好天で、重機でⅠ層を除去、搬出したが、Ｆ地区南半は深く抉られて、大きな基礎コンクリート塊などが埋められており、それら廃棄物の除去には予想外の時間を要した。北半部には大きな攪乱はなく、Ｌ～Ｍ－42区にかけて厚さ10cm程のⅡ層が残存していた。グリッド杭を打つ時間的な余裕はなかったが、Ⅱ層の大部分はＬ－42区のものであり、Ｆ地区のⅡ層は一括して重機で掘り上げ、調査区外に山積みしたのち、人手による遺物回収作業を行った。最終面での必要な記録をとった後、Ｆ地区はすぐに埋め戻し、展圧、砂利を敷いて、通路を復元した。

Ｇ地区：43ライン付近から50ラインまでの339m²。盛土主体のＩ層が厚く堆積し、東側では層厚90cm 以上に達する。盛土中には、コンクリート塊や水道塩ビ管など、多数の廃棄物が混在していた。７月中旬に重機によってＩ層を除去し、遺物包含層であるII層の上面を出す。Ｉ層はキャリアダンプに積んで、調査終了後のＨ地区に搬送、仮置きし、調査終了後、再び埋め戻しに使用した。II層上面に５×５ｍ方眼杭を打設したのち、Ｍラインなど必要なセクションベルトを残しながら、人手による包含層調査、遺構調査を開始した。Ｆ地区で説明したように、一帯には発電所関連の攪乱等が少なからず見られたが、今回の調査対象区の中では、Ｇ地区のII層の保存状態は最も良好であった。Ｇ地区の調査は７月末まで続けたが、電柱（52）と控えが配備された一画は、発掘期間内での電柱移設計画がなく、調査することができなかった。

Ｈ地区：50ラインから57ラインまでの買収済み畑地。植え付けの終わったデントコーン畑とは数ｍ以上の距離を置いており、発掘によって畑に直接的な影響が及ぶ心配は少なかったが、くれぐれも苗の生長等を阻害しないよう配慮し、Ｉ地区に引き続き早めに調査を実施した。Ｈ・Ｉ地区以東の畑地では、深度約50cm の心土破砕、天地返しを伴う農地改良工事が行われたようで、Ｈ地区西端部がぎりぎりII層の分布域東端に接していたほかは、全域的にII層が消失していた。Ｈ地区には７月12日に重機を導入して、暗黄褐色の粘土がちなＩ層の耕作土を、遺物の出土状況等を確認しつつ掘り下げた。排土は、キャリアダンプに積んで調査開始以前のＧ地区に運んで仮置きし、埋め戻しに備えた。Ｉ層には、黒曜石の石片や原石などの点在が僅かにみられたが、全般に遺物量は稀少であり、とくにグリッドを設定する必要はないものと判断し、重機主体による調査を続けた。Ｈ地区では遺構の検出も全くなく、最終面の写真撮影、水準測量など、必要な記録をとった後、すぐに畑と同じ地表面レベルに埋め戻し、掘開が及んだ現道の側溝も復元した。

Ｉ地区：57ライン以東の東端地区、100m²。デントコーン畑に隣接しており、用地買収済みにも拘わらず、地籍界をこえて一部にデントコーンの苗が植え付けられていた。土現の調整を経て、用地内の苗は抜去してもらったが、境界線付近の苗が生長してからでは、調査に際して、のびた茎や葉を損傷させる危険性が高く、発掘作業が急がれた。そこで最優先で、７月８日に重機を使って掘開、遺物の出土状況等を確認しつつ、調査を実施した。排土はキャリアダンプに積んで、調査前のＨ地区に運搬、仮置きした。土層の堆積状況などはＨ地区とほぼ同一で、厚さ50cm 程のＩ層の耕作土中には遺物の点在は殆どなく、遺構も全く検出されなかった。境界沿いのデントコーンの生長を阻害しないよう、Ｉ地区では、必要な記録をとったのち、ブルドーザーも利用して即日埋め戻し、敷き均し作業を進めた。また、調査で掘削した現道側溝の復旧工事を行った。（髙橋和樹）

（３）　整理・報告書の作成

栄野１遺跡、新野上２遺跡ともに、出土遺物の大半は黒曜石製の石器・石片で、それに続縄文時代を主体とする土器片などが加わるものであり、整理の方法も両遺跡で基本的に変わりはない。

現場段階で目に付く石器や土器片は、できるだけ個別に選択して取り上げるよう努め、石片類は一日ごとにグリッド別、層位別にまとめて回収した。これらの遺物の水洗作業や遺構関連土壌のフローテーション作業は、基本的に雨天日などを利用して現地で実施した。

土器の保存状態は一般に不良で、耕作等によって繰り返し破砕され、摩耗・劣化の進んだ脆い破片が殆どであった。土器片の多くは、取り上げ後の湿気を帯びた状態のまま水洗すると、さらに損耗、崩壊する危険性が高く、まず室内で自然乾燥させて強化したのち、ブラッシングによって、できるだけ泥土を落とし、その後に軽く水洗してさらに汚れを落とした。

大量の石器・石片については、水洗後にタオルで拭きコンテナに並べて乾燥させる工程で、一通り細かく観察し、石器や加工品と石片に選り分け、前者を抜き出した。

土器や選別された石器・加工品で必要なものは、白のポスターカラーで注記し、クリアラッカーで上塗りした。注記の順番は、遺跡名、出土地区・遺構、層位、遺物番号の順とし、それぞれの間にはハイフォンを挟む。具体的な注記の要領と例示は以下の通りである。

遺 跡 名：カタカナの頭文字と数字を用い、栄野１遺跡は〝サ１″、新野上２遺跡は〝シ２″と表記した。

グリッド名・遺構名等：Ｊ－11区の場合は〝Ｊ11″と続け、ピット３の場合は〝Ｐ・３″とピリオドで結んだ。

層　　位：表土・Ⅰ層・盛土の場合は〝Ⅰ″、Ⅱ層の場合は〝Ⅱ″とローマ数字を記入、攪乱の場合はカタカナで〝カク″と略記し、Ⅱ層攪乱の場合は〝Ⅱカク″と連記した。この他、グリッド単位以外の取り上げについては、Ｆ地区の北電通路部の北側Ⅱ層は〝Ⓕ Ｎ－Ⅱ″と表示し、Ａ地区の表土・盛土は〝Ⓐ－Ⅰ″、Ｅ地区の表土・盛土は〝Ⓔ－Ⅰ″などと地区名を丸で囲んだ。地区不明の重機による排土からの採集品は、遺跡名の次に〝排″と記した。

遺物番号：グリッド毎、遺構毎に１番からアラビア数字で、通し番号を付した。

例　　示：栄野１遺跡のＪ11区Ⅱ層から出土した、遺物番号３の遺物は、上述した注記法に従い、〝サ１－Ｊ11－Ⅱ－３″となる。

土器や選別された石器・加工品は個々に重さをはかり、石片は取り上げた袋ごとに、石質別にまとめたうえ数と総重量をはかって、それぞれ記録した。

土器については、数量等をグリッド別、層位別に集計し、データをパソコンに入力した。

石器・加工品については、器種分類、石質、残存状況、打点・自然面・被熱の有無などの属性観察をし、その結果を項目別に記入したカードを添えて、個別にチャック付きビニール袋に納め、それらのデータは遺物抜き出し台帳・遺物台帳に記録したうえで、パソコンに入力した。

注記やカード記入、台帳作成、集計、パソコン入力などは、現場だけでは終了せず、遺物搬送後、江別の整理作業所で残りの作業を継続した。

土器片は、手で触ると、表面がザラザラと剝落するものが多いため、注記後に、アセトンを溶剤とするパラロイドＢ72の７％溶液を塗布して、表面の強化を図ったのち、分類や接合作業を行った。土器接合の欠損部はバイサムで補塡した。

また、抜き出し石器については、折れ面を中心に接合作業を行った。接合資料には遺跡毎に接合番号を付けたが、折れ面接合は50001から、剝離面接合は１からとした。最終的に栄野１遺跡では折れ面接合17例（50001～50017)、剝離面接合６例（１～６)、新野上２遺跡では折れ面接合50例（50001～50050)、剝離面接合３例（１～３）が得られた。

これらの接合作業を済ませたのち、掲載遺物を選択し、実測、拓本、トレース、写真撮影等の図版作成へ向けた作業を開始した。土器で復元できたものは栄野１遺跡の１点だけで、これについては実測図を作成した。他は拓本とし、できるだけ多くの資料を示したが、摩耗のため文様の判別が困難な土器片も少なくない。実測図や拓影図を示した土器、石器などは、基本的に写真図版に掲載し、掲載遺物一覧に表示した。

（髙橋和樹・鈴木宏行）

（４）　遺構・遺物の分類

遺構の分類

栄野１遺跡と新野上２遺跡で確認された遺構には、土壙とフレイク集中があり、それぞれＰ、Fc と略記した。土壙には新野上２遺跡Ｐ－３のように副葬品と思われる遺物を伴って、墓壙と判断された例もあるが、草木根による攪乱や風倒木痕と思われるような、掘り込みがどの程度人為的なものか、疑問の残る例も少なからずみられた。しかし、伴出遺物に一括性が認められるなど、遺構が少ない両遺跡にあっては、貴重な検出例と考えられるものを含んでおり、検出時の印象そのままに土壙として報告し、最終的な所見を別に添えた。

フレイク集中は黒曜石を主体とするフレイク・チップのまとまりで、石器の製作や加工の跡を留めた遺構と推測される。明確な掘り込みを伴わない例が多いが、新野上２遺跡 Fc－３のように、僅かな掘り込みがみられ、石斧などが遺存していた例も見出された。

土器の分類

土器は㈶北海道埋蔵文化財センターの一般的な分類に準じ、縄文時代早期に属するものをⅠ群、前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群とし、続縄文時代のものはⅥ群、擦文時代のものをⅦ群とした。各群をさらに細分してａ・ｂ類に２分した場合は、ａ類が前半を、ｂ類が後半を意味し、ａ～ｃに３分した場合は、ａ類が前葉を、ｂ類が中葉を、ｃ類が後葉を意味する。

栄野１遺跡、新野上２遺跡ともに、続縄文時代前半期のⅥ群土器が主体で、新野上２遺跡では、Ⅰ群～Ⅲ群と思われる資料も散見される。分類の詳細については、それぞれの遺跡の報告やまとめの中で、具体的に検討を試みたい。　（髙橋和樹）

石器の分類

石器類は、これまでの研究史の中で確立し、広く一般的に認識されてきた器種分類を踏襲して以下のように分類した。石鏃・石核については形態・剝片剝離技術から細分類を行った。なお、石器の計測方法については図Ⅰ－４に示した。

石鏃　素材を細かい加工により薄身にして、端部に尖頭部を作り出した５cm 未満の石器。

Ⅰ類：両側縁がやや外湾し、基部が内湾するもの。長幅比が１～２である。

Ⅱ類：両側縁・基部ともに直線的、またはやや内湾し、二等辺三角形を呈するもの。長幅比が１～２である。

Ⅲ類：両側縁・基部ともに直線的で長幅比が２以上の細長いもの。基部がやや内湾するものもある。

Ⅳ類：明瞭な茎部が作出されるもの。

Ⅴ類：明瞭な茎部が作出されない凸基のもの。

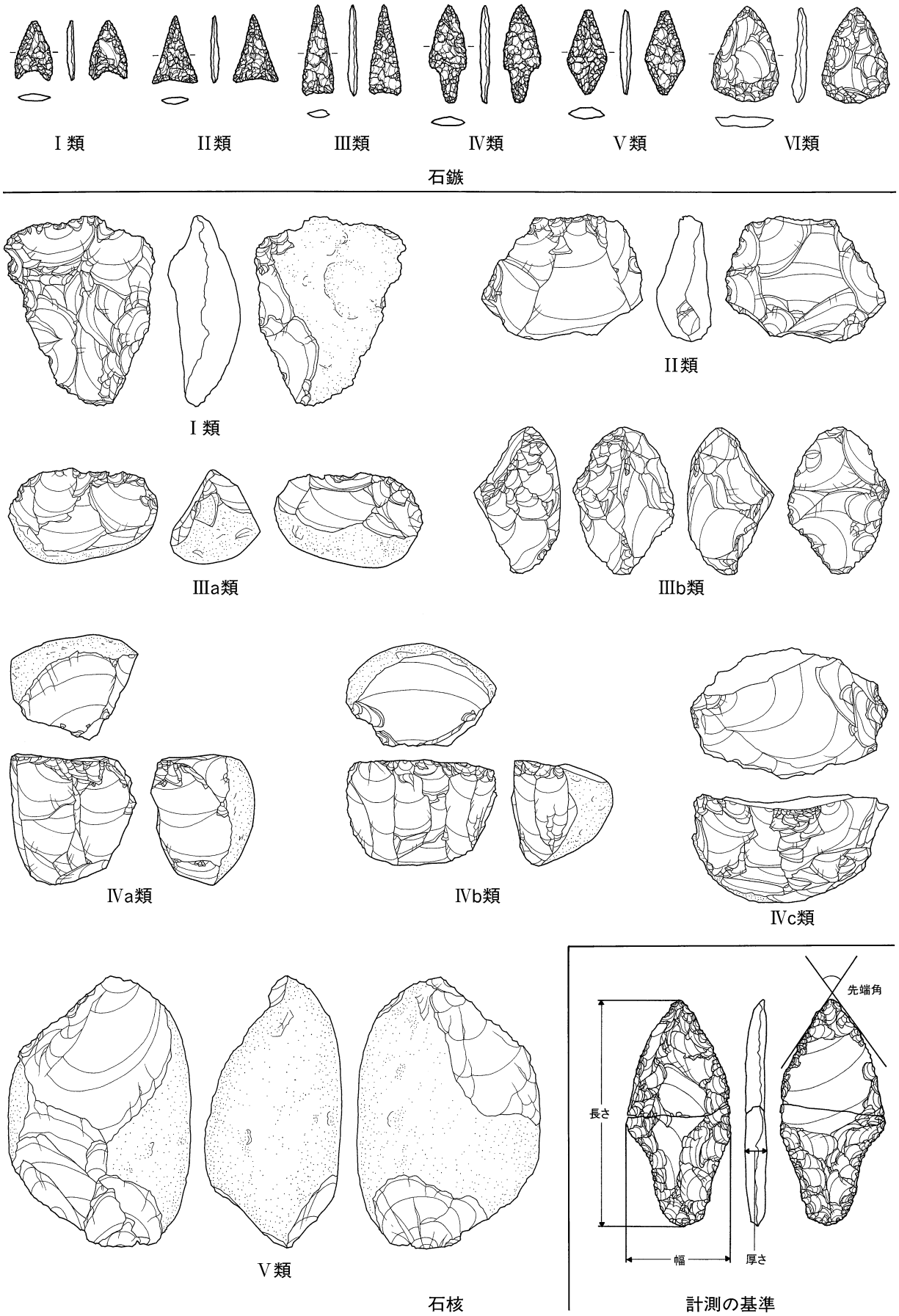
Ⅵ類：石鏃と比較して相対的に加工が粗く、大型で形態の整っていない未成品と考えられるもの。

Ⅶ類：折損品で判別不能なもの。

石槍　素材の両面を細かく加工して、端部に左右対称な、先端角が75°以下の尖頭部を作り出した５cm 以上の石器。

ナイフ　素材の両面を細かく加工したもので、石槍以外の石器。端部の形態は、左右対称な先端角が75°以上の尖頭形、円形、もしくは斜刃の直線形などがみられる。

石槍またはナイフ　素材の両面を細かく加工した石器で、端部を欠損している破片。石槍とナイフの



図Ⅰ－4　石鏃・石核細分類、計測の基準

分類が困難なもの。

両面調整石器　素材の両面を粗く加工した石器で、石槍・ナイフ・石槍またはナイフ以外の石器。

つまみ付きナイフ　素材端部にノッチ状の加工でつまみ部を作り出した石器。

スクレイパー　素材の側縁を中心に連続的な二次加工を施した石器。

掻器　素材の端部に連続的な二次加工を施した石器。

錐形石器　素材の端部に錐状の尖頭部を作り出した石器。

楔形石器　素材の両端に両極剥離による対向する剥離がある石器。

二次加工ある剥片　素材に二次加工を施したもので、定形的石器に分類されない石器。

石刃　長さが幅の２倍以上で、両側縁が平行し、それに平行する稜がある石器。

縦長剥片　長さが幅の２倍以上で、石刃に該当しない石器。

剥片　石核・石器（トゥール）から剥離されたもので、石刃・縦長剥片以外の二次的な加工が施されていない石器。

石核　目的剥片を剥離したと考えられるもので、石刃核以外の石器。

Ⅰ類：平坦な作業面で求心的な剥離が行われるもの。裏面には一部正面の剥離の打面と考えられる剥離面があるが、大部分には原礫面が残る。剥離される剥片は平坦かつ薄手で、末端部形状がヒンジの特徴を持つ。

Ⅱ類：Ⅰ類の剥離が両面で行われるもの。両面に平坦な作業面があり、原礫面は残らない。剥離される剥片形状はⅠ類と同様である。

Ⅲ類：転礫素材で打面と作業面を入れ替えながらチョッパー状に剥離が行われるもの。剥離される剥片の末端部には反りがあり、側縁に原礫面を持つものが多い。剥離が１カ所で行われるものをⅢa 類、転移が行われ、複数カ所で行われるものをⅢb 類とする。Ⅲa 類は栗の実形で下半部に原礫面が残り、Ⅲb 類は多面体で原礫面が少ない。

Ⅳ類：単剥離打面から剥片剥離が行われるもの。剥離は１方向に進行し、裏面に原礫面を残すものが多いが、作業面が全周を巡るものもある。剥離される剥片は縦長剥片が多い。通常のものをⅣa 類、特に整った石刃が剥離されている石刃核をⅣb 類、剥片素材をⅣc 類とする。

Ⅴ類：原石に両極剥離が行われたもの。Ⅰ類の初期段階に位置付けられる。

Ⅵ類：Ⅰ～Ⅴ類に分類困難なもの。

石刃核　石刃を剥離したと考えられる石器。石核Ⅳb 類。

石斧　打ち欠き・敲打・研磨により、斧状の刃部を作り出した石器。

砥石　礫の片面もしくは両面の平坦ないし凹んだ面に磨痕の観察される石器。

原石　石器の石材として利用される石で、人為的と考えられる剥離を受けていないもの。

礫　石器の石材として利用されない石で、剥離、敲打痕、潰打痕、磨痕などが観察されないもの。

（鈴木宏行）

表Ⅰ－１　遺構・遺物一覧

	栄野１遺跡	新野上２遺跡	計
土　　壙	0	15	15
フレイク集中	1	4	5
土　　器	199	1,033	1,232
石　　器	56,051	219,685	275,736
時　　期	続縄文	縄文早～後期・続縄文	

（５）　調査結果の概要

栄野１遺跡、新野上２遺跡は、遠軽町市街地の南西７km、瀬戸瀬東町の北東２km に位置し、湧別川に合流する佐藤川両岸の標高128～130m 程の河岸段丘上に立地する。すぐ北には新野上１遺跡が隣接しており、新野上１遺跡では道々改良に伴う発掘調査が、栄野１遺跡では試掘による遺跡分布調査が過去に実施されている。湧別川はその源流部に厖大な黒曜石の原産地を擁しており、流出する川原石には、石器の素材となる多量の黒曜石が含まれている。そのため湧別川中流域に分布するこれらの遺跡群では、古くから石器の製作や加工が盛んに行われていたようで、その特性は、今回の発掘調査結果でも明確に認められた。両遺跡に共通する様相として、竪穴住居跡がみられず、他の遺構も少なく、剝片石器やフレイク・チップが多量に出土するにも拘わらず、石皿やすり石、敲石といった礫石器の類が少ないことなどが指摘でき、ともに定住的な集落跡ではなく、生産活動における一時的な拠点だったものと推測された。それぞれの調査結果概要は以下の通りである。

栄野１遺跡

佐藤川の右岸、標高128m 前後の段丘上に営まれた遺跡で、昭和53年度に実施された分布調査（試掘）では、続縄文時代初頭とみられる土器片１点と石鏃、石槍、ナイフ、掻器など多数の石器、石片が検出されていた（米村1979）。昨年度行われた道教委の試掘調査でも石器類が確認されている。遺物の出土層位はいずれも表土層で、続縄文期主体の包含層は、過去の耕作等により大部分が攪乱されているが、その後30年以上落葉松の植林地になっており、遺物の散逸は少ないものと判断されていた。今回の調査結果でも、一部に本来の包含層であるⅡ層の残存がみられたが、遺物の殆どは攪乱の及んだⅠ層からの出土であり、検出された遺構は、フレイク集中が１カ所だけだった。出土土器は宇津内Ⅱb 式や後北C_1式など続縄文期のもので、その数は200点弱と少なかったが、小型の鉢形土器が１個体復元できた。石器は、石鏃、石槍、ナイフ、掻器、両面調整石器などで、多量のフレイク・チップを含め、その数は56,000点を超えた。石鏃には、宇津内Ⅱb 式の後半期に特徴的な、狭長な形態のものも含まれている。

新野上２遺跡

佐藤川の左岸、標高129～130m の段丘上に広がる遺跡で、現況や包含層の保存状態などは、場所によって一様ではなかった。大まかには３つの地域に分けられ、佐藤川に近い西寄りのＡ～Ｃ地区では、遺構も比較的多くみられ、遺物の出土量も多かったが、古くからの耕作や小屋などの建設のために攪乱されて、包含層の大部分は消失していた。遺構としては、13基の土壙と１カ所のフレイク集中が検出されている。それらの分布状況から、Ａ地区とＣ地区に分けて捉えることも可能である。土壙のうち、Ｐ－３には50本以上の石鏃などが副葬されており、石鏃の形態から後北期の墓と推定されたが、残念ながら墓壙の大部分は耕作等によって破壊されていた。その他に遺物を伴出する土壙も幾つかあり、Ｐ－５のようにやや規模の大きなものは、仮小屋的な施設とも思われ、Ｐ－６のように配石が見られるものは、墓の可能性も考えられたが、今一つ性格のはっきりしない例が多かった。いずれにせよ、この地域は段丘面がより広く、西～南に谷が開けて日当たりが良いなど、より快適に活動できる条件があったようで、利用頻度が高かったものと思われる。

北電の湧別川発電所に臨む、中央から東にかけてのＥ～Ｇ地区一帯は、送水管をはじめ、発電所に関連した建物や施設などによって、縦横に攪乱が刻まれていたが、その割に、やや低く窪んだ地形を呈することと相まって、畑として耕起されることが殆どなかったせいか、Ⅱ層の遺物包含層は比較的良好に保存されていた所が多く、遺構も２基の土壙と３カ所のフレイク集中を数えた。Ｐ－１には配石がみられ、浅い掘り込みを伴うFc－３からは、黒曜石製の石核のほか数点の石斧が検出されてい

る。出土土器の時期や石器の器種は、西寄りの地区のそれと殆ど変わらない。

デントコーン畑に隣接する東寄りのＨ・Ｉ地区では、農地造成工事により包含層が完全に削平されていた。デントコーンの生育に配慮する必要もあって、重機主体の調査を進めたが、もともと遺跡の東端部で遺構、遺物の分布密度が低い地域であり、結果的には遺構の検出はなく、少量の黒曜石片が採集されただけであった。

新野上２遺跡全体の遺物量は、土器が1,000点余、石器類は大量のフレイク・チップを含めて、219,700点弱である。出土土器の大半は宇津内IIａ式や宇津内IIｂ式を主体とする続縄文期前半のもので、縄文早期や前～中期、中～後期と思われる資料も僅かに含まれる。石器類は数多く、石鏃、石槍、ナイフ、掻器、両面調整石器、石錐などのほか、少量ながら石斧や礫石器もみられた。不定形の剝片に簡単な加工を施しただけの刃器が特に多く、遺跡の性格を反映した状況といえようか。

（髙橋和樹）

II　遺跡の位置と周辺の環境

1　遺跡の位置と周辺の遺跡

遠軽町は北海道の北東部、網走支庁管内のほぼ中央部に位置し、オホーツク海岸から約20km 内陸に入った、東経143°21′から143°35′まで、北緯44°06′から43°55′までの範囲を占めている。昭和７年に石北線の鉄道が全通し、旭川と北見を結ぶ遠軽は、交通や経済活動の地域的要衝として大きく発展した。東、南、西の三方は標高300～400m 級の山地に囲まれ、町域の70％以上は山林だが、町を貫流する湧別川はその中流域に、瀬戸瀬川やサナブチ川、生田原川などの大きな支流を集めて、盆地状の肥沃な平坦地を形成し、オホーツク海沿岸の湧別原野へと北流している（遠軽町役場1957ほか）。

遠軽町の町名の由来となったインカルシは現在の瞰望岩のことで、標高165m、平地との比高80m程。松浦武四郎は『戊午日誌』に、「其名義昔しクスリ、トカチ等の土人多く当所え軍（いくさ）に来りしに、皆此山の上より諸方を眺望をするよし也。よって此名有りと。インカルウシは物見の事を云り」（秋葉1985、262頁）と記している。

湧別川は黒曜石の原産地として名高い白滝村に源流を発しており、川原石に多量に含まれる黒曜石は、古くから石器の素材として古代人に利用されてきた。遠軽町内には現在51カ所の道教委登載遺跡があり、旧石器時代から擦文時代まで、幅広い年代の遺跡が周知されている。さらに、昭和52年に発行された『遠軽町史』や平成10年に刊行された『遠軽町百年史』には、遠軽町先史資料館の川口嘉一郎氏が長年にわたる分布調査によって確認し、丹念に記録された遺跡所在地が、別に50カ所近くも掲載されており、遠軽町の本来的な遺跡数は、100カ所をゆうに超えるものであることが知られる。

遠軽町における旧石器時代の資料は、大正年間すでに下社名淵の家庭学校建設に伴って発見されており、石刃、細石刃、石核、舟底形石器、尖頭器、掻器など旧石器時代の遺物が出土する遺跡は、「湧別川に沿った両岸の高原地帯で、現河川より十米乃至数十米の段丘の各地帯、すなわち新遠軽、向遠軽、上遠軽、野上、向野上、向瀬戸瀬、上瀬戸瀬、東社名淵、奥社名淵、新社名淵、上社名淵、中社名淵、下社名淵、学田などの全丘陵地帯に分布している」（大場1957、23頁）といわれ、旧石器文化の究明を目的とする発掘調査も実施されている（児玉・大場1957）。とりわけ向遠軽から弥生地区にかけての生田原川と湧別川の合流地付近一帯の右岸台地上や瀬戸瀬地区の湧別川右岸段丘上などでは、旧石器時代の遺跡分布が濃く、前者には有名なタチカルシナイ遺跡が含まれている。タチカルシナイは遺物の出土地点が幾つもある遺跡群で、昭和46年には林道工事に伴ってＴＩ～ＴⅣ地点が調査され（吉崎1971、遠軽町1977）、昭和47年には草地改良に伴う第Ⅴ遺跡の調査が実施されている（吉崎ほか1973）。また、昭和53年からは湧別川流域史研究会や筑波大学、札幌大学によるＭ－Ｉ地点の学術発掘調査も続けられている。タチカルシナイ遺跡群では、上層から遠軽ポイントと命名されたやや小型の有舌尖頭器が発見されたり、湧別技法による細石刃核や荒屋型彫器に特色づけられる石器群と他の石器群との層位的な対比などが検討されている。

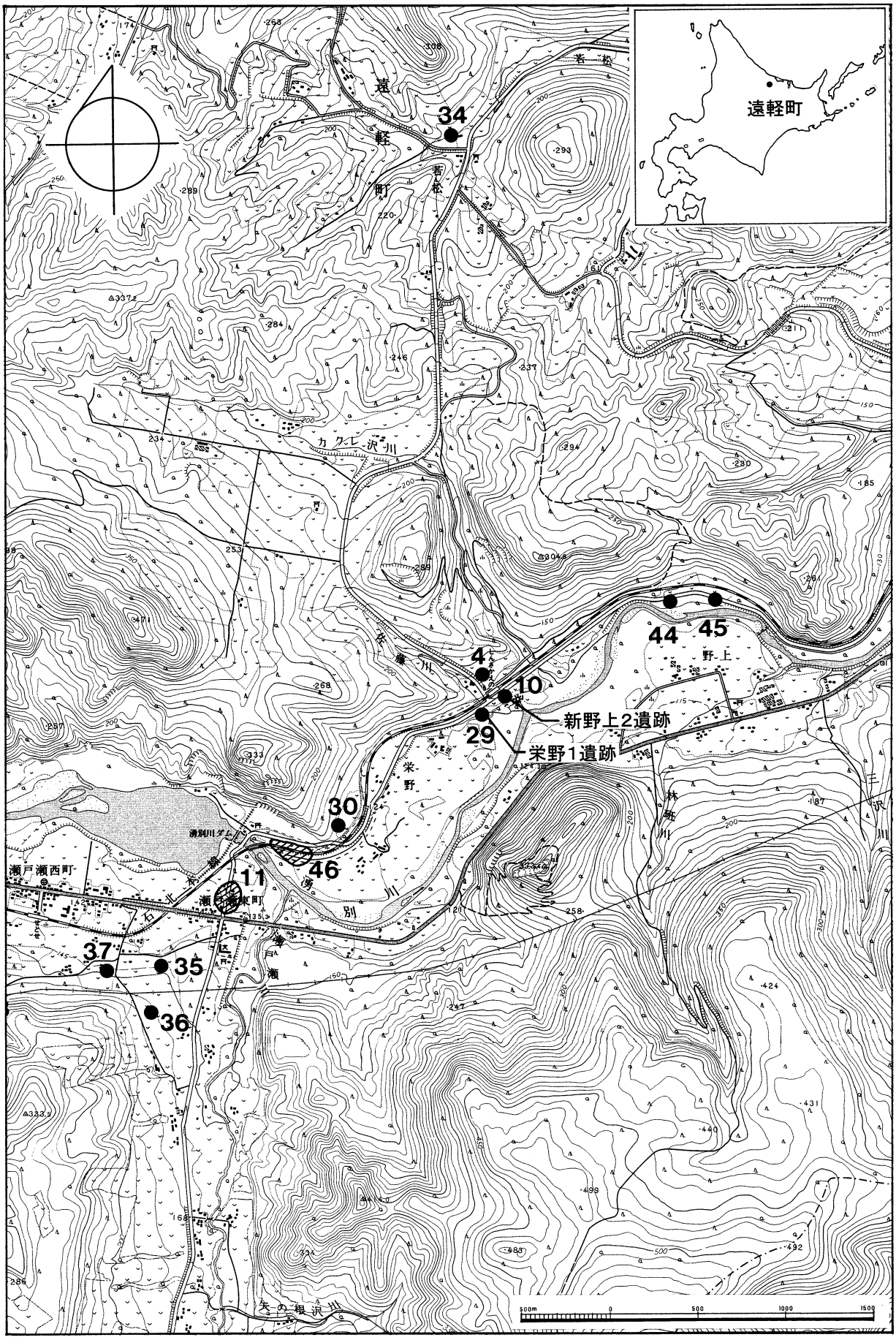
縄文時代の遺跡も少なくないが、発掘調査や試掘によって確認された資料をみても、石器に比して土器の出土は断片的であり、土器から時代を特定できるケースは必ずしも多くはないようだ。縄文早期では、道々改良に伴って発掘調査された新野上１遺跡で、東釧路Ⅳ式に類似するとされた土器片が少量ながら報告されている（米村1989）。縄文前期については、道営畑総明渠排水工事に伴う清川２遺跡の調査で、シュブノツナイ式に類する破片が僅かながら確認されている（加藤1985）。縄文中期の遺

跡は比較的多く、学田１遺跡（米村1979a）、清川２遺跡（加藤1985）、新野上１遺跡（米村1989）、西町２遺跡（前田ほか1990）などから北筒式系の土器が出土している。全般的にみて、トコロ５類や観音山式に比定されるものなど、新しい段階の資料が多いようだ。縄文後期については、『遠軽町史』の「遠軽町における遺物の発見地名表」に向遠軽で野幌式土器が発見されたと掲載されているが、具体的な説明はない（大場1957）。縄文晩期の資料も乏しいようで、『遠軽町百年史』のなかで、幣舞式土器の記述に際して、清川３遺跡の存在が触れられている程度である（遠軽町1998）。

続縄文時代にはいると、遺跡の様相はより明確になってくるようだ。『遠軽町百年史』によれば、下社名淵遺跡の「家庭学校内の牧草地に有舌隅丸方形の竪穴住居跡が十数個確認されている」（遠軽町1998、63頁）など、集落跡もみられ、西町１遺跡では、昭和53年度の分布調査によって墓壙が２基発見されている。墓壙には、宇津内IIb式土器や、狭長な形態が特徴的な多数の石鏃など、石器類が副葬されていた。また、同時に分布調査された清川１遺跡、清川２遺跡、清川３遺跡、清川４遺跡、そして今回の発掘対象地となった栄野１遺跡なども、ほぼ続縄文期を主体とする遺跡であることが確認されている（米村1979b）。清川２遺跡からは、昭和59年度の明渠排水工事に伴う発掘調査でも、続縄文期の遺物が検出されている（加藤1985）。昭和54年度に分布調査された瀬戸瀬１遺跡、若咲内１遺跡、若咲内２遺跡なども続縄文がらみの遺跡と判定されている（米村1980）。さらに、昭和53年度の河川改修に伴う学田１遺跡の発掘調査では、少量ながら続縄文終末期の北大II式土器が見出されている（米村1979a）。このように続縄文期の遺跡は、湧別川中流域の河岸段丘面を主体に広範囲な展開が認められ、続縄文人の行動域、生活圏の拡充ぶりが窺える。

擦文時代には、湧別川と生田原川に挟まれた、合流点内側の河岸段丘舌端部に、寒河江遺跡が営まれた。寒河江遺跡は、河川面との比高約10mの独立丘状を呈する地形面に立地し、牧草地の表面で28個の竪穴を数えたという、擦文時代後半期の集落跡である。昭和46年度には草地改良工事に先立って、６軒の竪穴住居跡が調査され（米村1972）、平成４年度には道路改良及び公園整備工事に伴う発掘によって、10軒の竪穴住居跡と５個のピットが調査されている（米村1994）。住居のカマド付近からはキビやアワなどの種子が検出されており、オホーツク海側の内陸部においても、雑穀栽培を行う、比較的安定した擦文文化が営まれていたことが実証された（山田・椿坂1994）。この他にも、「瞰望岩に存在する貝塚からは、擦文式の土器破片とともに長さ約15糎、幅１糎の鹿の角でつくった銛が数本発見されている」（大場1957、32頁）など、擦文期の遺跡が散見されるようだ。

また、「アイヌ文化時代の遺跡は、調査が行われていないので明らかにすることができないが、瞰望岩および湧別川に沿った地帯において、畑地の耕作中に時折アイヌ刀、マキリなどが発見されている」（大場1957、34頁）とされ、瞰望岩には十勝アイヌとの抗争を伝える伝説が残されていて、「チャシ（砦）は瞰望岩頂上付近に、ここの地形をそのまま利用し、わずかに加工したものがつくられており、その平面の広さは約40坪ぐらいである」（大場1957、28頁）と認識されている。チャシ跡に関しては、松浦武四郎の『戊午日誌』に栄野にエウケチャシコツがあり、「其名儀鹿の巣と云儀也。ユウケは鹿の事ユクの訛り、其チャシコツは城郭と云儀也。鹿多く集り居るより号しとかや」（秋葉1985、263頁）と記載されており、湧別川中流域に所在するチャシ跡の一つとして重視されるが、現在、その位置はどこなのか確定していない。遠軽先史資料館の川口嘉一郎氏や遠軽町文化財調査委員会の吉川文雄会長はじめ地元の方々にもいろいろ調べていただいたが、やはりはっきりしない。川口氏は松浦武四郎研究会の秋葉實会長に連絡を取ってくださり、秋葉先生はご多忙にも拘わらず、平成16年９月27日に所在地と推定される場所へ私たちをご案内下さった。そこは、JR新栄野駅の西方約1.5km、小関文子さんのお宅や丸尾仲さんの旧宅がある、標高250mを超える丘陵地帯で、畑地や牧草地、植林地が広がって



（国土地理院発行2万5千分の1地形図「瀬戸瀬」「瀬戸瀬温泉」を使用）

図II－1　遺跡の位置

いる。かなり高所だが、古くから開拓が可能だったように、湧水に恵まれた土地柄で、黒曜石片が散布している場所などもあったが、当日は、チャシと判別できる地形は確認できなかった。発掘終了間際で時間的にゆとりがなかったため、それ以上の探索はできなかったが、後日、川口氏が小関さんに聞き取りして下さったところでは、小関宅の西に一段と高い山があり、麓に涌き水の出る処がある。昔は小川のようになって流れていたといい、そこが、秋葉先生の記憶にも残るチャシの可能性が高い場所に一致するらしい。今後また、地元の方々のご協力を得て、踏査したいものと願っているが、どうやら湧別川中流域のチャシ跡は、サケ漁などに関連して、川に臨んだ段丘縁辺部を区切って造られるものとは異なり、眺望を最も重視した、見張り場的な機能が最優先されるものだったということらしい。伊藤せいち氏は、武四郎の『戊午由宇辺都日誌』に登場する、湧別川筋中上流の、遠軽町内の〝インカルシ、エエッケ・チャシコッ〟、そして丸瀬布町金山の〝カムイ・チャシコッ〟の３つのチャシコツについて資料集成しており、〝エエッケ・チャシコッ〟については、『永田地名解』の「川ノ方へ傾キタル砦跡」（永田1891、503頁）という解を取り上げ、〝エウケ〟を〝エエッケ〟（傾く）と解釈している（伊藤2002）。　（髙橋和樹）

表Ⅱ－１　遠軽町の遺跡一覧

登載番号	遺跡名	時代・遺構・遺物・文献など
Ⅰ－18－１	下社名渕	旧石器～擦文、児玉・大場1957
Ⅰ－18－２	瞰望台	縄文～擦文、集落跡、洞窟、チャシ 大場1957
Ⅰ－18－３	タチカルシナイ	旧石器～縄文、吉崎1971・1973
Ⅰ－18－４	新野上１	縄文、米村1989
Ⅰ－18－５	弥生Ａ	旧石器
Ⅰ－18－６	弥生Ｂ	旧石器
Ⅰ－18－７	弥生Ｃ	旧石器
Ⅰ－18－８	寒河江	擦文、集落跡、米村1972・1994
Ⅰ－18－９	瞰望岩丸大	旧石器～縄文、児玉・大場1957
Ⅰ－18－10	新野上２	縄文～続縄文
Ⅰ－18－11	瀬戸瀬１	縄文～続縄文、米村1980
Ⅰ－18－12	岩見通１	旧石器～縄文
Ⅰ－18－13	学田１	縄文、続縄文、米村1979a
Ⅰ－18－14	学田２	旧石器、児玉・大場1957
Ⅰ－18－15	清川１	旧石器～続縄文、米村1979b
Ⅰ－18－16	弥生高台	旧石器、米村1978
Ⅰ－18－17	向遠軽１	旧石器、米村1978
Ⅰ－18－18	トーウンナイ	縄文、米村1978
Ⅰ－18－19	向遠軽２	縄文、米村1978
Ⅰ－18－20	向遠軽３	続縄文、米村1978
Ⅰ－18－21	向遠軽４	縄文、米村1978
Ⅰ－18－22	向遠軽５	旧石器～縄文、米村1978
Ⅰ－18－23	向遠軽６	旧石器、米村1978
Ⅰ－18－24	西町１	続縄文、墓壙、米村1979b
Ⅰ－18－25	清川２	縄文、続縄文、加藤1985
Ⅰ－18－26	清川３	縄文～続縄文、米村1979b
Ⅰ－18－27	清川４	続縄文、米村1979b
Ⅰ－18－28	福路	縄文、米村1978
Ⅰ－18－29	栄野１	続縄文、米村1979b
Ⅰ－18－30	栄野２	旧石器
Ⅰ－18－31	瀬戸瀬２	縄文
Ⅰ－18－32	若咲内１	続縄文、米村1980
Ⅰ－18－33	若咲内２	続縄文、米村1980
Ⅰ－18－34	若松	縄文
Ⅰ－18－35	瀬戸瀬３	旧石器～縄文
Ⅰ－18－36	瀬戸瀬４	旧石器
Ⅰ－18－37	瀬戸瀬５	旧石器
Ⅰ－18－38	瀬戸瀬６	旧石器
Ⅰ－18－39	瀬戸瀬７	旧石器
Ⅰ－18－40	若咲内３	旧石器
Ⅰ－18－41	向遠軽７	黒曜石剝片
Ⅰ－18－42	西町２	縄文、前田1990
Ⅰ－18－43	弥生４	旧石器
Ⅰ－18－44	栄野３	縄文
Ⅰ－18－45	栄野４	縄文
Ⅰ－18－46	栄野５	黒曜石剝片
Ⅰ－18－47	清川５	縄文
Ⅰ－18－48	清川６	縄文
Ⅰ－18－49	清川７	縄文
Ⅰ－18－50	豊里１	縄文
Ⅰ－18－51	豊里２	縄文

図II－2　遠軽町内の遺跡

（国土地理院発行２万５千分の１地形図「上富美」「上湧別」「瀬戸瀬」「遠軽」「瀬戸瀬温泉」「生田原」を使用）

2　遺跡周辺の地形と地質

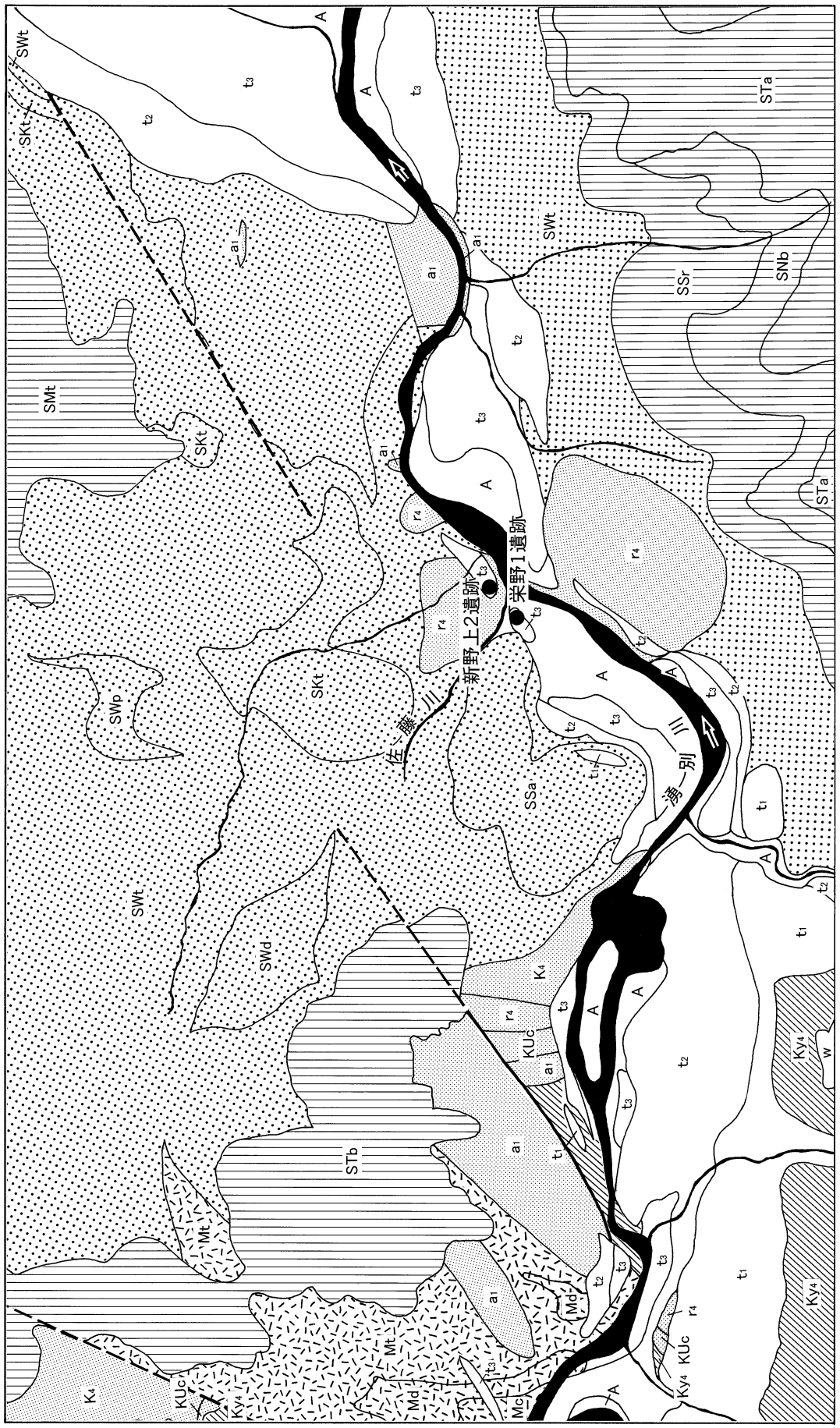
遺跡の所在する遠軽町近辺は、北見山地・大雪山系の山地の裾野部にあたり、四方が標高300～700mの低い山地形によって囲まれる盆地である。特に、南側に位置する瀬戸瀬地区の標高が比較的高く、その中に町内最高峰の瀬戸瀬山（標高900m）も含まれている。北･西側は西に向かって標高が高くなる300～500m前後の丘陵である。その中で、社名淵川流域は小盆地状で、学田墓地から見晴峠を越えて西南部に連続する山頂は平坦面を形成している。東側は、標高が300m前後と比較的低く、山頂部がやや平坦に連なっているが、斜面は比較的急傾斜の谷地形である。これらの山地形の中を湧別川が貫流している。湧別川は、大雪山系のチトカニウシ山や天狗岳を水源とし、西から東に流れて瀬戸瀬付近で北東方向に流れを変え、遠軽町内では湯の里地区で瀬戸瀬川、遠軽市街で生田原川、社名淵川と合流し20km下流でオホーツク海へ注ぐ。上流部の白滝村には黒曜石を大量に産出する赤石山があり、下流域の河床では白滝産黒曜石の転石がみられる。現在は赤石山に砂防ダムができたこともあり、流域では少量しか採取できないが、段丘礫層中には豊富な量の幼児頭大からコブシ大の黒曜石が確認できる。そのため遺跡の形成時は、石器の石材となる黒曜石が本遺跡近傍でも容易に入手できる環境であったとみられる。湧別川流域の地形は、主に瀬戸瀬付近までが山間部に属し、両岸の段丘面が狭いが、これより下流の生田原川との合流点付近の低地帯は、東西に約３kmの幅があるやや広い平坦地を形成している。遺跡の立地する栄野地区は両岸が広がる変換点のやや上流部にあり、周辺には300m前後の山地形が迫っている。

この地域の湧別川による河岸段丘面は、ｔ１からｔ３までの大きく３面が認められる。ｔ１面は標高160～200mにみられ、特に若咲内地区の湧別川右岸に広く発達している。この段丘面は湧別川に向かって緩く傾斜し、旧石器時代の瀬戸瀬３･若咲内３遺跡などが立地している。ｔ２面は標高120～150mにみられる。この面はほぼ水平であるが、ｔ１面と接する部分で両者の境界が不明瞭な部分も認められ、周縁部に傾斜している部分がある。ｔ３面は現河床に最も近接した面を形成し、標高は100～140mである。栄野１･新野上２遺跡ともｔ３面上に立地している。周辺の同一段丘面上には、縄文時代の栄野３・清川６遺跡などがある。また、湧別川流域ではｔ２・ｔ３面が現河床面と接していることが多い。

扇状地は湧別川と小沢の合流点に形成しており、瀬戸瀬付近や丸瀬布付近に小規模に発達している。いずれもｔ１またはｔ２面に重なっている。

遺跡を中心とした遠軽地域周辺を構成する地層は、後期白亜紀にできた日高畺層群と湧別層群の下層部と考えられる向遠軽層によって形成されている。大きく前者が西側の山地部、後者が東側の湧別原野全体に分布している。日高畺層群は上古丹コンプレックス、上丸コンプレックス、金山コンプレックスに区分され、ダービダイド性の泥岩、砂岩を主とし、礫岩、酸性凝灰岩、緑色岩類、チャート、石灰岩より構成される。遺跡西側の若咲内地区両岸に金山コンプレックスがみられる。向遠軽層は硬質で、暗灰色から黒色の砂岩、泥岩の互層である。

日高畺層群、向遠軽層の上位には、後期中新世に堆積した鴻之舞層、藻別層、留岡層、社名淵層がある。鴻之舞層は海成層、その他は陸成層となっている。鴻之舞層は下部層と上部層に区分される。下部層は頁岩を主とし、上部層は泥岩、砂岩、凝灰岩からなる主部とこれに介在される火山噴出物よりなる。藻別層は陸域で噴火・堆積した酸性の火山噴出物より構成される。留岡層は主として玄武岩質火砕岩よりなり、泥岩を介在する。遺跡東側の市街地周辺にみられ、学田地区や家庭学校の入り口で向遠軽層との不整合を観察することができる。社名淵層は下層・中層・上層部に区分される。下層部は内陸湖沼性の泥岩、礫岩よりなり、中層部は淡水域で噴火・堆積した火山噴出物層より構成され、



北海道地下資源調査所発行5万分の1地質図「丸瀬布北部」を元に作成

図II－3　遺跡付近の地形・地質

若松火砕岩とこれらに介在される隠沢玄武岩、栄野安山岩よりなる。上層部は陸域で噴火・堆積した火山噴出物である谷本川火砕岩、三沢川流紋岩、千代田玄武岩、二林班川玄武岩、背谷牛山安山岩よりなる。社名淵層は鴻之舞層・藻別層・留岡層を不整合に覆っている。

遺跡の近辺には社名淵層が広く分布し、その周辺に鴻之舞層や藻別層がみられる。特に遺跡の背後の斜面は、社名淵層中部の栄野安山岩、若松火砕岩（流紋岩質）や鴻之舞層の流紋岩によって形成されている。岩質では軟弱な軽石質凝灰岩・やや硬い玄武岩・比較的硬い安山岩に分かれる。遠軽町の名勝である瞰望岩（標高165m、地上からの高さ80m）は、湧別川の浸食によって比較的軟弱な凝灰岩部分が削られ、硬い安山岩質火山岩（栄野安山岩の一部）からなる部分が取り残されるかたちで形成されたと考えられている。

栄野１・新野上２遺跡は遠軽市街から南西に約6.5km、湧別川の左岸段丘上に佐藤川をはさんで隣接している。標高は127～130m で、湧別川との比高は約15m である。両遺跡とも湧別川に向かって緩やかに傾斜する平坦面にある。段丘面の奥行きは狭く、背後は100m 程で山地形となる。調査区域は栄野１遺跡が段丘の先端縁部、新野上２遺跡が段丘の縁部から20m 程内側の地点で、両遺跡とも段丘面を横切る南西―北東方向の細長い範囲である。（直江康雄）

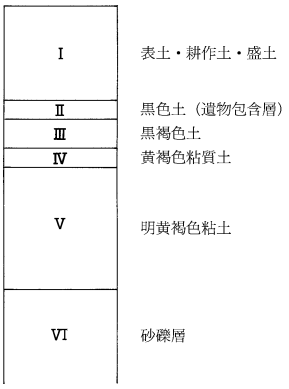
表Ⅱ－２　地質図凡例

第四紀完新世	沖積層	A	礫・砂及び粘土
第四紀更新世	段丘堆積物	t 3（第三段丘）	礫・砂及び粘土
		t 2（第二段丘）	礫・砂及び粘土
		t 1（第一段丘）	礫・砂及び粘土
		w（第二溶結凝灰岩）	流紋岩質溶結凝灰岩
新第三紀中新世	社名淵層上部	STa（背谷牛安山岩）	安山岩溶岩
		SNb（二林班川玄武岩）	玄武岩溶岩
		SSr（三沢川流紋岩）	流紋岩溶岩
		STb（千代田玄武岩）	玄武岩溶岩
		SMt（谷本川火砕岩）	石英安山岩質凝灰角礫岩及び火山礫凝灰岩
	社名淵層中部	SKb（隠沢玄武岩）	玄武岩溶岩
		SKt（隠沢玄武岩）	玄武岩質火山角礫岩及び凝灰角礫岩
		SSa（栄野安山岩）	安山岩溶岩
		SSt（栄野安山岩）	安山岩質火山礫凝灰岩
		SWt（若松火砕岩）	流紋岩質細～粗粒凝灰岩及び軽石質凝灰岩（基底に砂岩・礫岩を伴うことがある）
		SWp（若松火砕岩）	流紋岩質凝灰角礫岩及び軽石凝灰岩
		SWd（若松火砕岩）	石英安山岩溶岩
	藻別層	Mt（シブノツナイ火砕岩部層）	流紋岩質～石英安山岩質軽石凝灰岩（粗粒凝灰岩を伴う）
		Md（上モベツ流紋岩溶岩部層）	石英安山岩溶岩
	鴻之舞層	k 4（上部層）	安山岩質凝灰角礫岩・火山礫凝灰岩・粗粒凝灰岩及び安山岩溶岩
		Kuc（下部層）	礫岩・砂岩・泥岩及び凝灰岩
		a 1	安山岩
		r 4	流紋岩
白亜紀	日高累層群	Ky4（金山コンプレックス）	砂岩（砂泥混在岩を伴う）

3　基本土層

前章の説明のように、栄野１遺跡と新野上２遺跡はともに、最も新しく離水した、湧別川の第三段丘面に立地しており、基本土層も以下のように、ほぼ同一の堆積状況が認められた。

Ⅰ層　　表土・耕作土・盛土
Ⅱ層　　黒色土（遺物包含層）
Ⅲ層　　黒褐色土
Ⅳ層　　黄褐色粘質土
Ⅴ層　　明黄褐色粘土
Ⅵ層　　砂礫層



図Ⅱ－４　基本土層模式図

Ⅰ章４節２項に触れたように、遺跡や地区によって土層の残存状況はそれぞれ若干異なるが、Ⅰ層の大部分は耕作や建物の築造などによる攪乱層で、盛土に厚くおおわれた部分もみられた。攪乱は多くの地区でⅤ層にまで達しており、遺物包含層であるⅡ層は破壊され、遺物は攪拌されてⅠ層へ混入していた。Ⅰ層は、汚れた暗褐色土を主体とし、層厚は30～50cm 程度、G地区などでは、廃棄物を多量に含む粘土層主体の厚い盛土がみられ、層厚90cm 以上に及ぶ堆積もみられた。

遺物包含層であるⅡ層は、耕作等により攪乱を受け、殆ど破壊された所が多かったが、A地区西端部や、B・C地区北端部などでは、耕作が及ばぬ深度に、Ⅱ層が遺存していた。また、E～G地区では、全域的に北電の施設等による攪乱が刻まれてはいるものの、厚い盛土下にⅡ層が比較的よく残存していた。Ⅱ層は、粘質のある、やや堅くしまりがちな黒色土で、軽石の細粒が点在している。層厚は10cm 程度で、地区によって密度に差はあるが、縄文時代から続縄文時代までの遺物を包含する。

Ⅲ層は、軽石細粒の混在が多い黒褐色土で、層厚は10～20cm 程。軽石の少ない部分や、黄茶褐色のシルト質土がちな部分も不整にみられるなど、自然の流水の影響がやや強く及んでいるらしく、不整に波打って、下のⅣ層と入り乱れがちな所もみられた。

Ⅳ層は、黄褐色粘質土を主体とする、いわゆる漸移層で、層厚10cm 内外。堆積が不明瞭なところや、ガラガラの軽石を主体とする部分もみられた。

Ⅴ層は、調査の終了面とした明黄褐色粘土層で、粘質に富み、乾くと非常に堅くしまる。Ⅴ層上面では、幾重にも分岐する細流跡の分布が認められ、水の影響を強く受けた部分は、赤橙褐色がちの軽石を主体とする層に変移していた。層厚60～70cm。

Ⅵ層は、第三段丘を形成する基盤の砂礫層で、層厚４～５m。上方は数枚の砂質粘土層を介在させるシルト質細砂を主体とし、下方は川原石を多く含む礫層が主体をなしている。

土層については、後章の栄野１遺跡、新野上２遺跡の報告におけるメインセクションの説明に際して、それぞれまた具体的に触れたい。　　（髙橋和樹）

Ⅲ　栄野１遺跡の調査

１　調査の概要

（１）　遺跡の概要

遺跡は遠軽市街の南西７km、瀬戸瀬地区の北東３km、湧別川と佐藤川の合流点付近に位置する。新野上２遺跡の佐藤川を挟んだ南西側に隣接し、湧別川の左岸段丘上に立地している（図Ⅱ－１）。標高は128m 前後で湧別川との比高は約15m である。調査区は湧別川に沿った幅の狭い段丘面の北東端縁部にあたる。足下を流れる湧別川には黒曜石の転礫が多量に含まれ、その石材環境が遺跡の性格に影響を与えている。昭和53年に分布調査が行われ、続縄文時代初頭の土器片１点と石鏃などを含む450点の石器類が出土している（米村1979）。（鈴木宏行）

（２）　土層

基本土層（図Ⅲ－１）はⅠ層：黒褐色土（表土･耕作土）、Ⅱ層：黒色粘質土（遺物包含層）、Ⅲ層：黒色土、Ⅳ層：黄褐色粘質土（漸移層）、Ⅴ層：明黄褐色粘質土、Ⅵ層：礫層である。調査区の大部分が耕作による攪乱を受けているため、遺物包含層であるⅡ層は、やや落ち込んだ状態で局地的に分布していたFc－１や木根などで二次的に堆積しているものを除くと残存していなかった。

13ラインでは地表から20cm 程度Ⅰ層が堆積し、Ⅱ層は見られない。漸移層であるⅢ層はⅣ層上面の凹凸を埋めるように部分的に見られ、Kライン周辺では30cm 程度と厚く堆積している。Ⅴ層上面は比較的平坦で、安定して分布している。

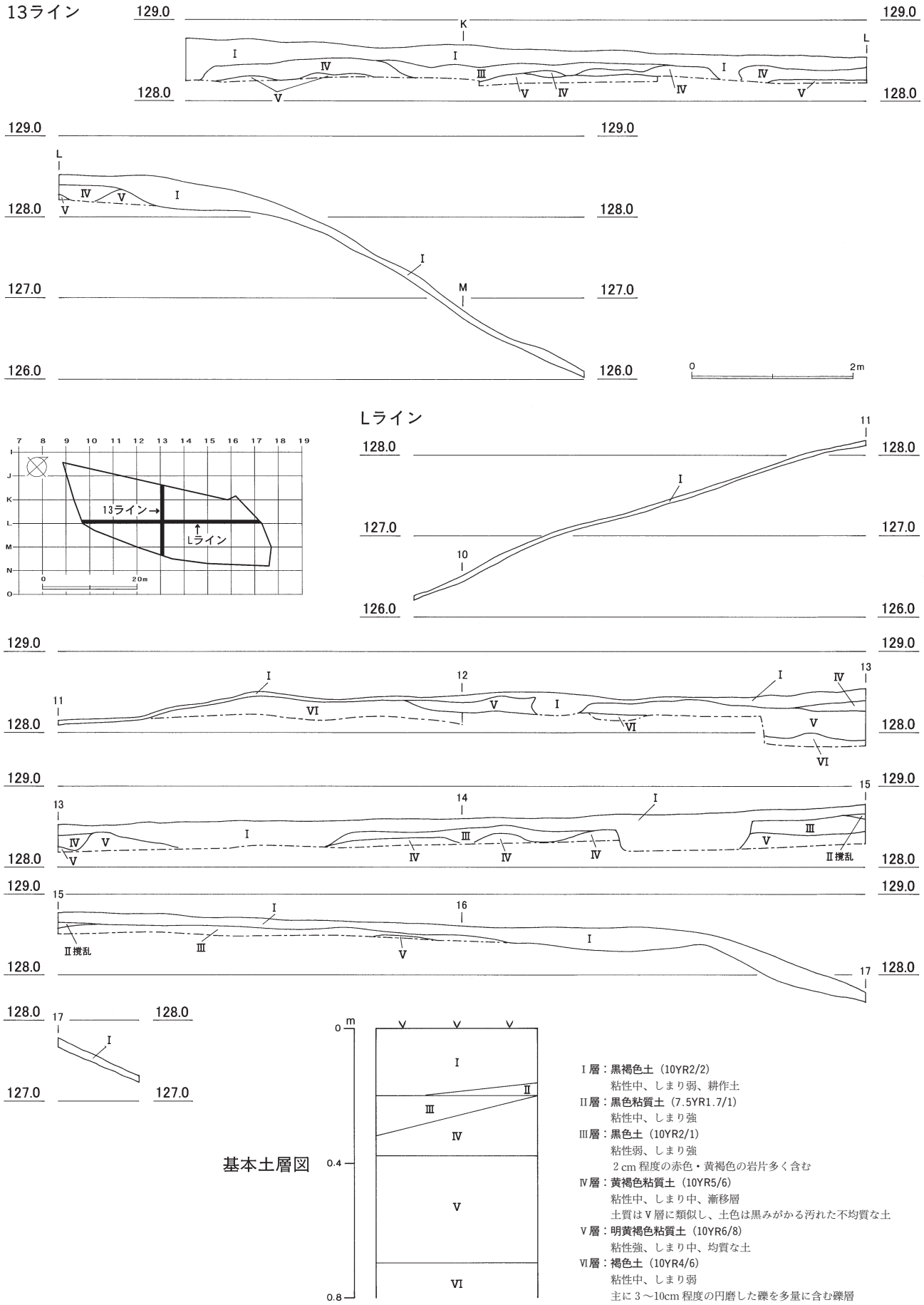
ＬラインではⅠ層が西側では薄く、東側の斜面近くでは厚く堆積している。Ⅲ層は13ライン同様、Ⅳ層上面の凹凸を埋めるように見られる。Ⅳ・Ⅴ層は14ライン以西で西から東に向かって緩やかに斜めに堆積し、そのうち、Ⅳ層は13ライン以西、さらにⅤ層は12ライン以西に分布しない。調査区南西部にあたるK11・12区周辺は耕作等によって削平されている可能性がある。

全体的には地表面から20cm 程度の攪乱によってⅡ層が破壊されていることから土層の発達が悪かったと考えられる。（鈴木宏行）

（３）　調査結果の概要

遺構はフレイク集中（Fc）１カ所のみ検出されている（図Ⅲ－２）。遺物の総点数は56,250点で、土器が199点、石器が56,051点と石器の量が圧倒的に多い（表Ⅲ－１）。Fc－１は遺跡内で唯一Ⅱ層の残存していた所である。段丘東端の斜面部肩に位置し、剝片や砕片の密集した出土状況は本来の廃棄状況を想起させた。その他は全てⅠ層ないし攪乱層からの出土である。

出土した土器は続縄文時代前半期である宇津内Ⅱb 式新段階の小型鉢形土器がほぼ１個体出土し、その他の破片資料も同型式の土器が主体を占める。また、一部後北C_1式土器が混じるが、両者はほぼ同時期に比定される。石器は99.9％以上が黒曜石製で凹基の石鏃・石槍・ナイフ・つまみ付きナイフ・両面調整石器・掻器・スクレイパー・作業面が平坦で打面が周囲を巡る石核・打面と作業面を入れ替えるチョッパー状の交互剝離が行われる石核などが出土している。特に、スクレイパー・両面調整石器・石鏃・石槍・石核が多く、それらには黒曜石の転礫を素材とした多くの加工途中のものが含まれる。加えて、遺構がほとんどないこと、土器と石器の絶対量とその量的な比率を考え合わせると本遺


13ライン
Lライン
129.0
128.0
127.0
126.0
0
2m
20m
13ライン→
Lライン
Ⅱ攪乱
基本土層図
0.4
0.8
Ⅰ層：黒褐色土（10YR2/2）
粘性中、しまり弱、耕作土
Ⅱ層：黒色粘質土（7.5YR1.7/1）
粘性中、しまり強
Ⅲ層：黒色土（10YR2/1）
粘性弱、しまり強
2cm程度の赤色・黄褐色の岩片多く含む
Ⅳ層：黄褐色粘質土（10YR5/6）
粘性中、しまり中、漸移層
土質はⅤ層に類似し、土色は黒みがかる汚れた不均質な土
Ⅴ層：明黄褐色粘質土（10YR6/8）
粘性強、しまり中、均質な土
Ⅵ層：褐色土（10YR4/6）
粘性中、しまり弱
主に3～10cm程度の円磨した礫を多量に含む礫層

図Ⅲ－1　基本土層・断面図

跡は足下の湧別川で採集可能な黒曜石を利用して石器製作を主要な目的として営まれた遺跡と想定される。（鈴木宏行）

2　遺構と出土遺物

（1）　フレイク集中

Fc－１（図Ⅲ－２、表Ⅲ－１、図版４）

位置・層位　Ｌ16区のやや北西寄り　Ⅱ層

規　　模　0.95m×0.87m×0.07m

遺　　物　両面調整石器２点、石核３点、剥片2,569点の計2,574点、総重量795.5g の石器類が出土した。微細な砕片も多く含まれ、本来の包含状態を示すものと思われる。

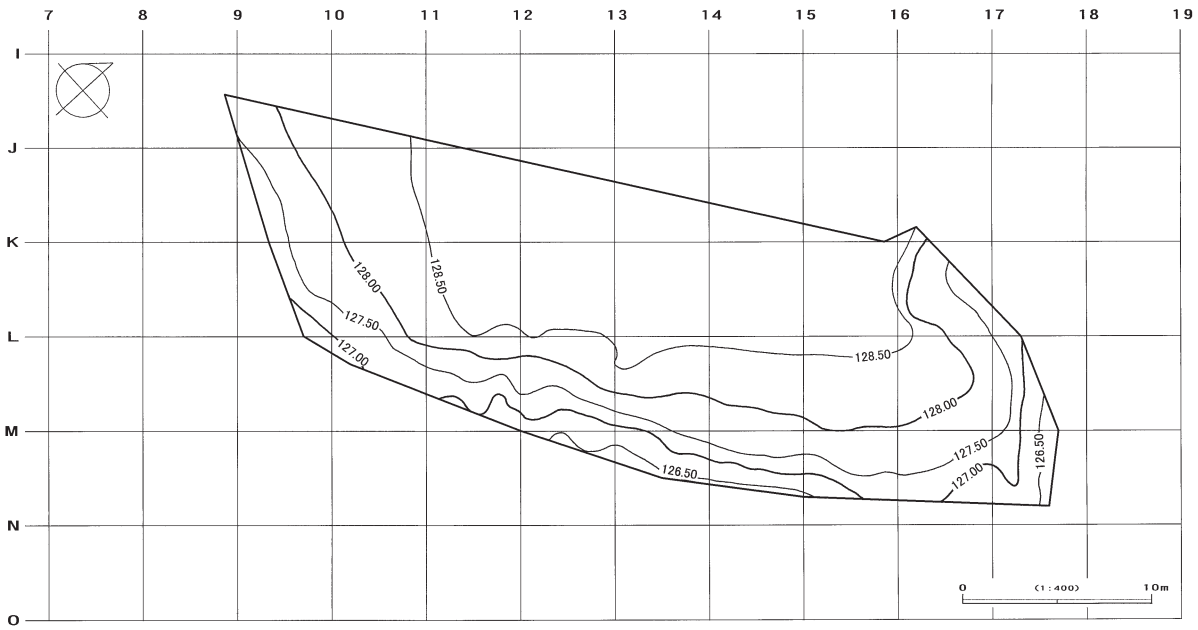
１は両面調整石器である。両面とも比較的粗い加工が見られ、節理面で折損している。断面形は裏面が平坦なかまぼこ状である。図示していないが石核３点は全てⅠ類である。（鈴木宏行）

3　発掘区出土遺物

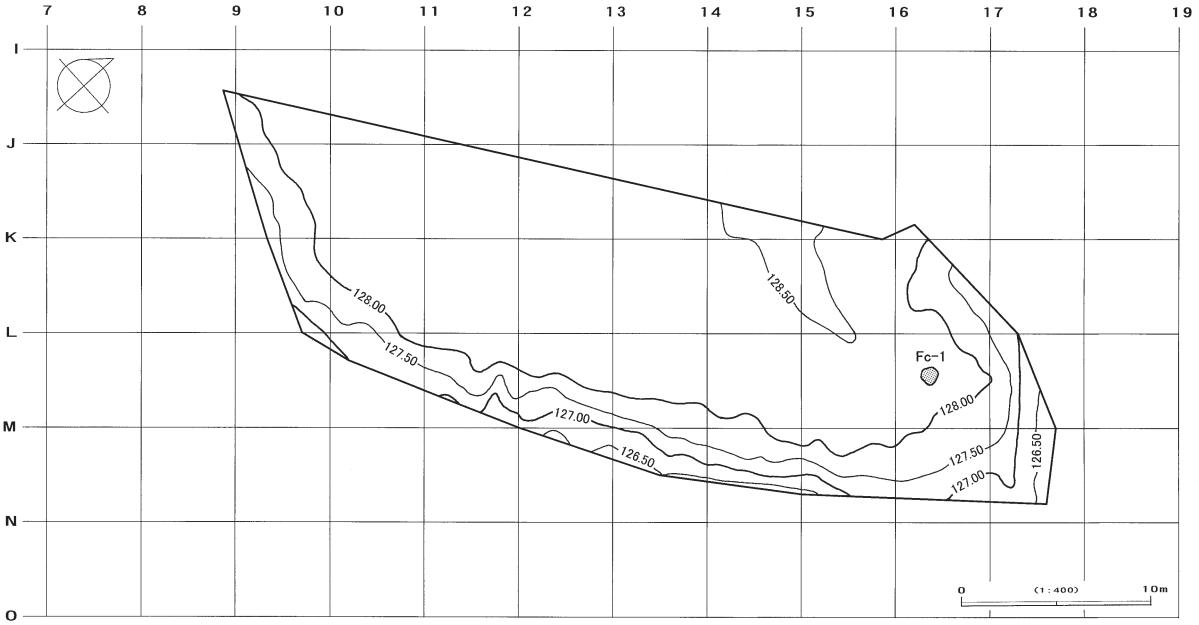
（1）　土器（図Ⅲ－３・４、図版６）

検出された土器は199点で、大部分がⅠ層や攪乱層から出土している。若干の土器片が得られたＬ－15区のⅡ層や一括土器を伴出したＫ－12区のⅡ層も、風倒木や木根等による自然の攪乱を受けており、土器の出土位置や層位は、殆どが二次的に動いていた。土器は耕作等によって破砕され、損耗の進んだ小破片が大部分で、文様等の不明瞭なものも少なくないが、できるだけ多くの類例を掲載するよう努めた。時期的には宇津内Ⅱb 式や後北C_1式など、続縄文時代前半期のⅥ群土器が主体で、大半が宇津内Ⅱb 式に比定される。Ｌ－13～14区のⅠ層からは、器厚が1.2～1.3cm と厚手の破片が合計４点採集されており、或いは縄文期のものかとも疑われるが、摩耗や剝落のため文様や地文が殆ど判別できず、図示はしていない。胎土に含まれる石英粒に径１mm を超える大きさのものの比率がやや高い傾向は認められるが、それ以上には色調や胎土に他と大きな差はないようだ。Ⅵ群土器は本来的にはほぼ堅緻に焼成されているが、近年の損耗によって劣化し、触っているうちにボロボロと器壁が剝落するなど、脆弱になったものが少なくない。器面の色調は、赤橙褐色～赤茶褐色を呈するものが多く、褐色がちなものや黒褐色がちなものも見られる。裏面を主体に黒色炭化物の付着が認められる破片も少なくなく、その分、裏面は黒褐色がちな色調を呈する度合いが高まる。割れ口の断面も黒色に変化している例が多々みられ、或いは煮沸した油脂成分などが素地内部にまで滲透した結果かとも思われる。胎土には、径１mm 以下の微細な砂粒が多量に含まれ、とくに石英粒の多さが目立つ。裏面は、横位を主体に、比較的丁寧に調整されたものが多いが、とくに滑沢というほどではない。器厚は６～８mm と７mm 前後のものが主体だが、１cm 内外の厚めの例もあり、後北C_1式などでは５～６mm 程度の薄いものもみられる。

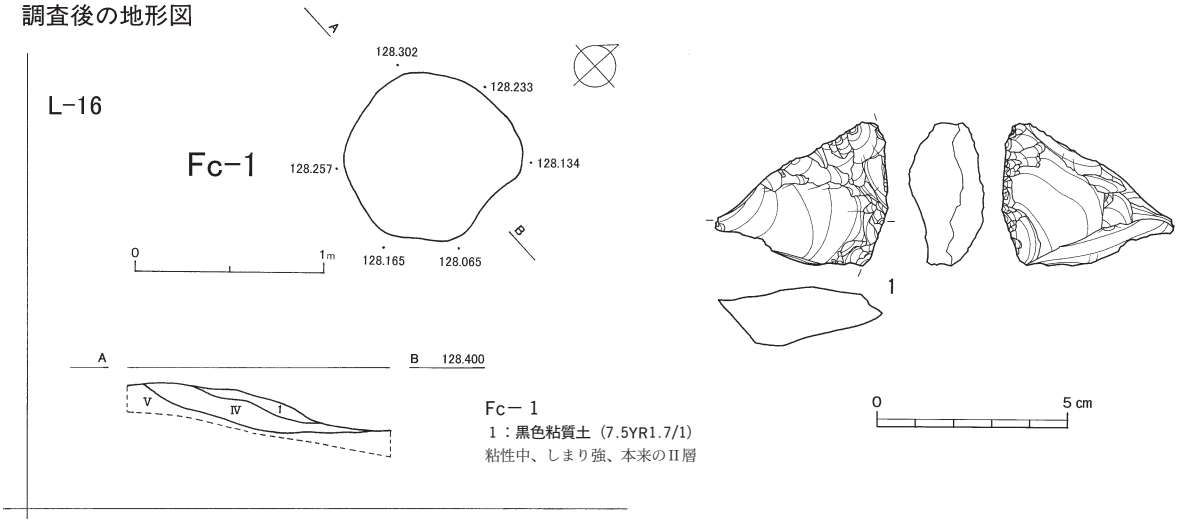
図Ⅲ－３－１は、Ｋ－12区南端の木根攪乱部分から横倒しの状態でまとまって出土した土器で（図版５）、一部の破片はⅠ層中に飛散していたが、接合の結果、ほぼ完形の小型鉢形土器に復元できたものである。口径および器高は突起部の最大でそれぞれ11.2cm と10.8cm を測る。底部は低めの揚底で、底径は3.2cm。器厚は６mm 内外である。胎土には砂粒を含み、器面の色調は黄橙～茶褐色を呈する。裏面には黒色炭化物が付着し、胎土も全体的に黒褐色に変色している。口縁には２個一対の円柱



調査前の地形図



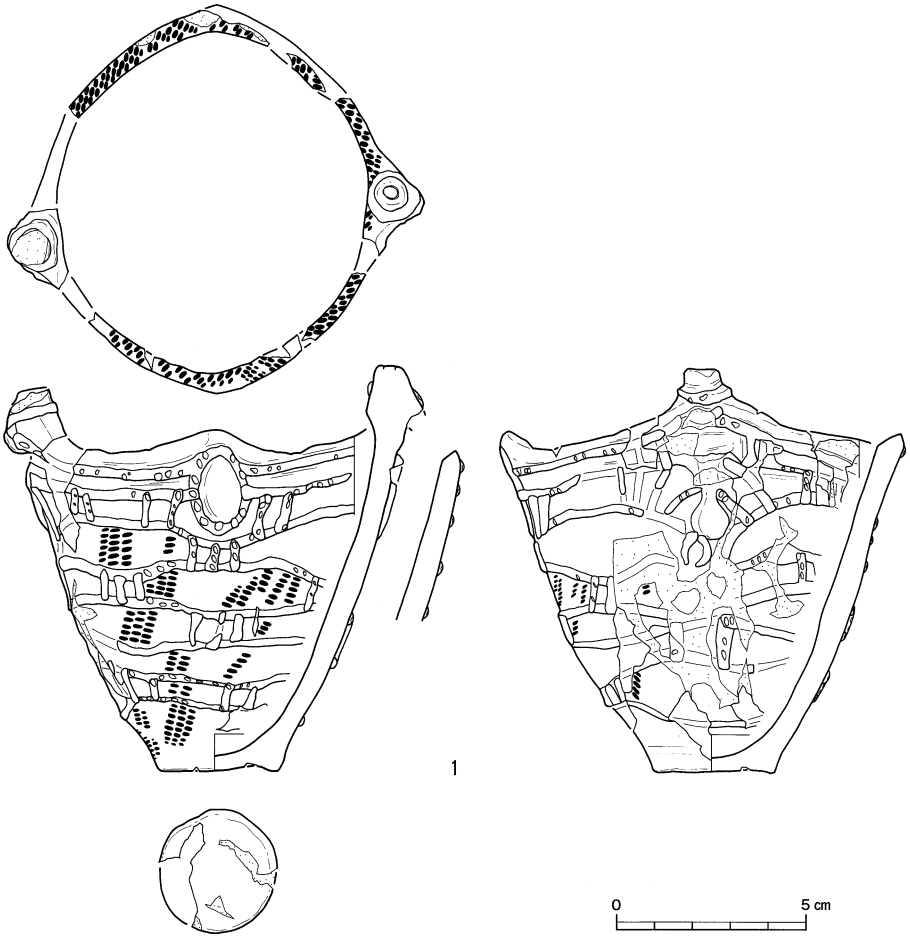
調査後の地形図



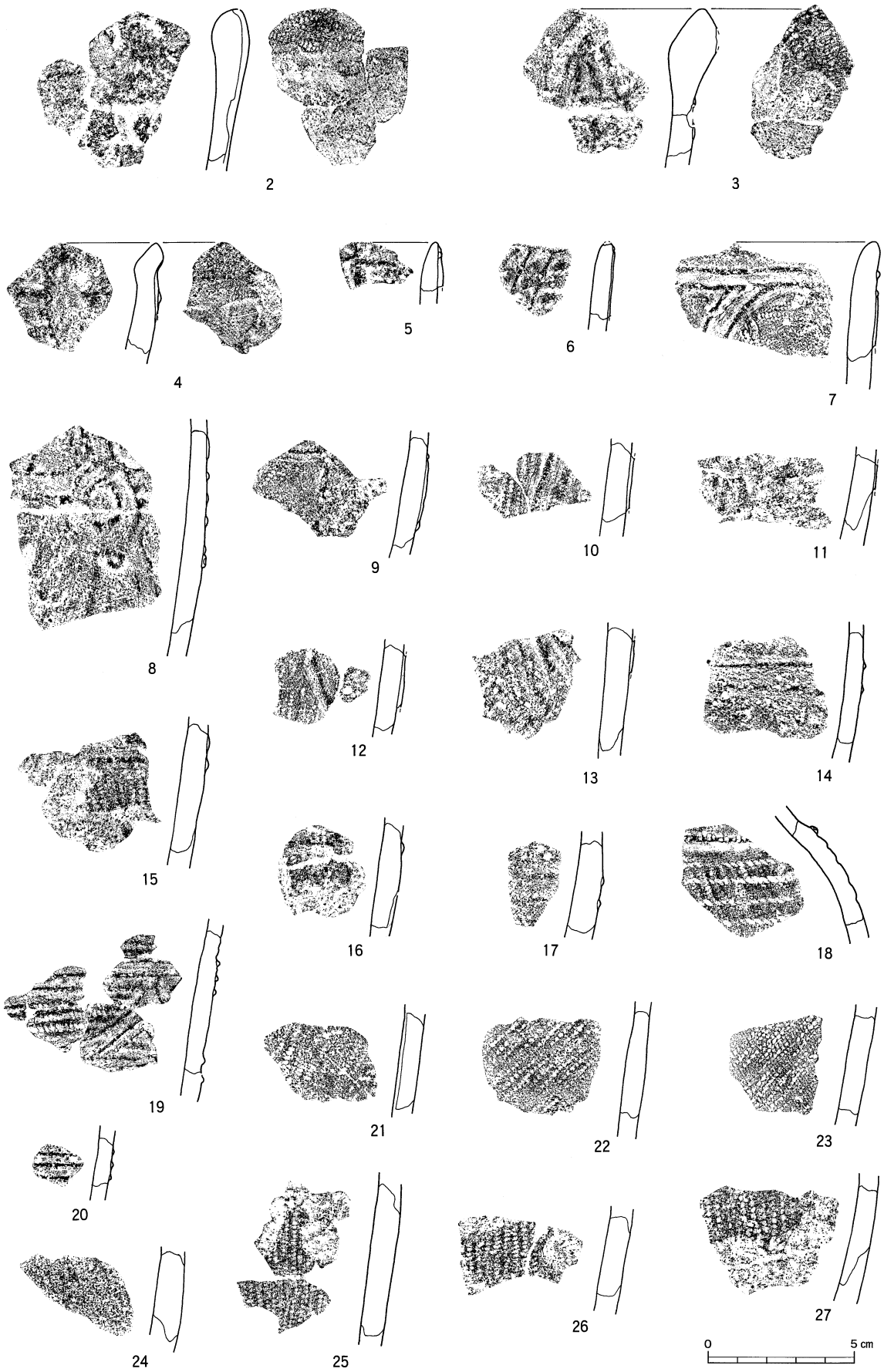
図III－2　発掘区域地形図・Fc－1平面図・土層・遺物

状突起と山形の突起が配され、剝落して現存しないが、前者の下には吊耳が加飾されていた痕跡を留める。口唇部断面は鋭角につくり出され、内面には突起部も含めて RL の単節縄文が施されている。器面には幅１～２mm の擬縄貼付文による文様が全面的に展開されているが、剝落や摩耗のため、モチーフの一部が失われている。柱状突起部にはリング状の貼付文が横環し、吊耳部の下には雫状の隆起文様が残されているが、周囲の貼付文が欠失しており、全容を明確にできない。山形突起の下には、やや縦長の円環が配置されている。計８本の横位の擬縄貼付文が、全面を緩やかに交互に波打ちつつめぐっており、要所にはそれらを上下に連結する２～３本単位の縦位の貼付文が、繰り返し付加されている。地文は RL 縄文で、縦位や斜位に施されている。

図Ⅲ－４－２～４は、山形の口縁突起部の破片で、内屈する口辺から、突起部がやや肥厚しつつ外傾する形状がみられる。２と４には縦長の円環と連結する横位の貼付文が、３には２重の三角状の貼付文が施されているようだが、器面の損耗が進んで、それらの痕跡が僅かに認められるに過ぎない。いずれも口唇内面には RL 縄文が残されており、黒色炭化物の付着がみられる。５は、山形の突起部破片で、口唇断面は鋭角に作出されている。やや薄手だが、縦、横の貼付文には径３mm 程のやや太めの粘土紐を用いており、無節Ｌの横位の縄線文が１条残されている。色調は茶褐色で、内面には黒色炭化物が付着し、胎土も黒褐色に変色している。６は、山裾付近の口縁片で、２本単位の斜位の微隆起線文と、無節Ｒの横位に施された３条の縄線文が現存している。７は、山形の小突起が配された口



図Ⅲ－３　発掘区出土土器(1)



図Ⅲ－４　発掘区出土土器(2)

縁片で、２本単位の微隆起線文が横位と弧状に貼付されているほか、横位や斜位の RL 縄文がみられる。口唇部や裏面は摩耗しており、口唇断面は丸みを帯びている。８は、同心円文が施された胴部片で、摩耗や剝落のためやや不鮮明だが、縦位や横位、斜位の微隆起線文が連結し、下には径７mm 弱の小リングも付加された様相が見てとれる。内外面の一部に黒色炭化物が付着しており、胎土も黒褐色を呈する部分がある。下端部は内傾接合の輪積み痕を残している。９は、縦と横の微隆起線文がみられる胴部片で、左方には縄文が痕跡を留めるようだが、摩耗のため原体の判別は難しい。裏面には黒色炭化物の付着が認められ、胎土も裏面側の過半が黒変している。10～13は、２～３本の斜位の微隆起線文がみられる胴部片だが、損耗が進んで文様は痕跡的である。10・12には、地文の縦走ぎみの RL 縄文が残されている。いずれも器面は赤橙褐色を呈するが、12以外の裏面には、黒色炭化物の付着が認められ、胎土も裏面側の半分から過半が黒変している。14～17は、痕跡的ながら２本単位の横位の微隆起線文がみられる胴部片。14は比較的薄手で、上方の貼付文の上端沿いにＬ縄線文かと思われる横位の痕跡がみられるが、摩耗のため定かではない。15には縦走する RL 縄文が残されている。17の裏面には黒色炭化物が付着しており、14～16の胎土も裏面側に黒変が少なからず認められる。18は、やや内弯の強い頸部付近の破片かと思われる。地文の RL 縦走縄文に重ねて、LR 原体による横位の縄線文を施し、現存最上部では、沈線文状の押圧を加えて微隆起線を浮き出させたうえ、縄で刻んで擬縄文を作出している。現存右端はやや厚みを増しており、ここに縦位の隆帯或いは吊耳が貼付されていた可能性があるようだ。沈線状の凹みには黒色炭化物が残されている。19・20は平行する断面三角状の細い微隆起線文が施された土器片で、前者には、３本単位の三角状の微隆起線文の一部と、横走する RL 縄文が残されている。ともに、比較的薄手で、赤橙褐色を呈し、胎土には他より多くの砂礫が含まれるようだ。裏面は丁寧に調整されている。同一個体の可能性があり、後北C_1式に比定されよう。21～23は、斜行する縄文がみられる胴部片で、21の縄文原体は RL。22･23のそれは、自縄自巻き的な LR で、裏面には黒色炭化物が付着している。24～27は縦走縄文がみられる胴部片。摩耗のため判然としないが、24の縄文原体は細めの LR と思われ、他は RL。　（髙橋和樹）

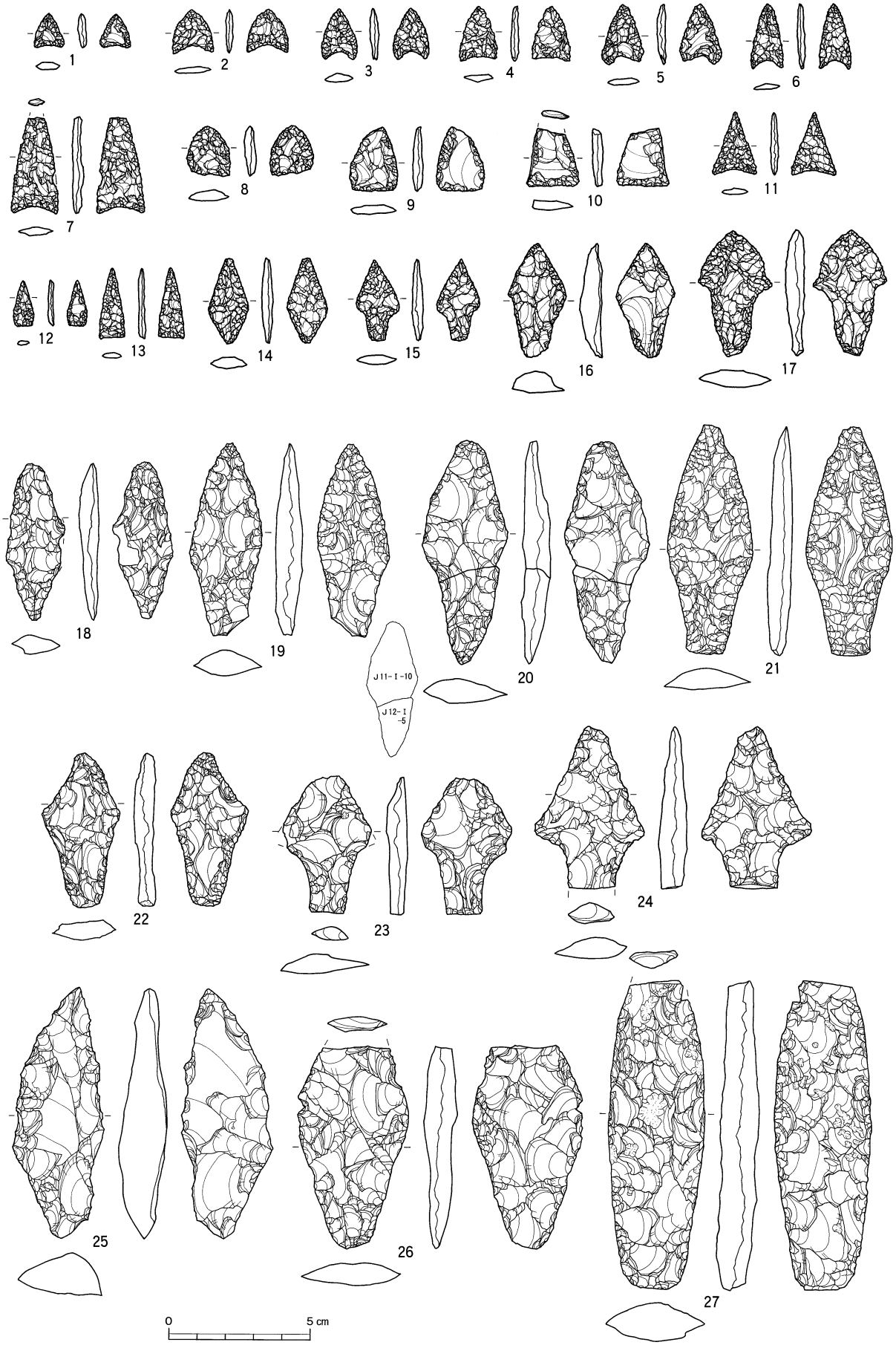
（２）　石器

出土石器（表Ⅲ－１）

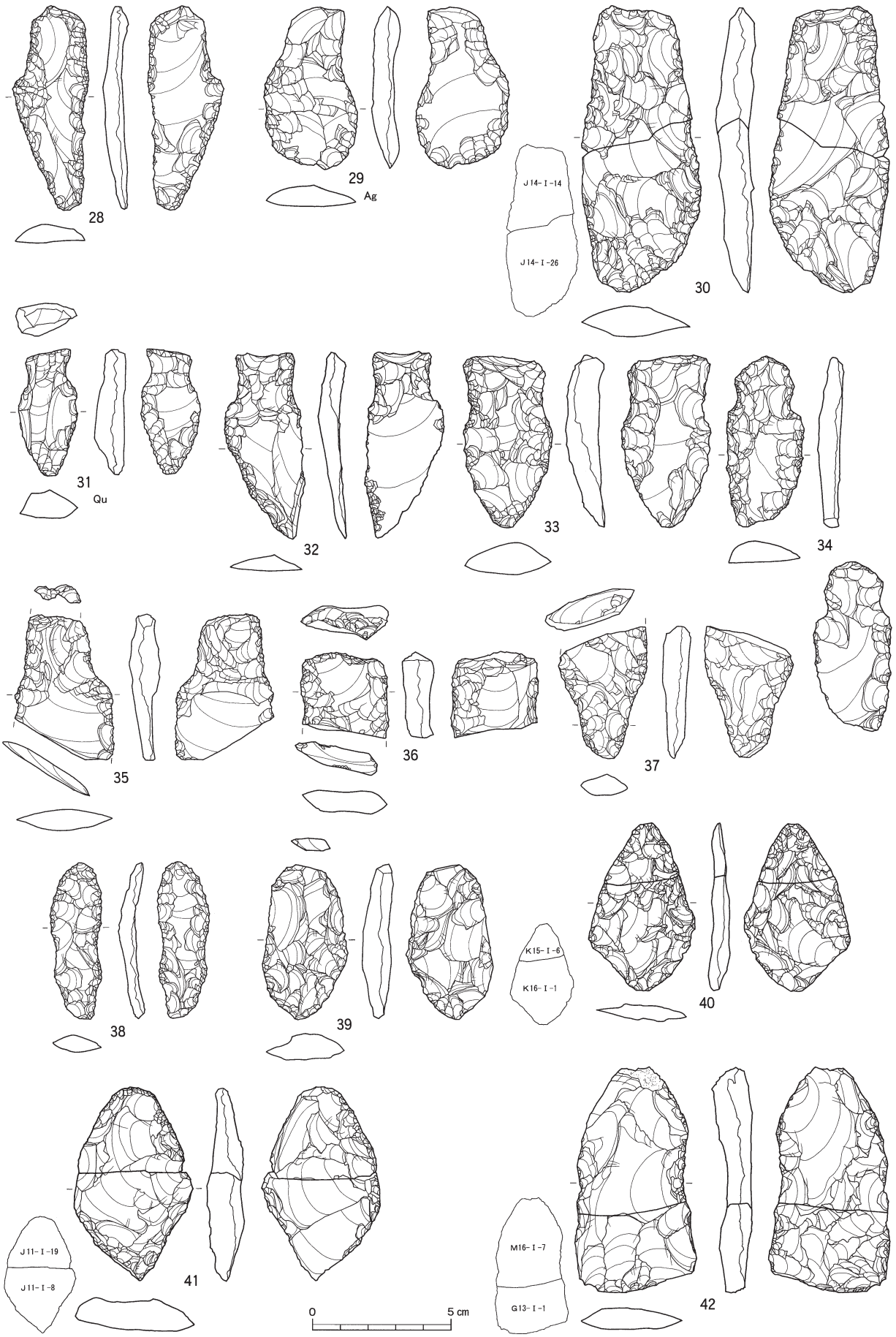
石鏃65点、石槍43点、ナイフ５点、つまみ付きナイフ４点、石槍またはナイフ33点、両面調整石器101点、スクレイパー121点、掻器15点、錐形石器１点、二次加工ある剝片24点、剝片53,001点、石核61点、原石２点、礫１点の計53,477点、重量93,788.6g の石器類が出土した。石材は黒曜石１が78.2％で大部分を占め、以下、黒曜石２（12.0％）、黒曜石３（7.0％）、黒曜石４（2.5％）、黒曜石５（0.3％）で、碧玉・珪岩・めのう・頁岩・安山岩・砂岩が0.1％以下である。白滝遺跡群における旧石器時代の石器群ではほとんど利用されない梨肌の黒曜石２が一定量利用され、茶色や紫の混じる黒曜石３～５の利用率が低いことが特徴である。

石鏃（図Ⅲ－５－１～17、図版７）

17点（17個体）を図示している。１～７はⅠ類。長さは大型の７を除くと、12～23mm で形態差が大きいが、20mm 前後のものが多い。幅は11～15mm で長さに比べ、形態差が小さい。側縁・表面とも滑らかで精巧な１～３・６・７と側縁が鋸歯状で表面に凹凸のあるやや粗い４・５がある。８～10はⅥ類で、３点とも両面に素材面を残す。10の左側縁は折れ面で、素材を折り取ったか、石鏃形態に類似した片側縁に折れ面のある三角形の素材を選択したものと考えられる。11はⅡ類で縁辺・表面の剝離状態とも精巧である。12・13はⅢ類。12は小型で、側縁の基端部周辺がやや外湾し、13は精巧な



図Ⅲ－５　発掘区出土石器(1)　石鏃・石槍



図Ⅲ－6　発掘区出土石器(2)　ナイフ・つまみ付きナイフ・石槍またはナイフ・両面調整石器

作りである。14はⅤ類で、形状は菱形、精巧な作りである。15～17はⅣ類。15は16・17に比べ小型で精巧、16・17は比較的大型の平坦剥離面が残り、相対的に粗い。これらは、形態・二次加工技術が石槍と類似し、同一の石器製作技術で作成されたものと思われる。

石槍（図Ⅲ－５－18～27、図版７）

11点（10個体）を図示している。18～21は細長い形状で不明瞭な茎部を持つもの。18～20には比較的粗い加工が、21の中央部には平坦剥離が、縁辺部には押圧剥離による平行剥離が見られる。22～24は幅広のもので、23・24は明瞭な茎部を持つものである。全て平坦剥離による粗い加工によって整形され、22の基端部には転礫面が残る。25は厚手の剥片素材で粗い剥離によって加工される。26は比較的大型のもの、27は両側縁が平行に近い細長いもので側縁・表面に凹凸が少なく、断面形は凸レンズ状で整った形状である。

ナイフ（図Ⅲ－６－28～30・35、図版７）

４点（３個体）を図示している。28・29・35は剥片素材、30は不明で、特に35は両面ともポジ面である。29はめのう製。28・29・35は四角い茎部があり、先端部は28が斜めの尖頭状に、29は円形に整形される。30は両面加工で茎部は無く、基部は四角く、先端部は斜めに整形される。

つまみ付きナイフ（図Ⅲ－６－31～34、図版７）

４点（４個体）を図示している。31は珪岩製。全て剥片素材で、両側縁ともノッチ状の加工でつまみ部が作出され、先端部は全て尖頭状に加工される。つまみ部は平坦剥離で加工されるものが多いが、先端部は比較的急角度の加工が施される。

石槍またはナイフ（図Ⅲ－６－36・37、図版７）

２点（２個体）を図示している。36は四角い基部で、37は不明瞭な茎部である。

両面調整石器（図Ⅲ－６－38～図Ⅲ－７－45、図版７・８）

13点（８個体）を図示している。38～41は剥片素材、43・44は石核素材の可能性がある。42～44には転礫面が残る。38は縦長剥片素材で両面とも縁辺部に加工が行われる。40・41は幅広で先端部が尖る。42･45は先端部が下端部から長軸方向の剥離によって四角く整形され、箆状の平面形である。39･43・44は尖頭部や明確な角を持たない。43は上部折損後、再加工が行われる。全体的に加工は平坦剥離が多用され、縁辺部の一部に細かい剥離が行われる。

スクレイパー（図Ⅲ－７－46～49、図版８）

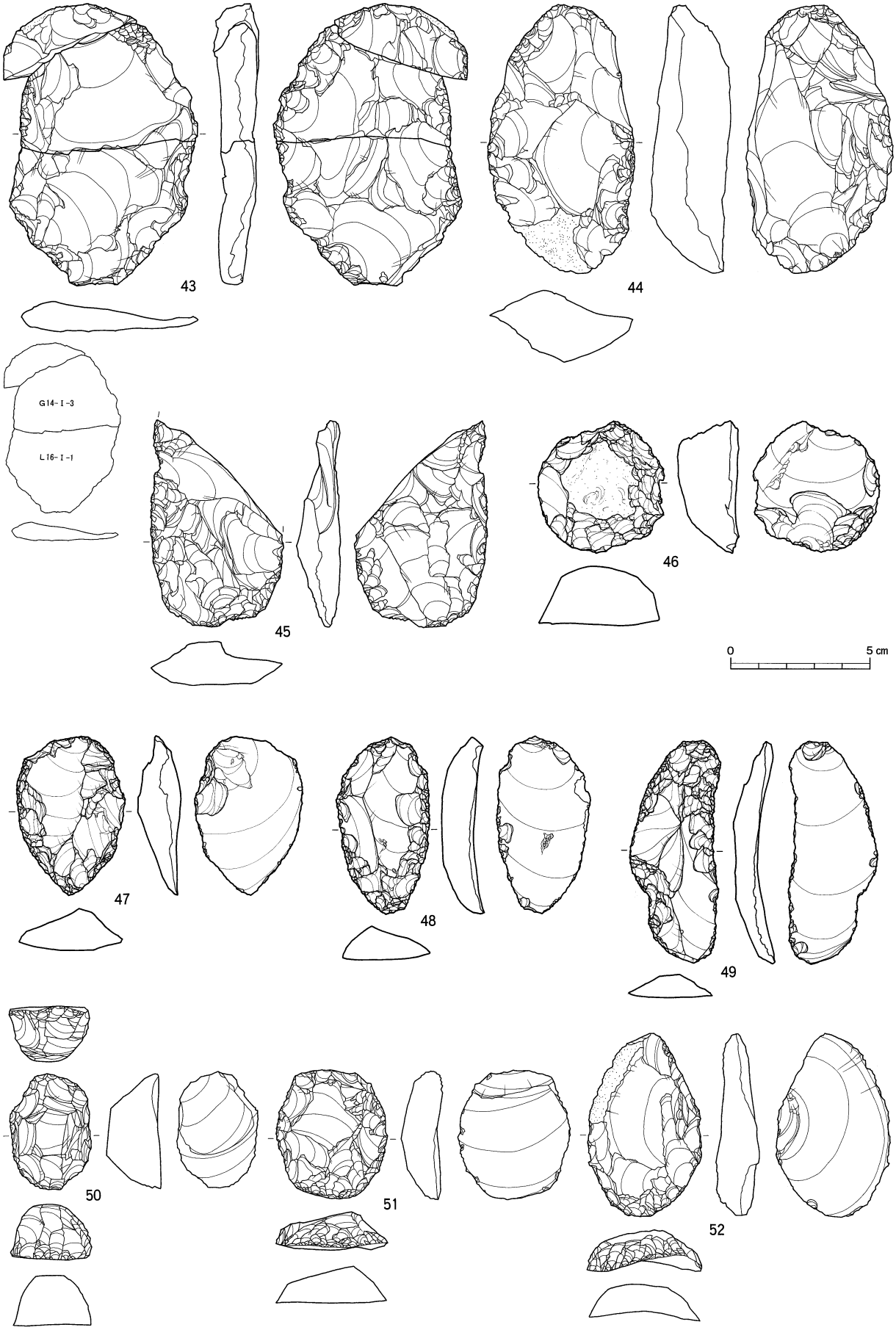
４点（４個体）を図示している。46は転礫面を持つ厚手の剥片素材で急角度の剥離で加工されたラウンドスクレイパー。腹面の一部に平坦剥離が行われる。47・48は平坦剥離によって尖頭状に加工されたもの。透明度が高く非白滝産と推定される47には稜線の摩滅した素材面と傷の少ない二次加工面の多段階表面変化（二重パティナ）が観察され、石器単体で搬入されたものと考えられる。49は縦長剥片素材で平坦剥離によって加工が行われる。

掻器（図Ⅲ－７－50～図Ⅲ－８－54、図版８）

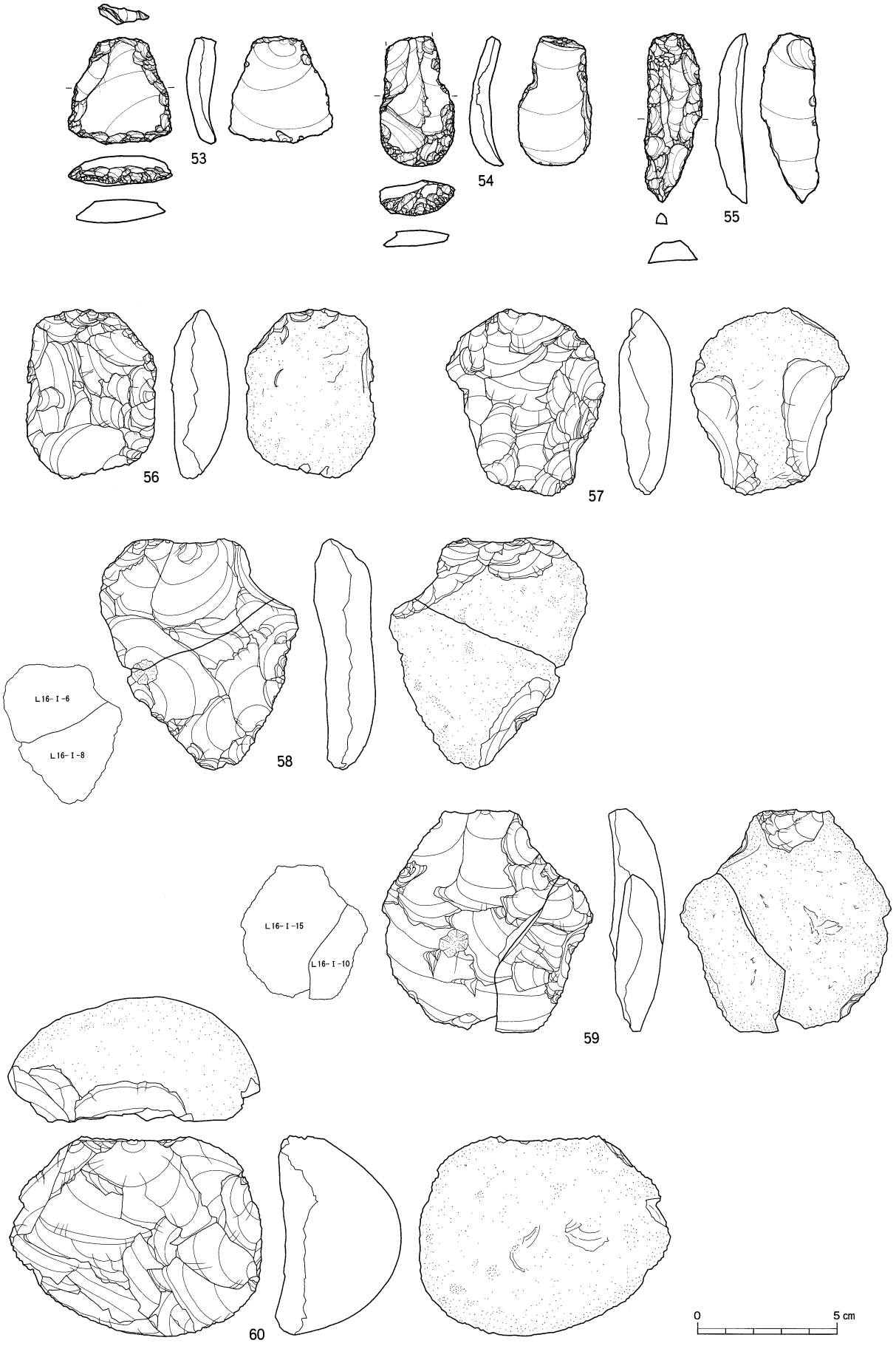
５点（５個体）を図示している。50・51は全周縁に急角度の加工が行われ、50は厚さ19mm の厚手の剥片素材である。52は幅広の湾曲した剥片素材で素材を横方向に利用して側縁に刃部が作出される。53は素材両面ともポジ面で、浅い加工によって四角い刃部が作出される。54は先端部に反りのある石刃素材で先端部に弧状の刃部が作出される。

錐形石器（図Ⅲ－８－55、図版８）

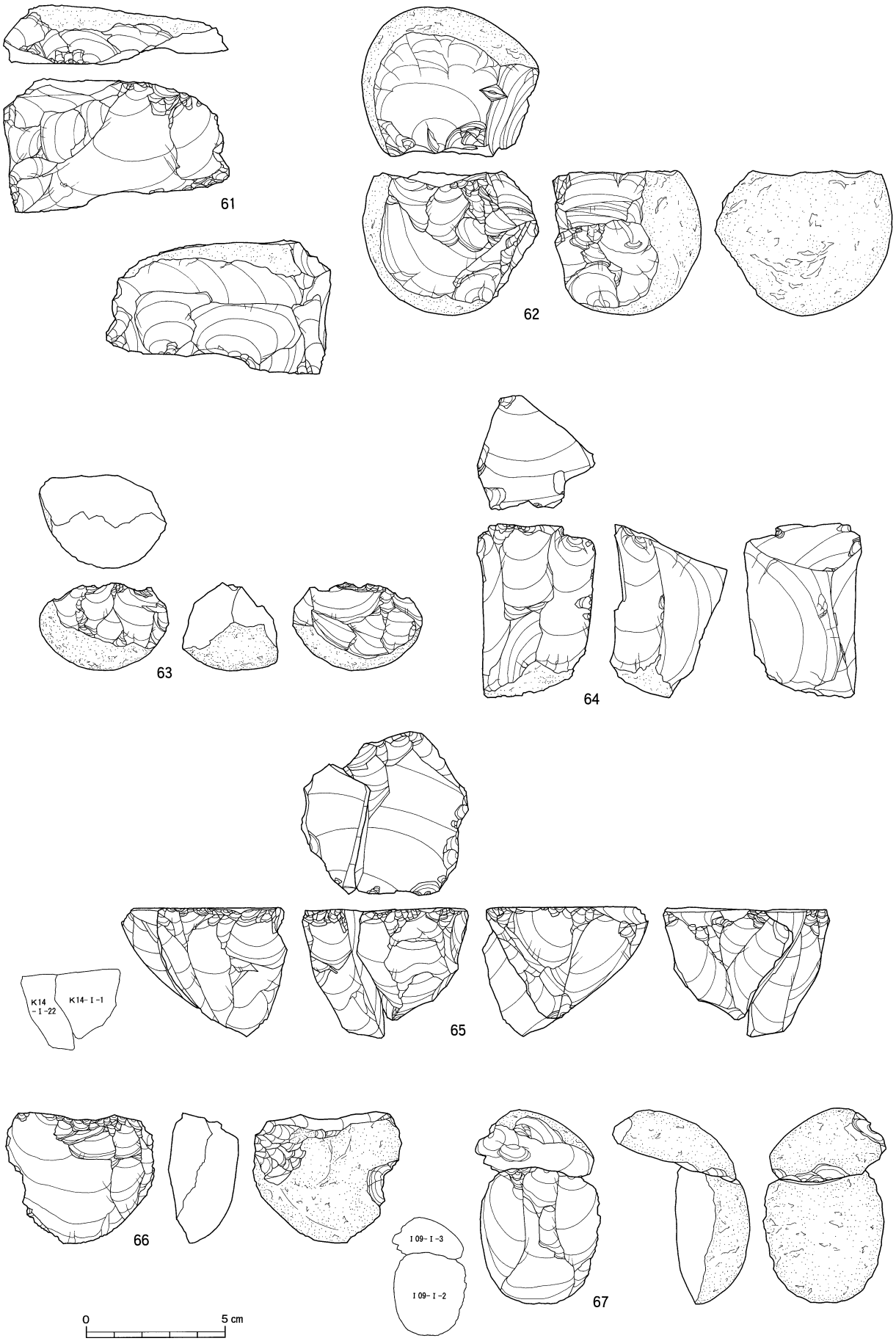
１点（１個体）を図示している。55は両側縁に急角度の加工が施され、先端部に突出した刃部が作出される。



図Ⅲ－７　発掘区出土石器⑶　両面調整石器・スクレイパー・掻器



図Ⅲ－８　発掘区出土石器(4)　掻器・石核



図Ⅲ－９　発掘区出土石器(5)　石核

石核（図Ⅲ－８－56～図Ⅲ－９－67、図版８）

16点(12個体)を図示している。原礫面の残存しない65を除くと全て転礫を素材としている。56～60はⅠ類。56～59の厚さは20mm以下と薄手であるが、残存する転礫面の形状から素材原石サイズは10～15cm程度の大きさであったと推定される。56～58は全周縁から求心的な剥離が行われる。59は剥片素材で正面下部に平坦でリングの密集する素材面が残り、下縁を除く３方向から剥離が行われている。60は裏面に原石の丸みが残り、厚手で、上縁・右側縁から剥離が行われる。61はⅡ類。裏面にはリングの密な平坦で大きい剥離面が残り、その面を切って正面の剥離が、さらに裏面下縁から剥離が行われる。62･63はⅢa類。63は剥離が交互剥離状に行われ、上縁形はギザギザしている。Ⅲa類の素材原石サイズは10cm以下と推定され、Ⅰ類より小型の原石が利用される。64～67はⅣa類。64は上面・右側面・左側面に大型の剥離面が残り、粗い剥離によって整形された後、正面で縦長剥片が剥離されている。頭部調整は見られない。65は全周で軽微な頭部調整を伴う縦長剥片剥離が行われる。途中、内在する剥離面で折損した後、剥離は継続される。66・67は裏面に原礫面が残り、剥離が一方向に進んでいる。67は打面作出剥片が接合し、８cm程度の小型の転礫が利用されている。

（鈴木宏行）

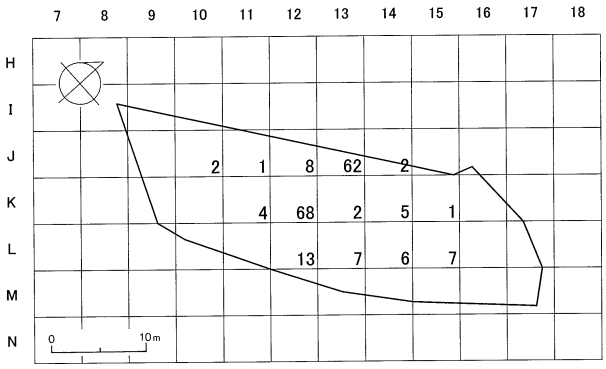
（３）　分布

図Ⅲ－10～12に発掘区出土遺物の器種別の分布状況を示した。前述の通り、耕作等により包含層が攪乱され、厳密な原位置を保っていない。しかしながら、出土遺物のほとんどがⅠ層発掘区出土遺物であり、遺跡全体の大まかな分布傾向を示していると考えられるためにここで概観することとする。

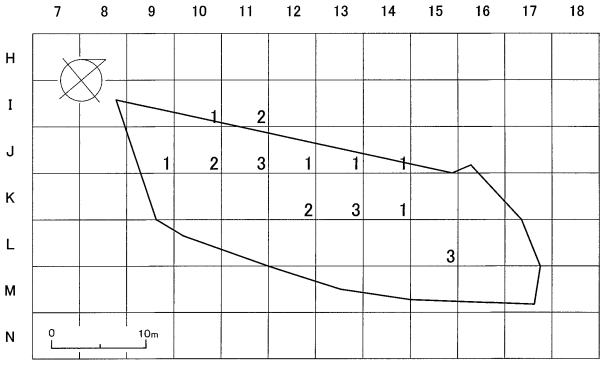
全体的な分布の傾向は剥片の出土状況が示している。剥片はＪ11･14、Ｋ10区で6,000点以上、隣接するＪ12・13、Ｋ11～14区で約２～4,000点が出土し、段丘の平坦面全域に集中する傾向がある。但し、Fc－１のあるＬ16区で2,633点出土し、斜面部の肩にも集中域が見られる。各器種も剥片同様に平坦面全体に分布する傾向があるが、石鏃はⅡ類が東側に、Ⅵ類がＫ13区に偏る。石槍は石鏃Ⅵ類の集中するＫ13区には分布せず、スクレイパーはＪ列に多く分布する。石核はⅠ類が斜面の肩であるＬ16区に、Ⅲ類が西側に分布する傾向があり、土器は個体資料である図Ⅲ－３－１が出土したＫ12区を除くとＪ13区に偏りが見られる。

（鈴木宏行）

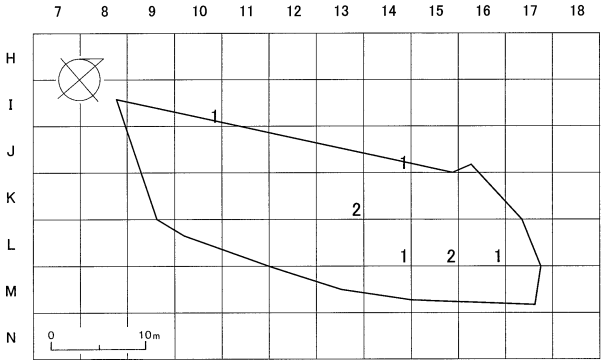
土器



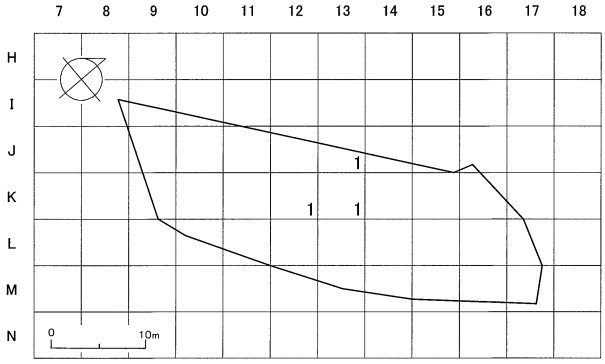
石鏃Ⅰ類



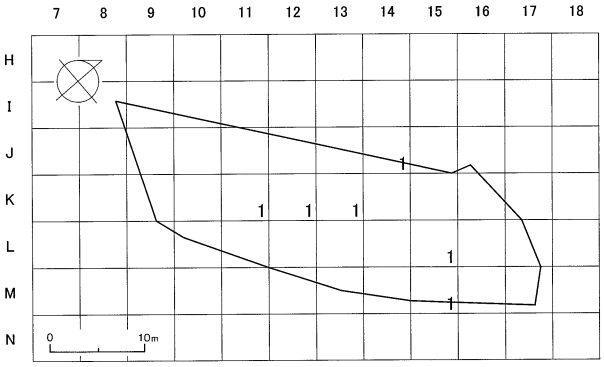
石鏃Ⅱ類



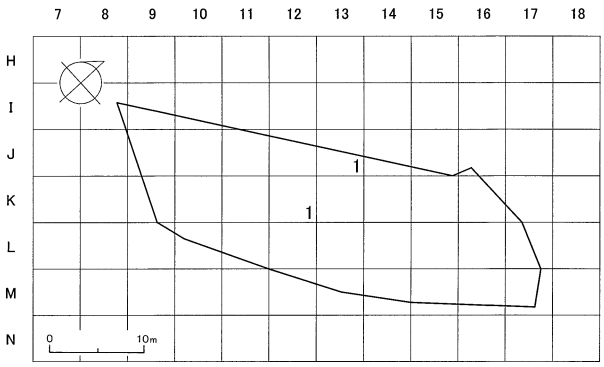
石鏃Ⅲ類



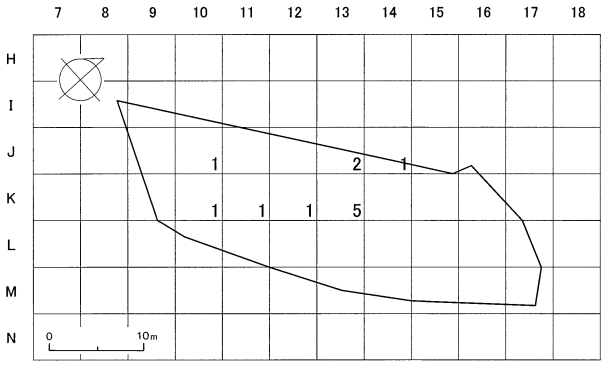
石鏃Ⅳ類



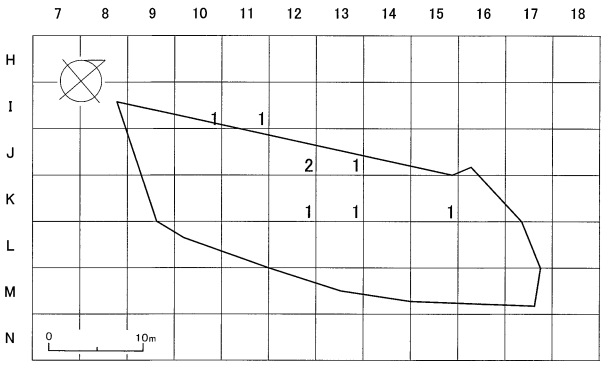
石鏃Ⅴ類



石鏃Ⅵ類

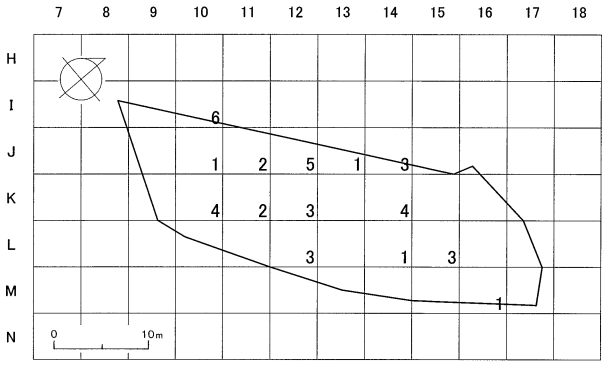


石鏃Ⅶ類

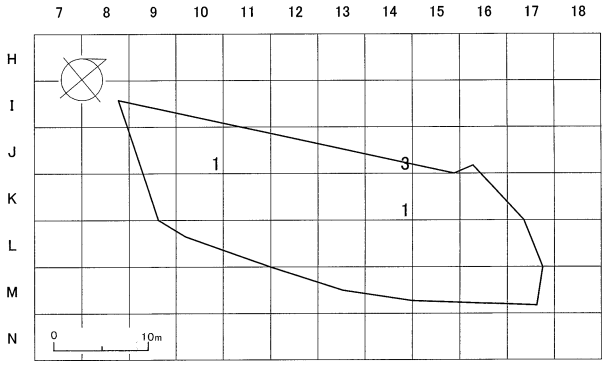


図Ⅲ－10　発掘区出土遺物の器種別分布図(1)

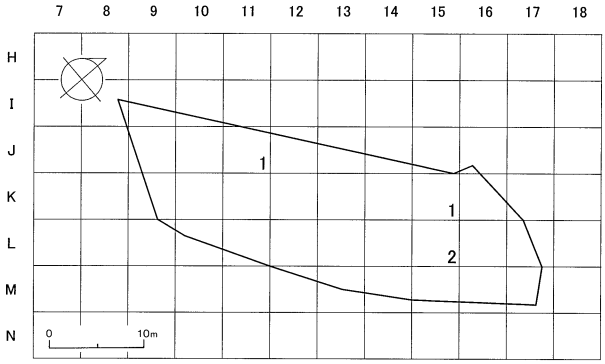
石槍



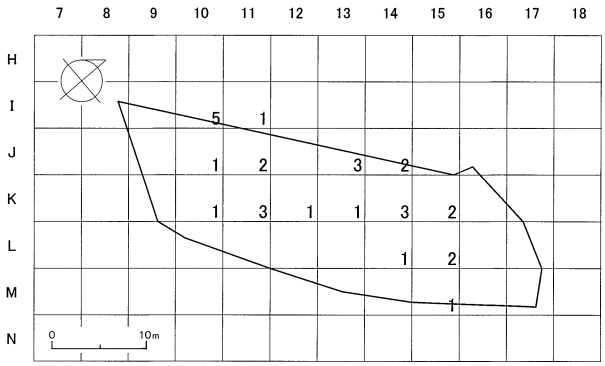
ナイフ



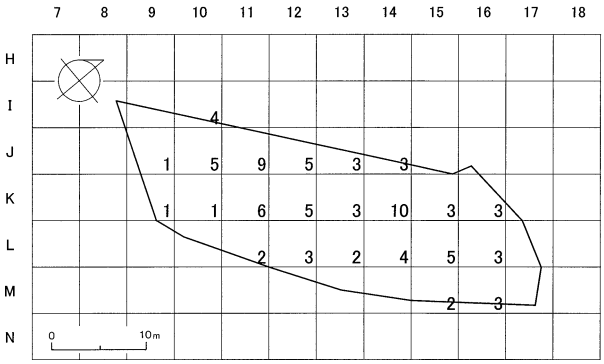
つまみ付きナイフ



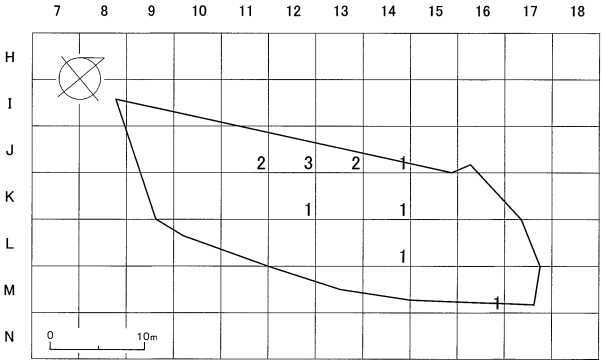
石槍またはナイフ



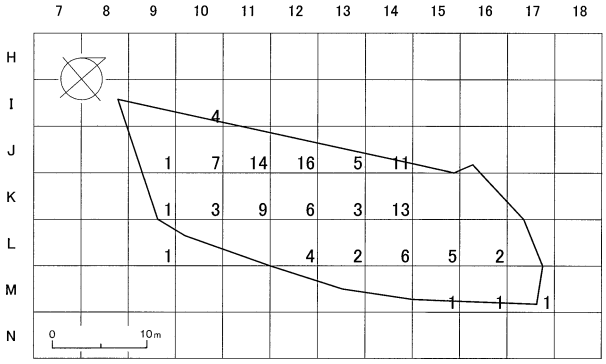
両面調整石器



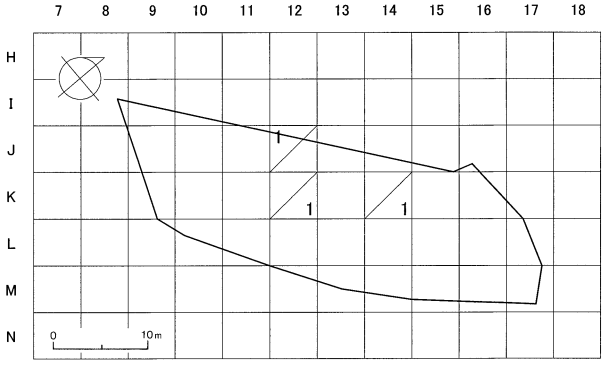
掻器



スクレイパー

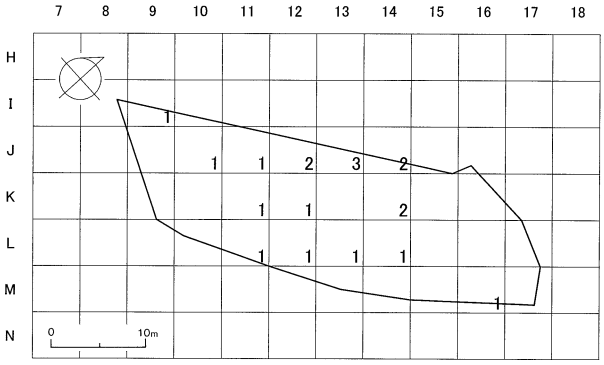


錐形石器／原石

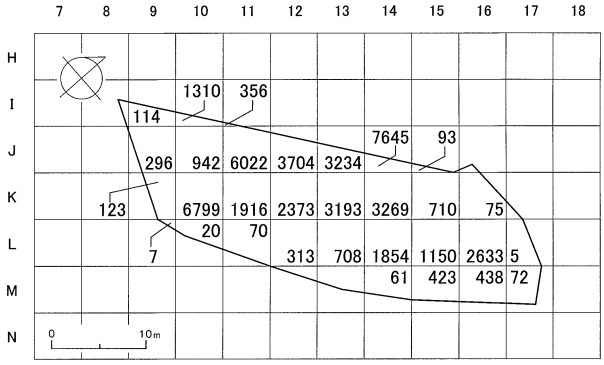


図Ⅲ－11　発掘区出土遺物の器種別分布図(2)

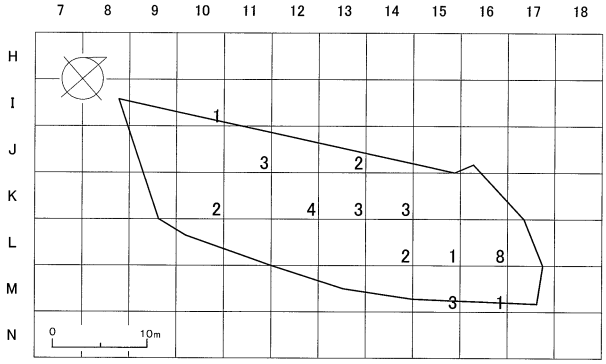
二次加工ある剥片



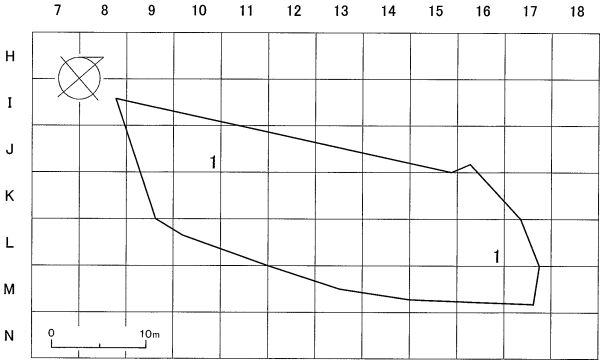
剥片



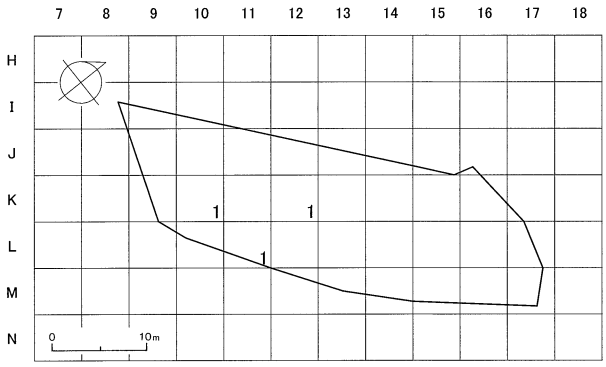
石核Ⅰ類



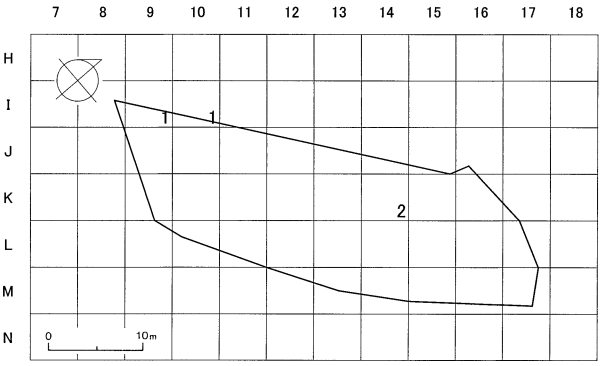
石核Ⅱ類



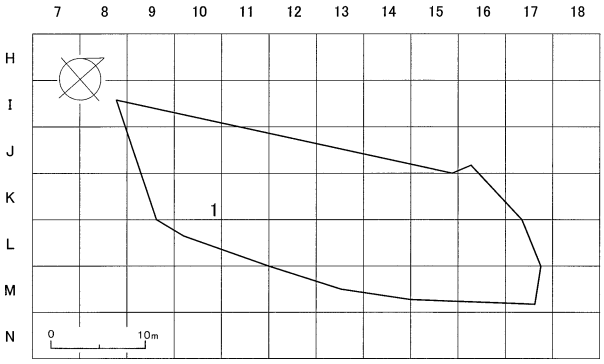
石核Ⅲ類



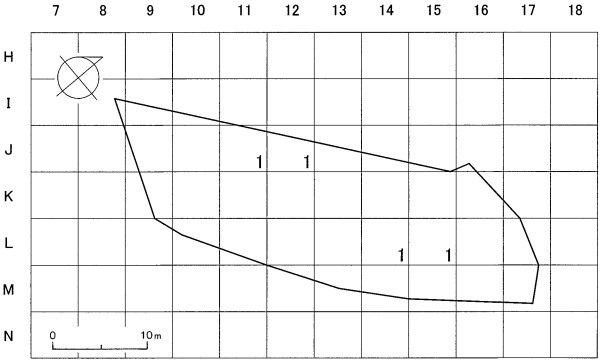
石核Ⅳ類



石核Ⅴ類



石核Ⅵ類



図Ⅲ－12　発掘区出土遺物の器種別分布図(3)

表Ⅲ－１　栄野１遺跡出土遺物 遺構・層位・石質別一覧

種類	遺構・層位	石質	土器		石鏃		石槍		ナイフ		つまみ付きナイフ		石槍またはナイフ		両面調整石器		スクレイパー	
			点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)
Fc	Fc－１	黒曜石１													2	33.4		
		黒曜石２																
		黒曜石３																
		黒曜石４																
		黒曜石５																
	Fc－１　計														2	33.4		
発掘区	Ⅰ	黒曜石１			54	51.4	23	239.5	1	15.4	2	38.0	18	177.3	62	1277.3	78	1027.8
		黒曜石２			3	1.6	10	148.2					1	12.4	8	244.5	12	252.4
		黒曜石３			4	2.7	2	20.2	3	66.8	1	12.3	7	99.9	16	512.9	17	394.1
		黒曜石４			1	0.3									1	20.4	2	10.2
		黒曜石５			1	0.6	5	30.5					5	32.4	10	138.2	8	159.8
		安山岩																
		頁岩															1	6.7
		珪岩					1	4.5			1	10.3						
		めのう							1	15.7								
		砂岩																
		碧玉																
	Ⅰ　計		188	867.3	63	56.6	41	442.9	5	97.9	4	60.6	31	322.0	97	2193.3	118	1851.0
排土・その他		黒曜石１			2	0.5	2	75.0					2	40.5	1	41.5		
		黒曜石２															2	123.5
		黒曜石３													1	72.6	1	28.5
		黒曜石４																
		黒曜石５													2	152.4		
		碧玉																
	排土・その他　計		11	17.2	2	0.5	2	75.0					2	40.5	4	266.5	3	152.0
合　計			199	884.5	65	57.1	43	517.9	5	97.9	4	60.6	33	362.5	103	2493.2	121	2003.0

種類	遺構・層位	石質	掻器		錐形石器		二次加工ある剥片		剥片		石核		原石		礫		合計	
			点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)
Fc	Fc－１	黒曜石１							2460	574.9	1	53.8					2463	662.1
		黒曜石２							4	4.5							4	4.5
		黒曜石３							83	86.1	1	8.7					84	94.8
		黒曜石４							22	2.5							22	2.5
		黒曜石５									1	31.6					1	31.6
	Fc－１　計								2569	668.0	3	94.1					2574	795.5
発掘区	Ⅰ	黒曜石１	12	157.4	1	11.3	8	223.0	40473	53130.8	32	2741.0	1	3.2			40765	59093.4
		黒曜石２	1	23.7			4	152.8	6234	12278.8	6	1041.4					6279	14155.8
		黒曜石３					4	51.9	3626	9239.6	7	340.5	1	1.3			3688	10742.2
		黒曜石４							1291	2640.2	1	76.0					1296	2747.1
		黒曜石５	2	50.9			4	52.1	76	512.8	5	236.9					116	1214.2
		安山岩							1	2.7							1	2.7
		頁岩					1	27.7	2	26.2							4	60.6
		珪岩							4	5.6							6	20.4
		めのう					1	6.0	2	19.1							4	40.8
		砂岩													1	358.9	1	358.9
		碧玉							7	16.8	1	57.2					8	74.0
	Ⅰ　計		15	232.0	1	11.3	22	513.5	51716	77872.6	52	4493.0	2	4.5	1	358.9	52356	89377.4
排土・その他		黒曜石１					2	108.3	1027	2341.3	5	441.0					1041	3048.1
		黒曜石２							138	765.9							140	889.4
		黒曜石３							85	343.6	1	155.1					88	599.8
		黒曜石４							20	16.6							20	16.6
		黒曜石５							14	138.5	3	432.0					19	722.9
		碧玉							1	1.7							1	1.7
	排土・その他　計						2	108.3	1285	3607.6	9	1028.1					1320	5295.7
合　計			15	232.0	1	11.3	24	621.8	55570	82148.2	64	5615.2	2	4.5	1	358.9	56250	95468.6

表Ⅲ－２　栄野１遺跡　掲載土器一覧

挿図	図版	番号	発掘区	層位	分類	部位	調整・保存状態		文様・特徴等			色調・胎土・付着物等			備考
							器面(表)	内面(裏)	地文	口唇部	器面(表)	器面(表)	内面(裏)	胎土	
Ⅲ－3	6	1	K12	Ⅰ・Ⅱ攪乱	Ⅵ	完形鉢形	一部剝落	やや粗面	RL 縦走	RL 斜行	擬縄貼付文	黄橙～茶褐	炭化物、黒褐	砂粒	鬚台状突起、揺籃
Ⅲ－4	6	2	J13	Ⅰ	Ⅵ	口縁部	剝落・摩耗	横位の調整	不明	RL 斜行	貼付文の痕跡	赤茶褐	炭化物、赤茶	砂粒、黒変	山形突起
Ⅲ－4	6	3	J13	Ⅰ	Ⅵ	口縁部	剝落・摩耗	横位の調整	不明	RL 斜行	貼付文の痕跡	黄茶褐	炭化物、黒褐	砂粒	山形突起
Ⅲ－4	6	4	J13	Ⅰ	Ⅵ	口縁部	剝落・摩耗	横位の調整	不明	RL 斜行	貼付文の痕跡	暗褐	炭化物、茶褐	砂粒、黒変	山形突起
Ⅲ－4	6	5	J13	Ⅰ	Ⅵ	口縁部				断面鋭角	貼付文、L 縄線文	茶褐	炭化物、黒褐	砂粒、黒変	山形突起
Ⅲ－4	6	6	J12	Ⅰ	Ⅵ	口縁部	やや摩耗	摩耗		断面鋭角	微隆起線文、R 縄線文	暗灰褐	茶褐	砂粒、黒変	
Ⅲ－4	6	7	K11	Ⅰ	Ⅵ	口縁部	やや摩耗	摩耗	RL 横、斜行	断面丸み	微隆起線文	暗茶褐	茶褐	砂礫	小突起
Ⅲ－4	6	8	J13	Ⅰ	Ⅵ	胴部	剝落・摩耗	横位の調整	不明		同心円状貼付文	黄茶褐	炭化物、橙茶	砂粒、黒変	
Ⅲ－4	6	9	J13	Ⅰ	Ⅵ	胴部	摩耗	剝落・摩耗	不明		微隆起線文	黄茶褐	炭化物、黒茶	砂粒、黒変	
Ⅲ－4	6	10	J13	Ⅰ	Ⅵ	胴部	摩耗	摩耗	RL 縦走		微隆起線文	赤橙褐	炭化物、黒褐	砂粒、黒変	
Ⅲ－4	6	11	J13	Ⅰ	Ⅵ	胴部	剝落・摩耗	摩耗	不明		微隆起線文	赤橙褐	炭化物、暗茶	砂粒、黒変	
Ⅲ－4	6	12	J13	Ⅰ	Ⅵ	胴部	剝落・摩耗	摩耗	RL 縦走		微隆起線文	赤橙褐	暗褐	砂粒、黒変	
Ⅲ－4	6	13	J13	Ⅰ	Ⅵ	胴部	剝落・摩耗	摩耗	不明		微隆起線文	赤橙褐	炭化物、黒褐	砂粒、黒変	
Ⅲ－4	6	14	K11	Ⅰ	Ⅵ	口縁部	剝落・摩耗	やや粗面	不明		微隆起線文	淡茶褐	暗茶褐	砂粒	
Ⅲ－4	6	15	J13	Ⅰ	Ⅵ	胴部	剝落・摩耗	摩耗	RL 縦走		微隆起線文	赤橙褐	暗褐～黒褐	砂粒、黒変	
Ⅲ－4	6	16	J13	Ⅰ	Ⅵ	胴部	剝落・摩耗	摩耗	不明		微隆起線文	黄茶褐	暗褐～黒褐	砂粒、黒変	
Ⅲ－4	6	17	J10	Ⅰ	Ⅵ	胴部	摩耗		不明		微隆起線文	赤橙褐	炭化物、灰黒	砂粒、黒変	
Ⅲ－4	6	18	J13	Ⅰ	Ⅵ	頸部	剝落・摩耗	粗面	RL 縦走		擬縄文、LR 縄線文	炭化物、暗黄褐	暗灰黄褐	砂粒	
Ⅲ－4	6	19	L12・13	Ⅰ	Ⅵ	胴部		丁寧に調整	RL 横走		微隆起線文	赤橙褐	赤橙褐	砂礫	
Ⅲ－4	6	20	K14	Ⅰ	Ⅵ	胴部		やや滑沢			微隆起線文	黄茶褐	赤茶褐	砂礫	
Ⅲ－4	6	21	J13	Ⅰ	Ⅵ	胴部	摩耗	剝落	RL 斜行			茶褐	暗褐色	砂粒	
Ⅲ－4	6	22	L15	Ⅰ	Ⅵ	胴部	やや摩耗		LR 斜行			褐	炭化物、黒褐	砂粒	
Ⅲ－4	6	23	L15	Ⅰ	Ⅵ	胴部		丁寧に調整	LR 斜行			淡橙茶	炭化物、黒	砂礫	
Ⅲ－4	6	24	J10	Ⅰ	Ⅵ	胴部	剝落・摩耗		LR 縦走			黒褐	黒褐	砂粒	
Ⅲ－4	6	25	J13	Ⅰ	Ⅵ	胴部	剝落・摩耗	摩耗	RL 縦走			赤茶褐	黒褐	砂粒、黒変	
Ⅲ－4	6	26	J13	Ⅰ	Ⅵ	胴部	剝落・摩耗		RL 縦走			赤茶褐	黒褐	砂粒、黒変	
Ⅲ－4	6	27	L14	攪乱	Ⅵ	胴部	剝落・摩耗		RL 縦走			黄赤褐	暗褐	砂粒	

表Ⅲ－３　栄野１遺跡　掲載単品一覧

挿図	図版	番号	器 種 名	遺構名	発掘区	一括層位	遺物番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　質	接合番号	備　考
Ⅲ－２	7	1	両面調整石器	Fc－１		Ⅱ	1	38	46	19	21.8	黒曜石１		
Ⅲ－５	7	1	石鏃		K12	Ⅰ	30	12	11	3	0.3	黒曜石１		
Ⅲ－５	7	2	石鏃		J13	Ⅰ	3	16	15	2	0.4	黒曜石１		
Ⅲ－５	7	3	石鏃		J11	Ⅰ	13	18	13	3	0.6	黒曜石１		
Ⅲ－５	7	4	石鏃		I11	Ⅰ	1	19	14	2	0.5	黒曜石１		
Ⅲ－５	7	5	石鏃		J09	Ⅰ	2	21	15	2	0.7	黒曜石１		
Ⅲ－５	7	6	石鏃		K13	Ⅰ	1	23	12	2	0.5	黒曜石１		
Ⅲ－５	7	7	石鏃		L15	Ⅰ	13	(34)	17	3	(1.5)	黒曜石１		
Ⅲ－５	7	8	石鏃		J10	Ⅰ	8	18	16	3	0.9	黒曜石１		
Ⅲ－５	7	9	石鏃		J13	Ⅰ	25	23	17	3	1.1	黒曜石１		
Ⅲ－５	7	10	石鏃		I15	Ⅰ	2	(21)	19	3	(1.2)	黒曜石１		
Ⅲ－５	7	11	石鏃		K13	Ⅰ	2	22	16	3	0.5	黒曜石１		
Ⅲ－５	7	12	石鏃		K12	Ⅰ	31	16	7	2	0.2	黒曜石１		
Ⅲ－５	7	13	石鏃		K13	Ⅰ	20	25	9	2	0.3	黒曜石１		
Ⅲ－５	7	14	石鏃		K12	Ⅰ	9	30	14	4	1.1	黒曜石１		
Ⅲ－５	7	15	石鏃		K12	Ⅰ	10	29	15	3	1.1	黒曜石１		
Ⅲ－５	7	16	石鏃		K13	Ⅰ	3	40	21	7	4.2	黒曜石１		
Ⅲ－５	7	17	石鏃		L15	Ⅰ	4	44	26	6	5.1	黒曜石１		
Ⅲ－５	7	18	石槍		L12	Ⅰ	2	56	(21)	7	(5.9)	黒曜石１		
Ⅲ－５	7	19	石槍		K14	Ⅰ	28	69	26	9	13.4	黒曜石１		
Ⅲ－５	7	20	石槍		J11 J12	Ⅰ Ⅰ	10 5	80	31	9	12.0 4.9	黒曜石２	50001	
Ⅲ－５	7	21	石槍		表採		1	82	31	8	18.8	黒曜石１		
Ⅲ－５	7	22	石槍		G10	Ⅰ	1	(55)	28	7	(8.4)	黒曜石１		
Ⅲ－５	7	23	石槍		M16	Ⅰ	4	49	(32)	8	(8.9)	黒曜石２		
Ⅲ－５	7	24	石槍		K10	Ⅰ	3	(58)	39	10	(14.4)	黒曜石２		
Ⅲ－５	7	25	石槍		K12	Ⅰ	20	90	33	16	35.6	黒曜石１		
Ⅲ－５	7	26	石槍		L15	Ⅰ	18	(72)	40	12	(26.6)	黒曜石２		
Ⅲ－５	7	27	石槍		ボサ		12	(110)	35	14	(56.2)	黒曜石１		
Ⅲ－６	7	28	ナイフ		K14	Ⅰ	14	74	28	7	12.1	黒曜石３		
Ⅲ－６	7	29	ナイフ		J14	Ⅰ	13	59	34	9	15.7	めのう		
Ⅲ－６	7	30	ナイフ		J14 J14	Ⅰ Ⅰ	14 26	104	34	12	24.6 30.1	黒曜石３	50002	
Ⅲ－６	7	31	つまみ付きナイフ		L15	Ⅰ	25	46	22	11	10.3	珪岩		
Ⅲ－６	7	32	つまみ付きナイフ		L15	Ⅰ	12	68	29	7	12.3	黒曜石３		
Ⅲ－６	7	33	つまみ付きナイフ		K15	Ⅰ	1	63	32	12	24.0	黒曜石１		
Ⅲ－６	7	34	つまみ付きナイフ		J11	Ⅰ	4	62	28	8	14.0	黒曜石１		
Ⅲ－６	7	35	ナイフ		J10	Ⅰ	20	(53)	(36)	10	(15.4)	黒曜石１		
Ⅲ－６	7	36	石槍またはナイフ		K15	Ⅰ	3	(31)	(32)	9	(11.7)	黒曜石１		
Ⅲ－６	7	37	石槍またはナイフ		I13	Ⅰ	1	(47)	(32)	9	(11.8)	黒曜石３		
Ⅲ－６	7	38	両面調整石器		J13	Ⅰ	10	57	19	5	5.6	黒曜石１		
Ⅲ－６	7	39	両面調整石器		J11	Ⅰ	18	56	31	10	15.2	黒曜石１		
Ⅲ－６	7	40	両面調整石器		K15 K16	Ⅰ Ⅰ	6 1	61	39	7	2.0 10.0	黒曜石１	50003	
Ⅲ－６	7	41	両面調整石器		J11 J11	Ⅰ Ⅰ	8 19	71	43	12	19.8 13.0	黒曜石５	50005	
Ⅲ－６	7	42	両面調整石器		G13 M16	Ⅰ Ⅰ	1 7	82	44	12	16.8 26.5	黒曜石１	50007	
Ⅲ－７	7	43	両面調整石器		G14 L16 M16	Ⅰ Ⅰ Ⅰ	3 1 5	102	70	15	36.7 41.7 15.1	黒曜石１	2	
Ⅲ－７	8	44	両面調整石器		K14	Ⅰ	9	97	53	26	128.7	黒曜石３		
Ⅲ－７	8	45	両面調整石器		K14	Ⅰ	7	(75)	(48)	14	(38.1)	黒曜石１		
Ⅲ－７	8	46	スクレイパー		M15	Ⅰ	8	47	46	21	45.6	黒曜石２		
Ⅲ－７	8	47	スクレイパー		J11	Ⅰ	14	67	39	15	24.8	黒曜石１		
Ⅲ－７	8	48	スクレイパー		K14	Ⅰ	15	64	34	11	21.3	黒曜石１		
Ⅲ－７	8	49	スクレイパー		J12	Ⅰ	22	80	32	9	20.0	黒曜石１		
Ⅲ－７	8	50	掻器		J12	Ⅰ	1	42	30	19	23.7	黒曜石２		
Ⅲ－７	8	51	掻器		J12	Ⅰ	2	47	40	13	25.9	黒曜石５		
Ⅲ－７	8	52	掻器		J11	Ⅰ	31	66	41	10	33.4	黒曜石１		
Ⅲ－８	8	53	掻器		J14	Ⅰ	19	38	37	9	12.4	黒曜石１		
Ⅲ－８	8	54	掻器		H08	Ⅰ	1	(46)	27	7	(9.1)	黒曜石１		
Ⅲ－８	8	55	錐形石器		J12	Ⅰ	17	60	22	9	11.3	黒曜石１		
Ⅲ－８	8	56	石核		L16	Ⅰ	9	61	46	20	60.6	黒曜石３		
Ⅲ－８	8	57	石核		K14	Ⅰ	8	67	57	18	68.1	黒曜石２		
Ⅲ－８	8	58	石核		L16 L16	Ⅰ Ⅰ	6 8	83	71	17	52.4 52.4	黒曜石１	50015	
Ⅲ－８	8	59	石核		L16 L16	Ⅰ Ⅰ	10 15	81	76	18	22.5 82.6	黒曜石３	50016	
Ⅲ－８	8	60	石核		M15	Ⅰ	5	72	91	41	302.9	黒曜石２		
Ⅲ－９	8	61	石核		L16	Ⅰ	13	49	82	20	70.6	黒曜石１		
Ⅲ－９	8	62	石核		H13	Ⅰ	3	52	64	51	218.8	黒曜石１		
Ⅲ－９	8	63	石核		L11	Ⅰ	2	32	47	27	49.9	黒曜石１		
Ⅲ－９	8	64	石核		G14	Ⅰ	2	63	43	38	85.2	黒曜石１		
Ⅲ－９	8	65	石核		K14 K14	Ⅰ Ⅰ	1 22	47	60	56	82.3 49.3	黒曜石３	4	
Ⅲ－９	8	66	石核		I10	Ⅰ	22	47	54	24	56.5	黒曜石１		
Ⅲ－９	8	67	石核 剝片		I09 I09	Ⅰ Ⅰ	2 3	70	45	26	64.7 36.1	黒曜石１	6	

Ⅳ　新野上２遺跡の調査

１　調査の概要

（１）　遺跡の概要

新野上２遺跡は、湧別川支流の佐藤川左岸、標高129～130m 程の河岸段丘上に立地し、対岸には栄野１遺跡が位置する。JR 石北本線を挟んだ北側には新野上１遺跡が所在し、地元では、新野上１遺跡、新野上２遺跡ともに、耕作等により石器や土器片が採集されて、比較的古くからその存在が知られていたようである。ただ、昭和51年度に実施された、道教委による一般分布調査でも、新野上２遺跡については、埋蔵文化財包蔵地カードに石片多数と記録され、黒曜石片の散布が多いことが分かる程度で、遺跡の時期や性格など、詳細は不明であった。

道々改良工事に伴う平成15年度の試掘調査や今回の発掘調査によって、新野上２遺跡が時期的には続縄文前半期を主体とし、その分布範囲は東西200m に及ぶ広いものであることなどが明確となった。包含層の保存状態や遺物の分布密度などは、近年の土地利用による改変も加わって場所によって異なり、遺物は多いが耕作等によって包含層が破壊されている所、発電用の送水管埋設のため溝状に掘削された所、住宅など北電関連の諸施設の廃棄後に盛土に厚く埋め立てられて、包含層が比較的良好に残存する所、農地改良によって心土破砕された所など、様々であった。さらに、Ⅰ章４節２項に記述したように、発掘に際しては、隣接地における農作物の生育、発電施設の管理・保全、栄野会館の移設など、各種の制約に対応して、発掘区をＡ～Ｉの９地区に分割し（図Ⅰ－３）、優先順位や調査方法を考慮しつつ、調査を進めた。

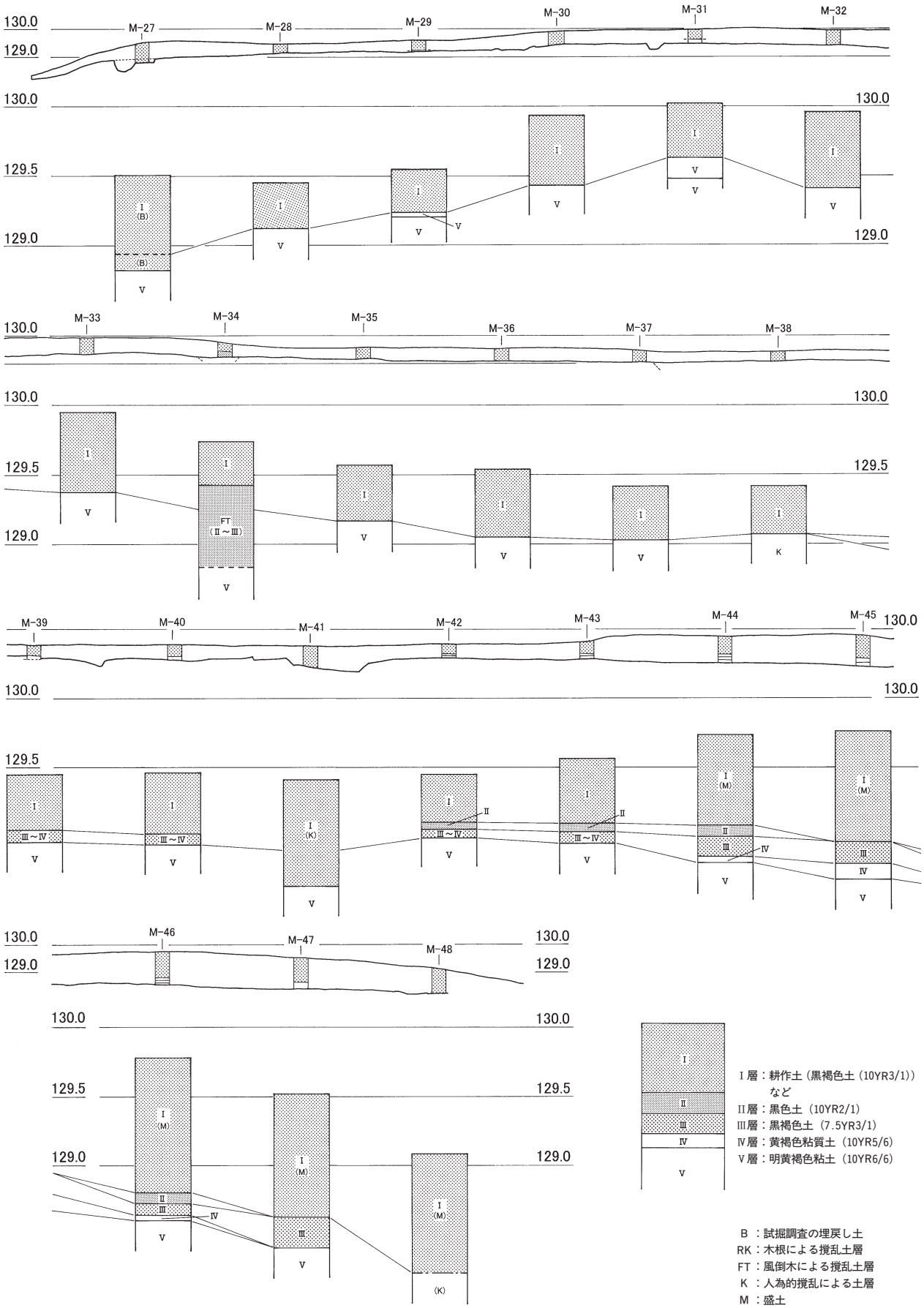
（２）　土層

新野上２遺跡では、栄野１遺跡と同様、Ⅱ章３節に触れた基本土層の堆積が認められたが、近年の土地改変による影響も多々あり、地区によって土層堆積は必ずしも一様ではなかった。その様相を記録するため、Ｍライン、30・40・50・60ラインを予めメインセクションラインに設定して、堆積状況を観察し、図Ⅳ－１～４に示す土層断面図を作成した。調査対象となった土層の大部分は耕作土や盛土主体のⅠ層であり、Ⅰ章４節２項で説明したように、セクションベルトは残さずに、地表面および最終面のレベル測定値に基づいて、断面図を作成したケースも多いが、５ｍ毎の柱状図の大部分については、グリッド杭の周囲に残された土層を観察、実測のうえ、図化した。

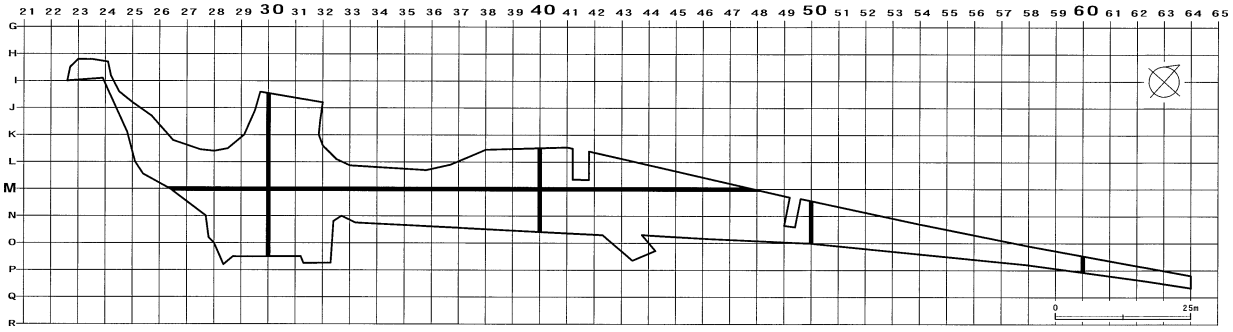
新野上２遺跡にみられた土層のうち、Ⅵ層を除くⅠ～Ⅴ層について、以下に説明する。

Ⅰ層には表土、耕作土、盛土など地表面を構成する土層を一括した。調査の主対象は黒褐色～暗褐色を呈する耕作土で、層厚は40～50cm 程度。耕作土には下のⅡ層に由来する遺物が遺存するケースが少なくない。とくに西側のＡ地区では、耕作土が50～60cm と厚い所も多く、多数の遺物が検出されたほか、Ｃ地区でも耕作土中から比較的多くの遺物が採集されている。Ｂ地区からＦ地区にかけて道路敷となっていた部分では、上層を主体に砂利の混入が多くみられた。Ｅ～Ｇ区にかけての一帯は、古くから発電所の建設や送電、維持管理に関連した諸施設が繰り返し建造された地域で、それらの解体、撤去後に残された攪乱層や埋め立てられた粘土主体の盛土層が、木材やコンクリート塊などの廃材や塵芥など多くの廃棄物を混在させて、厚く堆積していた。東のＨ・Ｉ地区では、心土破砕を伴う農地改良工事が行われたようで、層厚45～50cm の灰黄褐色を呈する粘土がちな耕作土が一様に堆積して

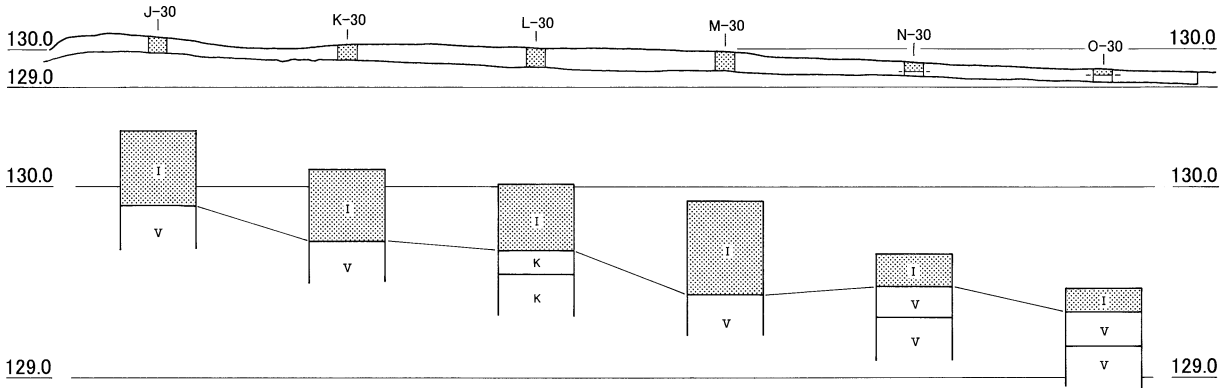
Mライン



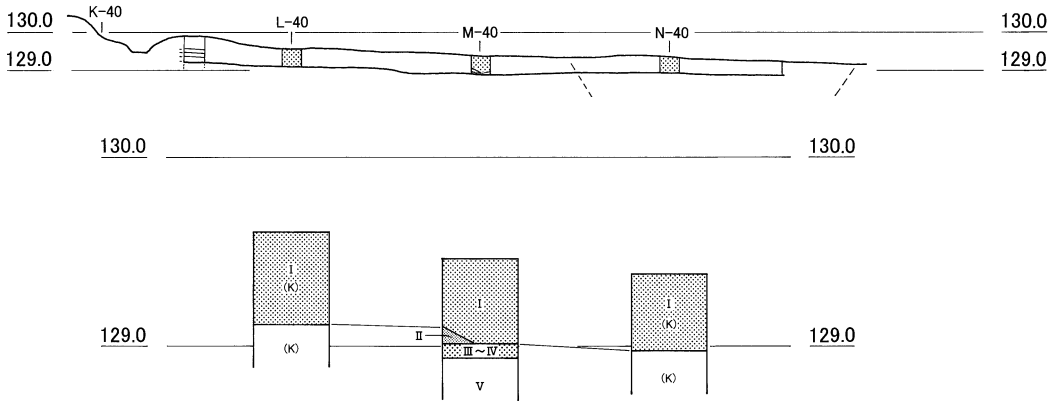
図Ⅳ－1　土層柱状図(1)



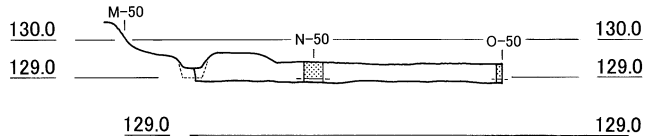
30ライン



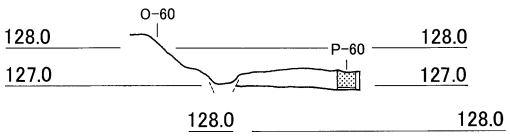
40ライン

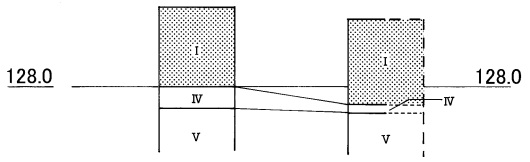


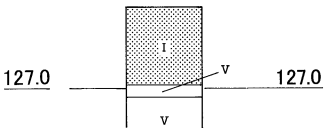
50ライン



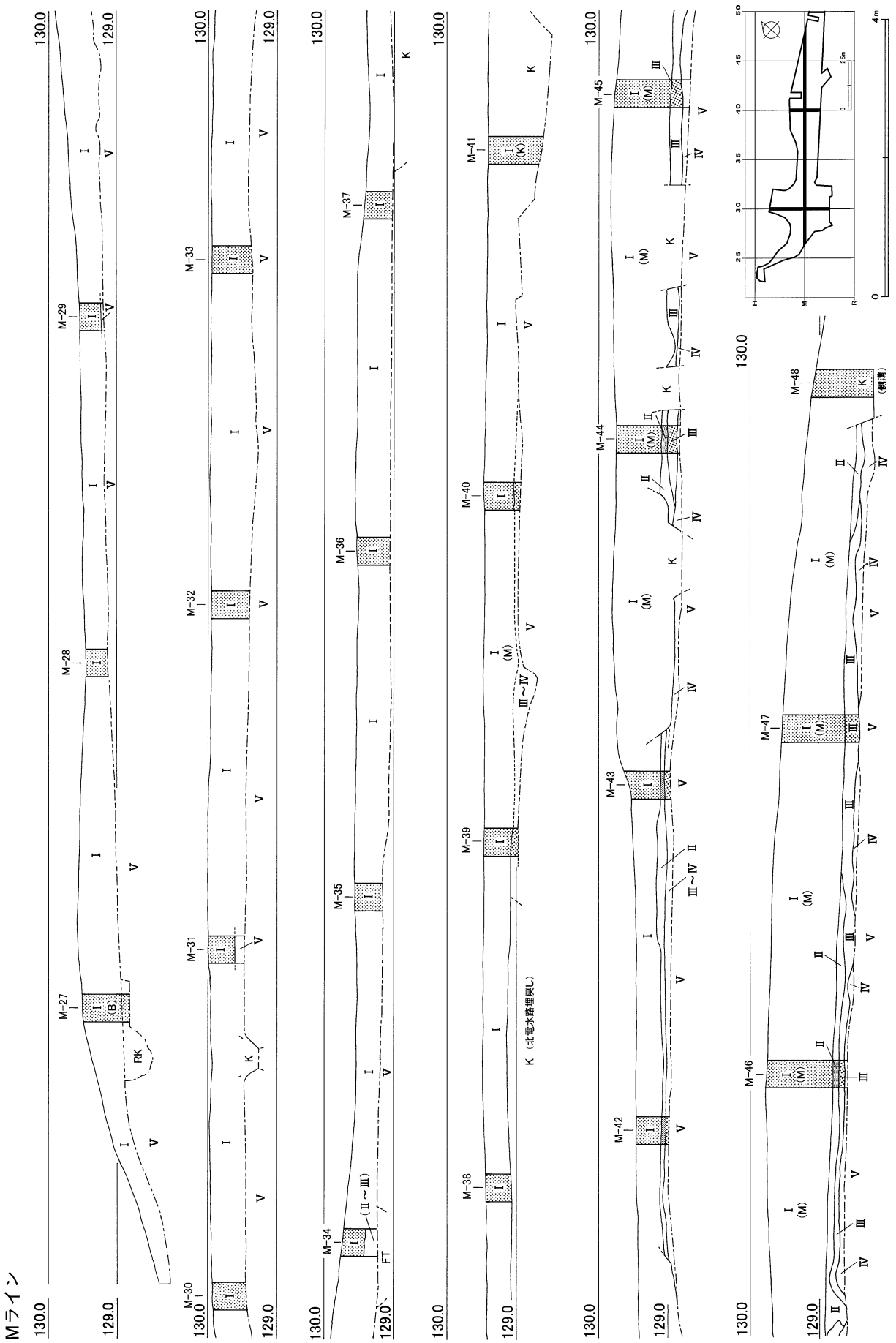
60ライン



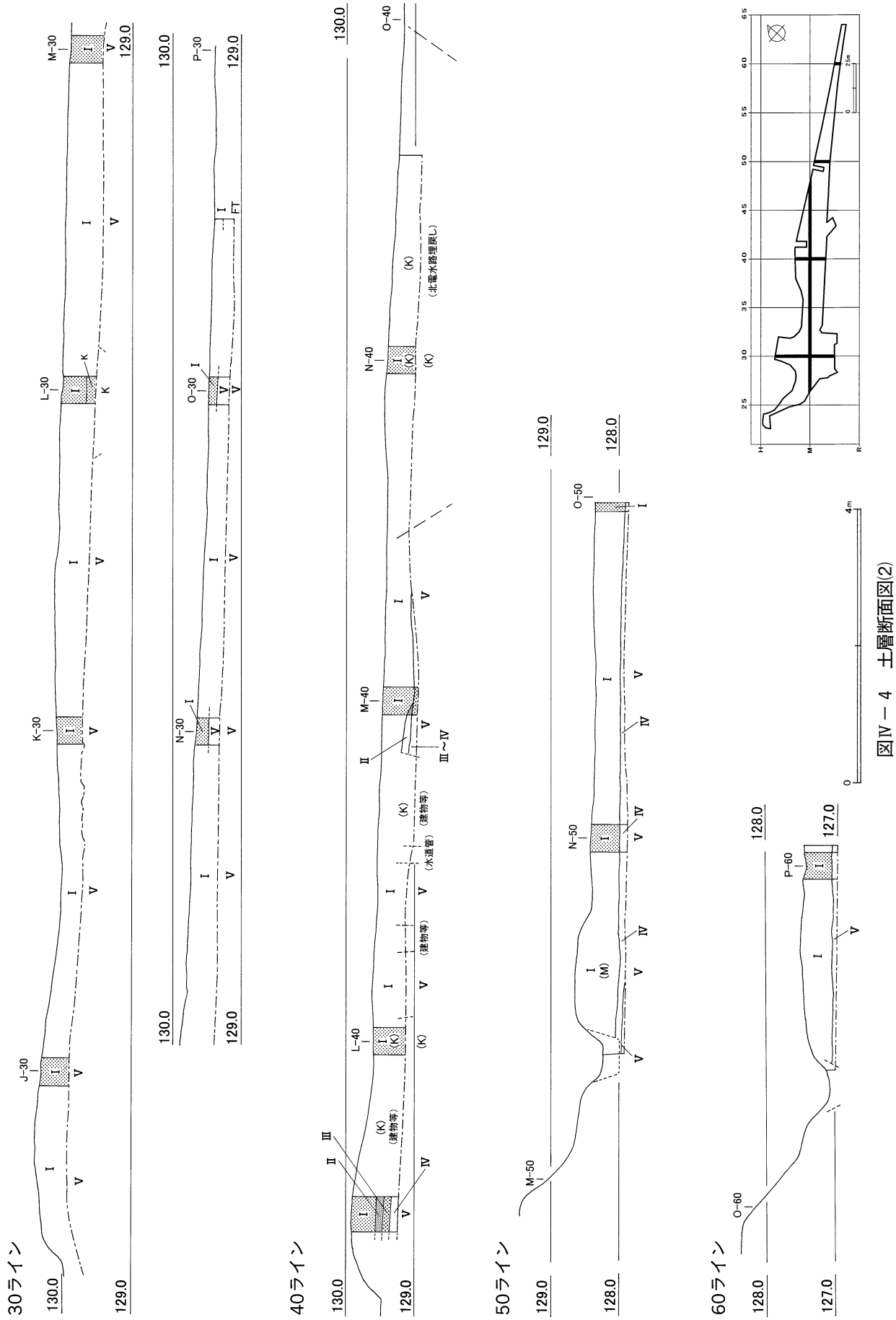




図Ⅳ－２　土層柱状図(2)


Mライン
130.0
129.0
M-27
M-28
M-29
M-30
M-31
M-32
M-33
M-34
M-35
M-36
M-37
M-38
M-39
M-40
M-41
M-42
M-43
M-44
M-45
M-46
M-47
M-48
RK
K
FT
K（北電水路埋戻し）
K（側溝）
4m

図Ⅳ－３　土層断面図(1)


30ライン
40ライン
50ライン
60ライン
J-30
K-30
L-30
M-30
N-30
O-30
P-30
L-40
M-40
N-40
O-40
N-50
O-50
M-50
P-60
O-60
130.0
129.0
128.0
127.0
(K)
(建物等)
(水道管)
(北電水路埋戻し)
(M)
FT
I
II
III
III～IV
IV
V
K
H
M
R
25m
4m

図Ⅳ－４　土層断面図(2)

おり、遺物の点在は僅かであった。

Ⅱ層は黒色土で、黄褐色軽石の細粒を点在させる。やや粘性を帯び、比較的堅くしまる。層厚は10cm内外。Ⅱ層は縄文早期から続縄文期の遺物包含層だが、耕作等により削平され、消失した所も少なくない。耕作が殆ど及ばなかった西端のＨ－22・23区あたりでは、笹根や草根が密生する灰褐色がちな表土の下にⅡ層が残存し、図Ⅳ－22－91に掲載した大片の土器など、比較的保存状態の良好な遺物の遺存がみられた部分がある。Ⅱ層はＢ・Ｃ地区の北側でもみられたが、ここでは黒曜石片が散見される程度で、遺物の包含は少なかった。Ｅ～Ｇ地区一帯ではやや窪んだ地形が認められるなど、比較的厚くⅡ層が分布していた。フレイク集中も３カ所検出されており、黒曜石片や続縄文土器のほか、縄文早期末、前～中期、中～後期初頭の土器片などが、断片的ながら出土している。ここは北電関連の諸施設が造営された所で、少なからぬ攪乱が刻まれていたが、本来的にはⅡ層の残存状況は比較的良好と判断された。ただ、Ⅱ層中に包含されていたにも拘わらず、土器は摩耗の進んだ破片が多く、水磨や風蝕を受ける環境にあったことも疑われた。

Ⅲ層は黒褐色土で、主にＥ～Ｇ地区にかけて残存していた。Ⅲ層には黄褐色軽石粒を多量に含有する傾向が認められるが、軽石の点在が少なくてシルトがちな所や、不整に波打って下のⅣ層と入り乱れた状態の所などもあり、自然流水の影響などを受けている可能性も考えられる。

Ⅳ層は黄褐色粘質土で、いわゆる漸移層。ガラガラと軽石細粒が多い所や灰褐色のシルト質粘土がちな所など、必ずしも一様ではなく、とくに分層の必要性を感じない所も少なからずみられた。

Ⅴ層は明黄褐色粘土、シルト質で粘性が強く、しまっている。このⅤ層まで掘り下げた段階で、発掘調査を終了した。終了面には不整に分岐する細い水流の痕跡が認められ、流路跡には赤橙褐色がちの軽石を主体とする層が分布していた。

（３）　調査結果の概要

新野上２遺跡からは、土壙15基、フレイク集中４カ所の遺構が検出された。土壙のうちＰ－３は52本の石鏃など、副葬品と思われる石器類を多数伴っており、続縄文期の墓壙と判断された。Ｐ－１・６は小規模な土壙だが、配石を伴っており、小児墓の可能性が考えられるかも知れない。礫石器等を伴出したＰ－14や隣接して検出されたＰ－13・15など同規模の類例についても、類似した性格が認められるかも知れない。２ｍを超える大きさのＰ－５は、形状や構造に整然とした規格性が認められないが、石鏃や槍、掻器など携行可能な道具類を伴っており、キャンプ時の仮小屋かとも推定される。Ｐ－４・９・10・11など１～２ｍ規模の土壙からは、土器や石器が出土しているが、人為的な掘り込みではなく、木根による攪乱や風倒木による落ち込みの可能性が考えられた。15基の土壙の多くは、周囲の出土遺物などから判断して、続縄文前半期の所産かと思われるが、このように構築意図や性格が明瞭に窺える例は限られていた。

フレイク集中のうちFc－１～３はＧ地区のⅡ層中に検出されたもので、いずれも小規模だが、Fc－３には石斧類の伴出があり、その形態等から縄文期の可能性が考えられている。Fc－４はＡ地区に見出されたもので、やや規模が大きい。

出土土器には縄文早期末と思われる破片があり、前期末～中期前半、中期後半～後期初頭に比定されるものなども僅かに散見されたが、続縄文前半期に属する宇津内Ⅱa・Ⅱb式前後の資料が主体を占めている。石器には石鏃、石槍、ナイフ、掻器、両面調整石器、石錐などの器種があり、少量ながら石斧や礫石器もみられた。黒曜石製の不定形剝片に簡単な加工を施しただけの刃器がとくに多く、フレイク・チップはきわめて多量に出土している。

発掘調査では竪穴住居跡が検出されず、他の遺構も稀薄で、礫石器も少なかったことなどから、新野上２遺跡には定住的な集落の様相は認められず、狩猟・漁撈・採集といった生産活動や、石器作りなどの一時的な拠点だった可能性が高いと思われた。（髙橋和樹）

２　遺構と出土遺物

新野上２遺跡からは、土壙15基とフレイク集中４カ所の遺構が検出された（図Ⅳ－５、表Ⅳ－１）。地区別にみると、遺構の分布は大きく３カ所に分かれ、佐藤川に近い西寄りのＡ地区にやや多く、次いでＣ地区にまとまりがみられ、Ⅱ層が残存したＧ地区にもやや集中する傾向が認められた。これらの遺構について、以下に土壙、フレイク集中の順で報告する。

（１）　土壙

Ｐ－１（図Ⅳ－６、表Ⅳ－２、図版12・18・20）

位　　置　M43区の南寄り。

規　　模　0.55m×0.48m／0.42m×0.34m／0.12m

形　　態　平面形は不整円形で、断面形は半月形を呈し、壙底中央に扁平な礫が配置される。

土　　層　覆土は１～３層で、底面近くにⅤ層と類似した２・３層が堆積し、その上にⅡ層と類似する黒色土が堆積する。（鈴木）

遺　　物　土器１点、剝片41点、礫１点の計43点、重量1,687.9g の遺物が出土した。

土器　１は、１層から出土した口縁部の破片で、口辺が僅かに外反している。口唇には先端がやや丸い平篦状工具で刺突が連続して加えられており、口縁が小さく波打っている。色調は赤茶褐色で、胎土には砂礫が多く含まれる。器面は摩耗しているが、地文のやや縦走ぎみのLR斜行縄文がみられる。続縄文前半期の土器であろう。（髙橋）

石器　２は壙底から出土した礫である。薄く扁平で、左側縁の打ち欠き以外の加工は見られない。

時　　期　出土土器から続縄文前半期と判断される。

性　　格　底面に扁平な礫が配置されており、墓壙の可能性がある。（鈴木）

Ｐ－２（図Ⅳ－６、表Ⅳ－２、図版12・20）

位　　置　Ｌ44区中央

規　　模　(1.0)×0.85／(0.9)×0.50／0.13m

形　　態　北側半分は調査区域外、南東側の一部は木根による撹乱を受けているため、全体の形状は不明瞭であるが、長軸方位Ｎ－33°－Ｗの長円形であったとみられる。断面形は浅鉢状である。

土　　層　覆土は１～３層に分かれ、１層が木根によるⅡ層の撹乱層、２・３層はほぼ水平に堆積している。特に埋め戻したという様相はみられず、自然堆積の印象が強い。（直江）

遺　　物　スクレイパー１点、重量75.2g の遺物が出土した。

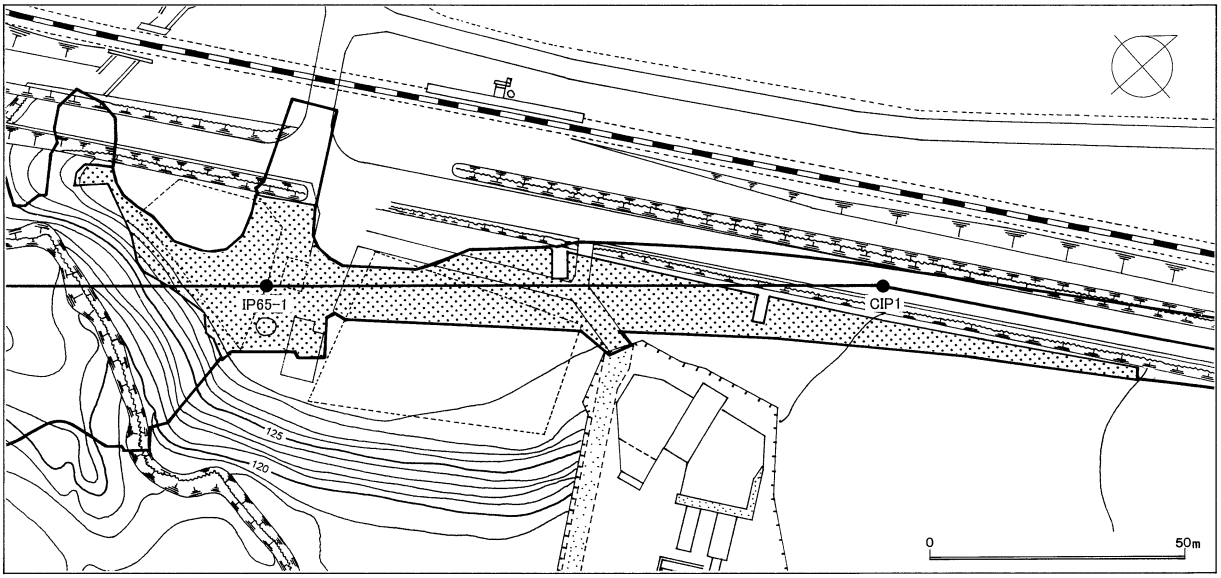
石器　１は覆土２層出土のスクレイパー。転礫面を持つ厚手の剝片素材で両側縁に急角度の加工が施される。（鈴木）

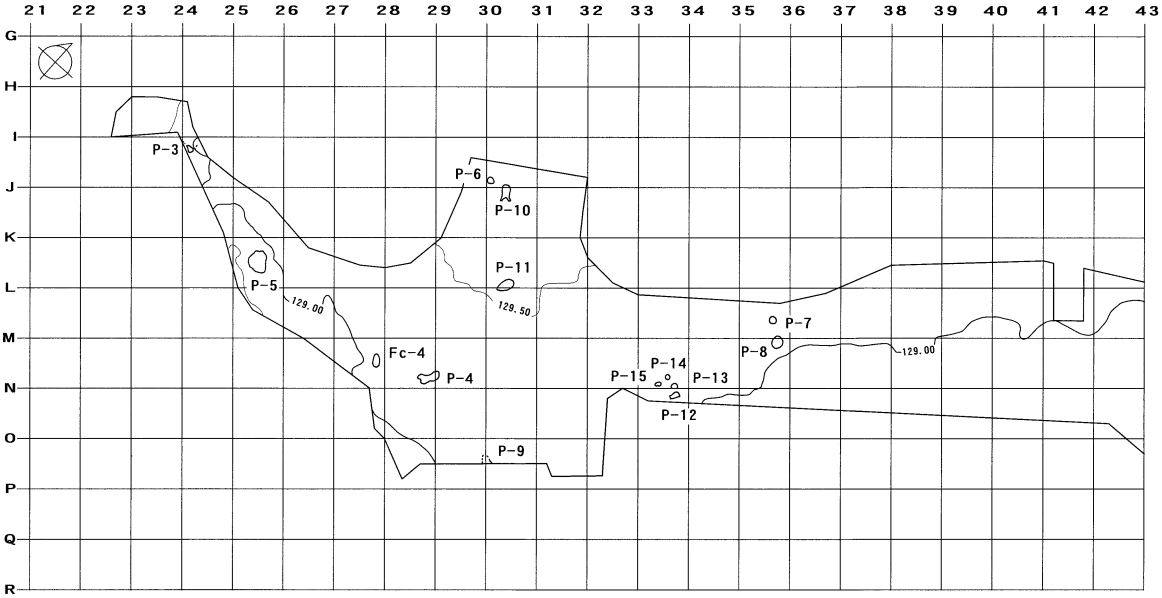
時　　期　確信はないが、覆土中の遺物や、周囲の出土遺物から続縄文前半期の可能性がある。

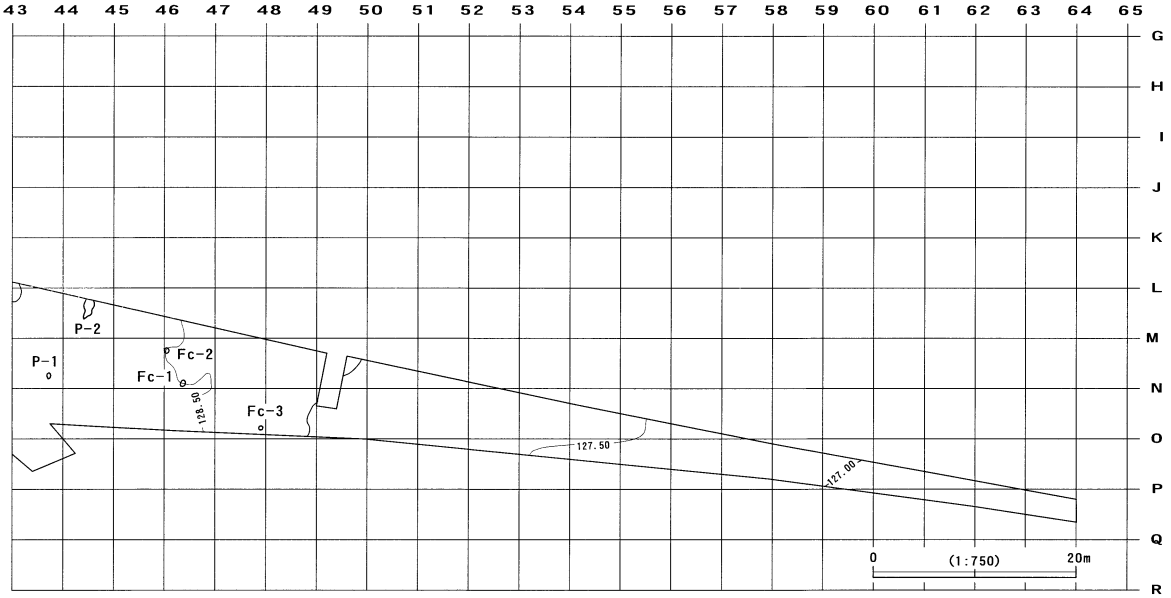
性　　格　掘りっぱなしの土壙だった可能性があり、構築意図は不明である。（直江）

Ｐ－３（図Ⅳ－７・８、表Ⅳ－２、図版13・20）

位　　置　Ｉ24区の北東寄り。佐藤川に面した段丘の縁に位置する。遺構の南側が削平され、北側は

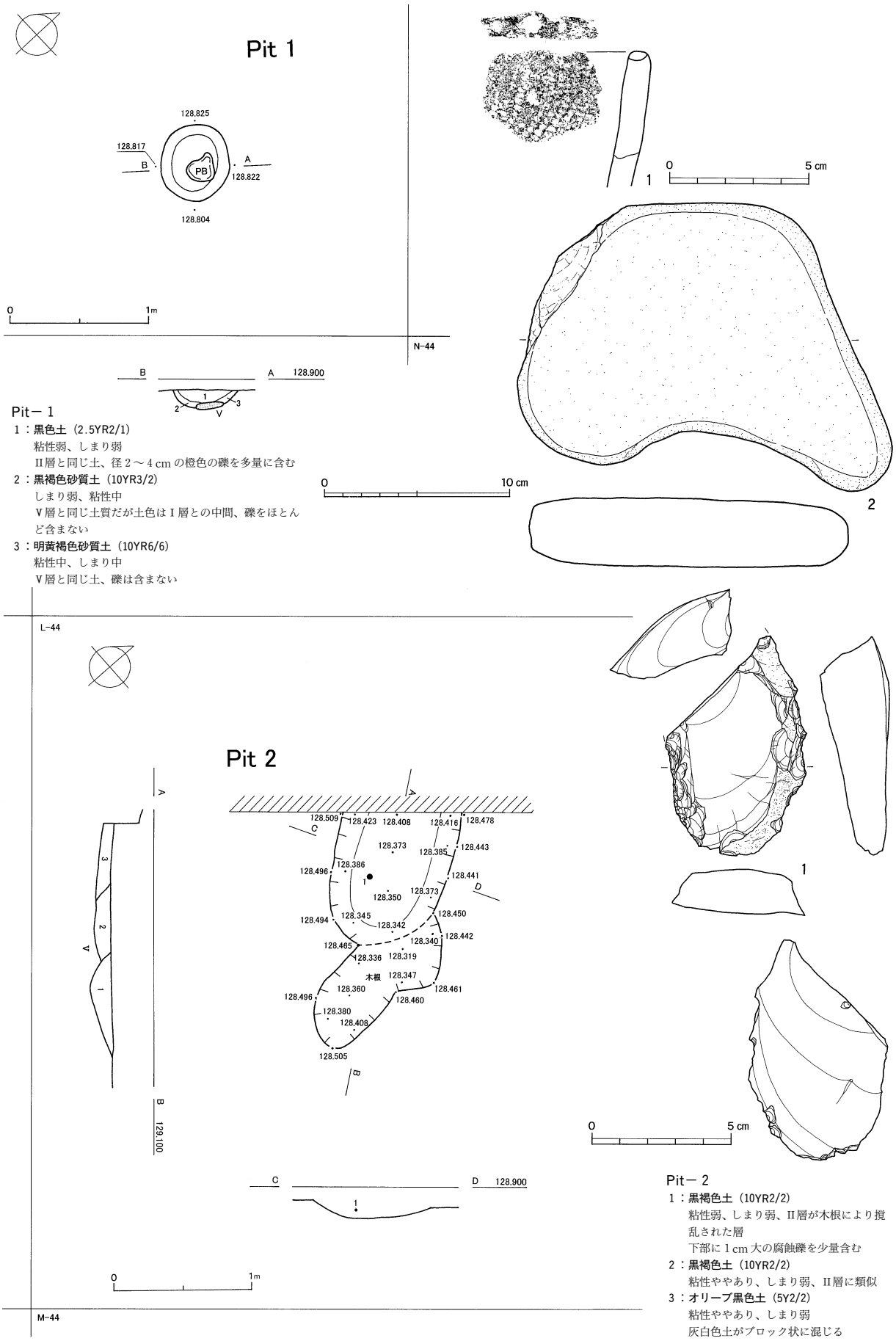




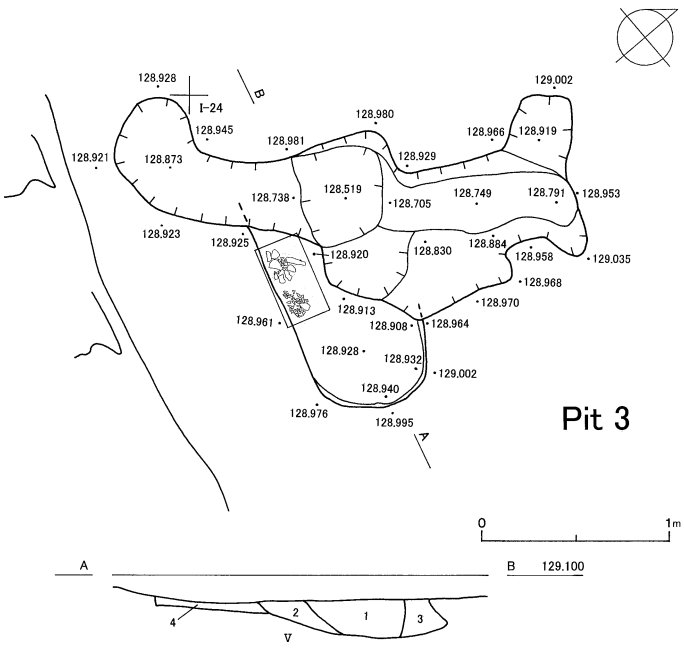


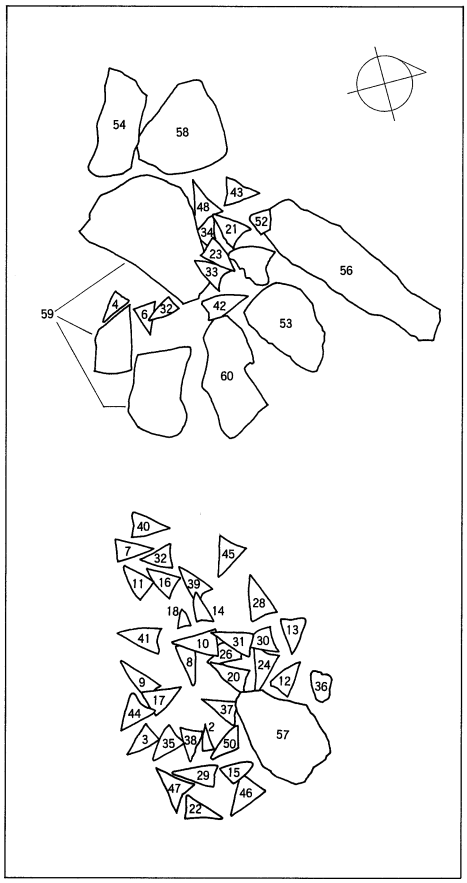
調査後の地形図

図Ⅳ－５　発掘区域地形図・遺構位置図



図Ⅳ－６　Ｐ－１・２平面図・土層・遺物





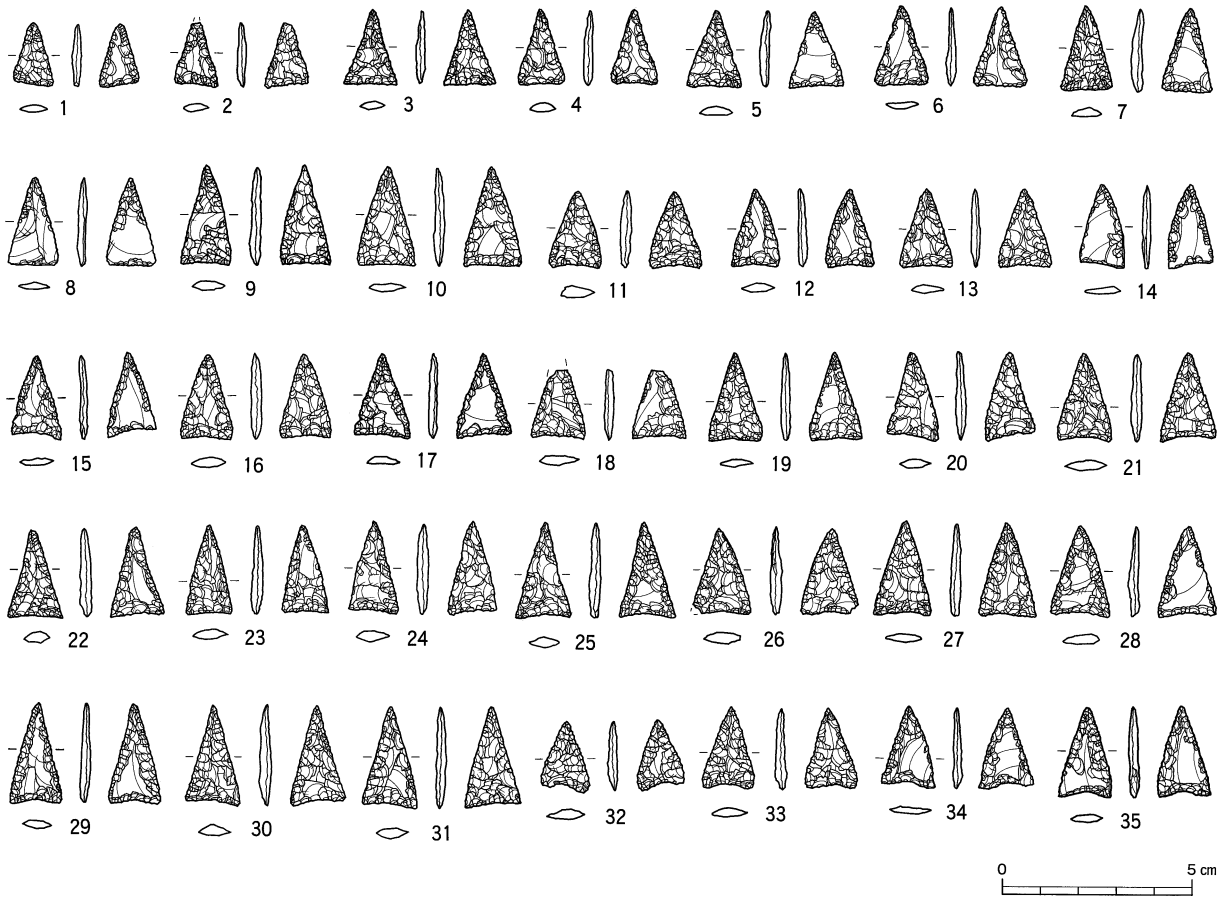
Pit－３

１：**黒色土**（10YR2/1）
　粘性中、しまりやや弱
　２～５cm 橙色の礫を含む、Ⅲ層と考えられる

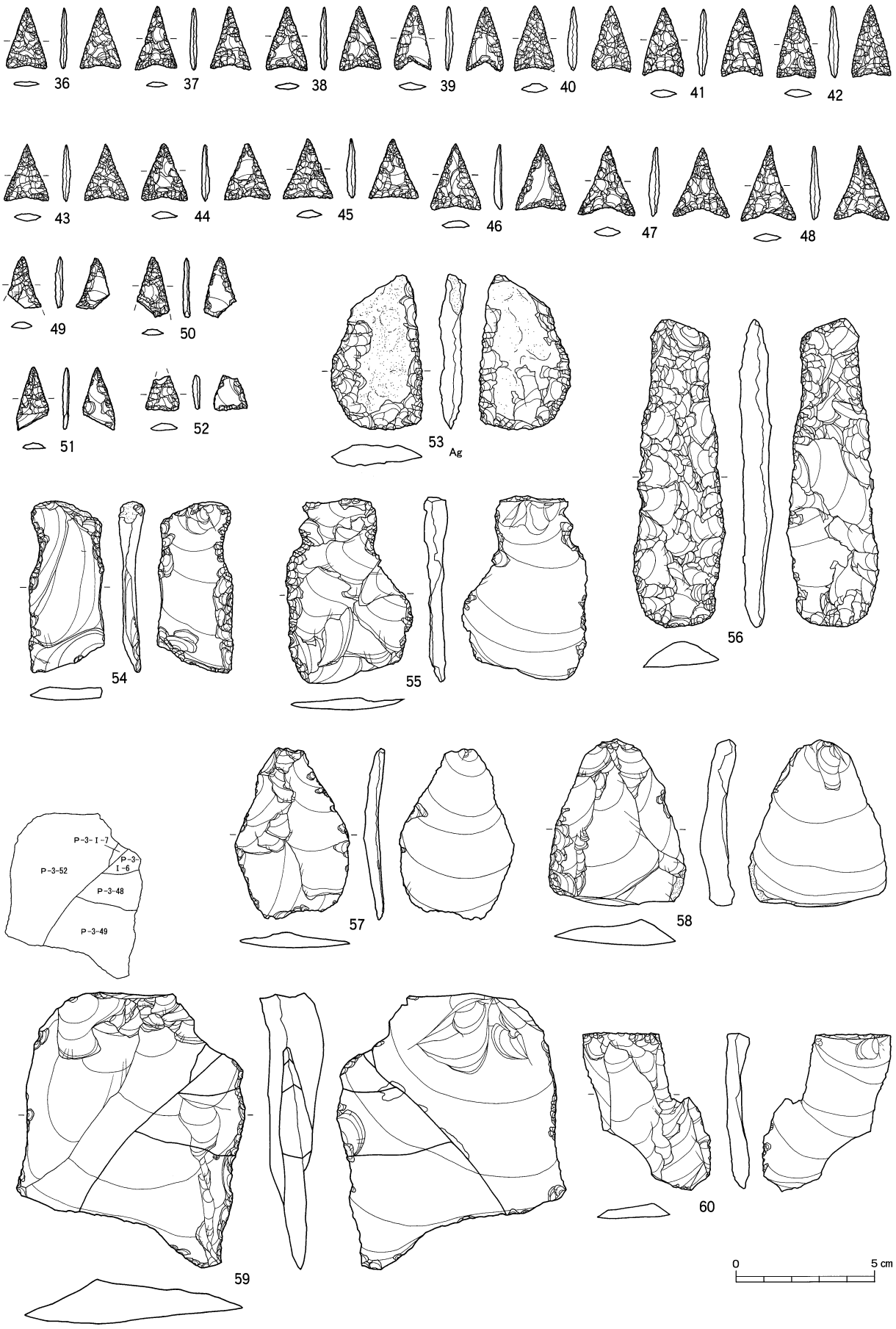
２：**黒褐色土**（10YR3/2）
　粘性中、しまり中
　黒～褐色の土が混じる不均質な土
　径２～５mm 程度の橙色の岩片を含む

３：**暗褐色土**（10YR3/3）
　粘性中、しまり中
　２～５cm の橙色の礫を多量に含むⅤ層の汚れた土

４：**黒褐色土**（10YR2/2）
　粘性やや強、しまり中、Pit３埋土



図Ⅳ－７　Ｐ－３平面図・土層・遺物(1)


36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
Ag
54
55
56
P-3-I-7
P-3-I-6
P-3-52
P-3-48
P-3-49
57
58
59
60
0
5 cm

図Ⅳ－８　Ｐ－３遺物(2)

調査区外であるため周辺に同様の遺構があるかどうかは不明。

規　　模　(1.3)m×0.60m／－／0.06m

形　　態　北西側半分が木根で壊され、正確な全体形は不明であるが、長軸がほぼ東西方向にある端部が弧状になった隅丸長方形を呈する。壙底は非常に平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がり、それらの境は明瞭である（図版13－５）。

土　　層　重機による耕作土除去の際に石鏃がまとまって出土し、確認された。耕作によって遺構の大部分は削平されており、覆土４が６cm 残存するのみであった。除去された耕作土の厚さから遺構の本来の深さは40cm 程度と推定される。遺体層･ベンガラ等は確認できなかった。断面図の土層１～３は木根による攪乱部分である。

遺　　物　土器は出土せず、石鏃52点、ナイフ１点、つまみ付きナイフ２点、両面調整石器１点、スクレイパー７点、二次加工ある剥片１点、剥片13点の計77点、重量265.3g の石器類が出土した。南側の壁の立ち上がりは削平によって残存せず、遺構内での正確な副葬品の位置は不明であるが、石器は南側の壁際二カ所にまとまっていたと思われる。東側の集中部からは石鏃34点、スクレイパー１点、剥片１点が、西側の集中部からは石鏃12点、ナイフ１点、つまみ付きナイフ２点、両面調整石器１点、スクレイパー６点（２個体）、二次加工ある剥片１点、剥片１点が出土している。東側は石鏃が、西側はナイフ類が多く、両地点とも石鏃の先端方向は一定ではなく、袋に入れられた状態で副葬されたものと推測される。その他の石鏃６点はその周辺から出土し、隣接する木根ないし耕作土からもII類の石鏃が出土していることから副葬品の一部は耕作によって拡散したものと思われる。

石器　１～52は石鏃で、完形品は全てII類、折損品も同様であったと考えらえる。１～10は基部が直線的なもの、11～31は基部がやや内湾するもの、32～42は基部がより内湾するもの、43～48はより幅広のタイプで45を除き基部が内湾している。側縁は直線的なものが多いが、内湾するものもある。基部を含めた形状の違いは連続的で明確な形態差として分別できるものではない。石質は全て黒曜石１で茶色の黒曜石４である16・部分的に茶色が混じる黒曜石３の24以外は全て黒色の黒曜石である。肉眼的には黒色のもの・やや灰色がかったもの・透明度の高いもの・線や模様の入り方などが様々で多様な石材が利用されている。８・14のように加工が限定的に行われるものと47のように全面的に行われるものがあるが、素材面が残るものが多く、石鏃形状に近い素材を選択し、素材形状を大きく変えない加工がなされたと考えられる。これらII類の石鏃は栄野１・新野上２両遺跡を合わせて本土壙に限定されると言っても過言ではなく、副葬品としての出土状況と合わせて特徴的である。53はめのう製の両面調整石器。表面に凸凹した原石面のある１cm 以下の薄い小型原石を素材として縁辺部に交互剥離状の加工が施される。右側縁・下縁は直線的、左側縁は丸みを帯び、加工の行われない上部はややすぼまる形状である。54・55はつまみ付きナイフ。両者とも背面に多方向の剥離面がある平坦な剥片素材で、素材打面は54が転礫面、55が複剥離打面である。つまみ部は潰れた加工で作出され、刃部は縁辺部に簡単な平坦剥離が行われる。56はナイフ。大型の剥片素材で、基部の側縁はより細かい加工によって細く直線的に、基端部は斜めに整形され、身部は両面とも平坦剥離によって断面三角形に、先端部は長軸方向の剥離によって隅丸方形に整形される。57～59はスクレイパー。平坦な幅広の剥片素材で部分的な加工が見られる。60は右側縁の一部に微細な剥離痕のある二次加工ある剥片である。素材剥片の打面は複剥離打面である。

時　　期　II類石鏃は道央部ではオサツ２遺跡 GP2（北埋文1995）など、道東部では常呂川河口遺跡ピット23（武田1996）などの後北Ｂ式期の墓に大量に副葬される。本土壙には土器が伴わないものの、その出土状況から後北Ｂ式土器に伴うものと考えられる。

性　　格　遺構の形態・石器の出土状況から墓壙と考えられる。　（鈴木）

Ｐ－４（図Ⅳ－９・10、表Ⅳ－２、図版13・14・19・20）

位　　置　M28区の南東部から若干M29区にまたがる。

規　　模　2.12m×1.05m／(0.3)m×(0.25)m／0.5m

形　　態　平面形は方形に近い中央部から北東・南西方向に広がる不整形。断面形は急角度に立ち上がる方形の中央部から南北の張り出しに緩やかに立ち上がっている。

土　　層　Ⅱ層である覆土１とⅣ層と見られる覆土２が縦に堆積している。堆積状況・断面形から風倒木痕の可能性が高いが、まとまった遺物の出土が見られたため遺構として記録した。

遺　　物　土器57点、石鏃１点、両面調整石器１点、スクレイパー２点、剥片756点、石核２点の計819点、重量1,754.8g の遺物が出土した。遺物のほとんどが方形の中央部分から上下差を持ってまとまって出土している。　（鈴木）

土器　１は、厚手の頸部片で、口縁部肥厚帯への移行部に円形刺突文が残されている。表裏ともに摩耗が進んで地文はよく見えないが、RL 斜行縄文と思われる。胎土には砂粒のほか、若干の繊維も含まれる。縄文中期末のトコロ６類に比定されよう。２は、覆土の胴部小片とM27・28区Ⅰ層出土の口縁片が接合した、推定口径19cm 程の深鉢形土器の上部で、胴上半から頸部にかけて緩やかにふくらみ、口辺が僅かに外反している。口縁はほぼ平縁だが、現存部左側には小さな突起が付されていた痕跡がみられる。口唇は丸みを帯びた外切ぎみの平坦面で、原体Ｒの撚糸文が施されている。器面にも一面に縦走する撚糸文が施文され、口唇直下には内面からの突瘤文と外面への刺突文が、交互に密に加えられている。色調は茶褐色がちで、表裏ともに丁寧に調整されており、黒色炭化物の付着がみられる。宇津内Ⅱａ式に属する。３は、K25区Ⅰ層の出土品だが、２と同一個体の可能性があり、ここに並べて掲載した。４は、覆土出土の約50片の破片から想定復元された続縄文前半期の深鉢型土器で、胴部下半から底部は欠失している。推定口径22cm 程で、口頸部がほぼ垂直に立つ。口縁は平縁で、ほぼ平坦な口唇上には縄による連続した刺突が刻まれており、器面には LR 縄文がやや不整に縦走している。口唇を含め、器面の摩耗がかなり進んでおり、文様の不鮮明な部分が少なくない。色調は暗茶褐色で、表裏に黒色炭化物の付着がみられる。　（髙橋）

石器　５はⅠ類の石鏃。６は縁辺に微細な加工のある小型のスクレイパー。７は転礫面のある厚手の剥片素材のスクレイパー。右側縁から下縁にかけて弧状の刃部が作出される。８は左側面に転礫面の残るⅣａ類の石核。右側面には潜在的な割れ、あるいは原石の分割段階での割れと考えられる。

時　　期　形成時期は不明であるが、出土土器はトコロ６類・宇津内Ⅱａ式である。

性　　格　風倒木の可能性が高いが土器の集中の度合いから廃棄された可能性もある。　（鈴木）

Ｐ－５（図Ⅳ－11、表Ⅳ－２、図版14・18・21）

位　　置　K25区のほぼ中央。

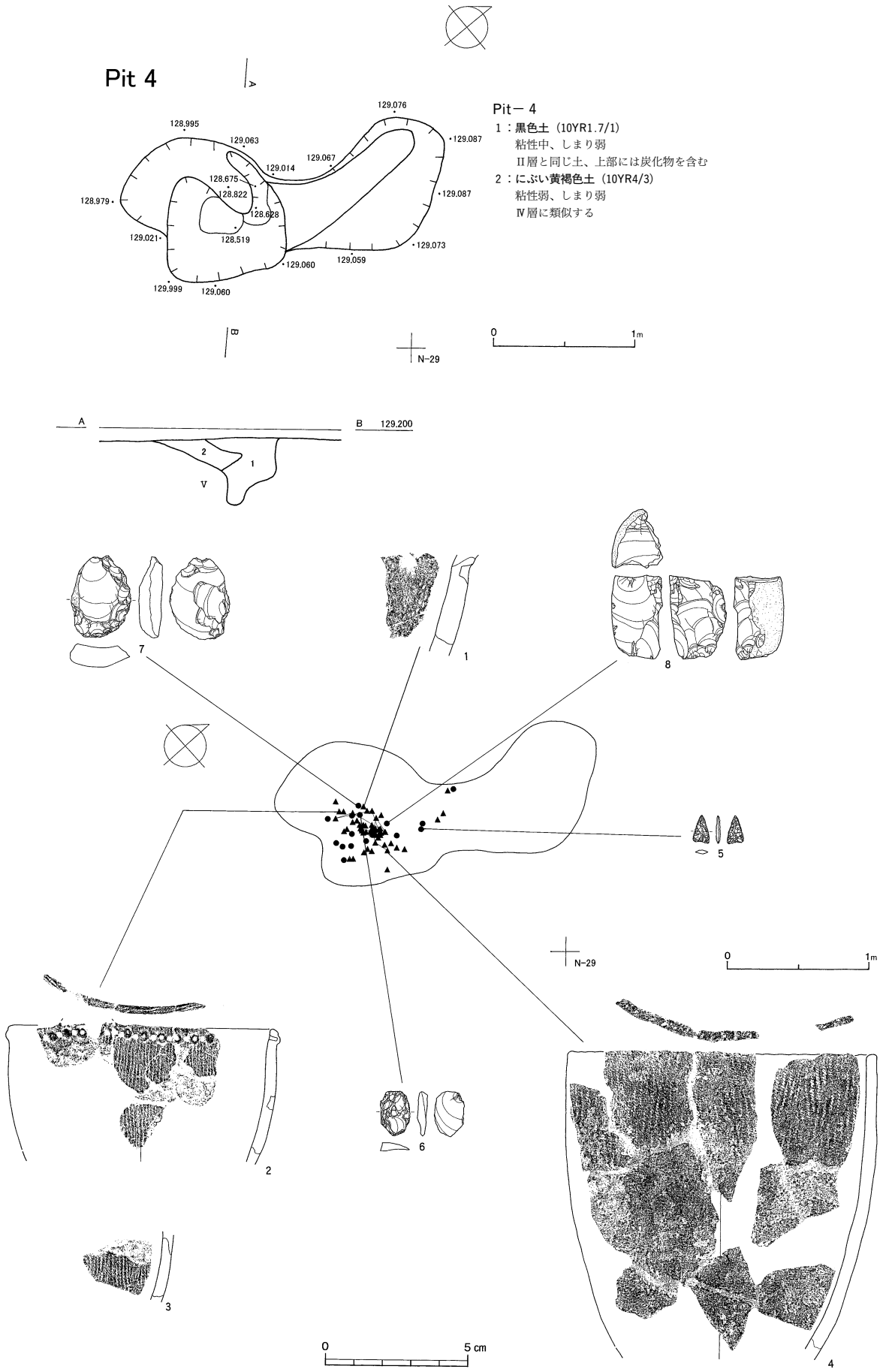
規　　模　2.20m×1.82m／1.74m×0.78m／0.35m

形　　態　平面形は不整台形で、断面形は斜面の下位にあたる南西部が深く、北東部が浅い二段構造。

土　　層　覆土１は黒色土でほぼ全体に分布する。斜面下位の壁際にはⅤ層の汚れた覆土２が、上位の壁際には覆土３が堆積する。

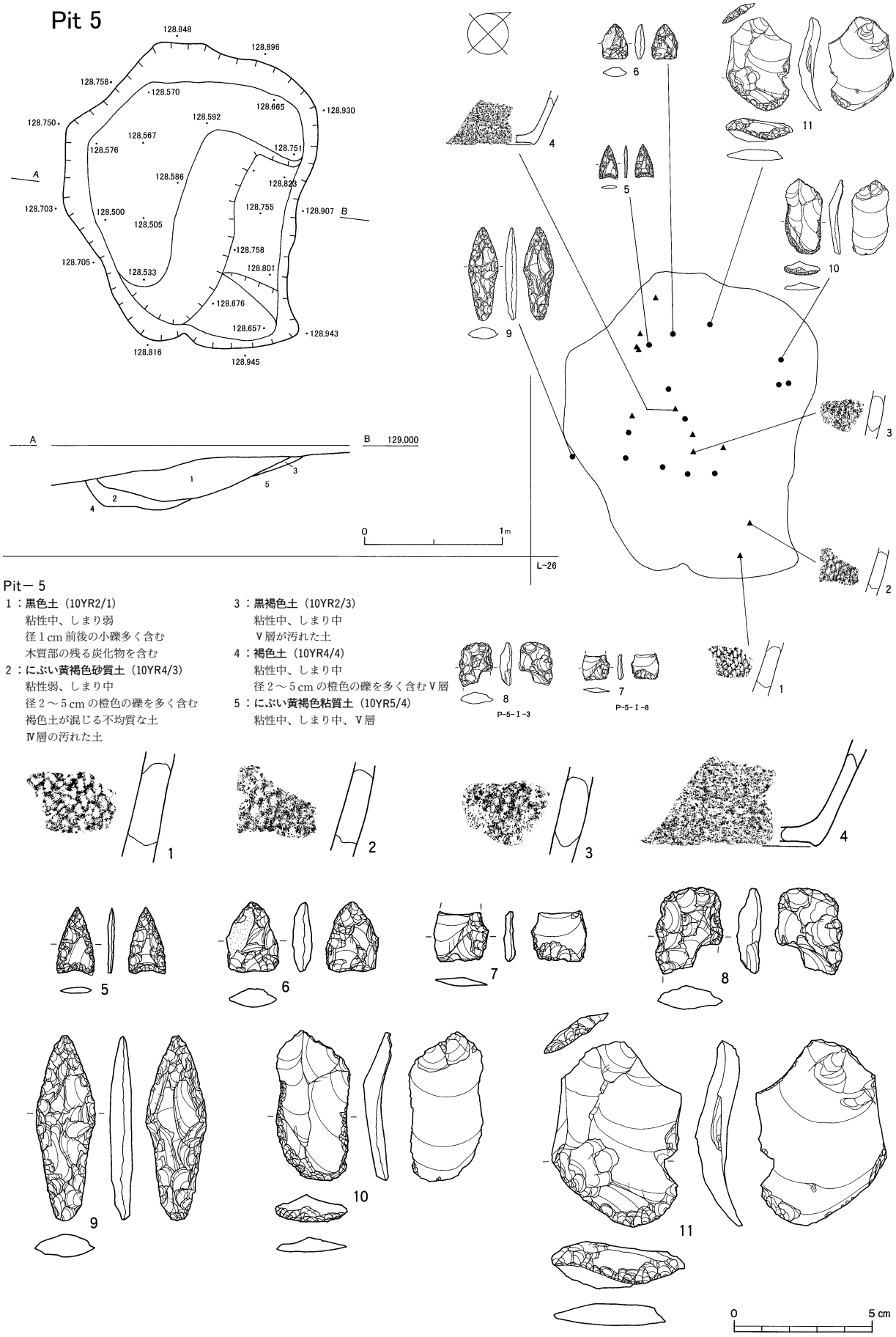
遺　　物　土器11点、石鏃３点、石槍２点、石槍またはナイフ２点、両面調整石器１点、スクレイパー４点、掻器２点、二次加工ある剥片４点、剥片1,452点、石核１点の計1,482点、重量1,206.6g の遺物が出土した。遺物は散漫に分布している。

土器　覆土からは11片の土器が出土したが、損耗、剥落が進んだ小片が多く、辛うじて図示にたえる

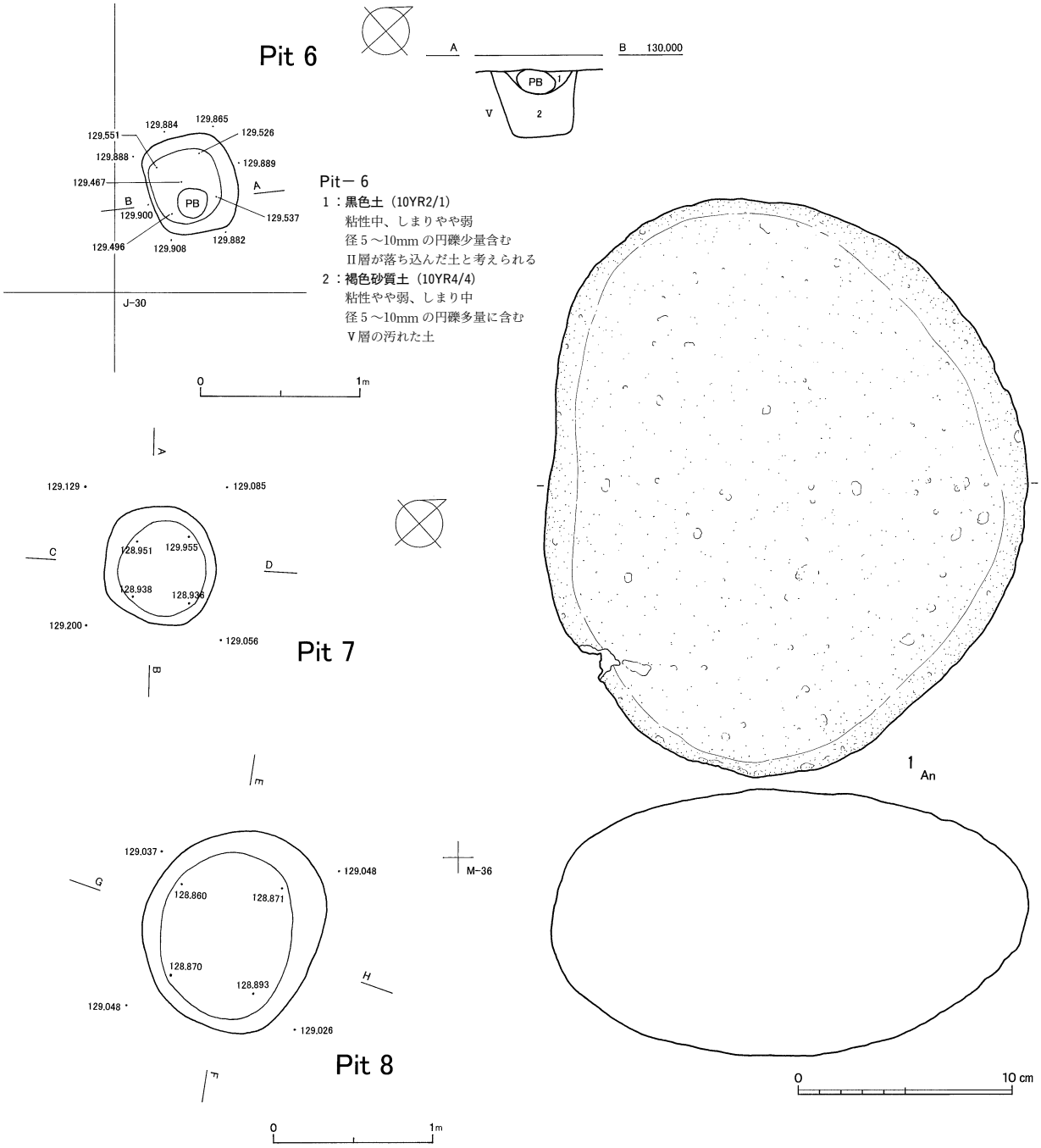


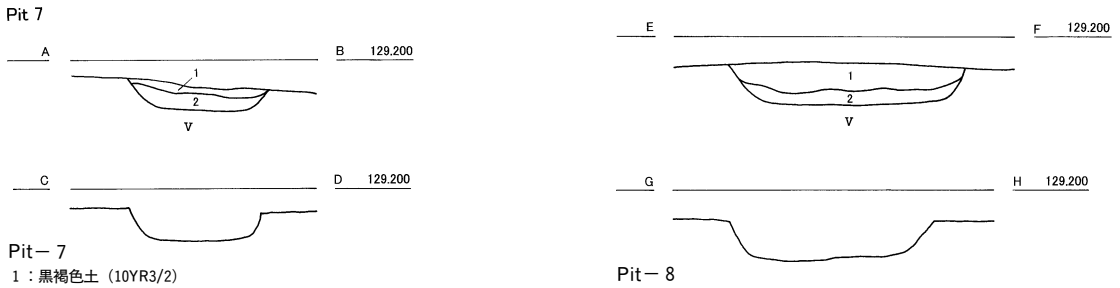
図Ⅳ－９　Ｐ－４平面図・土層・分布図

図Ⅳ－10　Ｐ－４遺物



図Ⅳ－11　Ｐ－５平面図・土層・分布図・遺物





Pit－7
1：黒褐色土（10YR3/2）
軽石粒（径２cm 内外）の混入多く、堅くしまりがち
2：褐色砂質土（10YR5/4）
軽石粒や礫（径２～５cm 程度）の混入がさらに多い、砂礫がちの土
比較的堅くしまる
Ⅴ：黄橙褐色土（7.5YR7/8）
流水の影響か赤橙色の軽石主体の部分もみられる

Pit－8
1：黒褐色土（10YR3/2）
径２～４cm の軽石粒の混入多く、堅くしまりがち
2：褐色砂質土（10YR5/4）
径２cm 内外の軽石粒が混入し、やや粘性あり
比較的堅くしまる
Ⅴ：黄橙褐色粘土（7.5YR7/8）

図Ⅳ－12　Ｐ－６～８平面図・土層・遺物

４点を掲載した。１は、やや厚手で、複節 LRL と思われる斜行縄文が痕跡を留めている。剝落面は橙褐色を呈し、胎土には砂礫が多く含まれる。縄文中期の破片であろうか。２・３は、LR 斜行縄文と思われる地文がみられる胴部の小片である。４は、薄手の揚底片で、縦走する地文の浅い溝がかすかに残るが、縄文原体は判別できない。これらは続縄文前半期のものであろう。（髙橋）

石器　５はⅠ類、６・７はⅥ類の石鏃。５・７には薄手、６には厚手の素材が利用される。８は比較的粗い加工が行われる両面調整石器。上端部が四角く、ナイフの基部の可能性がある。９は整った形態の石槍。基部は比較的急角度の剝離で整形されている。10・11は掻器。10は薄手の剝片素材で刃部がやや左側縁に偏り、11は厚手で複剝離打面を持つ幅広の剝片素材で両者とも平坦剝離によって刃部が作出される。

時　　期　覆土中の遺物や周囲の出土状況からから続縄文前半期の可能性がある。

性　　格　形態・覆土の堆積状況・遺物の分布状況から性格を推定するのは困難であるが、他の遺構に比べ大型である。（鈴木）

Ｐ－６（図Ⅳ－12、表Ⅳ－２、図版21）

位　　置　Ⅰ30区南西寄りでＰ－10に隣接する。

規　　模　0.62m×0.55m／0.45m×0.42m／0.42m

形　　態　平面形は隅丸方形で断面形は鍋底状である。

土　　層　下部には覆土２が堆積し、上部の中央やや東寄りには長さ27cm、厚さ10cm の大型礫の配石があり、その周囲にはレンズ状にⅡ層と同じ覆土１が堆積する。覆土２はⅤ層の汚れた土であり、埋め戻された可能性がある。

遺　　物　剝片１点、礫１点の計２点、重量9,065.2g の石器類が出土した。

石器　１は長さ27cm、厚さ10cm の大型礫である。加工痕はなく、正面は裏面に比べ平坦で正面を上に向けて配置されていた。

時　　期　覆土中に配石以外の遺物がほとんど無く不明であるが、周囲の出土遺物から続縄文前半期の可能性がある。

性　　格　配石や覆土の堆積状況から墓の可能性がある。（鈴木）

Ｐ－７（図Ⅳ－12、図版14）

位　　置　Ｌ35区のやや南東寄り。

規　　模　0.76m×0.73m／0.57m×0.55m／0.12m

形　　態　平面形は不整円形で、断面形は鍋底状を呈し、底面は平坦。

土　　層　覆土は１・２層で、地形面に沿ってほぼ水平に堆積する。とくに埋め戻したという様相はみられず、自然堆積の印象が強い。

遺　　物　遺物は出土していない。

時　　期　確信はないが、周囲の出土遺物などから、続縄文前半期の可能性が高いと推定される。

性　　格　掘りっぱなしの土壙だった可能性があり、構築意図は不明である。（髙橋）

Ｐ－８（図Ⅳ－12、表Ⅳ－２、図版15）

位　　置　M35区のやや北東寄り。

規　　模　1.27m×1.10m／1.05m×0.82m／0.22m

形　　態　平面形は不整円形、断面形は鍋底状を呈し、底面は平坦。

土　　層　覆土は１・２層で、地形面に沿ってほぼ水平に堆積する。とくに埋め戻したという様相はみられず、自然堆積の印象が強い。

遺　　物　剝片４点、重量2.4g の遺物が出土した。

時　　期　確信はないが、周囲の出土遺物などから、続縄文前半期の可能性が高いと推定される。

性　　格　Ｐ－７と同様、掘りっぱなしの土壙だった可能性があり、構築意図は不明である。（髙橋）

Ｐ－９（図Ⅳ－13、表Ⅳ－２、図版15・21）

位　　置　O29・30区にまたがり、調査区外に伸びる。

規　　模　(1.0)m×0.82m／(0.96)m×0.78m／0.59m

形　　態　西側はＢ調跡に切られ、東側は調査範囲外で全体形状は不明である。断面形は不定形で凹凸が激しい。

土　　層　Ⅱ層起源の覆土３の上にⅤ層起源の覆土４がブロック状に堆積し、その上位に不均質な覆土１や覆土２が堆積している。天地返しを行ったような堆積状況である。

遺　　物　石鏃１点、剝片181点の計182点、重量90.9g の遺物が出土した。

石器　１はⅥ類の石鏃。左側面に折れ面があり、素材の折り取り、または、石鏃形状に近い折れた素材を利用したと考えられる。

時　　期　形成時期は不明であるが、出土遺物は続縄文前半期のものと考えられる。

性　　格　覆土の堆積状況から風倒木の可能性が高い。（鈴木）

Ｐ－10（図Ⅳ－13・14、表Ⅳ－２、図版15・18・21）

位　　置　Ｉ・Ｊ　30区にまたがり、西にＰ－６が隣接する。

規　　模　1.32m×0.75m／0.40m×0.17m／0.30m

形　　態　平面形は不整長円形で、長軸方位はＮ－49°－Ｗである。断面形は長軸方向では北側がややきつく、南側がやや傾斜の緩い、不整な弧状を呈し、底面はすぼまる。周囲にも黒く汚れた落ち込みが不整に広がっており、連続して掘り下げることができた。

土　　層　１～４層は、いずれも土壙の断面形状に沿って累積しており、自然堆積の可能性が高いと思われた。１層の下部を主体に土器片や石器がややまとまって遺存していた。

遺　　物　土器６点、石槍１点、スクレイパー１点、剝片49点、礫１点の計58点、重量412.9g の遺物が出土した。

土器　１は、覆土１層の４片とＪ30区Ｉ層出土の２片が接合したもので、口頸部がほぼ垂直に立つ、やや厚手の深鉢形土器の破片であり、同一個体と思われる資料は、図Ⅳ－21－54に示したものなど、他にも数点みられる。平坦な口唇部は縄で刻まれ、口縁部にはLR 原体による横位の縄線文が５条めぐっている。地文は縦走ぎみのLR 縄文。色調は暗褐色で、胎土には砂が多く含まれる。整形はさほど丁寧ではない。２も１層から出土した胴部片。色調や胎土、整形などは１と殆ど変わらないが、やや薄手である。地文の斜行縄文は、０段多条のLR 原体と思われる。１・２ともに、表裏の一部に黒色炭化物の付着がみられる。（髙橋）

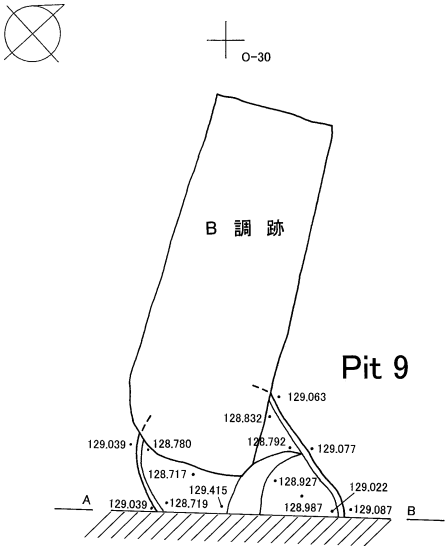
石器　３は６cm 程の小型の石槍である。平面形は整っているが表面には段差があり、滑らかではない。４は背面が転礫面に覆われた剝片素材のスクレイパーで、素材腹面はリングが密集し、平坦である。加工は両側縁から平坦剝離で行われ、石槍やナイフの未成品の可能性がある。（鈴木）

時　　期　出土土器から、続縄文前半期と判断される。

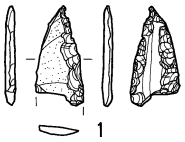
性　　格　遺物がまとまって検出されたことなどから遺構として扱ったが、人為的な掘り込みと認められる要素は少なく、木根攪乱の凹みに遺物が流れ込んだものである可能性が高そうだ。（髙橋）

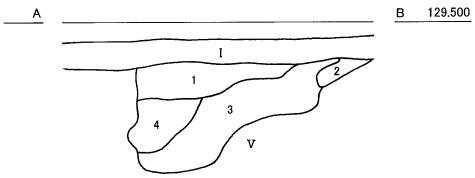
Ｐ－11（図Ⅳ－15、表Ⅳ－２、図版15・18・21）

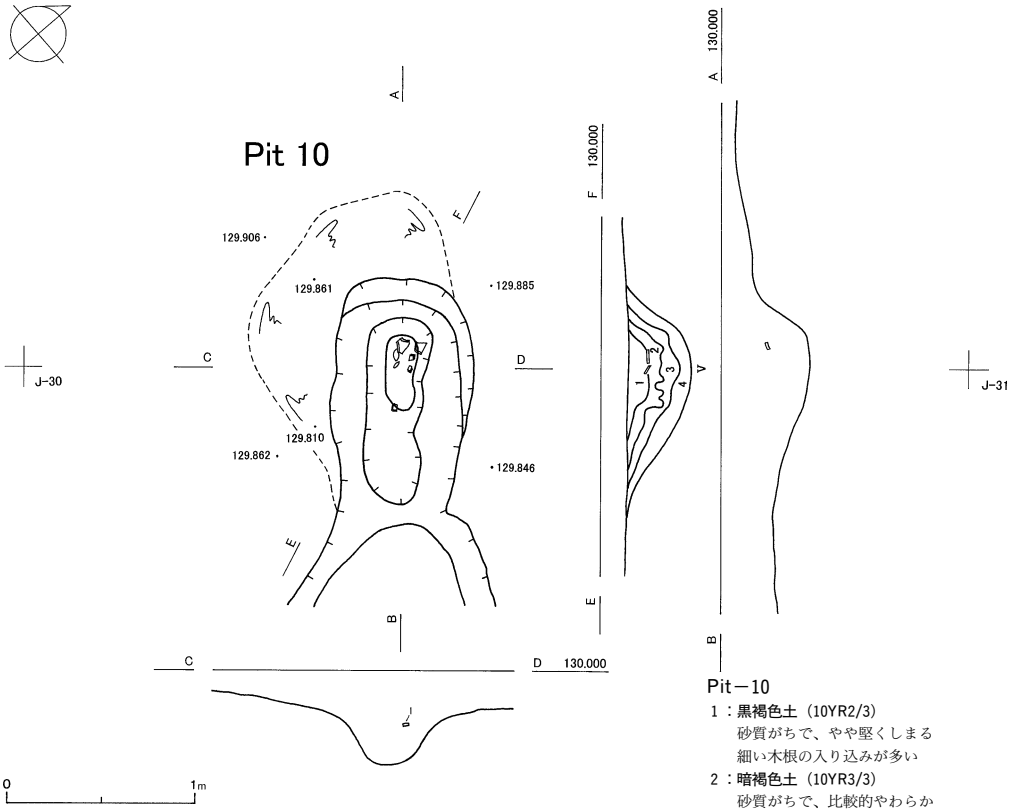
位　　置　K30区の南西部からＬ30区にまたがり、Ｐ－10の南に位置する。



Pit－９
１：**黒褐色粘質土**（7.5YR3/1）
粘性やや強、しまり中
５～10mm の黄色礫を含む
やや黄色い部分もある不均質な土
２：**暗褐色粘質土**（10YR3/3）
粘性中、しまり中
５～10mm の黄色礫を含む
３：**黒褐色粘質土**（10YR2/2）
粘性やや強、しまり弱
Ⅱ層起源と考えられる比較的均質な土
４：**にぶい黄褐色土**（10YR4/3）
粘性やや強、しまり弱
Ⅲ層に土質は類似するが土色は異なる

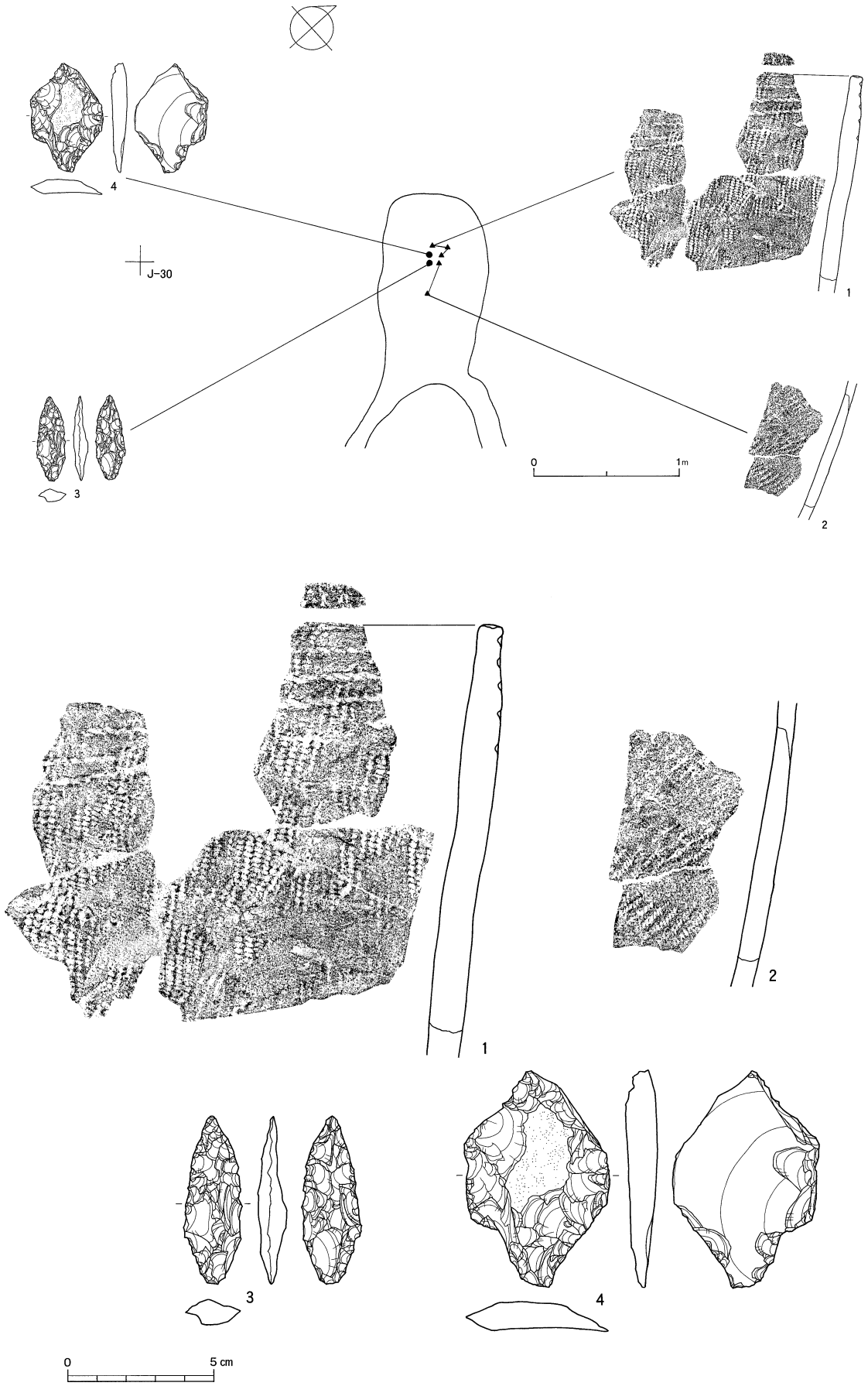




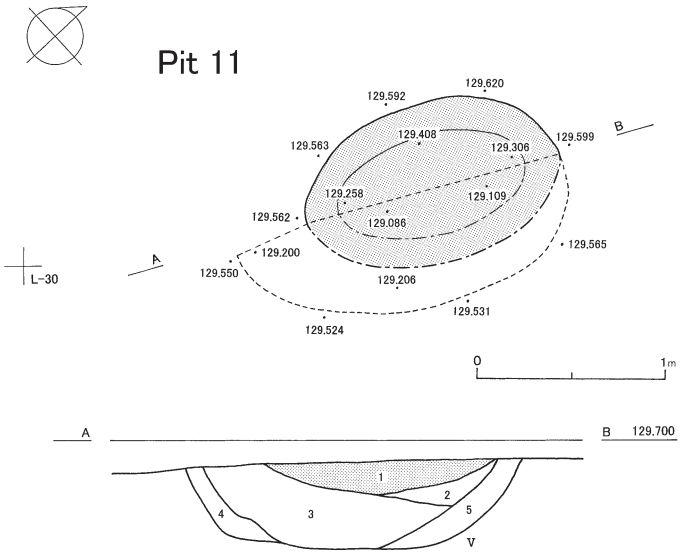


Pit－10
１：**黒褐色土**（10YR2/3）
砂質がちで、やや堅くしまる
細い木根の入り込みが多い
２：**暗褐色土**（10YR3/3）
砂質がちで、比較的やわらか
３：**褐色粘質土**（7.5YR4/3）
漸移層が少し汚れた感じのシルト質粘土
比較的やわらか
Ⅴ：**褐色シルト質粘土**（7.5YR5/4）
径４～５cm の大粒の軽石が多く混在し、淡橙色がち

図Ⅳ－13　Ｐ－９・10平面図・土層・遺物



図Ⅳ－14　Ｐ－10分布図・遺物



Pit－11

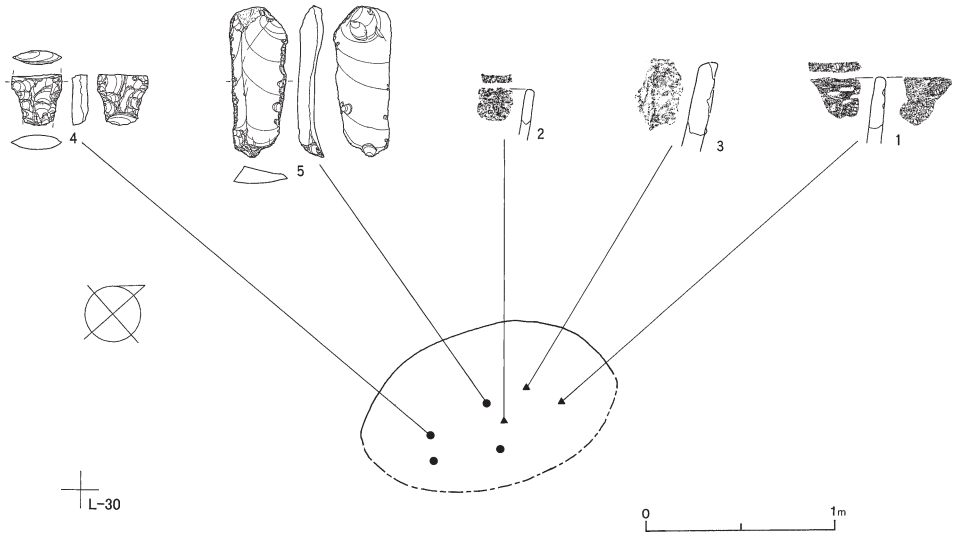
1：**黒色土**（10YR2/1）
粘性中、しまりやや弱
10YR4/4の褐色の土が斑に混じるⅡ層に類似した土

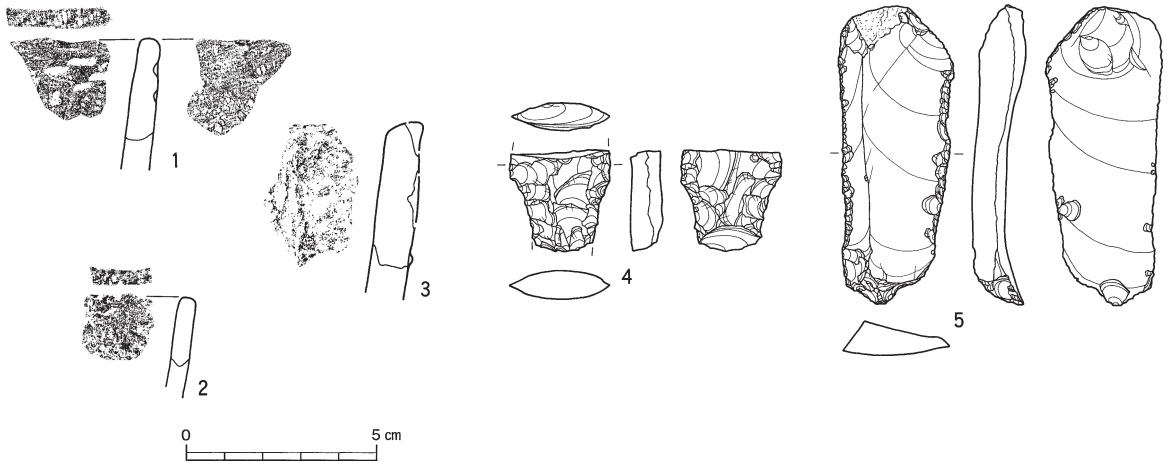
2：**暗褐色土**（10YR3/3）
粘性中、しまり中

3：**黒褐色土**（10YR3/2）
粘性中、しまりやや強
径２～５cm のオレンジ色の岩片多量に含む
Ⅲ層に類似した土

4：**褐色砂質土**（10YR4/4）
粘性弱、しまり中
１cm 以下の褐色の岩片多く含む

5：**にぶい黄褐色粘質土**（10YR4/3）
粘性中、しまり強
径２～３mm の白色の岩片少量含む





図Ⅳ－15　Ｐ－11平面図・土層・分布図・遺物

規　　模　1.38m×(0.86)m／1.00m×(0.44)m／0.18m

形　　態　調査は確認時の長軸である南北方向で半割し、東側から行った。覆土１とした黒色土除去後、下位の汚れた土である覆土２～５の除去を行ったが立ち上がりが判然としないため覆土１の範囲をＰ－11と認定し、西側の調査は覆土１の範囲に止めた。平面形は長円形で断面形は皿状である。

土　　層　覆土１がレンズ状に堆積し、その下位には汚れた２～５層が堆積する。

遺　　物　土器３点、石槍またはナイフ１点、スクレイパー１点、剥片148点、礫２点の計155点、重量1,409.4g の遺物が出土した。遺物は散漫に分布している。

土器　覆土から３片の土器が出土した。１は口縁片で、丸みのある口唇や内外面には、LR 縄文が施文されており、口辺には撚りのゆるい LR 原体による斜位の縄線文が２条みられる。色調は暗褐色で、剥離面は橙褐色を呈する。２はやや小型、薄手の口縁小片で、黒褐色がち、胎土には砂粒が多くふくまれる。不明瞭ながら口唇部に縄文と思われる痕跡を留めるが、器面は摩耗のため文様を判別できない。３は器面が剥落した口縁片で、内切する平坦面につくられた口唇の一部が観察できる。焼成は堅緻で、胎土には砂が多く、内面は比較的丁寧に調整されている。（髙橋）

石器　４は石槍またはナイフの基部と考えられる。中央の平坦剥離面を切る比較的細かい基部加工が見られる。基部折損後、基端部から長軸方向の再加工が行われている。５は転礫面の残る石刃素材のスクレイパー。側縁には連続した細かい加工が行われ、先端部は両側のノッチ状の加工により尖頭部が作出される。

時　　期　出土土器から続縄文前半期と考えられる。

性　　格　形態・覆土の堆積状況・遺物の分布状況から性格を推定するのは困難である。また、土壙下位の汚れた土の堆積状況から木根による攪乱の可能性もある。（鈴木）

Ｐ－12（図Ⅳ－16、表Ⅳ－２、図版16・17）

位　　置　N33区の北東寄り。周囲にＰ－13～15が隣接する。

規　　模　1.05m×0.72m／0.21m×0.16m／0.23m

形　　態　検出面ではＰ－13～15と同様の円形の小型ピットとして捉えたが(図版16－１)、掘り進むうちに南北方向に長い不整形で、断面も２段となる形状に変貌した。

土　　層　覆土は１層のみで、軟らかな流れ込み土と判断された。

遺　　物　剥片22点、重量29.1g の遺物が出土した。

時　　期　確信はないが、周囲の出土遺物などから、続縄文前半期の可能性が高いと推定される。

性　　格　Ｐ－13～15とはやや異質で、草木根などによる不整な落ち込みに、II層を主体とする砂質土が流れ込んだものと考えられる。（髙橋）

Ｐ－13（図Ⅳ－16、表Ⅳ－２、図版16・17）

位　　置　M33区の南東端。周囲にＰ－12・14・15が隣接する。

規　　模　0.64m×0.64m／0.43m×0.38m／0.18m

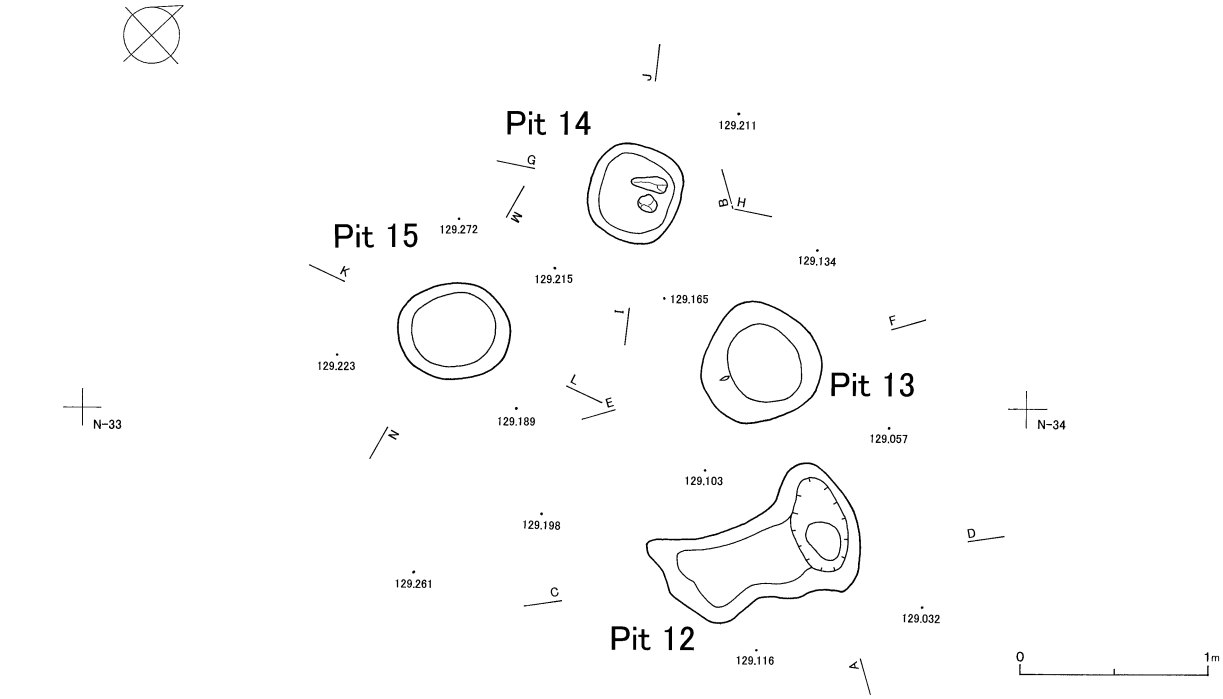
形　　態　平面形は不整円形で、断面形はやや開きぎみの鍋底状を呈し、底面は平坦。

土　　層　覆土は１層のみで、軟らかな黒褐色砂質土。埋め戻された可能性がある。

遺　　物　剥片６点、重量52.5g の遺物が出土した。

時　　期　確信はないが、周囲の出土遺物などから、続縄文前半期の可能性が高いと推定される。

性　　格　小型だが比較的整然とした形態を保っており、人為的な掘り込みの可能性を否定しがたい。性格は不明である。（髙橋）

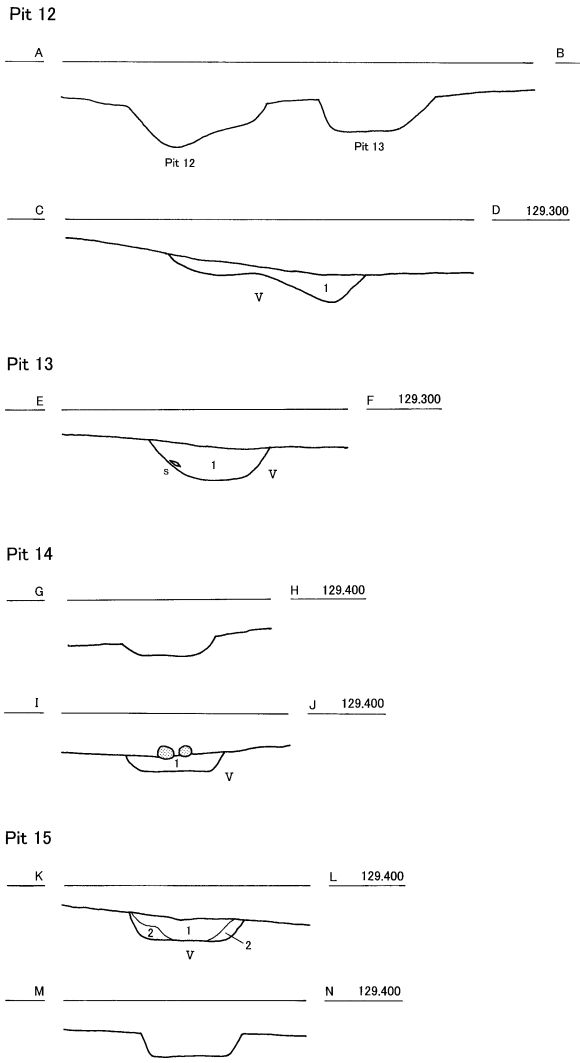


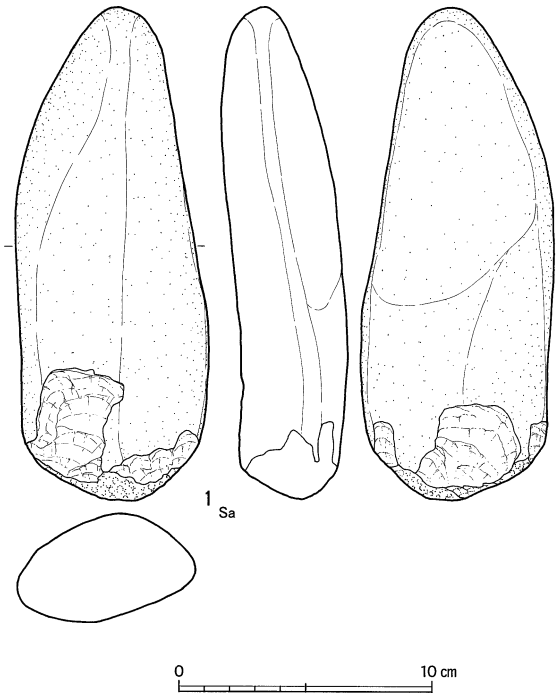
Pit－12
1：**黒色砂質土**（10YR2/1）
シルト質粘土を若干混合する
軟らかな流れ込み土

Pit－13
1：**黒褐色砂質土**（10YR3/2）
軽石や小角礫の混在多い
軟らかい

Pit－14
1：**黒褐色砂質土**（10YR3/2）
軽石の混在多い
やや堅くしまる

Pit－15
1：**灰黄褐色砂質土**（10YR4/2）
軽石粒が混在し、やや堅くしまる
2：**暗黄褐色砂質土**（10YR5/3）
Ⅴ層にちかく、軽石を混在して、橙褐色がち
軟らかい
Ⅴ：**橙色シルト質粘土**（7.5YR6/6）
大粒の軽石が多く混在して赤橙色がちな所やシルト質粘土がちで灰黄褐色がちな所がある
前者は堅くしまりがちで、後者はやや軟らかい





図Ⅳ－16　Ｐ－12～15平面図・土層・遺物

Ｐ－14（図Ⅳ－16、表Ⅳ－２、図版16・17・21）

位　　置　M33区の南東寄り。周囲にＰ－12・13・15が隣接する。

規　　模　0.51m×0.48m／0.40m×0.38m／0.12m

形　　態　平面形は円形に近い隅丸方形で、強いて長軸方位を求めればＮ－30°－Ｗ。断面形は鍋底状を呈し、底面はほぼ平坦。検出面の東寄りに、敲石と円礫が並んで遺存していた。

土　　層　覆土は１層のみで、やや堅くしまった黒褐色砂質土。埋め戻された可能性がある。（髙橋）

遺　　物　剥片６点、敲石１点、礫１点の計８点、重量1,663.0g の遺物が出土した。

石器　１は細長い形状の砂岩製敲石である。下部両面には剥離痕があり、下端部は敲打による潰れで丸みを帯びる。（鈴木）

時　　期　確信はないが、周囲の出土遺物などから、続縄文前半期の可能性が高いと推定される。

性　　格　礫石器などを伴出しており、性格は不明だが、小型の遺構と考えたい。（髙橋）

Ｐ－15（図Ⅳ－16、図版16・17）

位　　置　M33区の南寄り。周囲にＰ－12～14が隣接する。

規　　模　0.59m×0.51m／0.45m×0.39m／0.14m

形　　態　平面形は不整円形で、断面形は鍋底状を呈し、底面は平坦。

土　　層　覆土は２層に分かれるが、境界は不分明で、漸移的。埋め戻された可能性がある。

遺　　物　遺物は出土していない。

時　　期　確信はないが、周囲の出土遺物などから、続縄文前半期の可能性が高いと推定される。

性　　格　底面の規模などはＰ－13・14に近似しており、性格は不明だが、小型の遺構と考えたい。（髙橋）

（２）　フレイク集中

Fc－１（図Ⅳ－17、表Ⅳ－２、図版17）

位置・層位　M46区中央南側　Ⅱ層下部、出土したレベルは Fc－２とほぼ同一である。

規　　模　0.55m×0.36m／0.03m の不整長円形　長軸方位はＮ－35°－Ｗ。

遺　　物　剥片1,657点、重量726.7g が出土した。（直江）

Fc－２（図Ⅳ－17、表Ⅳ－２、図版17）

位置・層位　M46区北西寄り　Ⅱ層下部、出土したレベルは Fc－１とほぼ同一である。

規　　模　0.41m×0.25m／0.05m の不整長円形　長軸方位はＮ－88°－Ｗ。

遺　　物　剥片830点、重量25.3g が出土した。（直江）

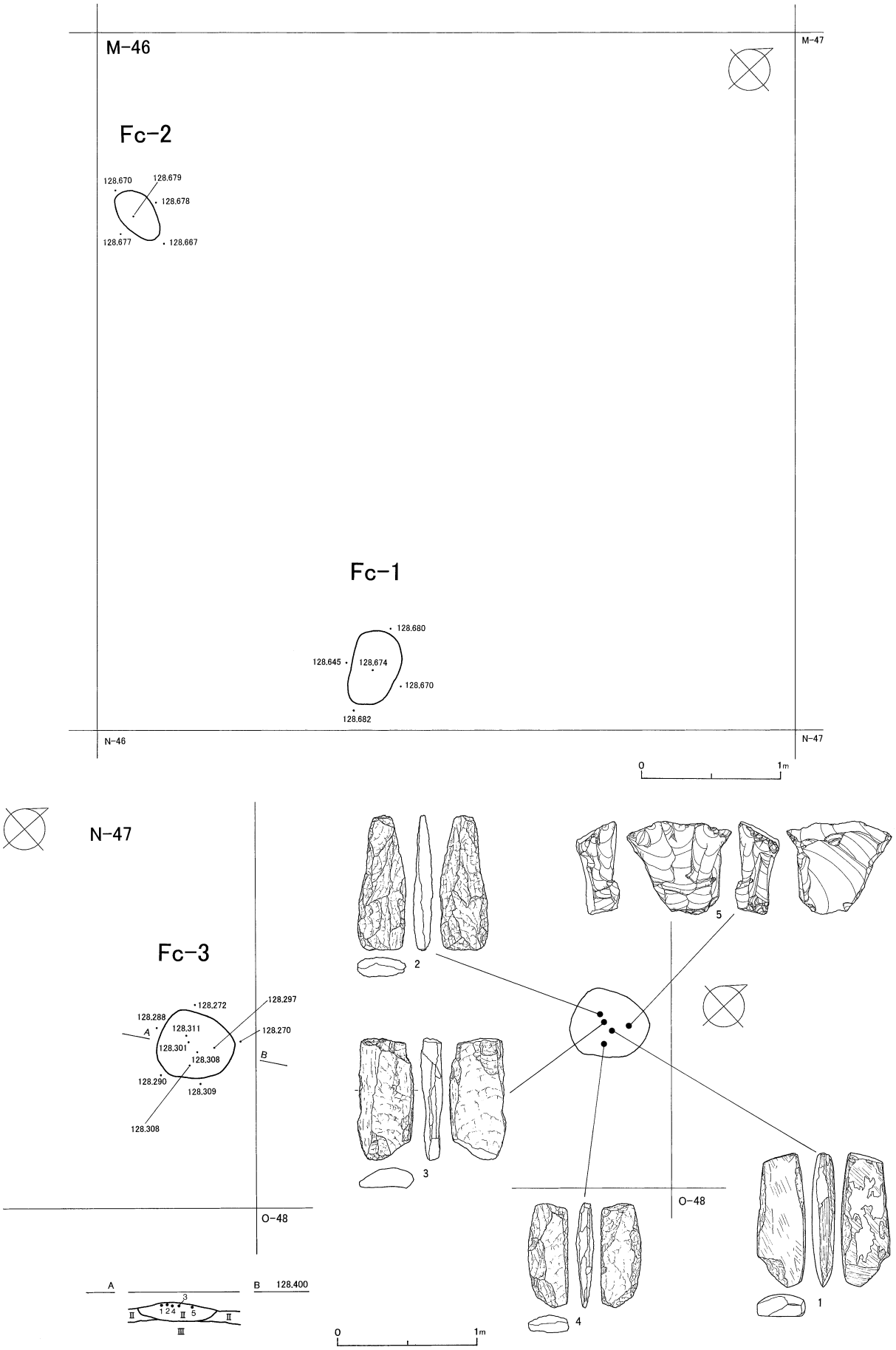
Fc－３（図Ⅳ－17・18、表Ⅳ－２、図版17・21）

位置・層位　N47区南東寄り　Ⅱ層下部

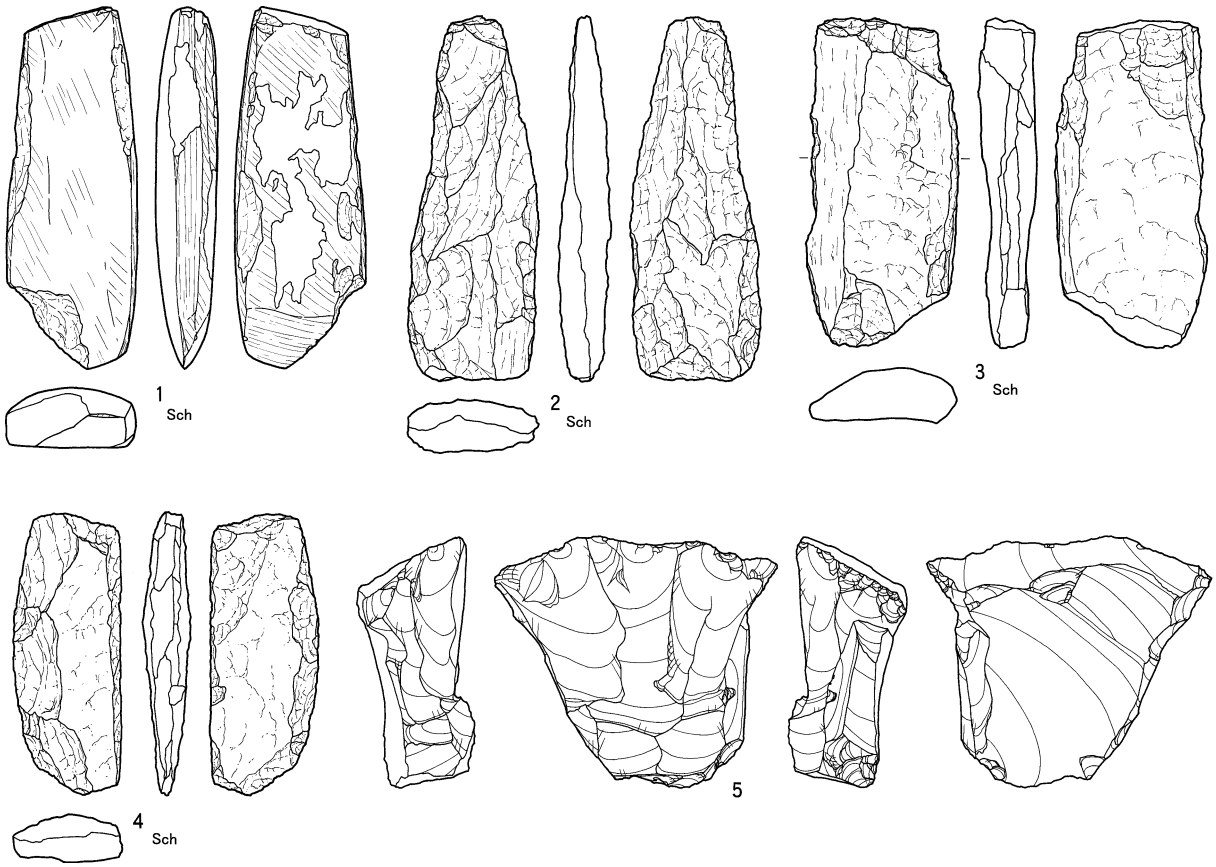
規　　模　0.54m×0.48m／0.14m の不整円形　長軸方位はＮ－42°－Ｅ。（直江）

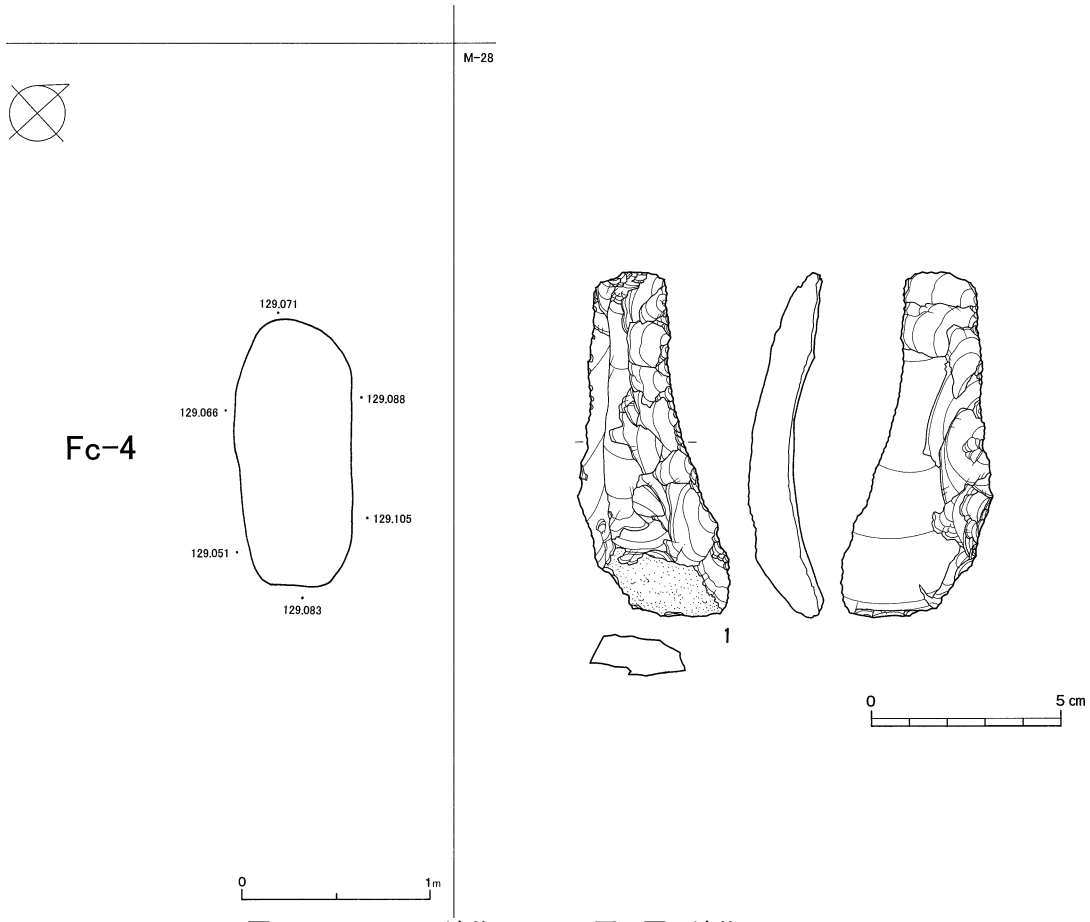
遺　　物　剥片566点、石核１点、石斧３点の計570点、重量411.4g の遺物が出土した。これらはまとまって出土し、一括性の高い資料と思われる。

１～４は全て片岩製。１は両側面の一部、裏面の中央部を除いて表面全体に研磨痕がある両刃の石斧である。２・４は素材面と剥離痕のみ残る石斧未成品で、両者とも縦長の素材剥片に横方向からの剥離による整形が行われ、２の側縁は基部に向かってすぼまるように、下端部は長軸方向の剥離によって四角く刃部が作出される。３は石斧の素材と考えられる短冊状の剥片である。１は最も厚く、次に３が厚く、２・４は薄手である。これらの資料は、素材剥離によって得られた素材(3)→側縁の剥離に



図Ⅳ－17　Fc－１～３平面図・土層・分布図





図Ⅳ－18　Fc－３遺物、Fc－４平面図・遺物

よる整形(4)→長軸方向の剝離による刃部の整形(2)→研磨(1)という石斧製作の一連の製作工程を示している。また、遺跡内ではほとんど片岩製の剝片が出土していないことから、それぞれの形態に近い形で搬入されたものと考えられる。つまり、一連の工程のうち、素材・未成品・完成品というそれぞれ異なる段階の形態で保持されていた可能性がある。５は非白滝産と思われる透明度の高い黒曜石製。上面は大型のポジ面、裏面はその剝離面を切る広い剝離面である。剝片を素材として右側面から裏面への剝離後、上面に打面を固定し正面で縦方向に剝片剝離が行われる。頭部調整は行われず、バルブは発達する。また、ヒンジにより作業面末端部が段差になり、廃棄されたものと考えられる。下面には裏面からの剝離痕があるが、作業面調整として行われたと思われる。　（鈴木）

Fc－４（図Ⅳ－18、表Ⅳ－２、図版21）

位置・層位　M27区　Ⅳ層

規　　模　1.43m×0.62m／0.25m

遺　　物　石槍１点、スクレイパー１点、剝片12,822点の計12,824点、重量1,925.7g の遺物が出土した。微細な砕片が多く、一次剝離より二次剝離によるものが多く含まれている。Ⅳ層に含まれ、上下差を持って出土していることから何らかの作用で遺物が下方に移動したと考えられるが、平面的な位置はさほど変わらないと思われる。

１は転礫面の残る縦長剝片素材のスクレイパーである。錯交剝離による二次加工は正面が平坦剝離による加工で縁辺が滑らかであるのに対し、裏面は粗い加工によって縁辺は凸凹している。　（鈴木）

表Ⅳ－１　新野上２遺跡遺構一覧

遺構名	位　置	平面形	長軸方位	規　模　(m)			出土遺物等	時　期	性　格	備　考
				確認面 長軸長×短軸長	底　面 長軸長×短軸長	深さ				
P－１	M43	不整円形	－	0.55 × 0.48	0.42 × 0.34	0.12	配石１・土器片１剝片41	続縄文？	墓？	
P－２	L44	長　円　形	N－33°－W	(1.0)× 0.85	(0.9)× 0.50	0.13	掻器１	続縄文？	不明	北半部は調査区外
P－３	I24	隅丸長方形	(西北西－東南東)	(1.3)× 0.60	－	0.06	石鏃52など石器64	後 北 B	墓壙	上部・北西側欠失
P－４	M28	不　整　形	(北－南)	2.12 × 1.05	(0.3)×(0.25)	0.5	想定復元土器２・石器６	宇津内IIa	不明	木根攪乱？
P－５	K25	不整台形	(北西－南東)	2.20 × 1.82	1.74 × 0.78	0.35	土器片11・石器17	続縄文？	不明	
P－６	I30	隅丸方形	N－70°－W	0.62 × 0.55	0.45 × 0.42	0.42	配石１・剝片１	続縄文？	墓？	
P－７	L35	不整円形	－	0.76 × 0.73	0.57 × 0.55	0.12	－	続縄文？	不明	
P－８	M35	不整円形	－	1.27 × 1.10	1.05 × 0.82	0.22	剝片４	続縄文？	不明	
P－９	O29･30	不　整　形	(西－東)	(1.0)× 0.82	(0.96)× 0.78	0.59	石鏃１・剝片181	続縄文？	不明	風倒木痕？
P－10	I・J30	不整長円形	N－49°－W	1.32 × 0.75	0.40 × 0.17	0.3	接合土器片２・石器２	続 縄 文	不明	木根攪乱？
P－11	K・L30	不整長円形	N－25°－E	1.38 ×(0.86)	1.0 ×(0.44)	0.18	土器片３・石器２	続縄文？	不明	木根攪乱？
P－12	N33	不　整　形	(北－南)	1.05 × 0.72	0.21 × 0.16	0.23	剝片22	続縄文？	不明	木根攪乱？
P－13	M33	不整円形	－	0.64 × 0.64	0.43 × 0.38	0.18	剝片６	続縄文？	不明	
P－14	M33	隅丸方形	N－30°－W	0.51 × 0.48	0.40 × 0.38	0.12	敲石１・礫１・剝片６	続縄文？	不明	
P－15	M33	不整円形	－	0.59 × 0.51	0.45 × 0.39	0.14	－	続縄文？	不明	
Fc－１	M46	不整長円形	N－35°－W	0.55 × 0.36	－	0.03	剝片1,657	続縄文？	石器加工跡	
Fc－２	M46	不整長円形	N－88°－W	0.41 × 0.25	－	0.05	剝片830	続縄文？	石器加工跡	
Fc－３	N47	不整円形	N－42°－E	0.54 × 0.48	－	0.14	石斧３・石核１・剝片566	縄 文 ？	石器製作跡	
Fc－４	M27	不整長円形	N－50°－W	1.43 × 0.62	－	0.25	石槍１・掻器１・剝片12,822	続縄文？	石器製作跡	

3　発掘区出土遺物

調査では部分的に遺物包含層であるⅡ層が確認されたが、Ⅰ層遺物は本来Ⅱ層に包含されていたと思われるため、ここではⅠ層の遺物と併せて一括して報告する。また、排土など含め、撹乱層の遺物についてもここで報告する。

（1）　土器（図Ⅳ－19～25、図版22～26）

新野上２遺跡の発掘区からは1,000点弱の土器片が出土した。その大半はⅠ層や撹乱層から採集されたものだが、Ａ地区の西端部やＥ～Ｇ地区では遺物包含層であるⅡ層が比較的よく残存しており、Ⅱ層からも若干量の土器片が検出されている。Ⅰ層や撹乱層から得られた土器片は、耕作等によって破砕され、損耗、剝落がみられる小片が大部分で、文様等の不明瞭なものが多かった。また、Ⅱ層の出土品についても、Ｅ～Ｇ地区では摩耗した破片が少なくなかった。これらを対象に接合作業を進めたが、復元できた個体は皆無であり、図上で器形を想定復元できた土器も２例に過ぎない。文様の不鮮明な断片的な資料も多いが、できるだけ多くの拓影図を掲載するよう努めた。Ⅰ層や撹乱層出土土器も本来的な包含層はⅡ層であり、層位は分けずに一括して報告し、必要に応じて個々に層位を付記することにする。時期的には宇津内Ⅱａ式や宇津内Ⅱｂ式を主体に、その前後を含む続縄文時代前半期のⅥ群土器が主体であり、他に縄文時代のものが少量認められた。

縄文時代早期の土器

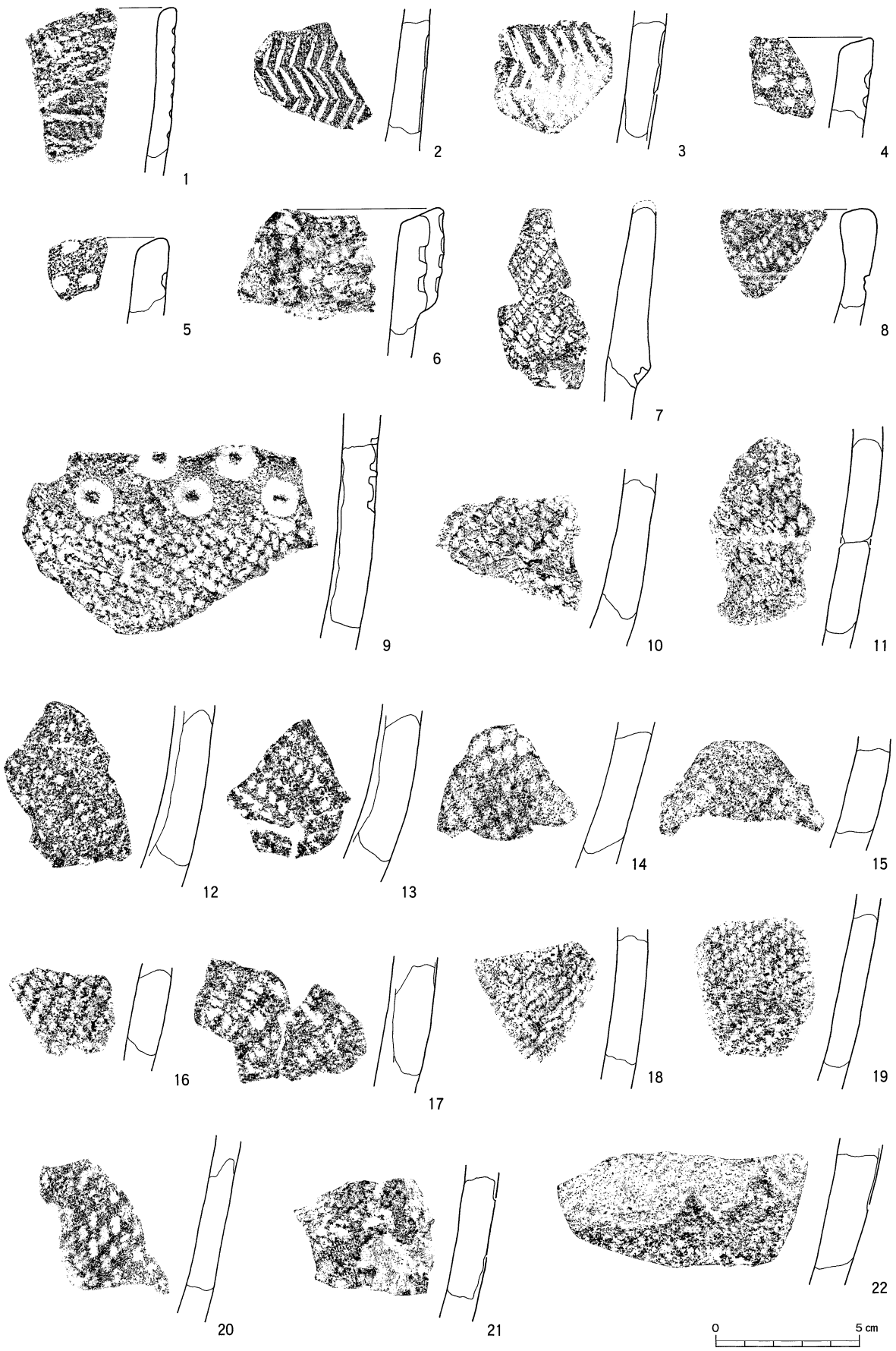
１は、M41区Ⅱ層から出土した口縁片。比較的薄手で、緩やかな波状を呈する。色調は黒茶褐色で、胎土には砂粒が多く含まれる。表裏ともに摩耗しており、文様はやや不鮮明だが、LR 縄文原体による、傾きを異にする撚糸文がみられる。東釧路Ⅳ式に比定されよう。

縄文時代前期後半～中期前半の土器

２・３は、同一個体と思われる破片で、ともにＬ41区Ⅱ層の出土。色調は茶褐色がちで、胎土には多量の砂が含まれる。器面には刻線を矢羽根状に重ねた文様が施されている。４・５は、内切する平坦な口唇部を有するやや厚手の口縁片で、同一個体と思われる。色調は暗茶褐色で、胎土には砂のほか、かなりの量の繊維が含まれる。口辺には１～２列の連続する刺突文が残されており、丸みを帯びた窪みがみられるが、摩耗のため工具の判定は難しい。これらはシュブノツナイ式以降の刺突文系土器の仲間かと思われる。

縄文時代中期末～後期初頭の土器

６は、N46区Ⅱ層から出土した肥厚帯を有する口縁片で、縦位の貼付帯が付加されている。色調は黒褐色で、胎土には砂礫のほか繊維が含まれる。損耗が進んでいるが、貼付帯上には縦に、肥厚帯上には横位２列の、平篦状工具を押し引いたと思われる突引文がみられる。７は、幅５cm 以上の肥厚帯を有する口縁片で、色調は黒茶褐色、胎土には砂礫のほか繊維が多く含まれる。肥厚帯上には LR 斜行縄文が施され、肥厚帯下には右斜め下から左斜め上へ突き上げるように加えた、径３mm 強の竹管状工具による刺突文が２個残されている。８は、平坦な口唇部が厚くつくられて、やや内屈する形状がみられる口縁片で、色調は茶褐色、胎土には砂が多く含まれる。器面には LR 斜行縄文が施された後、半截竹管状工具による横位の沈線文が引かれている。９は、径1.3cm 弱の竹管状工具による円形刺突文が交互に２段残された頸部片で、地文は RL 斜行縄文。色調は暗褐色で、胎土には砂礫のほか、繊維が多く含まれており、裏面の殆どが剝落している。10～22は、胴部の破片で、比較的厚手のものが多い。色調は赤橙～暗茶褐色を呈するものが多く、黒褐色がちなものも少数みられる。胎土には砂礫の



図Ⅳ－19　発掘区出土土器(1)

ほか、殆どが多少なりとも繊維を含んでいるようだ。地文はLR斜行縄文が主流を占めるが、摩耗や剝落のため、明確に判別できない例も少なくない。10はN45区Ⅱ層の出土で、胎土には径4mm内外の大粒の砂が多く含まれる。LR斜行縄文は縄端部の回転押捺痕を留めている。11・16～18・21・22の地文は、LR斜行縄文と思われるが、よく見えない部分が少なくない。12・13は同一個体らしく、12には羽状縄文が、13にはRL斜行縄文が残されている。14・15も同一個体らしく、14には羽状縄文がみられる。原体は複節の可能性もあるが、摩耗のため判別できない。12・14の羽状縄文は、結束部が観察できない。19の原体は細めだが複節LRLと思われ、20の原体もLRLである。以上の資料は、トコロ6類以降の北筒式の系統に属する土器群と考えられる。

続縄文時代前半期の土器

続縄文前半期に属すると思われる土器について、(a)貼瘤文を有するもの、(b)刺突や押捺による文様有するもの、(c)隆起線文を主体とする文様を有するもの、の3者に大別し、さらに胴部片、底部片を加えて、以下に説明する。色調は、橙褐色～暗茶褐色を呈するものが多く、褐色がちなものや、黒褐色がちなものも見られる。裏面を主体に黒色炭化物の付着も少なからず認められる。胎土には砂礫が多く含まれ、径1mm以下の石英粒が目立つほか、径2～3mmの細礫を含むものも見られる。裏面調整は比較的丁寧だが、とくに滑沢な例は多くはなく、整形もやや粗雑なものが少なからず見られる。器厚は6～9mm程度のものが主体だが、4mm程度の小形土器や、1cmを超える厚めのものも見られる。大部分が深鉢形土器の破片で、小型の鉢形土器が加わる。

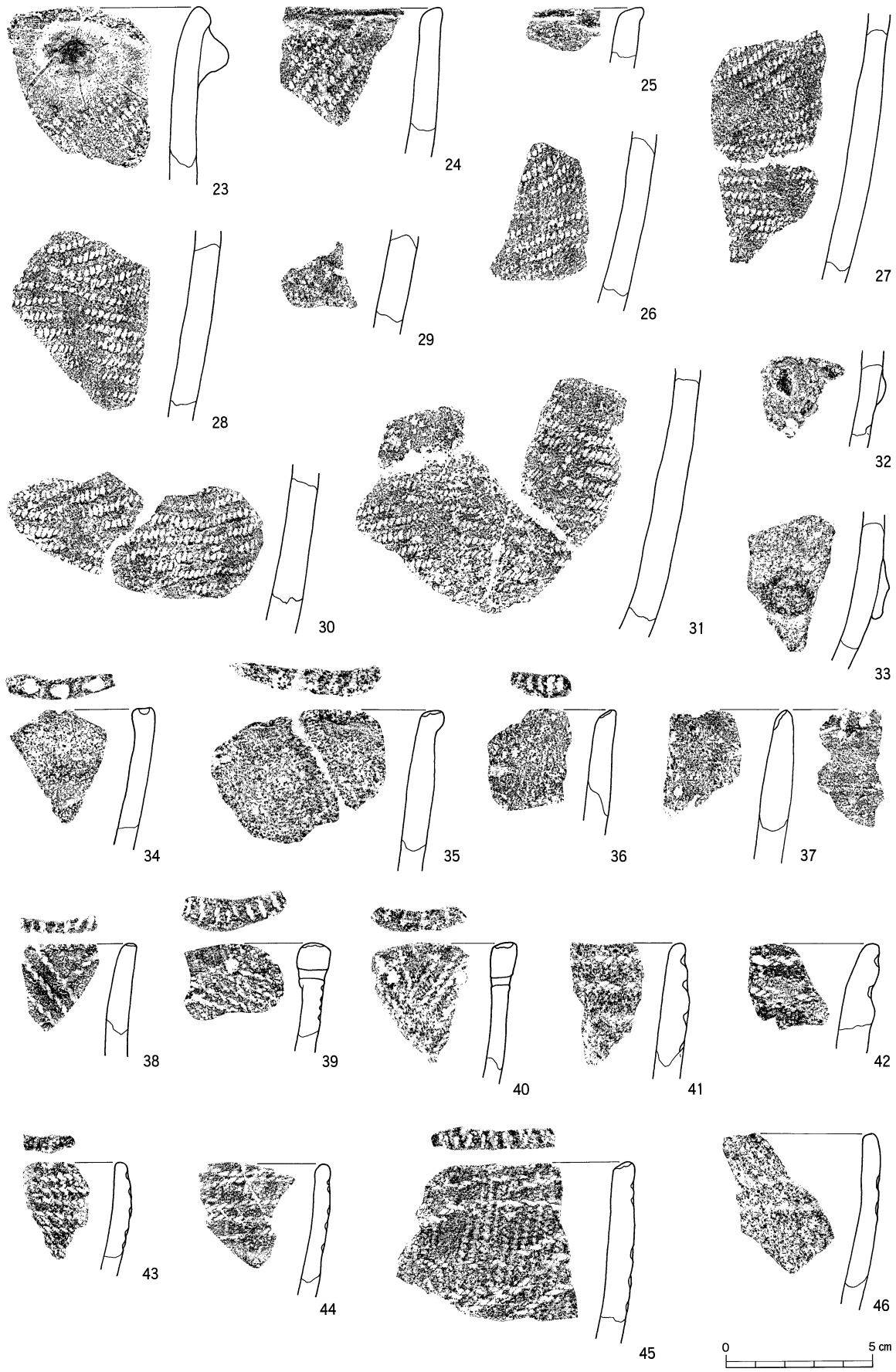
(a)　貼瘤文を有するグループ

23～31は接合しないが、Ⅰ29区やJ30区から出土した同一個体と思われる破片である。口縁部がほぼ垂直に立ち、胴部がやや膨らむ器形で、大きめの丸い貼瘤が付く23では、口縁が幾分緩やかな高まりをみせるが、24・25では平縁で、内切ぎみの丸みを帯びた口唇部が、外側に少しめくれている。色調は赤茶褐色がちで、黒色炭化物の付着がみられる部分では黒褐色に変わっている。胎土には砂礫が多く含まれる。地文はLR斜行縄文だが、27～31に見られるように胴部下半では横走ぎみに施文されている。縄文は器面調整により潰れぎみで、裏面にも横位の調整痕がみられるが、整形はとくに丁寧というほどではない。後述するように、他にも接合しない胴部や底部の破片がある。32は、貼瘤かと思われる粘土の貼付がみられる小片で、周囲を取り巻く環状の貼付文の痕跡とも思える陰影や下端には刺突文の一部のような痕もみられるが、摩滅や剝落のため文様がよく見えない。或いは宇津内Ⅱb式かも知れない。33も、表裏の摩耗が進んで文様の判別が困難な破片で、径2cm程の円形状の貼瘤かと思われる隆起がみられる。

(b)　刺突や押捺による文様を有するグループ

34～37は、摩耗のため器面の文様は判別できないが、口唇部に刻みが施された口縁片である。34は、山形の波状口縁片で、やや厚くつくられた口唇の頂部や両裾に、竹管状工具によると思われる刺突が加えられている。L44区Ⅱ層の出土で、色調は赤褐色がち、胎土に砂が多く含まれる。35は口辺が外側にやや肥厚し、36は口唇が内切する口縁片だが、ともにLR縄文原体を押捺した刻みがみられる。37の内切する口唇部には、RL縄文原体を押捺した刻みが残されている。

38～40は、斜位の交差する縄線文がみられるもの。38は、表裏ともに比較的丁寧に調整された口縁片で、器面には右下がり3条、左下がり1条のLR原体による縄線文が現存し、口唇部にも同じ原体による刻みが並んでいる。39は、L41区Ⅱ層出土で、色調は黒褐色、胎土には砂礫が多い。丸い波状口縁で、器面には複数の傾斜の緩いLR原体による縄線文が交差しており、波頂下には単孔が穿たれている。厚めの口唇上にも、同じ原体による縄線が押捺されている。40は、丸みを帯びた口縁片で、やや

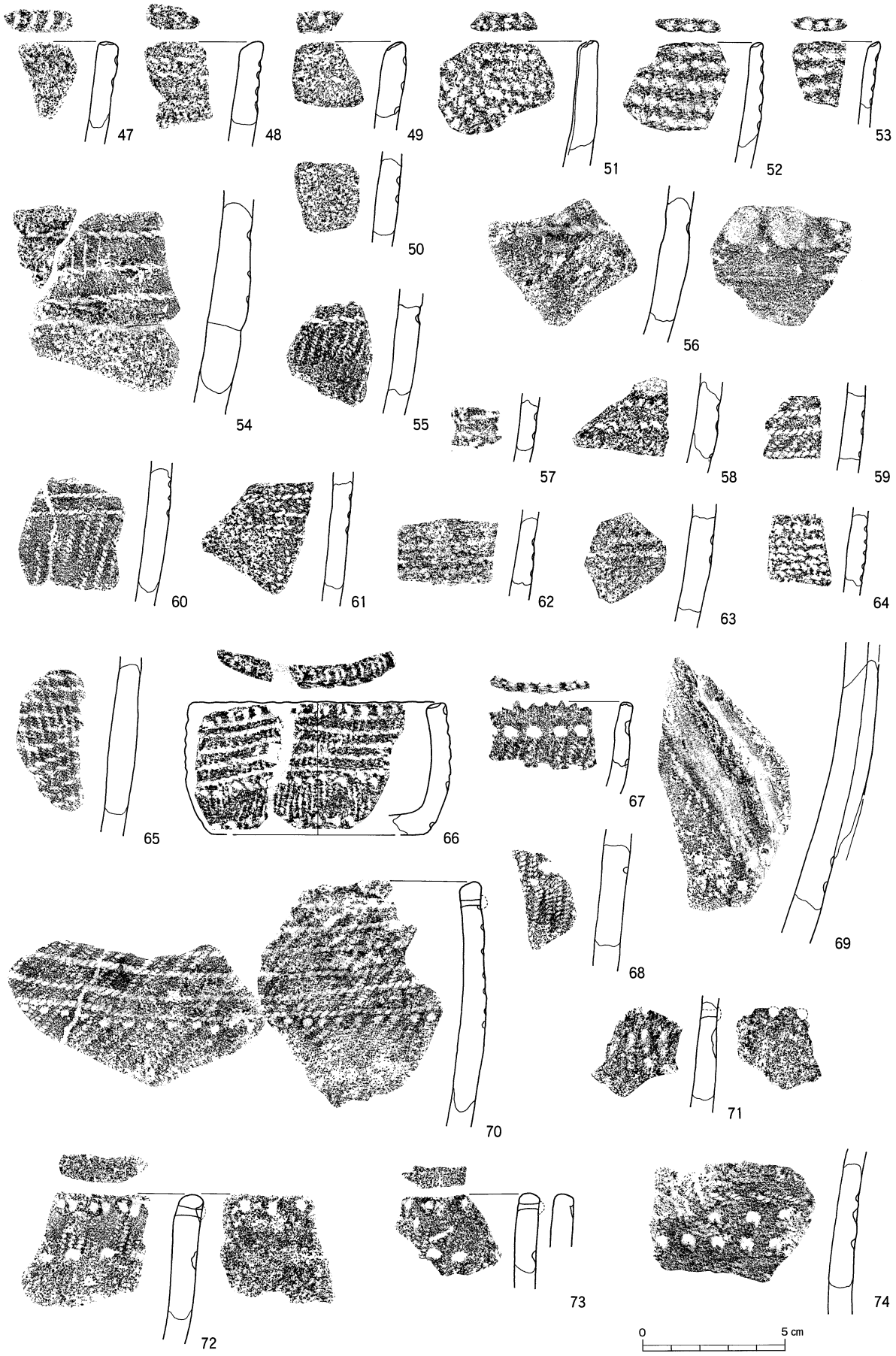


図Ⅳ－20　発掘区出土土器(2)

薄手だが、口辺では厚みが増している。器面にはLR原体による縄線文がV字状に重ねられ、貫通孔が２個現存している。周囲の粘土の盛り上がりから推して、本来は内面から刺突を加えた突瘤文だった可能性が考えられる。口唇上には、LR原体の縄端部を刺突した圧痕文がみられる。

41～65は、横位や斜位の縄線文が施されたもの。41・42は、口唇部が丸く細まる口縁片で、太めのLR原体をやや間隔を置いて押捺した縄線文がみられる。43は、小型の鉢形土器かと思われる薄手の口縁片で、口唇部が丸みを帯びる。器面には、LR原体による縄線文が比較的密に重ねられている。摩耗のため判然としないが、地文の縦走する縄文が施されているようであり、口唇部にも縄による刻みがあるようだ。44も薄手、小型の口縁片で、口唇部が丸い。現存下端部がやや厚くなっており、ここに器形の変換点があるようだ。文様は無節R原体を押捺した縄線文で、２本単位で重ねられているようにも見えるが疎密が一定しない。また、痕跡的ではっきりしないが、細いRL原体による縦走する地文があるようだ。45は、口辺にほぼ水平な２条の縄線文があり、その下にはやや斜位に交差する数条の縄線文がみられる口縁片で、内切するほぼ平坦な口唇上にも、縄による刻みが密に加えられている。地文は縦走縄文で、いずれも原体はLR。色調は黒褐色がちで、胎土には砂礫が多い。46は、F地区北側Ⅱ層出土の口縁片で、色調は黒茶褐色、胎土には砂が多い。やや薄手で、口唇部は平坦につくられている。ほぼ垂直に立つ口縁部には、不明瞭ながらLR原体によると思われる縄線文が２条みられる。摩耗のため地文は識別できない。47～49は、不鮮明ながら平行するLR縄線文が数条みられる口縁片で、口唇上にも縄による刻みがみられる。49・50は同一個体と思われる。51～53も、不鮮明ながら太めのLR原体によるらしい縄線文がみられるもので、内切する口唇上にも縄が刻まれている。51には斜位の縄線文が加わり、53は薄手である。52の原体は複節の可能性もあるが、摩耗のため判別できない。いずれも胎土には砂が多く含まれる。54は、やや厚手の口頸部の破片で、P－10出土の口縁部（図Ⅳ－14－１）と同一個体。LR縄線文のほか、縦の細い刻線が４～５本残されている。地文の縦走ぎみのLR縄文が、一部に辛うじて認められる。55～58も、LR縄線文が施された小片である。55の縦走する地文は０段多条のLR原体によるものらしく、56の裏面には整形時の指痕が残されている。59～61には、原体Rの縄線文の押捺があり、斜行あるいは縦走する地文のLR縄文がみられる。62・63も縄線文の痕跡を留めるが、摩耗が進んで原体の判別は困難である。64は薄手で、LR縄線文が密に重ねられている。65にみられるLR縄線文は、緩やかな斜位を保って交差するように配置されているようだ。縦走するLR縄文は、０段多条の細い原体によるものと思われる。

66～84は、縄端や竹管による刺突や圧痕が付加されるもの。66は、N43・44区Ⅱ層出土の２片から想定復元された鉢形土器で、大きさは口径９cm、底径7.6cm、器高4.6cm程と推定される。平底で、体側に丸みがあり、口頸部がやや内傾する。口唇部は平坦で、細い平篦状工具によって、密に刻線が刻まれている。体上半部には５条のLR縄線文と、その上下を縁取る縄端による連続刺突文がめぐっており、縄端による連続刺突文は底部直上にも加えられている。地文は縦走するLR縄文。色調は暗茶褐色で、胎土には砂粒が多く含まれる。67は、薄手で焼成堅緻な口縁片。口辺がやや外反し、口唇部が縄によって密にやや深く刻まれ、小波状口縁をなす。口辺と現存下端部に縄端を刺突した横位の丸い圧痕文が並んでおり、地文はやや斜行するLR縄文である。68は、径２mm弱の細い竹管状工具によって、斜めやや右下からやや左上へと突き上げるように施文した刺突文がみられる小片で、地文は縦走するRL縄文である。69は、器面に炭化物が付着して黒褐色を呈する破片で、胎土には砂礫の含有が多い。器面にはやや太めの隆起線文が斜位に貼付され、左裾沿いには２条のLR縄線文が添加されており、右裾にも縄線文の痕跡がみられる。現存下部には、縄端による連続刺突文が２列配されている。地文は縦走ぎみに施されたLR縄文である。



図Ⅳ－21　発掘区出土土器(3)

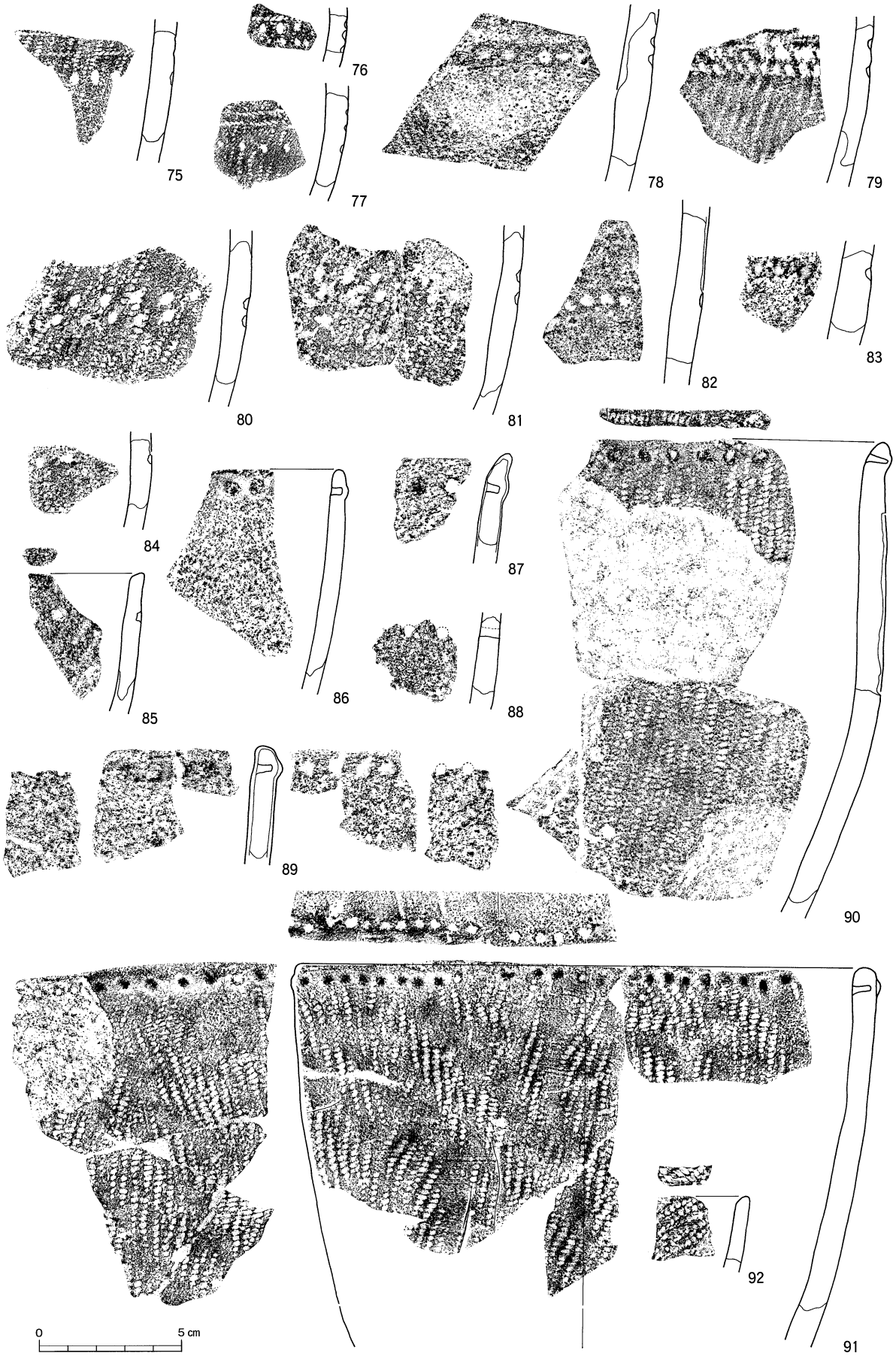
70～73は、さらに内面から刺突した突瘤文が加わるもの。70はやや内傾する口縁片で、口唇部は内切する。器面には原体Ｒの縄線文が６条めぐっており、最上位のそれを貫く径２mm程の小孔が並んでいる。小孔は突瘤文の突瘤部が剝落した結果、現れたものと思われる。縄線文の下部には連続して刺突された縄端圧痕文が添加されている。地文はRL原体を縦位に回転押捺した斜行縄文。表裏とも一部に黒色炭化物の付着がみられる。71も突瘤部の剝落によると思われる現存２個の貫通孔がみられる破片で、摩耗のため不鮮明だが、LR原体を縦に押捺した短縄文を並列させている。地文はよく見えない。72・73は、同一個体と推定される口縁部で、丸い口唇上には或いは縄文が施されているかと思われる部分があるが、拓本でも確認できない。口唇直下には突瘤文の痕と思われる径３mm弱の貫通孔と半截竹管状工具を押し当てた桜花状の刺突文が交互に並んでいる。頸部には縄端部を連続して刺突した圧痕文がみられ、地文は縦走するRL縄文である。74～78は、縄線文と縄端圧痕文が施されたもの。74には、LR原体によると思われる、やや不整な１条の縄線文と２列の縄端圧痕文がみられる。75・76は、RL縦走縄文に重ねて、Ｒ縄線文と、RL原体によると思われる縄端圧痕文が施文されたもので、前者には２条の縄線文と１列の圧痕文が、後者には１条の縄線文と２列の圧痕文が現存している。77もRL縄文と縄端圧痕文が見られるもので、原体Ｌの縄線文が２条残されている。78には、１条の縄線文と１列の縄端圧痕文が痕跡的に残存するが、摩耗のため原体は判別できない。地文はLR斜行縄文らしい。79～81は、RL原体による縦走縄文と、２列の縄端圧痕文がみられるもの。82～84は摩耗や剝落が進んだ破片で、辛うじて縄端圧痕文の痕跡を留めるものである。84の地文は縦走するRL縄文らしいがよく見えない。

85は、M41区Ⅱ層から出土した、小型土器の口縁片で、表裏とも摩耗している。頸下部が若干膨らみ、口辺が僅かに外反する。口唇はごく一部が残存するに過ぎない。色調は茶褐色、胎土には砂が多く含まれる。頸部には径３mm弱の竹管状工具による円形刺突文が２個現存している。その下には地文の痕跡と思われる左下がりのやや幅広の溝がみられるが、原体などは判別できない。やや特異であり、縄文期に属する可能性も考えられるが、器形や胎土、工具の印象などから、続縄文前半期に含めておきたい。

86～91は、口辺に突瘤文が施されるもので、口唇部は丸みを帯びている。86～89は、摩耗や剝落が進んで、突瘤文以外の文様が不明なもの。86の裏面には黒色炭化物の付着がみられる。90は、胴部がやや膨らんで、口縁部がほぼ垂直に立ち、口辺が僅かに外屈する器形を呈する。色調は暗茶褐色がちで、胎土には砂礫が多く含まれる。摩耗や剝落を免れた口唇から口縁外側、胴部内面には、黒色炭化物の付着がみられる。突瘤文は径2.5mm程の細い工具によるもので、半分は外側の突瘤部が剝離して、貫通している。器面にはRL縄文が縦走し、口唇部にも同じ原体によると思われる縄文が施文されている。91は、H23区Ⅰ・Ⅱ層出土の破片から想定復元した深鉢形土器の上半部で、図示した以外にも接合しない破片が20片程ある。推定口径は20.6cmで、胴部から口縁へ、一連のごく緩やかな弧状を保って立ち上がる器形を呈する。輪積みの接合部は外傾している。色調は橙褐色で、胎土には砂礫の含有が多い。口縁外側や内面の一部には、黒色炭化物が付着している。突瘤文の工具は径２mm程の細いもので、地文はやや不整に縦走するRL縄文である。

92は、薄手で、焼成堅緻な口縁小片。裏面も滑沢といえるほど丁寧に横位に調整されている。器面は淡褐色、裏面は黒褐色がちの色調を呈する。器面及び内切する口唇部には、LR縄文が施されている。突瘤文はなく、他に文様があったのかどうかも不明で、時期的な判断材料は少ないが、文様が寡少な例として、ここで報告しておきたい。

(b)グループとしたものは、時期的には、宇津内Ⅱa式やその直前くらいに位置づけられるものが多い



図Ⅳ－22　発掘区出土土器(4)

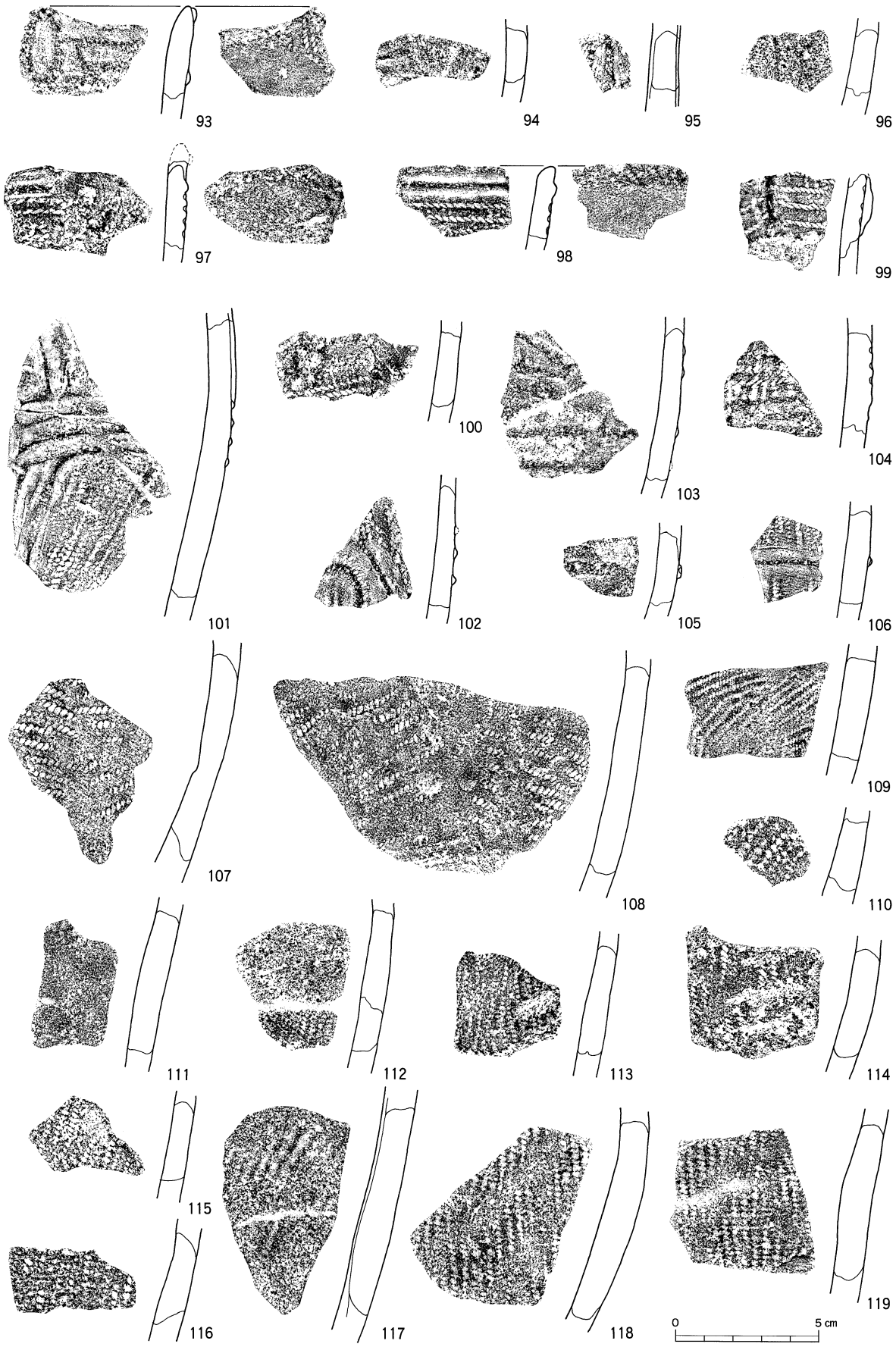
と考える。

(c)　隆起線文を主体とする文様を有するグループ

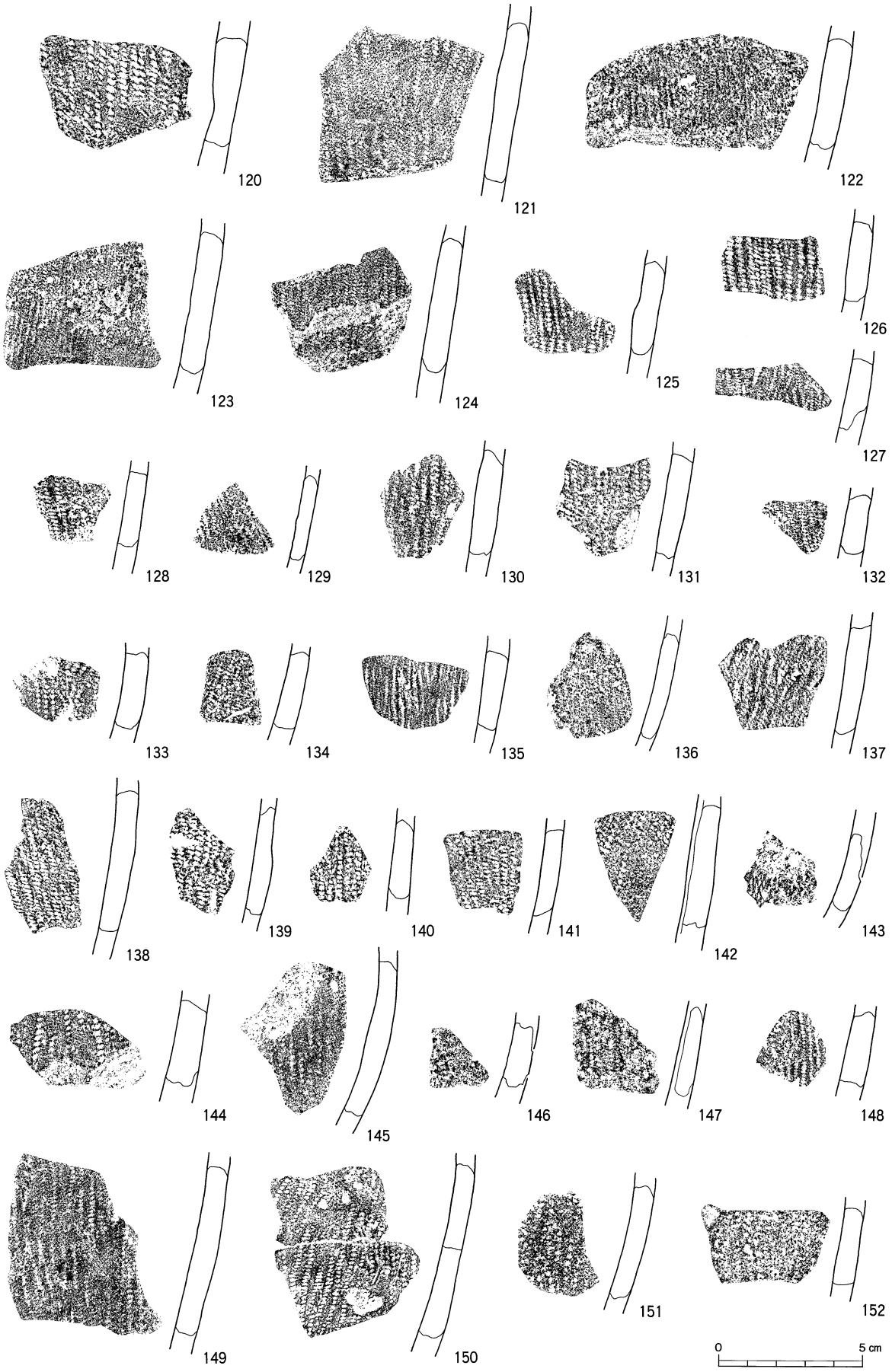
93は、山形の小突起をもつ口縁片で、口唇部断面は鋭角となる。色調は黒褐色がちで、胎土には砂が多く含まれる。裏面は比較的丁寧に調整されている。突起下に配された長円形の貼付けを文様のメインに、横位や斜位の隆起線文が付加されている。隆線上の刻みの有無は、摩耗のため判別できない。現存下端部に、横位の原体Ｌの縄線文の痕跡が僅かにみられ、突起部内面にも縦位のＬ縄線文が３条押捺されている。94は、二重の同心円文の剝落痕を留め、左に横位の細い隆線文が連結する小片で、現存下端部では、辛うじて横位のＬ縄線文の一部が観察できる。95は、口唇部が欠損する口縁片と思われ、やや弧状を描く縦位の隆起線文が２本残存するが、摩耗や剝落が進んでいる。96は、小さな長円形の陰影から貼付けの存在が窺えるもの。97は、波頂部を欠失する口縁突起部の破片で、左の山裾にのみ口唇部が残存している。やや縦長の二重の同心円文が剝離痕を留め、横位の隆起線文が貼付されている。隆起線文の上下には原体Ｒの縄線文が配されており、口唇部には原体 RL かと思われる縄文が施文されている。98は、断面三角状の細い隆起線文と現存３条のＬ縄線文が横位に配された口縁片で、口唇部にも RL 縄文がみられ、左下に補修孔が残る。裏面は縦位に丁寧に調整されており、縦位の微細な調整痕が残されている。99は、縦位に貼付された隆起線文と横位のＬ縄線文帯が配された口頸部の破片。100は、表裏に剝落がみられる破片で、弧状や縦、横の貼付けの剝離痕が認められ、２条のＬ縄線文が残存している。101は、表裏に黒色炭化物の付着がみられる胴部片で、縦、横に緩やかに弧状を描く隆起線文が貼付されている。隆起線上に刻みはなく、地文は縦走ぎみの RL 縄文である。やや厚手だが、裏面は比較的丁寧に調整されており、横位の微細な調整痕が観察できる。102は、３重の同心円文の一部かと思われる微隆起線文がみられる破片で、外側のそれは剝落している。中心部の微隆起線文の外縁には、原体Ｌを用いたと思われる押捺がめぐっており、内側にも縄文或いは縄線文の痕跡が縦に２筋みられるが、器面調整のためか縄目が潰れており、原体などを判別できない。103は、Ｌ26区とＮ28区Ⅰ層出土の破片が接合したもので、器面には斜位に配された上方が広い矩形の隆起線文と、やや間隔を置いた横位２本の隆起線文が貼付されている。表裏は摩耗しており、隆起線文はその基底部が残存する程度に過ぎない。104は、地文の RL 縦走縄文に重ねて施文された、横位の現存３条のＲ縄線文と、２本の隆起線文の痕跡がみられるもの。器面の色調は橙褐色がちで、裏面は黒褐色がち。やや厚手だが、裏面は横位に丁寧に調整されている。105は、刺突が加えられたやや幅広の隆起線文がみられる小片だが、器面の摩耗のため、擬縄貼付文の残存は一部にとどまる。裏面には黒色炭化物が付着している。106は、表裏ともにやや滑沢に調整された胴部片で、裏面は黄茶褐色を呈する。胎土や裏面の印象が102に近く、或いは同一個体かも知れない。器面には縦走する RL 縄文と横位の微隆起線文がみられ、微隆起線文には細かな刻みが加えられている。なお、93・95・97～100・101・103の胎土は、色調が黒変している。(c)グループは、宇津内Ⅱb 式に比定されよう。

胴部片

107～152は、続縄文前半期の土器の胴部片である。摩耗の進んだ破片も少なくないが、地文などの全体的な傾向をみるため、多くの類例を掲載した。107・108は、23などと同一個体と思われるもので、横走ぎみの LR 縄文がみられる。109～111は、原体 LR による斜行縄文が施されたもの。109の原体は０段多条の細いもののようだ。112～142は、原体 LR による縄文を、縦位や縦走ぎみに施文したもの。118では、意図的に磨り消しを加えたものであろうか、斜位の無文部が縞状に残されている。121～124は、やや器厚が薄めで、胎土が黒変しているもの。縄文原体も細めのものが利用されている。125～142でも細めの原体が使われている。126・127は、表裏が滑沢に調整された小片で、裏面は黒褐色を呈す



図Ⅳ－23　発掘区出土土器(5)



図Ⅳ－24　発掘区出土土器(6)

る。128の裏面も滑沢で、表裏とも色調は茶褐色。129は、とくに薄手で、縄文原体もより細く、裏面は粗面がちのもの。132～134の裏面には、黒色炭化物が一面に付着している。135・138の原体は０段多条と思われる。137は、55と同一個体の可能性が高い。142は、灰黄褐色がちな色調を呈し、現存上半部の縄文は、斜行縄文とも見なしうる。

143は、器面は赤茶褐色で光沢があり、裏面は黒褐色、比較的丁寧に調整されているが、平滑ではない。器面には、原体Ｒを軸に巻いた撚糸文がみられる。撚糸文を地文とする土器は稀で、Ｐ－４出土の図Ⅳ－10－２に、色調や胎土などが似ているが、撚糸文の様相からこれとは別個体と考える。

144～152は、原体 RL による縦位や縦走ぎみの縄文がみられるもの。LR に比べ、数は少ない傾向が認められる。144は、やや厚めの破片だが、裏面は比較的丁寧に調整されている。145は、やや薄めの胴下半片で、調整は表裏とも比較的丁寧。146･147は、かなり摩耗が進んでいる。148は、細い原体によるもので、裏面には黒色炭化物が一面に付着している。149・150は、やや薄手で、縄文原体も比較的細いもの。焼成は堅緻だが、表裏の調整は、さほど丁寧ではない。151・152も比較的薄手だが、摩耗のためよく見えないが、縄文原体はそう細いものではない。

底部片

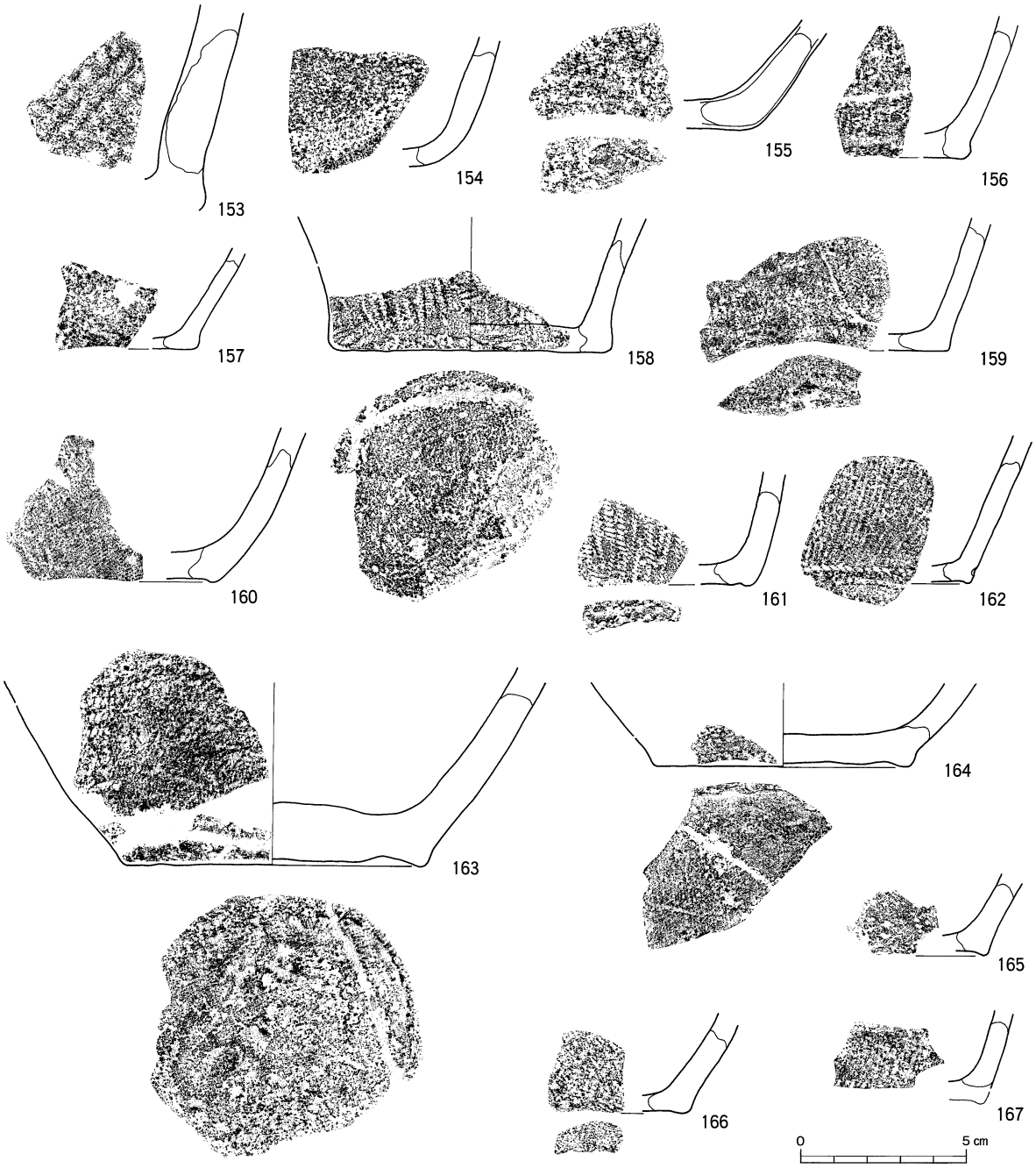
153以外は、続縄文前半期の底部片と思われる。153は、底部近くの厚手の破片で、内面側は剝落している。器面の色調は淡赤茶褐色で、胎土は黒褐色を呈する。胎土には砂礫のほか、繊維も含まれている。摩耗が進んで、地文の判別は困難だが、左下がりの溝状の痕跡から、LR 原体によるものかと推測される。縄文中期末のものであろう。

154は、比較的薄手の破片で、丸底と思われる。器面は摩耗しており、文様は不明。裏面は比較的丁寧に調整されている。色調は暗茶褐色で、胎土には砂粒が多い。155は、表裏の損耗により、正確な器形は不明だが、丸底に近いような平底であろうか。外側は黒褐色、内側は茶褐色がちな色調を呈する。

156～159は、それぞれ外側にやや張り出す形状がみられる平底の類例。156は、小型、薄手で、摩耗が進んで不明瞭だが、左下に細い LR 縄文と思われる痕跡が残されている。157も薄手で、器面の摩耗が著しい。内面は黒褐色で、比較的丁寧に調整されている。158は、比較的薄手で、推定底径8.6cm、体部には０段多条の細めの LR 原体による縦走縄文がみられる。色調は暗茶褐色で、胎土には砂礫が多く含まれる。159も比較的薄手の平底と思われる破片で、N45区Ⅱ層の出土。摩耗や剝落が進んでおり、揚底の可能性も捨てきれない。黄赤褐色がちの色調で、胎土には砂礫の含有が多い。

160～166は、低めの揚底がみられる底部片である。160は、体側の丸みがやや強いもので、左方に細い LR 縄文の縦走が痕跡を留めている。再火熱を受けたのか、器面は灰青褐色を呈する。161は、平箆状工具を用いて縁辺に押圧を加えて、揚底に整形したもの。内面はかなり丁寧に調整されている。器面には０段多条の LR 原体による縄文が縦走している。162は、薄手で、直線的に立つ断面形状を有するもの。内面調整はさほど丁寧ではない。器面には０段多条の細い LR 原体による縦走縄文がみられ、下端には横位の LR 縄線文が加えられている。器面は黒褐色、内面は赤茶褐色で、胎土には砂礫が多く含まれる。163は、23などと同一個体の可能性が高いもので、推定底径9.2cm。厚みを増す底面の整形はやや粗い。器面の一部には LR 縄文の横走がみられる。164は、推定底径7.8cm 程の揚底片で、体部は殆ど欠失している。内面の摩耗が進んで、砂礫がちの胎土が観察できる。165は比較的丁寧に整形されたもので、焼成は堅緻、器面には、縦走ぎみの LR 縄文が僅かに残存している。166は摩耗した底部片で、胎土には砂礫が多く含まれる。167は、やや薄手の底部付近の破片で、揚底か否かは不明である。器面に縦走する細い縄文の痕跡を微かに留めるようだが、摩耗や剝落のため判然としない。

（髙橋和樹）



図Ⅳ－25　発掘区出土土器(7)

（２）　石器

出土石器（表Ⅳ－２）

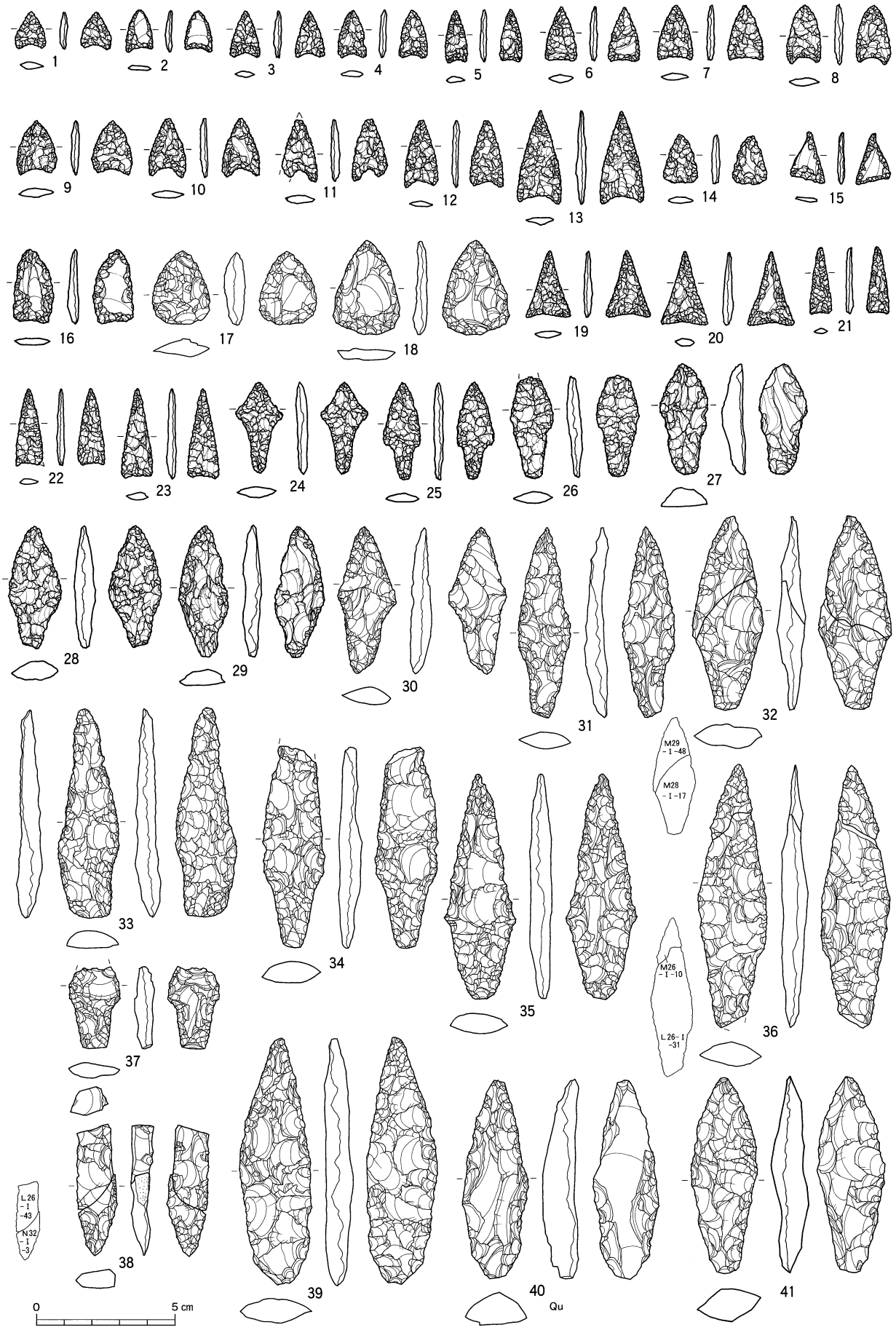
石鏃244点、石槍222点、ナイフ１点、つまみ付きナイフ19点、石槍またはナイフ308点、両面調整石器538点、スクレイパー788点、掻器44点、錐形石器３点、楔形石器２点、二次加工ある剥片148点、削片１点、剥片198,499点、石刃核５点、石核154点、原石18点、石斧16点、敲石３点、台石６点、磨石１点、砥石３点の計201,978点、重量301,024.7ｇの石器類が出土した。石材は黒曜石１が81.8％で大部分を占め、以下、黒曜石３（11.2％）、黒曜石２（3.7％）、黒曜石４（1.7％）、黒曜石５（1.0％）で、めのう・安山岩・珪岩・頁岩・片岩・砂岩・碧玉・緑色泥岩は0.1％以下である。栄野１遺跡に比べ黒曜石２の比率が低い。

石鏃（図Ⅳ－20－１～29、図版27）

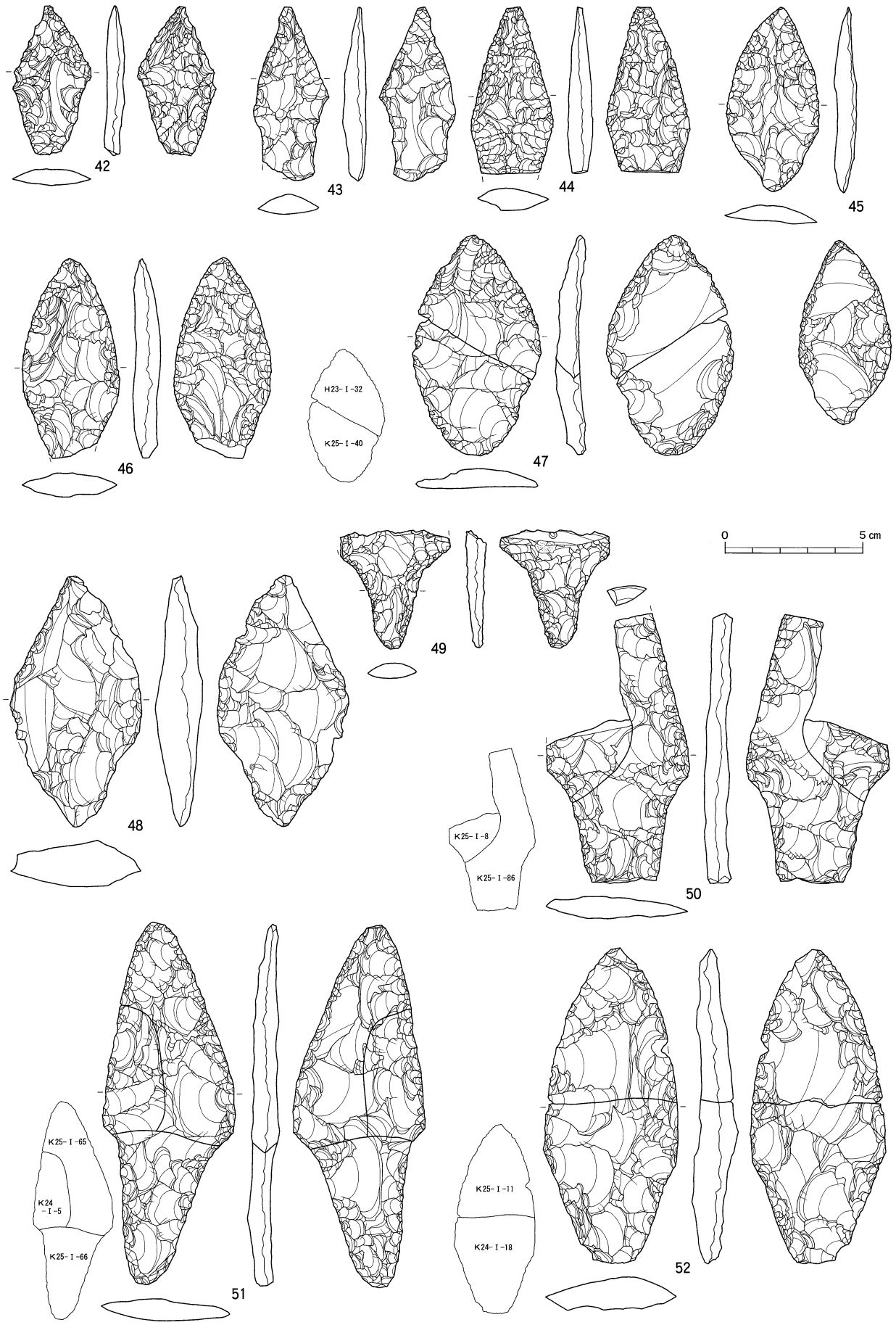
29点（29個体）を図示している。１～13はⅠ類である。２は素材縁辺のみの加工で整形されているが、全面に近い加工が行われるものが多い。また、未成品である14～18に比べ縁辺は加工が細かく滑らかである。13は大型であるが薄く、精巧である。Ⅰ類の長さは約１～3.5cmであるが、２cm前後のものが主体を占める。遺跡の中では最も多いタイプで、折損品も多いことから遺跡内で主に製作されたものと考えられる。14～18は未成品と考えられるⅥ類である。15の左右側縁は折れ面で素材を折り取った可能性がある。16は縁辺に簡単な加工が見られるのみで完成品に類似した形状の素材が選択されていたと思われる。それらに対し、17・18はほぼ全面に比較的大きい剥離で加工が施され、厚手で大型の素材が利用されている。両者ともにⅠ類の未成品と考えられ、Ⅰ類は二種類の素材から作られていた可能性がある。19・20はⅡ類で三辺が内湾している。21～23はⅢ類で基部がやや内湾している。24～29はⅣ類。24・25は明瞭な茎部のあるもので、24の茎部は弧状に、25の茎部はかえしが明瞭に作出される。26～29は茎部が不明瞭なもので、27・29の裏面は大きい平坦剥離によって平坦に、正面は角度のある剥離で断面形がかまぼこ状に整形される。これらは石槍と形態的な連続性があり小型の石槍と見なすことができる。

石槍（図Ⅳ－26－30～図Ⅳ－27－52、図版27）

31点（23個体）を図示している。30～41は細身のもので、30～37は不明瞭ではあるが茎部が作出されるもの、38～41は茎部が作出されないものである。30・31には素材腹面が残り、30の裏面は素材腹面のバルブを除去するような粗い剥離が行われ、正面の縁辺は細かい加工で整形される。31は比較的粗い加工が施され、素材の反りが残る。32は両面とも平坦剥離が行われた後、縁辺部への細かい加工で整形されるが右側縁から裏面への加工の際に折損している。33の基部は基端部からの剥離により四角く加工され、正面左側縁は裏面からの急角度の加工で内湾する。基部形状からナイフの可能性がある。34・35は左右対称で、基部は平行剥離によって丁寧に加工され、35の先端部は錯交状の急角度の加工によって整形される。36は全面的に平坦剥離による加工が行われ、断面形は凸レンズ状である。37の先端部には衝撃剥離と見られる剥離が残る。小型の棒状原石素材の38は中央で折損後、右側縁で折れ面から削片状の剥離が行われる。39は角礫面が残り、やや粗い加工が見られる。40は珪岩製で、表面はヒンジによる段差があり、両面に素材面が残る。41は先端側が丁寧に整形される。42～44は幅広で茎部が作出されるもので、平坦剥離による加工が行われ、薄手である。45～48は幅広で茎部が作出されないものである。45の裏面は素材腹面のバルブを除去する加工が、正面は全面的な加工が行われる。46の縁辺は比較的細かい加工で整形され、47の裏面にはリングが密で平坦な素材面が残る。48は両面に大きい素材面が残り、粗い加工が見られる。灰色がかった縞のある黒曜石で非白滝産と思われる。49～52は大型のもので、49～51には明瞭な、52にはやや不明瞭は茎部が作出される。これらは



図Ⅳ－26　発掘区出土石器(1)　石鏃・石槍



図Ⅳ－27　発掘区出土石器(2)　石槍

縁辺部を除いて平坦剥離によって加工されており、表面に凹凸が無く滑らかで縁辺も直線的で整った形状である。51は裏面に素材腹面が残り、長さ15cm 程度の大型剥片素材である。また、51は茎部と身部の軸がずれている。52は両面とも大きい平坦剥離面が残り、中央で折損している。49～51の初期段階と思われる。

ナイフ（図Ⅳ－28－53、図版28）

１点（１個体）を図示している。53は黄褐色の頁岩製。剥片素材で両面とも左右からの平坦剥離で加工されるが中央にヒンジによる段差が残る。基部縁辺は角度のある剥離で四角く整形される。

石槍またはナイフ（図Ⅳ－28－54・55、図版28）

２点（２個体）を図示している。54・55ともに端部からの加工によって四角く整形される。55は頁岩製の剥片素材でナイフの基部と考えられる。

つまみ付きナイフ（図Ⅳ－28－56～58、図版28）

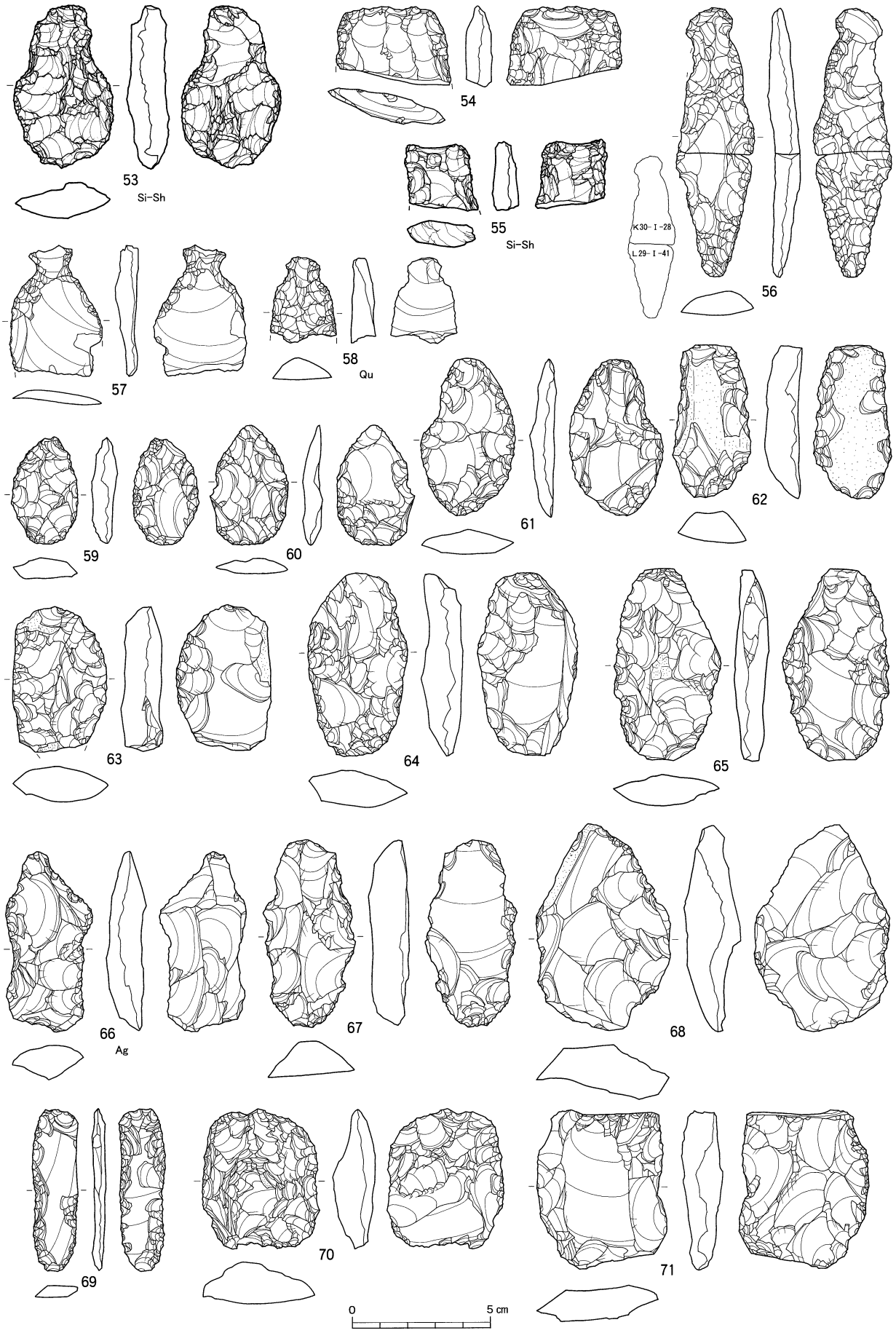
４点（３個体）を図示している。56～58は左右ともノッチ状の加工によってつまみ部が作出される。56は両面、58は片面の面的な加工によって縦長に整形され、57は縁辺のみの加工で反りのある幅広の素材剥片形状を残す。58は珪岩製である。

両面調整石器（図Ⅳ－28－59～図Ⅳ－29－77、図版28）

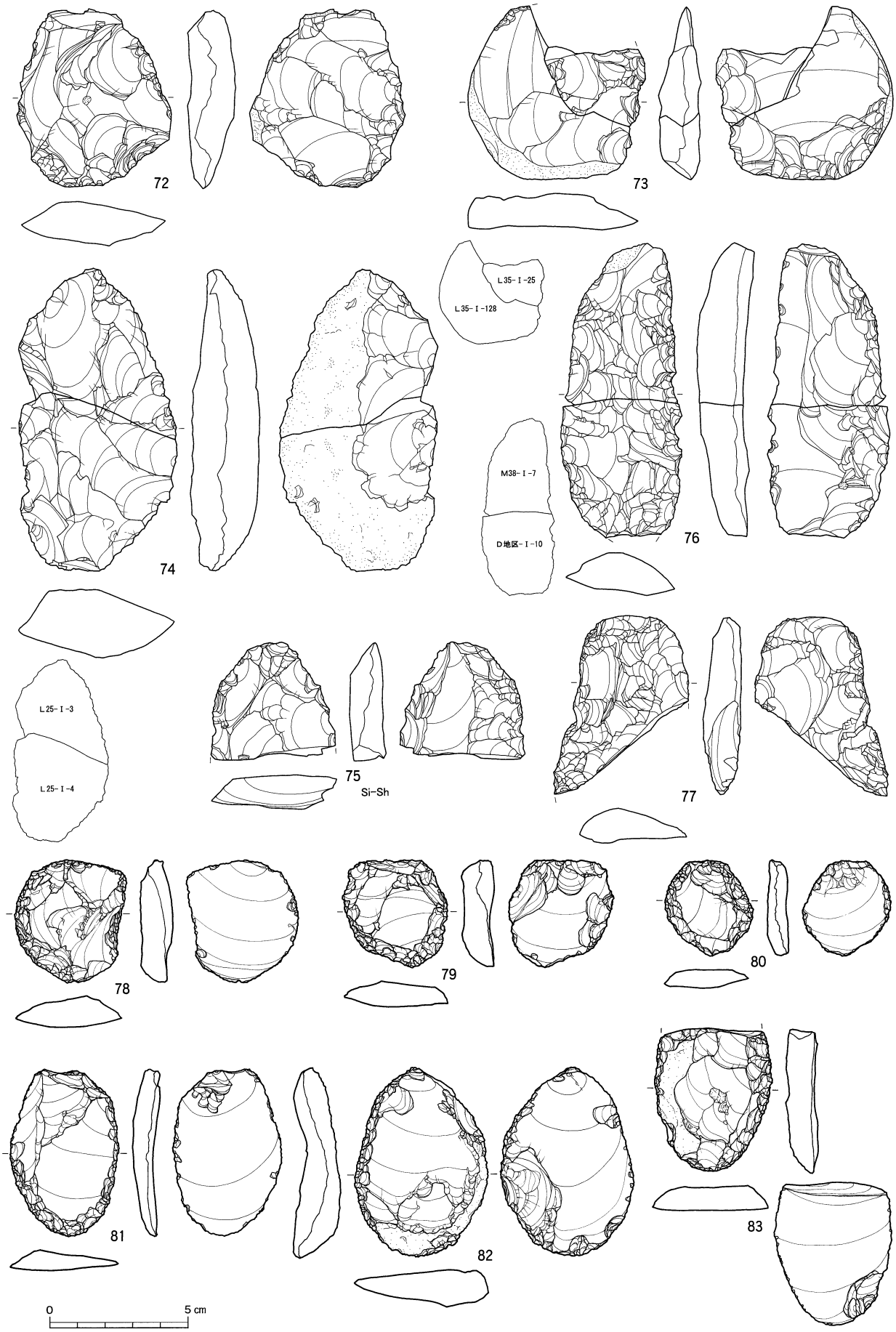
22点（19個体）を図示している。59～61は不明瞭ながら尖頭部をもつものである。59・60は石鏃Ⅵ類である17・18のさらに初期の段階の可能性がある。61の縁辺には細かい加工が見られる。62～67は楕円形に近い形状のものである。62は小型の短冊状の角礫素材で縁辺のみ加工が行われる。63・64は角礫面が残る剥片素材で、正面は両側縁から、裏面は右側縁から主に平坦剥離によって加工が行われる。63の表面には右側縁の正面下部･裏面の加工とそれ以外の素材面･加工面とに多段階表面変化（二重パティナ）が確認される。65は剥片素材で、左側縁は交互剥離状の平坦剥離、右側縁は裏面への急角度の剥離によって加工される。66は白色に褐色部分が縞状に混じるめのう製で、粗い剥離で覆われ、形態も不定形である。67・68は比較的大型の剥片素材で粗い剥離が行われる。67は非常に平坦な素材腹面から正面への加工により断面が三角形で、68には角礫面が残る。69は石刃素材で縁辺のみ加工が行われる。70～73は長幅比が１に近い形状で、70・71は角礫面が残り、四方向からの平坦剥離によって方形である。70は剥片素材で正面中央にヒンジによる段差が見られ、71は上部折損後、折れ面から剥離が行われる。72・73は転礫面を持ち、73は剥片素材で、両者とも粗い剥離が見られる。74・頁岩製の75は大型で加工の粗いものである。74は石核と同様な粗い剥離が行われ、剥片剥離の進行した一形態と考えられる。大型の細長い形状の76・77は、平坦剥離で加工され、端部が四角く整形されている。

スクレイパー（図Ⅳ－29－78～図Ⅳ－31－103、図版28・29）

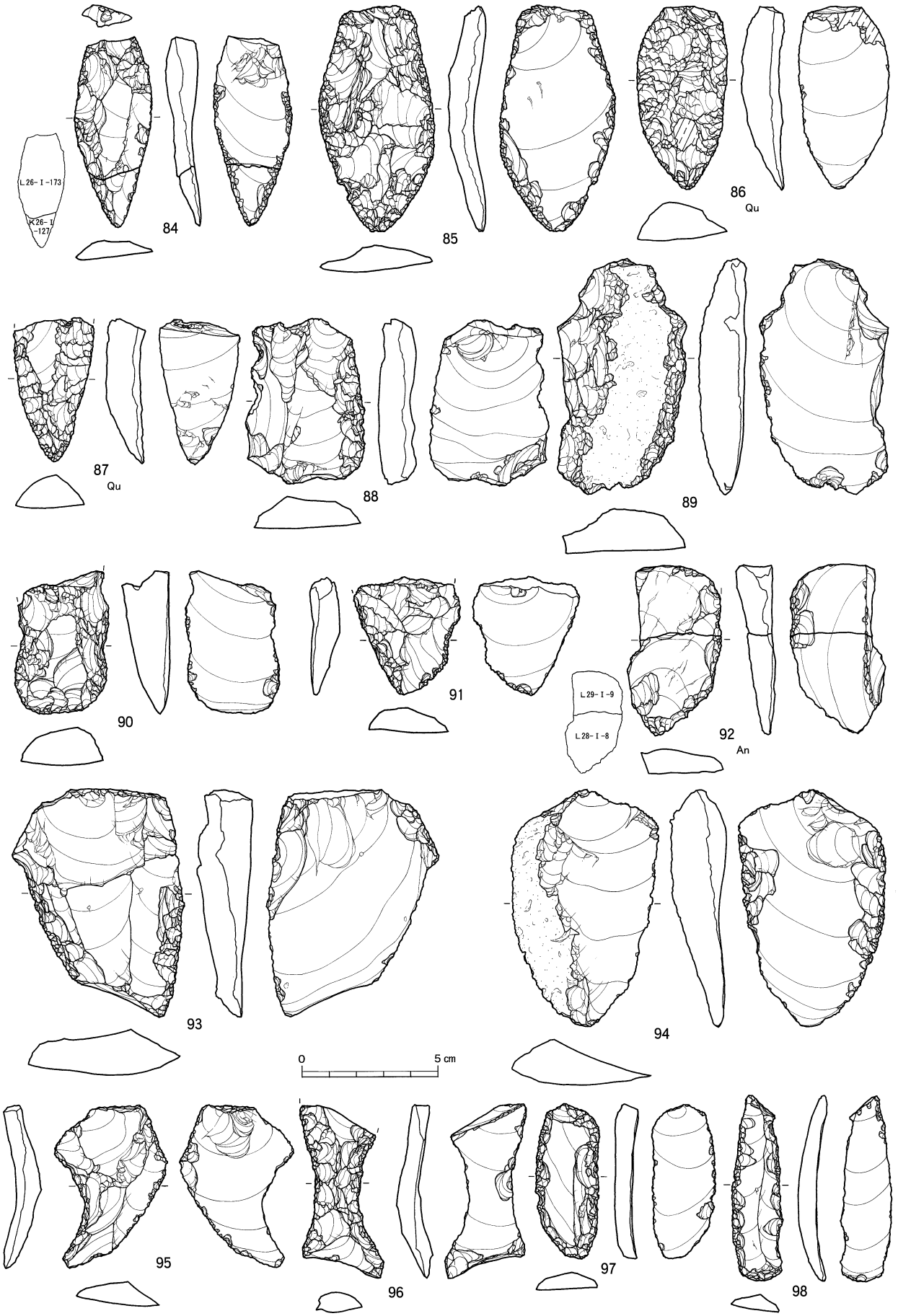
28点(26個体)を図示している。78～83は比較的角度のある連続した加工が行われるもので、78～80は背面に多方向の剥離面のある長幅比が１に近い剥片を素材とした円形に近いラウンドスクレイパーである。81～83は背面に素材剥離方向と同一方向のみの剥離面のあるやや縦長の剥片を素材としたもので､82は反りがある｡82には転礫面､83には角礫面が残る｡84～87は尖頭部が作出されるもので85～87は素材背面に面的な加工が行われる。84は主に左側縁に加工が施され、85は平坦剥離によって薄く整形される。86・87は厚手の珪岩製剥片素材で押圧剥離と考えられる平行剥離によって加工されている。88～91は比較的厚手の剥片を素材として角度のある加工が施される。88は背面に二方向の剥離面の残る方形に近い形状の剥片を、89は背面に転礫面が残り、腹面が平坦な剥片を素材として右側縁に加工が行われる。90は厚手の剥片を素材として端部が三方向からの加工により四角く、91は寸詰まりの剥



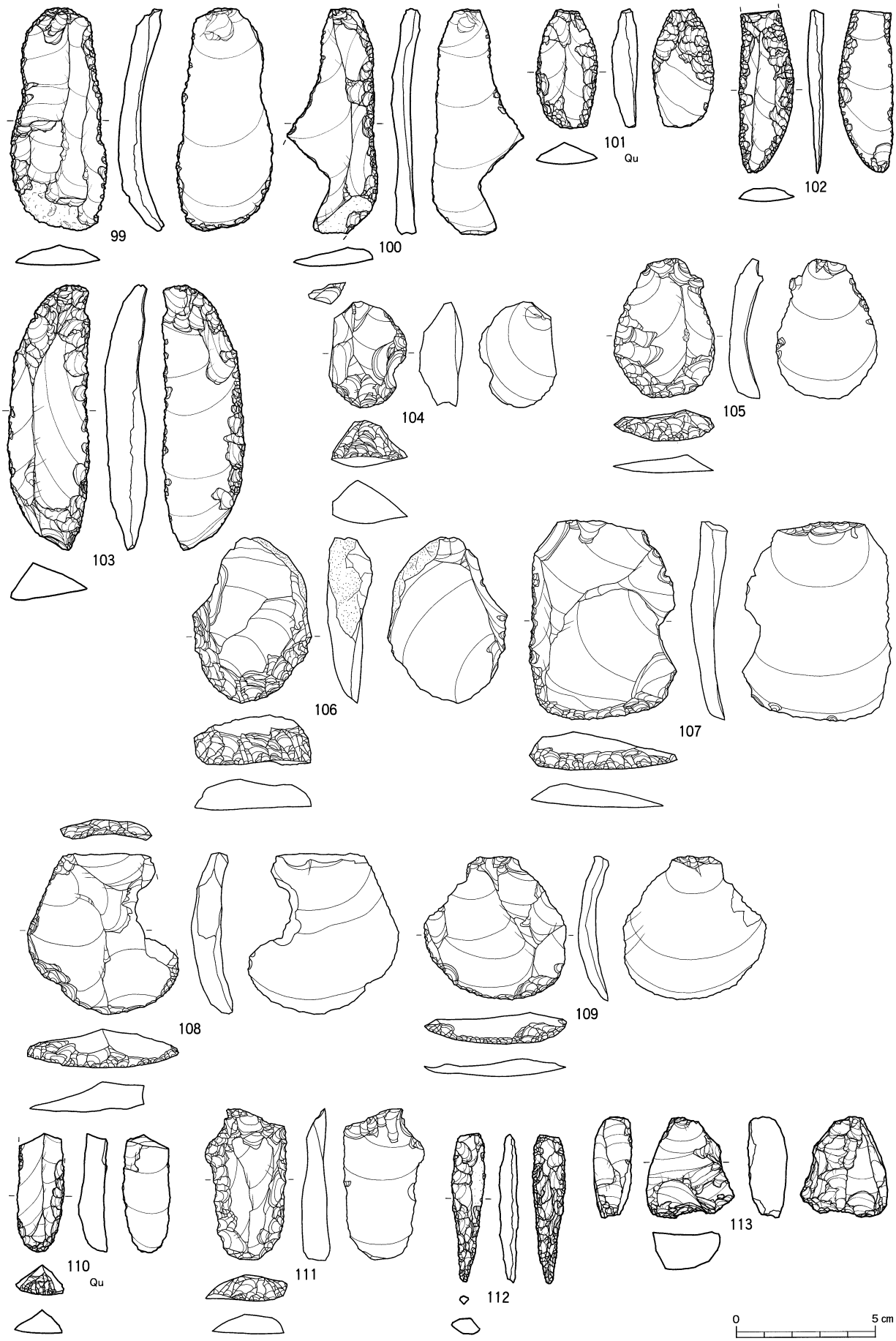
図Ⅳ－28　発掘区出土石器(3)　ナイフ・石槍またはナイフ・つまみ付きナイフ・両面調整石器



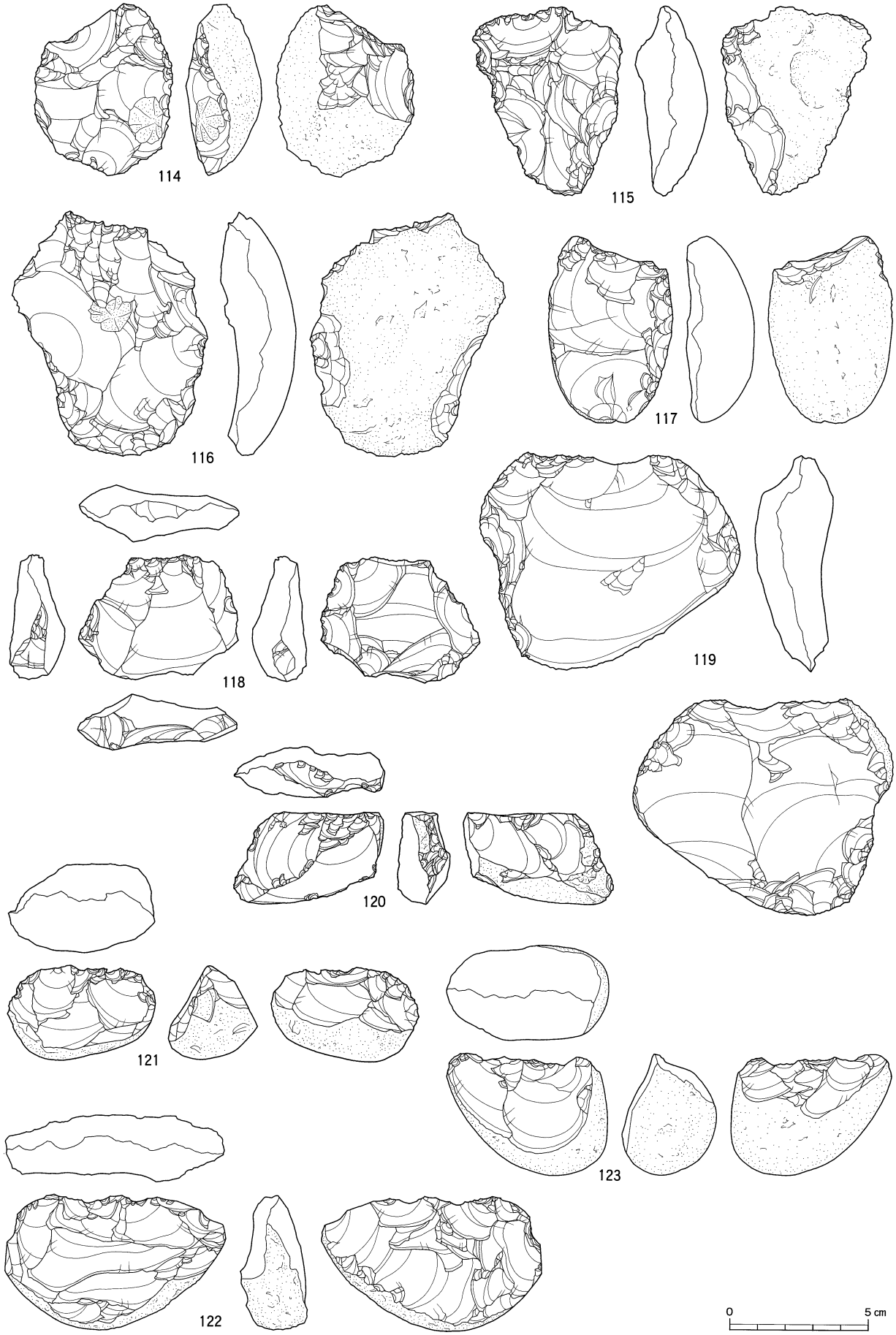
図Ⅳ－29　発掘区出土石器(4)　両面調整石器・スクレイパー



図Ⅳ－30　発掘区出土石器(5)　スクレイパー



図Ⅳ－31　発掘区出土石器(6)　スクレイパー・掻器・錐形石器・楔形石器



図Ⅳ－32　発掘区出土石器(7)　石核

片を素材として左側縁の加工により尖頭状に整形される。92は安山岩製でやや不連続な加工が行われる。93・94は大型の剥片素材で、原礫面打面の93は主に背面両側縁に、複剥離打面の94は腹面両側縁に連続した平坦剥離が行われる。両者とも転礫面が残り、境界が明瞭な流理構造のある94は非白滝産と思われる。95・96は側面観が湾曲した剥片素材で側縁が内湾するような加工が行われる。95は調整打面である。97～103は石刃ないし縦長剥片素材である。97～100は縁辺に限定される角度のある加工が施される。99の素材は転礫素材の単剥離打面石核から頭部調整を伴う剥離によって剥離された石刃で、100の素材は背面に二方向の剥離面、打面に原礫面を持つ縦長剥片である。

101～103は両面加工で押圧剥離と思われる平坦剥離が見られる。101は珪岩製である。

掻器（図Ⅳ－31－104～111、図版29・30）

８点（８個体）を図示している。104は厚手で小型の剥片を素材として端部に急角度の刃部が、105・106は比較的深い剥離によって弧状に刃部が作出される。105・106は先端部に反りのある素材が利用され、106は転礫面が残り、素材打面側に刃部が作出される。107～109は縁辺部に限定される剥離によって107は四角く、108・109は弧状に刃部が作出される。これらは特徴的な複剥離打面の石核から剥離されている。109は飴色の黒曜石で非白滝産と思われる。110・111は石刃ないし縦長剥片素材で端部に急角度の加工で刃部が作出される。110は珪岩製である。

錐形石器（図Ⅳ－31－112、図版30）

１点（１個体）を図示している。112は角礫面を持つ剥片素材で両面加工により細長い形状に加工されている。

楔形石器（図Ⅳ－31－113、図版30）

１点（１個体）を図示している。113は剥片素材で両面にリングが密でバルブの発達しない両極剥離によるものと思われる剥離痕が残る。

石核（図Ⅳ－32－114～図Ⅳ－33－132、図版30）

19点（19個体）を図示している。平滑な原礫面が残る角礫素材の118・120を除くと全て転礫素材である。

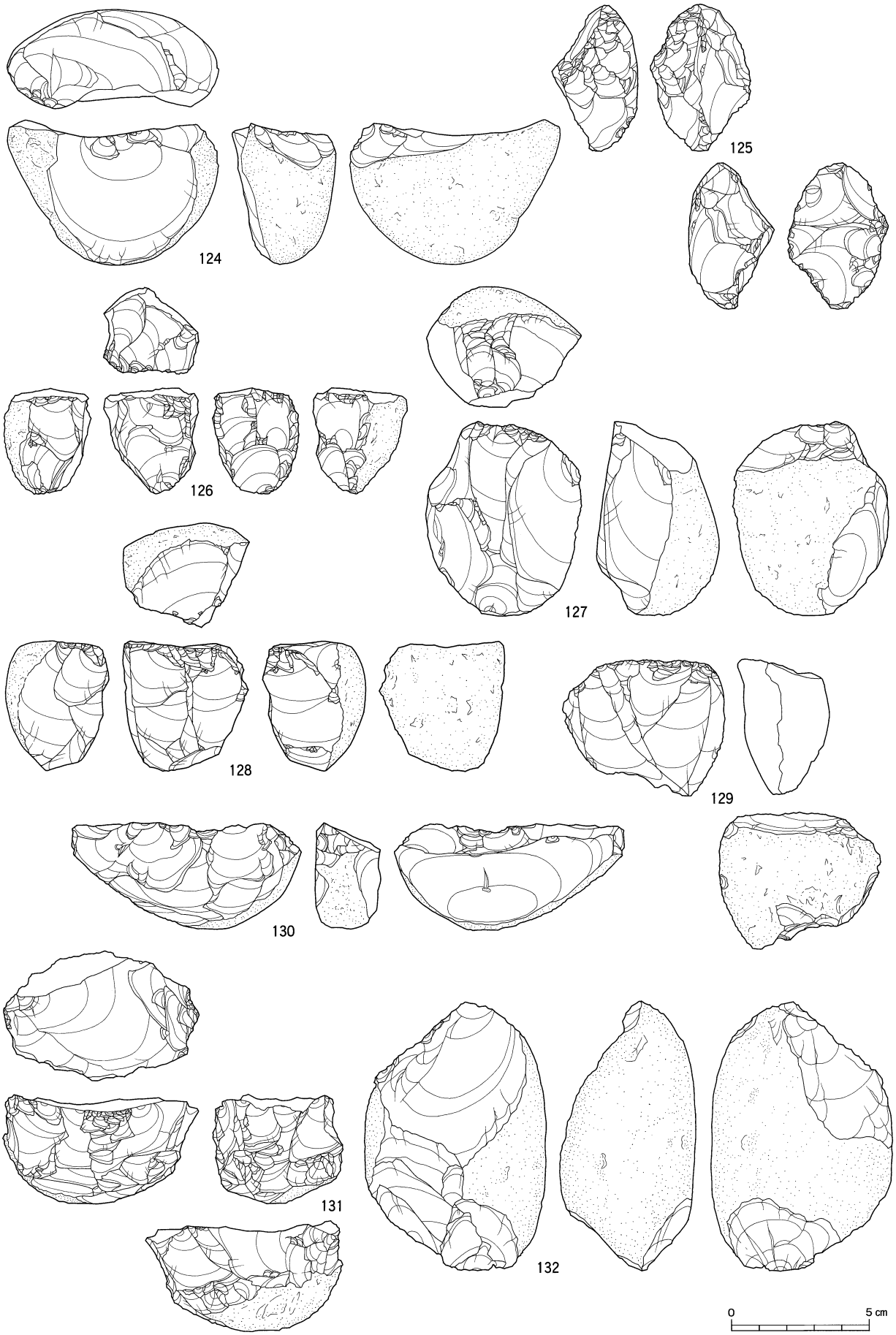
114～117はⅠ類。114には素材腹面が、117には両極剥離によると思われる分割面が残り、転礫が両極剥離によって分割された可能性がある。114は上部両面で剥離の後、正面右側縁で剥離が行われ、115は右側縁両面・正面左側縁で剥離が行われた後、正面上部で剥離が行われる。116は正面左側縁での剥離の後、右側縁で剥離が行われる。117は正面右側縁からの剥離後、上部の上・正面で剥離が行われる。

118～120はⅡ類。118は正面上からの剥離の後、裏面で求心状の剥離が行われる。119は裏面での剥離の後、正面で剥離が行われる。石核自体が大型で大型の剥片が剥離されている。120は右側面から裏面への剥離で折損した後、折れ面から正面に剥離が行われる。

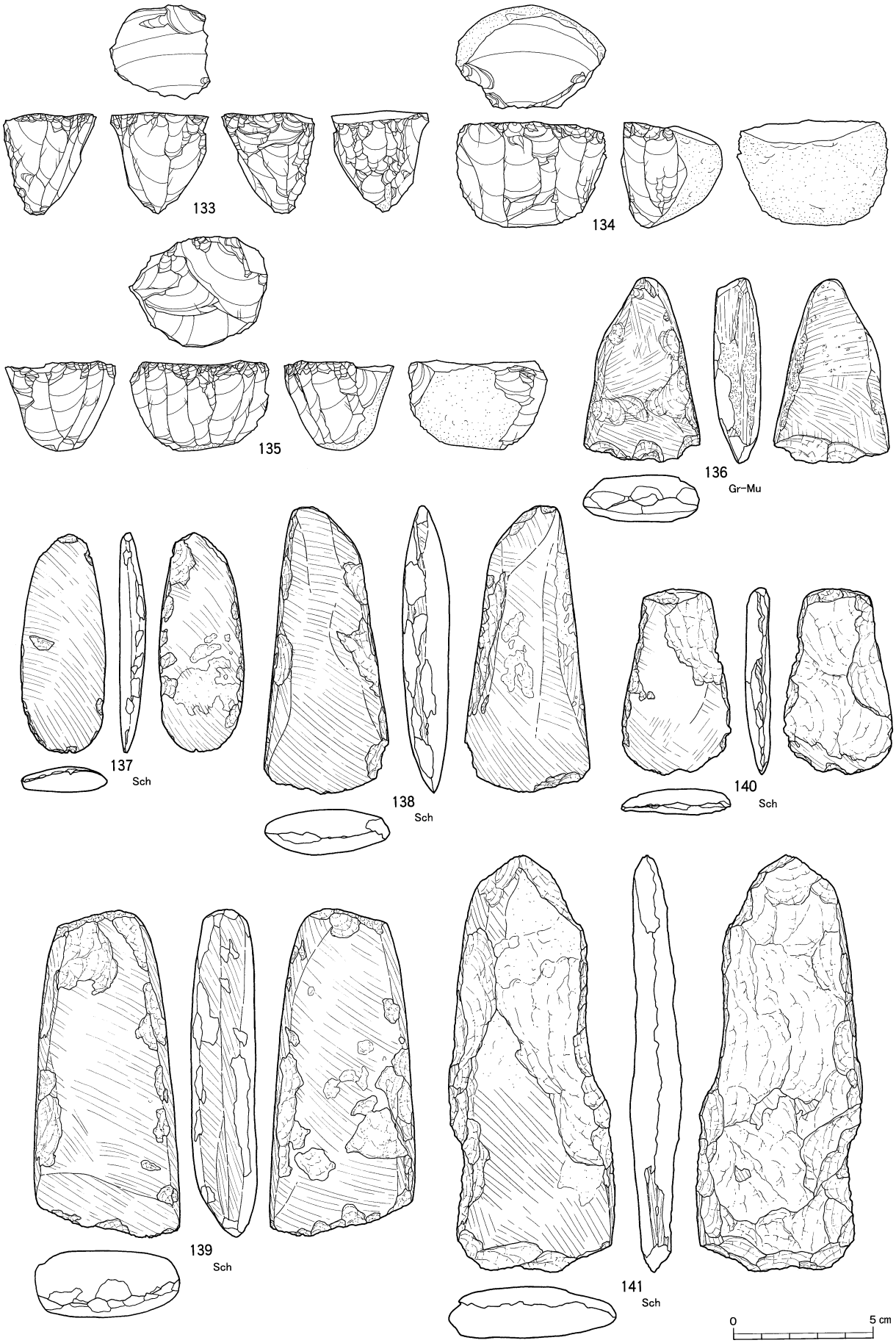
121～124はⅢa 類、121・122は打面縁辺が弧状で、123・124はやや内湾している。後者の剥離面が少ないこと、剥離方向が限定されることから剥片剥離の進行に伴い、後者から前者に形態変化したものと考えられる。

125・126はⅢb 類。125は左側縁から正面・裏面での剥離の後、右側縁から正面・裏面で剥離が行われる。126は上面と正・左側面で打面と作業面を入れ替える剥離の後、正面と右側面で剥離が行われる。

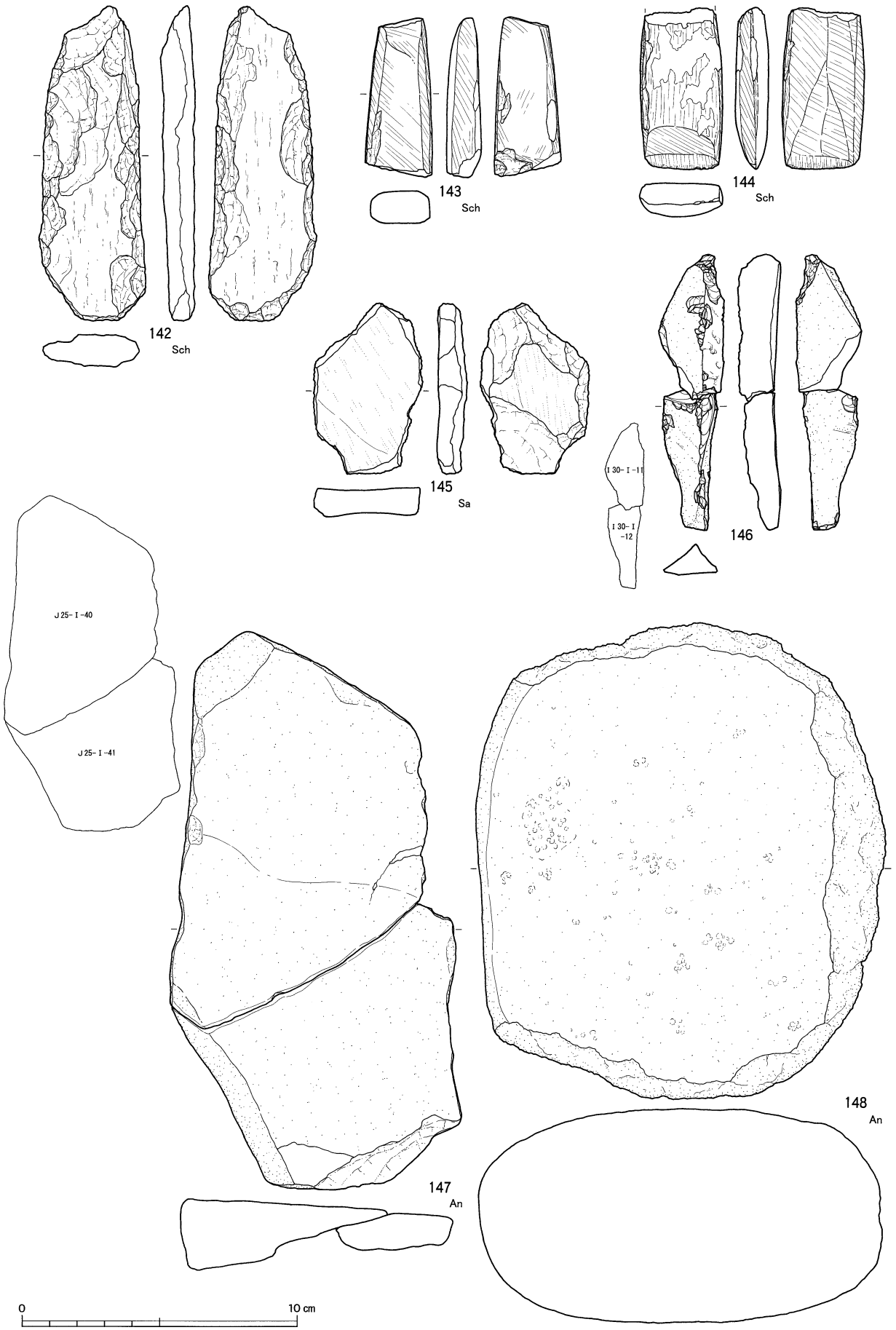
127～130はⅣa 類。127・128は作業面の断面形が弧状ではなく角張り、打面縁辺から少し奥を加撃し、比較的厚手の剥片が剥離されている。両者とも簡単な頭部調整がみられる。129は作業面形状が相



図Ⅳ－33　発掘区出土石器(8)　石核



図Ⅳ－34　発掘区出土石器⑼　石刃核・石斧



図Ⅳ－35　発掘区出土石器⑽　石斧・砥石・原石・台石

対的に平坦で、薄手で幅広の剝片が剝離されている。130は横長で分割面を打面としている。その形状からⅢa 類に近い。

131はⅣc 類。両極打撃によるものと見られる分割面を打面に設定した剝片素材で正面・右側面に剝離痕がある。

132はⅤ類で両極剝離による剝離痕があるが、上手く分割できていない。第一段階である分割作業を示した資料である。

原石は10cm 以下の小型のものから15cm 程度の中型のものが利用されているが、Ⅰ類の素材原石サイズは多様で、Ⅱ類は中型の、Ⅲa・b 類は小型の、Ⅳa・c 類は10cm 程度の原石が利用されている。

石刃核（図Ⅳ－34－133～135、図版31）

３点（３個体）を図示している。石刃核は石核Ⅳb 類にあたる。133～135は転礫素材である。133は作業面が全周を巡り、134･135は裏面に原礫面を残し、一方向に石刃剝離が進行している。135には顕著な頭部調整が認められ、作業面の断面形は弧状で、稜も平行し、非常に整った形態である。全て４cm 程度の石刃が剝離され、10cm 以下の小型の原石が利用されている。

石斧（図Ⅳ－34－136～図Ⅳ－35－144、図版31）

９点（９個体）を図示している。136は緑色泥岩製、137～144は片岩製で大きさは多様である。136は擦り切り技法によるもので整形剝離・敲打の後、研磨されている。刃部の両面に剝離痕が見られるがそれらは交互剝離であるため、刃こぼれではなく剝離されたものと考えられる。137～139･143･144はほぼ全面に研磨が認められる。137は非常に薄い形状で、139は片刃である。143・144は折損品である。143は側面も面取りされ、144は側縁が平行である。140・141は部分的に研磨の認められるものである。140は正面と刃部に、141は正面に研磨痕がある。142は素材剝片の両側縁に整形剝離が見られるのみで刃部作成の長軸方向の整形剝離や研磨は行われていない。

砥石（図Ⅳ－35－145、図版31）

１点（１個体）を図示している。145は、厚さ１cm 程度で薄手であるが、正面は斜め方向に、裏面は長軸方向に擦痕と窪みが認められ、両面とも使用されている。

原石（図Ⅳ－35－146、図版31）

２点（１個体）を図示している。146は平滑な原礫面で覆われた棒状原石である。直下の河原での入手は不可能で原石山の露頭で採取され、搬入されたと考えられる。

台石（図Ⅳ－35－147・148、図版31）

３点（２個体）を図示している。147は安山岩製の大型のもので正面は平滑である。148は多孔質の安山岩製で縁辺は打ち欠かれている。両面とも緩やかに湾曲している。　（鈴木宏行）

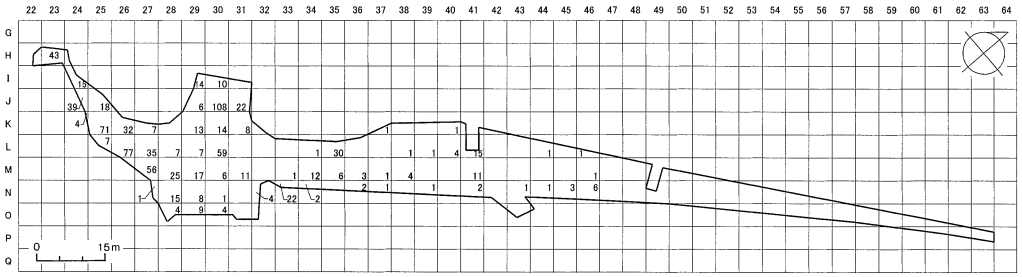
（３）　分布

図Ⅳ－36～40に発掘区出土遺物の器種別分布状況を示した。前述の通り、耕作等により包含層が攪乱され、厳密な原位置を保っていない。しかしながら、出土遺物のほとんどがⅠ層発掘区出土遺物であり、遺跡全体の大まかな分布傾向を示していると考えられるためにここで概観することとする。

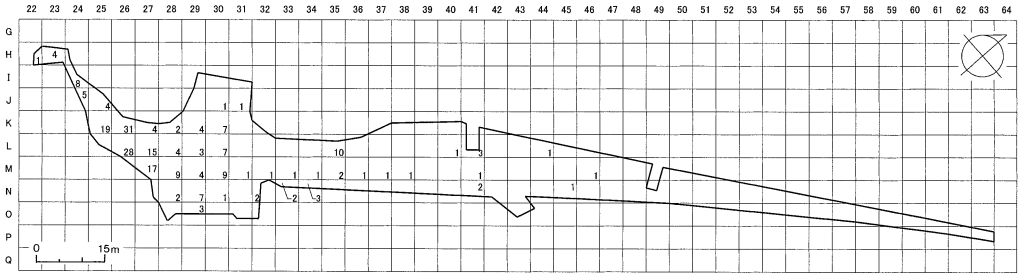
石器の全体的な分布の傾向は剝片の出土状況（図Ⅳ－38）が示している。剝片が3,000点以上出土しているグリッドで集中域を分けると①H23区、②K25～27・L26～28・M27～29・N28・29区、③L35区、④L41区、⑤M46・N46・47区に分けられる。特に佐藤川に面した②地区は20,000点前後のグリッドが４カ所あり、突出した出土量である。一方、土器は剝片の分布傾向と概ね一致しているが、最多のJ30区やJ24・L30区など剝片の集中域外でも多出するグリッドがある。石鏃はⅠ・Ⅲ類が②

地区の北西部に多く、Ⅱ類はⅠ24区と②地区中央、Ⅳ類は②地区中央、Ⅴ類は②地区に散漫に、Ⅵ類は②地区中央から北西・③地区・M30に多く分布する。石槍は②地区段丘縁辺部・③地区・K30区に偏りがある。ナイフ・つまみ付きナイフは②地区に散漫に、石槍またはナイフは①～③地区・J30区に多く分布する。両面調整石器は②～⑤地区・J24・L30区周辺に、スクレイパーは①～③地区・J30区周辺に、掻器は①～③地区・K30・N33・34区に偏りが見られる。錐形石器は②⑤地区に、楔形石器は②地区に、二次加工ある剥片は①～③地区・Ⅰ24区周辺・L30区周辺に偏りが見られる。石刃核（石核Ⅳb類）は少数ながらも集中域以外から出土し、石核Ⅰ類は②地区北西部・L30付近に、Ⅱ・Ⅴ類は散漫に、Ⅲa類は集中区以外に散漫に、Ⅲb類は②地区周辺に、Ⅳa類は②地区・③地区に偏りがある。原石は②地区段丘縁辺部に、石斧はJ24・②地区・J30周辺にまとまっている。但し、石斧の素材を含め４点が出土したFc－３のN47区周辺にも集中が見られる。敲石は⑤地区に、台石は②③⑤地区に、砥石・磨石は②地区周辺に分布する。（鈴木宏行）

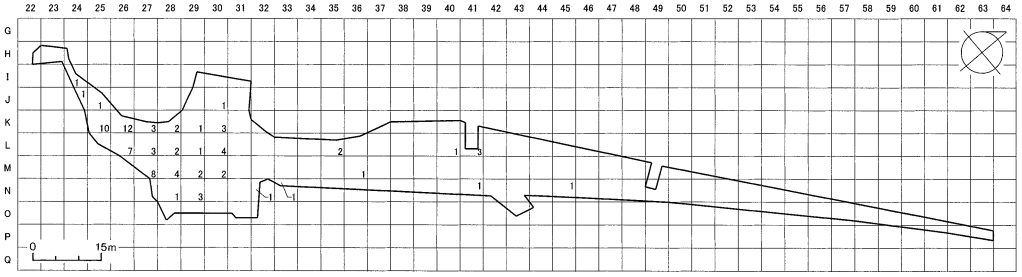
土器



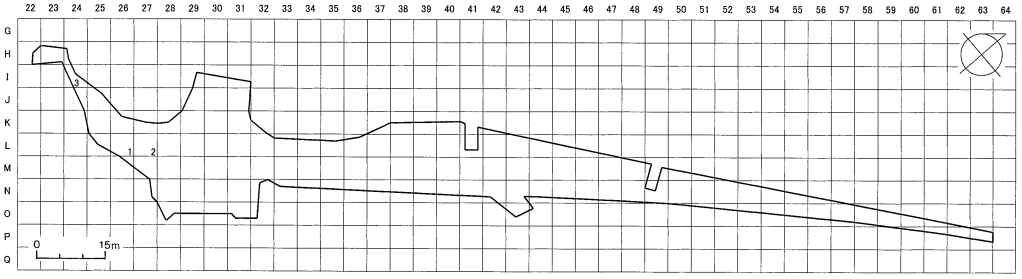
石鏃全体



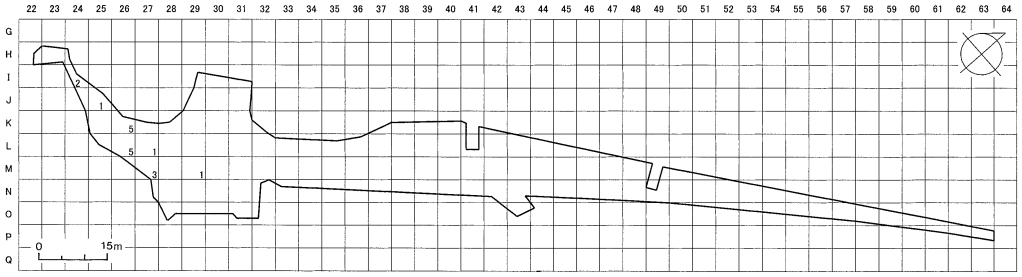
石鏃Ⅰ類



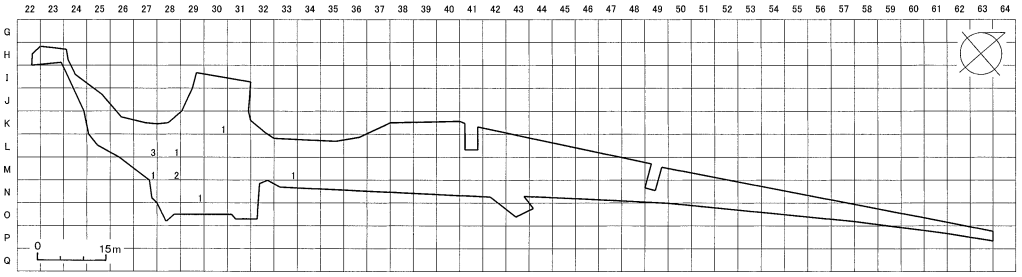
石鏃Ⅱ類



石鏃Ⅲ類

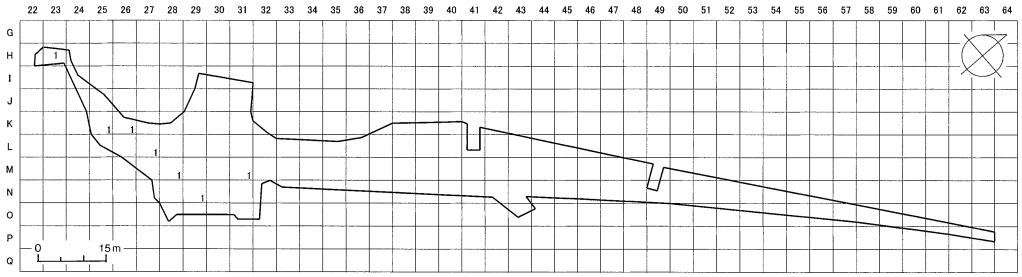


石鏃Ⅳ類

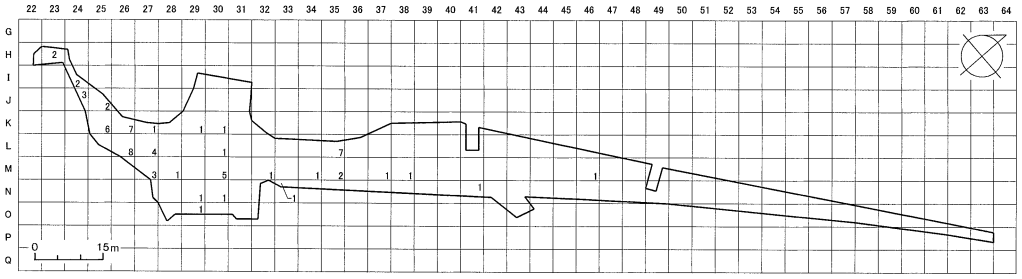


図Ⅳ－36　発掘区出土遺物の器種別分布図(1)

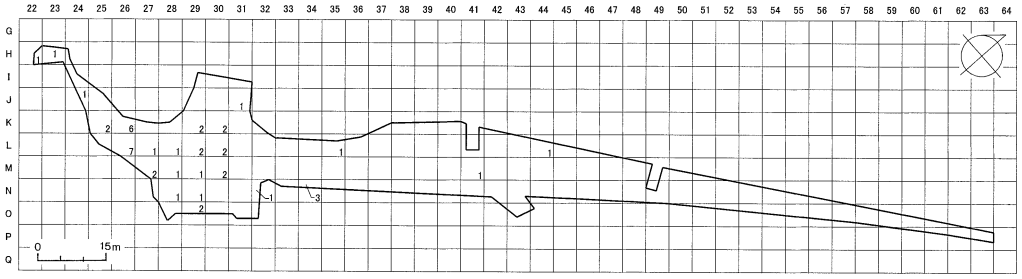
石鏃Ⅴ類



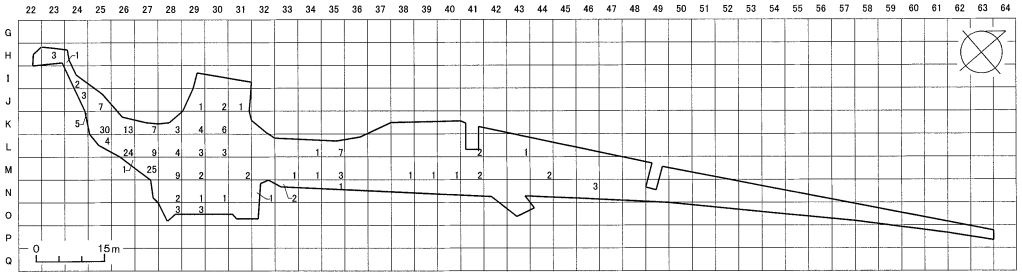
石鏃Ⅵ類



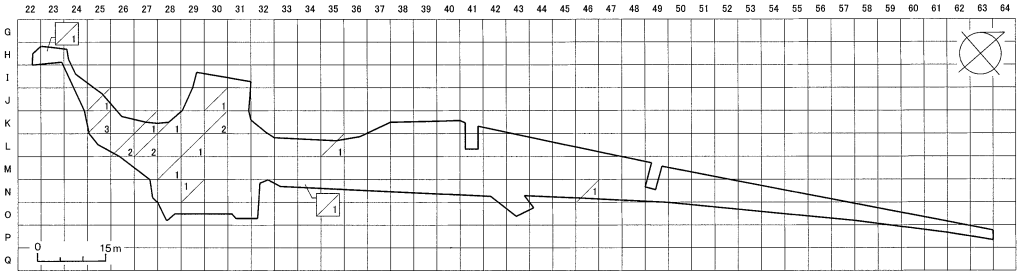
石鏃Ⅶ類



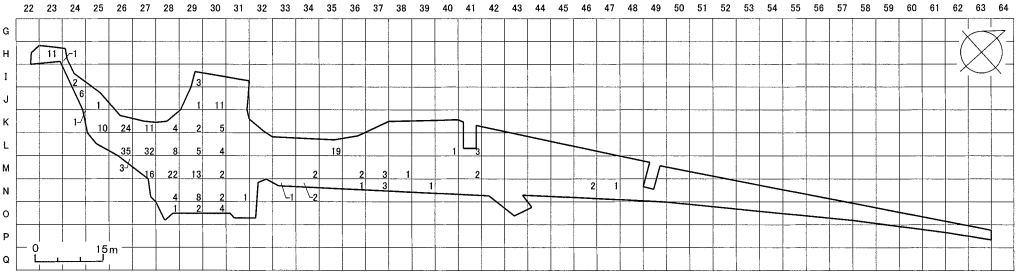
石槍



ナイフ／
つまみ付きナイフ

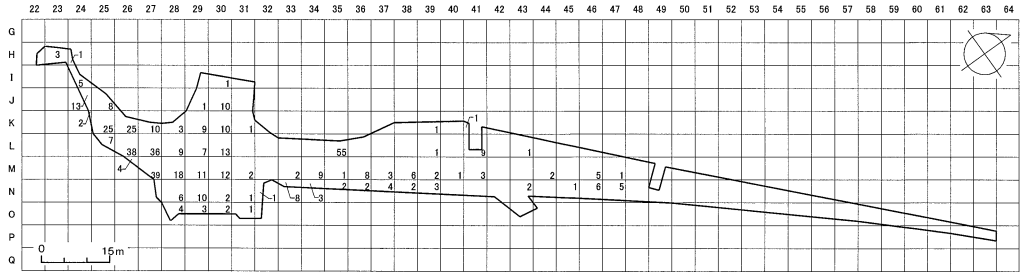


石槍またはナイフ

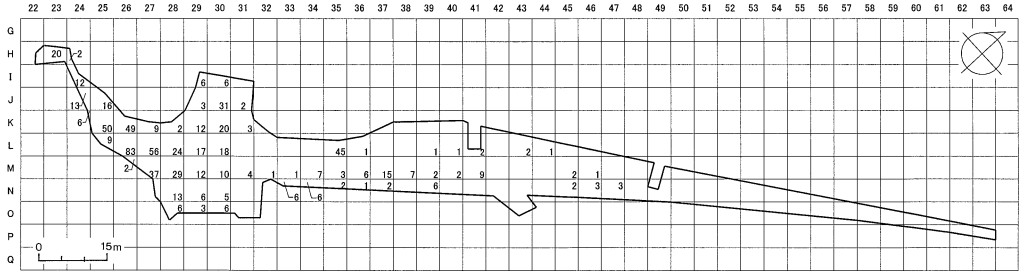


図Ⅳ－37　発掘区出土遺物の器種別分布図(2)

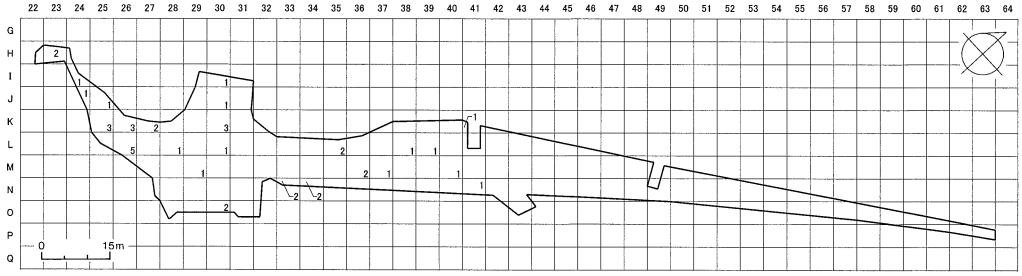
両面調整石器



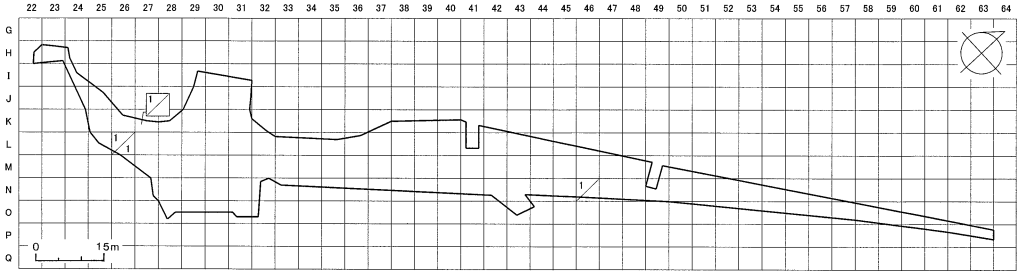
スクレイパー



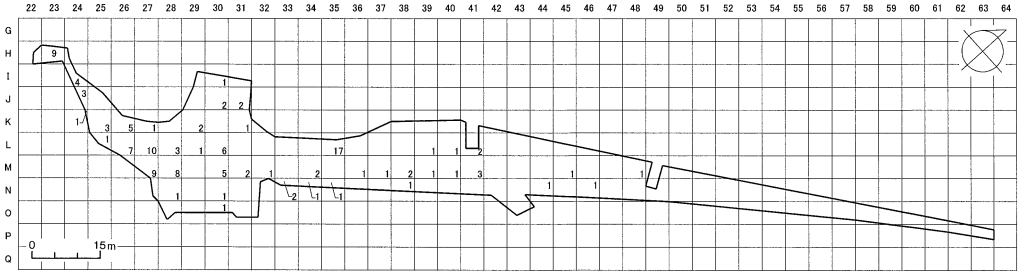
掻器



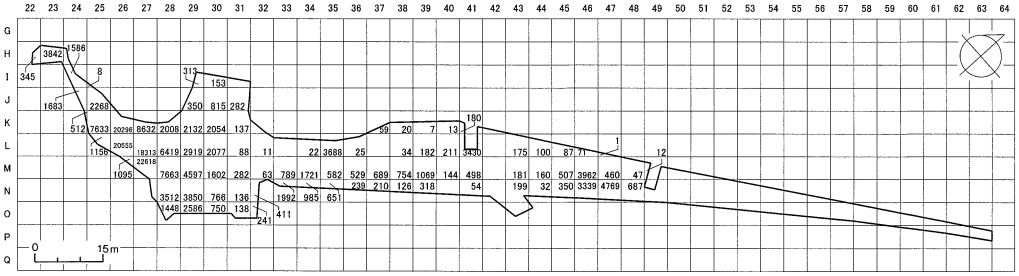
錐形石器／楔形石器



二次加工ある剥片

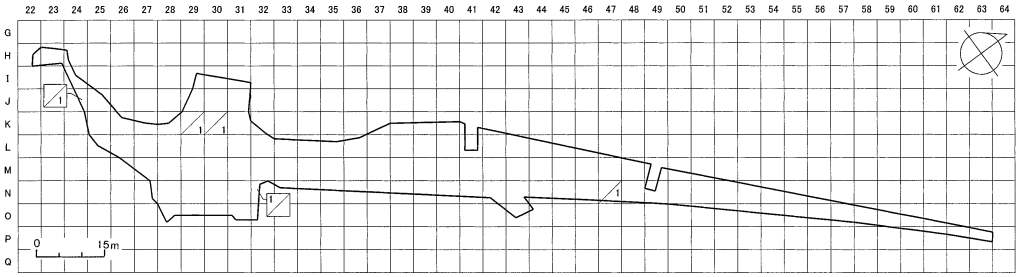


剥片

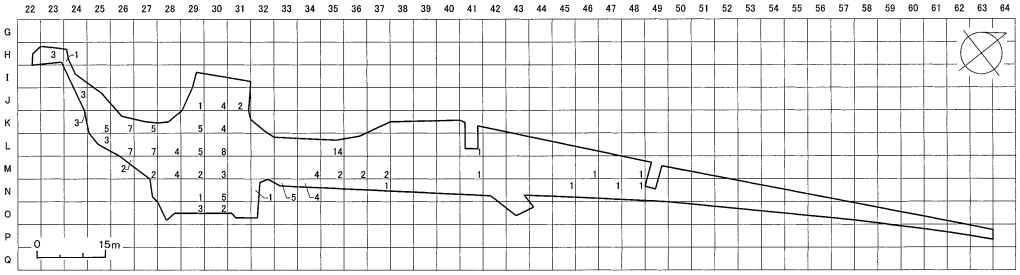


図Ⅳ－38　発掘区出土遺物の器種別分布図(3)

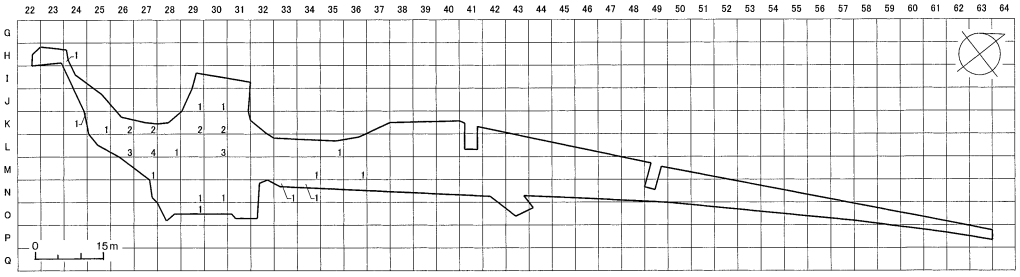
削片／
石刃核（石核Ⅳb類）



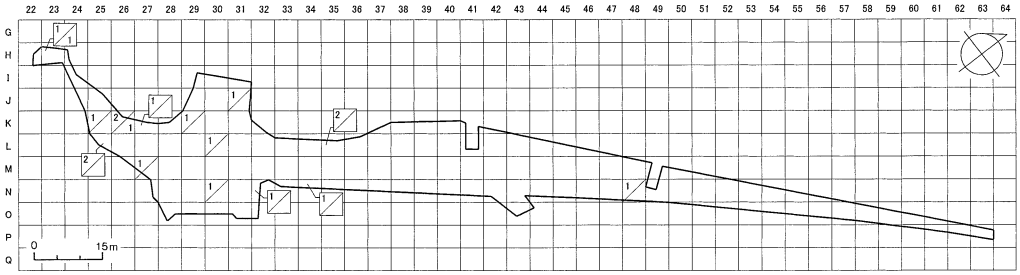
石核全体



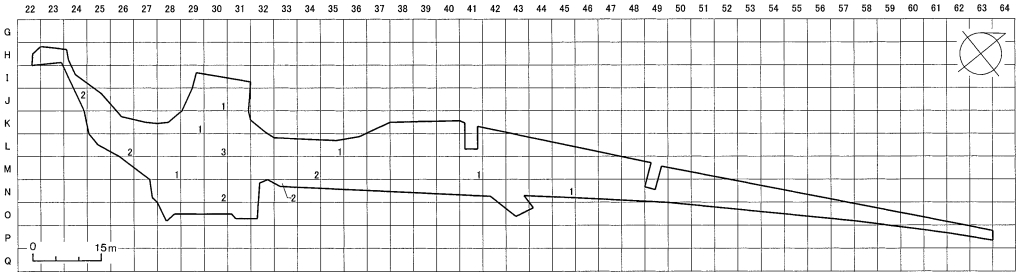
石核Ⅰ類



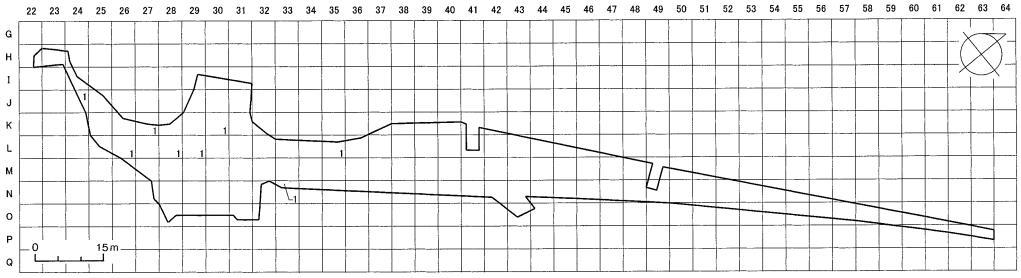
石核Ⅱ類／Ⅴ類



石核Ⅲa類

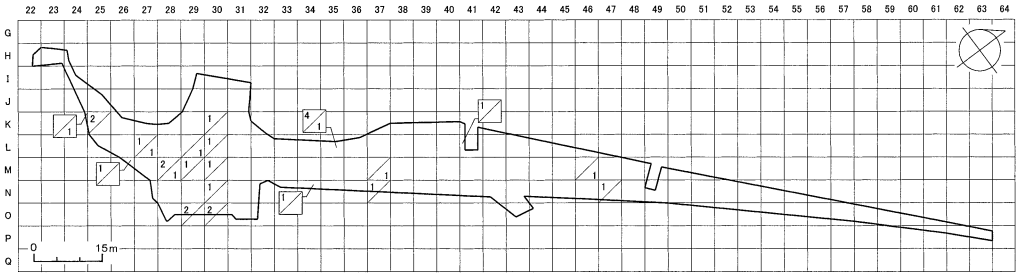


石核Ⅲb類

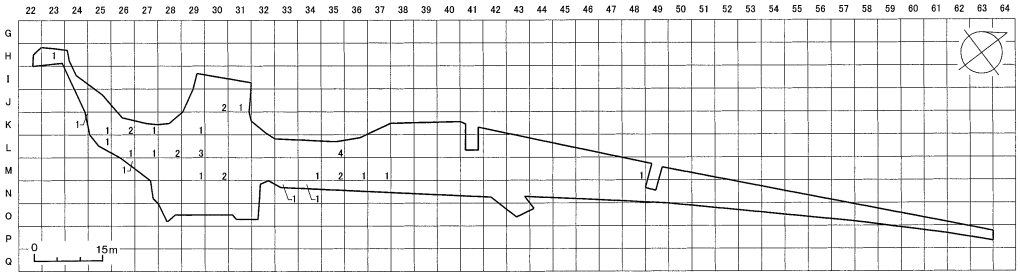


図Ⅳ－39　発掘区出土遺物の器種別分布図(4)

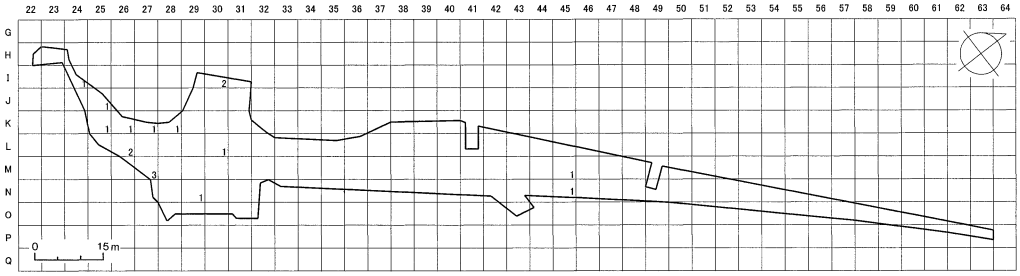
石核Ⅳa／Ⅳc類



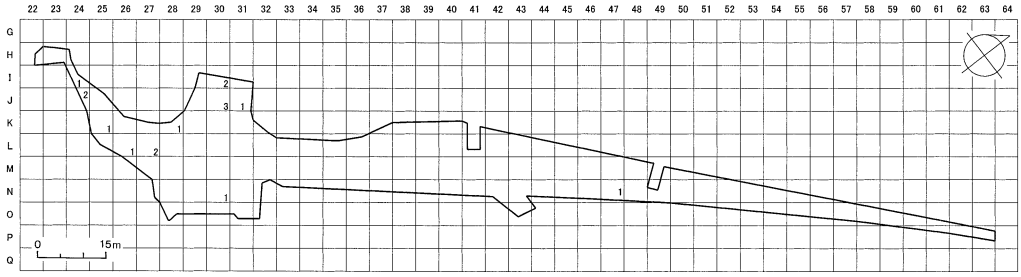
石核Ⅵ類



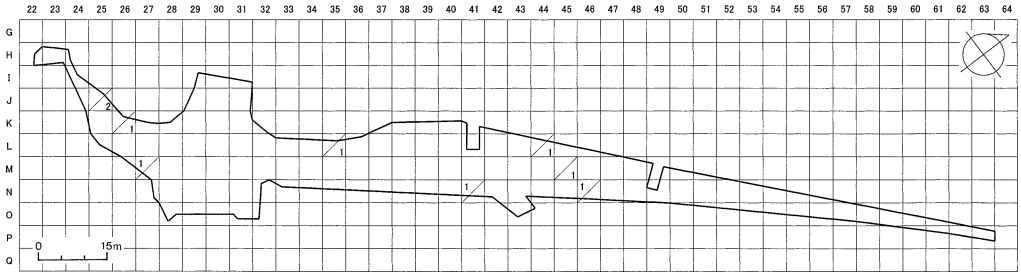
原石



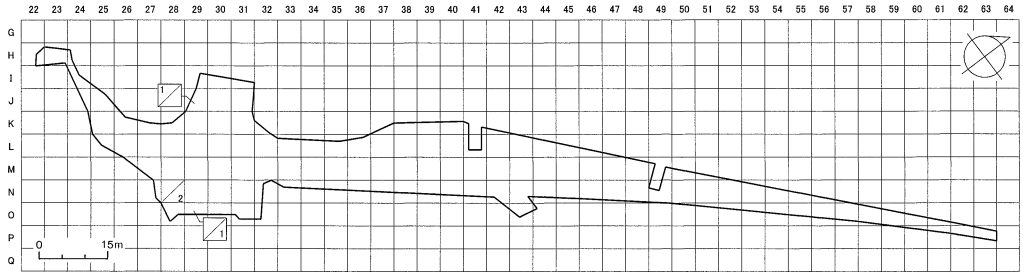
石斧



敲石／台石



磨石／砥石



図Ⅳ－40　発掘区出土遺物の器種別分布図(5)

表Ⅳ－２　新野上２遺跡出土遺物 遺構・層位・石質別一覧

種類	遺構・層位	石質	土器		石鏃		石槍		ナイフ		つまみ付きナイフ		石槍またはナイフ		両面調整石器		スクレイパー		掻器		錐形石器		楔形石器		二次加工ある剥片	
			点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)
Fc	Fc－1	黒曜石1																								
		黒曜石2																								
		黒曜石3																								
		黒曜石4																								
		黒曜石5																								
		小計																								
	Fc－2	黒曜石1																								
		黒曜石2																								
		黒曜石3																								
		小計																								
	Fc－3	黒曜石1																								
		黒曜石2																								
		黒曜石3																								
		黒曜石4																								
		片岩																								
		小計																								
	Fc－4	黒曜石1					1	0.5									1	41.8								
		黒曜石2																								
		黒曜石3																								
		黒曜石4																								
		黒曜石5																								
		小計					1	0.5									1	41.8								
	Fc 計						1	0.5									1	41.8								
Pit	P－1	黒曜石1																								
		黒曜石2																								
		黒曜石3																								
		流紋岩																								
		小計	1	18.1																						
	P－2	黒曜石1															1	75.2								
	Pit－02 計																1	75.2								
	P－3	黒曜石1			47	26.1					2	27.7					2	37.8							1	11.3
		黒曜石2			2	0.9											5	109.0								
		黒曜石3			1	0.6																				
		黒曜石4			1	0.6																				
		黒曜石5			1	0.4			1	33.4																
		めのう													1	14.6										
		小計			52	28.6			1	33.4	2	27.7			1	14.6	7	146.8							1	11.3
	P－4	黒曜石1			1	0.5											1	41.1								
		黒曜石2													1	2.3										
		黒曜石3															1	3.7								
		黒曜石4																								
		黒曜石5																								
		安山岩																								
		小計	57	1092.6	1	0.5									1	2.3	2	44.8								
	P－5	黒曜石1			3	4.8	2	11.8					2	5.8	1	5.0	3	24.5	2	38.1					3	41.6
		黒曜石2																								
		黒曜石3															1	1.5								
		黒曜石4																								
		黒曜石5																							1	22.8
		頁岩																								
		めのう																								
		片岩																								
		小計	11	66.8	3	4.8	2	11.8					2	5.8	1	5.0	4	26.0	2	38.1					4	64.4
	P－6	黒曜石1																								
		安山岩																								
		小計																								
	P－8	黒曜石1																								
		黒曜石2																								
		小計																								
	P－9	黒曜石1			1	0.8																				
		黒曜石2																								
		黒曜石3																								
		黒曜石4																								
		小計			1	0.8																				
	P－10	黒曜石1															1	34.3								
		黒曜石3																								
		黒曜石5					1	7.8																		
		凝灰岩																								
		小計	6	215.9			1	7.8									1	34.3								
	P－11	黒曜石1											1	6.1			1	23.5								
		黒曜石2																								
		黒曜石3																								
		黒曜石5																								
		安山岩																								
		小計	3	15.2									1	6.1			1	23.5								
	P－12	黒曜石1																								
		黒曜石3																								
		黒曜石5																								
		小計																								
	P－13	黒曜石1																								
		黒曜石5																								
		小計																								
	P－14	黒曜石1																								
		黒曜石3																								
		安山岩																								
		砂岩																								
		小計																								
	Pit 計		78	1408.6	57	34.7	3	19.6	1	33.4	2	27.7	3	11.9	3	21.9	16	350.6	2	38.1					5	75.7
発掘区	Ⅰ	黒曜石1			177	187.6	164	1003.3			9	65.9	210	1588.9	341	4497.3	524	5151.2	31	496.2	1	1.1	1	13.4	77	958.6
		黒曜石2			8	4.6	7	120.6			1	7.0	14	146.6	38	1050.3	40	776.2	3	68.7					5	137.3
		黒曜石3			31	24.1	20	132.9			4	20.2	44	285.3	59	930.2	86	927.2	4	115.0					13	100.0
		黒曜石4			8	13.1	5	50.8			2	9.6	8	63.2	11	216.6	17	179.2			1	1.0				
		黒曜石5			6	11.5	8	93.6					13	71.0	17	186.6	25	404.2	1	18.3						
		安山岩													1	166.2	4	31.0							4	237.8
		頁岩							1	24.8			3	17.3	3	77.3	3	24.0							4	51.6
		珪岩			1	0.3	1	19.1			2	7.5	1	13.4	2	25.1	18	138.0	1	6.7					11	112.2
		めのう															4	28.8							5	19.6
		砂岩																								
		緑色泥岩																								
		碧玉																								
		片岩																							1	3.5
	Ⅰ 計		855	9658.8	231	241.2	205	1419.7	1	24.8	18	110.2	293	2205.7	472	7149.6	721	7679.8	40	704.9	2	2.1	1	13.4	120	1620.6
	Ⅱ	黒曜石1			6	9.2	7	48.0			1	18.5	7	43.1	26	323.3	20	434.0	2	27.8	1	3.4			9	125.8
		黒曜石2					3	30.9							7	247.5	4	69.1								
		黒曜石3			1	0.5							2	20.8	3	45.3	4	65.3							1	18.4
		黒曜石4													3	53.7	2	32.0	1	9.7					1	2.0
		黒曜石5					1	7.3																		
		安山岩																							2	17.6
		頁岩																								
		珪岩																							1	4.4
		めのう													1	18.1										
		片岩																								
	Ⅱ 計		73	723.7	7	9.7	11	86.2			1	18.5	9	63.9	40	887.9	30	600.4	3	37.5	1	3.4			14	168.2
排土・その他		黒曜石1			3	1.6	4	13.5					4	9.7	20	333.2	27	344.0	1	44.4			1	14.0	11	100.4
		黒曜石2			2	4.5	1	2.3					1	6.1	2	42.3	4	51.9							3	80.1
		黒曜石3					1	3.1							3	41.2	4	37.8								
		黒曜石4															1	5.1								
		黒曜石5			1	0.3							1	2.5	1	2.6	1	5.5								
		頁岩																								
		珪岩																								
	排土・その他 計		27	288.4	6	6.4	6	18.9					6	18.3	26	419.3	37	444.3	1	44.4			1	14.0	14	180.5
合計			1033	12079.5	301	292.0	226	1544.9	2	58.2	21	156.4	311	2299.8	541	8478.7	805	9116.9	46	824.9	3	5.5	2	27.4	153	2045.0

種類	遺構・層位	石質	削片		剝片		石刃核		石核		原石		石斧		敲石		台石		磨石		砥石		礫		合計	
			点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)
Fc	Fc－1	黒曜石 1			1395	614.4																			1395	614.4
		黒曜石 2			32	11.0																			32	11.0
		黒曜石 3			170	46.2																			170	46.2
		黒曜石 4			50	20.7																			50	20.7
		黒曜石 5			10	34.4																			10	34.4
		小計			1657	726.7																			1657	726.7
	Fc－2	黒曜石 1			746	19.0																			746	19.0
		黒曜石 2			34	4.1																			34	4.1
		黒曜石 3			50	2.2																			50	2.2
		小計			830	25.3																			830	25.3
	Fc－3	黒曜石 1			515	40.4			1	110.8															516	151.2
		黒曜石 2			43	5.7																			43	5.7
		黒曜石 3			6	1.9																			6	1.9
		黒曜石 4			1	0.8																			1	0.8
		片岩			1	78.9							3	172.9											4	251.8
		小計			566	127.7			1	110.8			3	172.9											570	411.4
	Fc－4	黒曜石 1			9529	1185.0																			9531	1227.3
		黒曜石 2			485	177.5																			485	177.5
		黒曜石 3			2575	371.3																			2575	371.3
		黒曜石 4			177	115.0																			177	115.0
		黒曜石 5			58	34.6																			58	34.6
		小計			12822	1883.4																			12824	1925.7
	Fc 計				15875	2763.1			1	110.8			3	172.9											15881	3089.1
Pit	P－1	黒曜石 1			27	16.1																			27	16.1
		黒曜石 2			1	0.9																			1	0.9
		黒曜石 3			13	4.2																			13	4.2
		流紋岩																					1	1648.6	1	1648.6
		小計			41	21.2																	1	1648.6	43	1687.9
	P－2	黒曜石 1																							1	75.2
	Pit－02 計																								1	75.2
	P－3	黒曜石 1			9	2.6																			61	105.5
		黒曜石 2																							7	109.9
		黒曜石 3			4	0.3																			5	0.9
		黒曜石 4																							1	0.6
		黒曜石 5																							2	33.8
		めのう																							1	14.6
		小計			13	2.9																			77	265.3
	P－4	黒曜石 1			615	345.1			1	90.3															618	477.0
		黒曜石 2			50	33.3			1	52.4															52	88.0
		黒曜石 3			45	14.1																			46	17.8
		黒曜石 4			7	2.1																			7	2.1
		黒曜石 5			38	36.5																			38	36.5
		安山岩			1	40.8																			1	40.8
		小計			756	471.9			2	142.7															819	1754.8
	P－5	黒曜石 1			1133	616.0																			1149	747.6
		黒曜石 2			41	75.1																			41	75.1
		黒曜石 3			195	108.8																			196	110.3
		黒曜石 4			40	45.3																			40	45.3
		黒曜石 5			37	43.3																			38	66.1
		頁岩			1	61.9																			1	61.9
		めのう			4	9.4			1	23.9															5	33.3
		片岩			1	0.2																			1	0.2
		小計			1452	960.0			1	23.9															1482	1206.6
	P－6	黒曜石 1			1	0.1																			1	0.1
		安山岩																					1	9065.1	1	9065.1
		小計			1	0.1																	1	9065.1	2	9065.2
	P－8	黒曜石 1			2	2.1																			2	2.1
		黒曜石 2			2	0.3																			2	0.3
		小計			4	2.4																			4	2.4
	P－9	黒曜石 1			150	72.1																			151	72.9
		黒曜石 2			10	9.7																			10	9.7
		黒曜石 3			17	7.4																			17	7.4
		黒曜石 4			4	0.9																			4	0.9
		小計			181	90.1																			182	90.9
	P－10	黒曜石 1			38	10.1																			39	44.4
		黒曜石 3			11	43.3																			11	43.3
		黒曜石 5																							1	7.8
		凝灰岩																					1	101.5	1	101.5
		小計			49	53.4																	1	101.5	58	412.9
	P－11	黒曜石 1			118	39.5																			120	69.1
		黒曜石 2			14	39.5																			14	39.5
		黒曜石 3			13	7.2																			13	7.2
		黒曜石 5			3	1.1																			3	1.1
		安山岩																					2	1277.3	2	1277.3
		小計			148	87.3																	2	1277.3	155	1409.4
	P－12	黒曜石 1			19	24.8																			19	24.8
		黒曜石 3			2	3.6																			2	3.6
		黒曜石 5			1	0.7																			1	0.7
		小計			22	29.1																			22	29.1
	P－13	黒曜石 1			5	8.0																			5	8.0
		黒曜石 5			1	44.5																			1	44.5
		小計			6	52.5																			6	52.5
	P－14	黒曜石 1			5	1.2																			5	1.2
		黒曜石 3			1	3.5																			1	3.5
		安山岩																					1	851.4	1	851.4
		砂岩													1	806.9									1	806.9
		小計			6	4.7									1	806.9							1	851.4	8	1663.0
	Pit 計				2679	1775.6			3	166.6					1	806.9							6	12943.9	2859	17715.2
発掘区	Ⅰ	黒曜石 1	1	1.7	143019	144670.7	2	387.0	97	7698.5	14	134.8													143958	166888.2
		黒曜石 2			5953	20661.0			11	1449.1															5980	24421.4
		黒曜石 3			19829	28637.4			21	1600.8	1	11.1													20112	32250.6
		黒曜石 4			3008	4732.6			2	91.5															3062	5357.4
		黒曜石 5			1581	4767.6	1	46.0	7	588.4															1629	6187.2
		安山岩			30	675.8			1	332.4			1	61.8			4	6455.9	1	144.0	1	220.5			67	8945.4
		頁岩			47	177.8			1	22.5															62	385.3
		珪岩			36	164.0																			73	506.3
		めのう			37	127.8			2	74.8															48	251.0
		砂岩													2	53.6					2	44.9			4	98.5
		緑色泥岩											1	66.9											1	66.9
		碧玉			4	41.4																			4	41.4
		片岩			4	53.0							13	908.3											18	964.8
	Ⅰ 計		1	1.7	172858	204709.1	3	433.0	142	11877.8	15	145.9	15	1037.0	2	53.6	4	6455.9	1	144.0	3	265.4			177003	225954.2
	Ⅱ	黒曜石 1			15180	14856.4			3	177.2					1	102.4									15263	16169.1
		黒曜石 2			1025	1630.5			1	221.2															1040	2219.2
		黒曜石 3			2024	2753.4	1	78.7	2	157.9															2038	3140.3
		黒曜石 4			230	502.1																			237	589.5
		黒曜石 5			93	587.1																			94	594.4
		安山岩			6	489.5											2	9678.0							10	10185.1
		頁岩			7	37.7					1	78.3													8	116.0
		珪岩			1	4.2																			2	8.6
		めのう			34	11.1					1	27.5													36	56.7
		片岩			2	17.8							1	85.6											3	103.4
	Ⅱ 計				18802	20909.8	1	78.7	6	556.3	2	105.8	1	85.6	1	102.4	2	9678.0							18804	34116.0
排土・その他		黒曜石 1			4817	6527.9	1	65.1	5	489.6	1	20.1													4825	7763.5
		黒曜石 2			305	928.3			1	61.8															319	1177.3
		黒曜石 3			541	873.1																			549	955.2
		黒曜石 4			70	209.4																			71	214.5
		黒曜石 5			304	541.5																			308	552.4
		頁岩			1	2.6																			1	2.6
		珪岩			1	0.6																			1	0.6
	排土・その他 計				6039	8883.4	1	65.1	6	551.4	1	20.1													6177	10854.5
合計			1	1.7	217653	259041.0	5	576.8	158	13262.9	18	271.8	19	1295.5	4	962.9	6	16133.9	1	144.0	3	265.4	6	12943.9	220718	324529.0

表Ⅳ－３　新野上２遺跡　掲載土器一覧

挿図	図版	番号	遺構 発掘区	層位	分類	部位	調整・保存状態		文様・特徴等			色調・胎土・付着物等			備考
							器面(表)	内面(裏)	地文	口唇部	器面(表)	器面(表)	内面(裏)	胎土	
Ⅳ－6	18	1	P－1	1	Ⅵ	口縁部	摩耗	やや粗面	LR斜行	刺突列		赤茶褐	暗赤茶褐	砂礫	
Ⅳ－10	19	1	P－4	1	Ⅲb	頸部	摩耗	剝落	RL斜行		円形刺突文	茶褐	淡茶褐	砂粒、繊維	
Ⅳ－10	19	2	P－4	1	Ⅵ	口縁～胴部	剝落	丁寧な調整	R撚糸文	R撚糸文	突瘤文、刺突文	茶褐、炭化物	炭化物、黒褐	砂粒、黒変	M27・28－Ⅰと接合
Ⅳ－10	19	3	K25	Ⅰ	Ⅵ	胴部	剝落	丁寧な調整	R撚糸文			赤橙褐	暗褐	砂粒、黒変	
Ⅳ－10	19	4	P－4	1	Ⅵ	口縁～胴部	摩耗	粗面	LR縦走	縄の刺突		暗茶褐、炭化物	暗茶褐、炭化物	砂礫、黒変	
Ⅳ－11	18	1	P－5	1	Ⅲb	胴部	摩耗		LRL斜行			暗茶褐	暗茶褐	砂礫、橙褐	
Ⅳ－11	18	2	P－5	1	Ⅵ	胴部	摩耗		LR斜行			暗赤茶褐	暗茶褐	砂礫	
Ⅳ－11	18	3	P－5	1	Ⅵ	胴部	剝落、摩耗		LR斜行			黒褐	褐	砂礫、暗赤茶	
Ⅳ－11	18	4	P－5	1	Ⅵ	底部	剝落、摩耗	剝落、摩耗				黒茶褐、炭化物	黒茶褐	砂粒、黒変	揚底
Ⅳ－14	18	1	P－10	1	Ⅵ	口縁部	一部摩耗	やや粗面	LR縦走	縄で刻む	LR縄線文5条	暗褐	茶褐～黒褐	砂粒	J30－Ⅰと接合
Ⅳ－14	18	2	P－10	1	Ⅵ	胴部		ほぼ平滑	LR斜行			暗茶褐、炭化物	炭化物、黒	砂粒	
Ⅳ－15	18	1	P－11	1	Ⅵ	口縁部		LR斜行	LR縦走	LR斜行	LR縄線文2条斜位	暗褐	暗褐	砂粒、橙褐	
Ⅳ－15	18	2	P－11	1	Ⅵ	口縁部	摩耗		不明	縄文痕跡的		黒褐、炭化物	黒褐、炭化物	砂粒	
Ⅳ－15	18	3	P－11	1	Ⅵ	口縁部	剝落	ほぼ平滑	不明			黒褐	褐	砂粒	
Ⅳ－19	22	1	M41	Ⅱ	Ⅰb	口縁部	摩耗	摩耗			LR撚糸文	黒茶褐	暗茶褐	砂粒	波状口縁
Ⅳ－19	22	2	L41	Ⅱ	Ⅱb	胴部					矢羽根状刻線文	茶褐	茶褐	砂粒	2・3は同一個体
Ⅳ－19	22	3	L41	Ⅱ	Ⅱb	胴部		一部剝落			矢羽根状刻線文	茶褐	茶褐	砂粒	
Ⅳ－19	22	4	L28	Ⅰ	Ⅱb	口縁部	摩耗	摩耗			刺突文2列現存	暗茶褐	黒茶褐	砂粒、繊維	4・5は同一個体
Ⅳ－19	22	5	M28	Ⅰ	Ⅱb	口縁部	摩耗	摩耗			刺突文1列現存	暗茶褐	黒茶褐	砂粒、繊維	
Ⅳ－19	22	6	N46	Ⅱ	Ⅲb	口縁部	摩耗	摩耗			貼付帯、突引文	黒褐	暗褐	砂礫、繊維	口縁部肥厚帯
Ⅳ－19	22	7	M28	Ⅰ	Ⅲb	口縁付近	やや摩耗	やや粗面	LR斜行	欠失	竹管による刺突文	黒茶褐	暗茶褐	砂礫、繊維	口縁部肥厚帯
Ⅳ－19	22	8	J30	Ⅰ	Ⅳa	口縁部	やや摩耗		LR斜行	肥厚	半截竹管による沈線文	茶褐	黄茶褐	砂粒	
Ⅳ－19	22	9	L26	Ⅰ	Ⅲb	口縁付近	摩耗	剝落	RL斜行		円形刺突文2段現存	暗褐	暗褐	砂礫、繊維	
Ⅳ－19	22	10	N45	Ⅱ	Ⅲb	胴部	やや粗面	やや粗面	LR斜行			黒茶褐	黒茶褐	砂礫	
Ⅳ－19	22	11	O29	Ⅰ	Ⅲb	胴部	剝落、摩耗		LR斜行			褐	茶褐	砂礫、黒変	
Ⅳ－19	22	12	M29	Ⅰ	Ⅲb	胴部	やや摩耗	剝落	羽状縄文			赤橙褐	黒茶褐	砂礫	12・13は同一個体
Ⅳ－19	22	13	M29	Ⅰ	Ⅲb	胴部	やや摩耗	剝落	RL斜行			赤橙褐	黒茶褐	砂礫	
Ⅳ－19	22	14	L29	Ⅰ	Ⅲb	胴部	摩耗		羽状縄文			赤橙褐	赤橙褐	砂礫、黒変	14・15は同一個体
Ⅳ－19	22	15	L29	Ⅰ	Ⅲb	胴部	摩耗		LR斜行			赤橙褐	赤橙褐	砂礫、黒変	
Ⅳ－19	22	16	O30	B調撹乱	Ⅲb	胴部	摩耗		LR斜行			黒	赤茶褐	砂礫	
Ⅳ－19	22	17	L30	Ⅰ	Ⅲb	胴部	摩耗	剝落	LR斜行			黄赤橙褐	赤橙褐	砂粒	
Ⅳ－19	22	18	H23	Ⅰ	Ⅲb	胴部	摩耗		LR斜行			赤茶褐	赤茶褐	砂粒、黒変	
Ⅳ－19	22	19	K25	Ⅰ	Ⅲb	胴部	摩耗	粗面	LRL斜行			暗茶褐	暗茶褐	砂礫	
Ⅳ－19	22	20	J30	Ⅰ	Ⅲb	胴部	摩耗	粗面	LRL斜行			灰赤茶褐	暗褐	砂粒	
Ⅳ－19	22	21	K25	Ⅰ	Ⅲb	胴部	剝落、摩耗		LR斜行？			赤橙褐	茶褐	砂粒、繊維	
Ⅳ－19	22	22	N33	Ⅰ	Ⅲb	胴部	剝落、摩耗		LR斜行？			赤橙褐	褐	砂粒	
Ⅳ－20	22	23	J30	Ⅰ	Ⅵ	口縁部	一部剝落	摩耗	LR斜行		貼瘤文	赤茶褐	暗褐	砂礫	23～31は同一個体
Ⅳ－20	22	24	I29	Ⅰ	Ⅵ	口縁部		横位に調整	LR斜行			赤茶褐、炭化物	暗褐	砂礫	
Ⅳ－20	22	25	I29	Ⅰ	Ⅵ	口縁部		横位に調整	LR斜行			赤茶褐、炭化物	暗褐	砂礫	
Ⅳ－20	22	26	I29	Ⅰ	Ⅵ	胴部		横位に調整	LR斜行			暗茶褐、炭化物	茶褐	砂礫	
Ⅳ－20	22	27	I29	Ⅰ	Ⅵ	胴部	やや摩耗		LR斜、横走			黒褐、炭化物	赤茶褐	砂礫	
Ⅳ－20	22	28	I29	Ⅰ	Ⅵ	胴部	やや摩耗	摩耗	LR斜、横走			暗茶褐、炭化物	茶褐	砂礫	
Ⅳ－20	22	29	I29	Ⅰ	Ⅵ	胴部	やや摩耗	摩耗	LR横走			黒褐、炭化物	暗茶褐	砂礫	
Ⅳ－20	22	30	I29	Ⅰ	Ⅵ	胴部	やや摩耗	摩耗	LR横走			暗褐	暗褐	砂礫	
Ⅳ－20	22	31	I29	Ⅰ	Ⅵ	胴部	摩耗	粗面	LR横走			赤茶褐	暗褐	砂礫	
Ⅳ－20	22	32	L30	Ⅰ	Ⅵ	口縁付近	剝落、摩耗	摩耗			貼瘤？、貼付文痕跡	暗褐	暗褐	砂粒、黒変	
Ⅳ－20	22	33	M36	Ⅰ	Ⅵ	口縁付近	摩耗	摩耗			貼瘤	灰橙褐	黒褐	砂粒	
Ⅳ－20	23	34	L44	Ⅱ	Ⅵ	口縁部	摩耗	剝落、摩耗	不明	刺突列		赤褐	淡橙褐	砂粒	
Ⅳ－20	23	35	L26	Ⅰ	Ⅵ	口縁部	剝落、摩耗	摩耗	LR斜行？	LR縄刻み		暗茶褐	暗茶褐	砂礫	
Ⅳ－20	23	36	L25	Ⅰ	Ⅵ	口縁部	摩耗	摩耗	LR縦走？	LR縄刻み		暗褐	暗褐	砂粒	
Ⅳ－20	23	37	K24	Ⅰ	Ⅵ	口縁部	摩耗	やや粗面	不明	RL縄刻み		茶褐	茶褐	砂粒	
Ⅳ－20	23	38	I24	Ⅰ	Ⅵ	口縁部	やや摩耗	丁寧な調整		LR縄刻み	LR縄線文斜めに交差	黒灰	茶褐	砂粒	
Ⅳ－20	23	39	L41	Ⅱ	Ⅵ	口縁部	一部剝落			LR縄刻み	LR縄線文斜めに交差	黒褐	黒褐	砂礫	波頂下に単孔
Ⅳ－20	23	40	K31	Ⅰ	Ⅵ	口縁部	やや摩耗	やや摩耗		LR縄端刻み	LR縄線文斜めに交差	黒褐	黒褐	砂粒	突瘤文？２個
Ⅳ－20	23	41	排土		Ⅵ	口縁部	摩耗	摩耗		丸く細まる	太めのLR縄線文3条	赤茶褐	赤茶褐	砂粒	
Ⅳ－20	23	42	N33	Ⅰ	Ⅵ	口縁部	摩耗	摩耗		丸く細まる	太めのLR縄線文2条	黒灰	暗赤茶褐	砂粒	
Ⅳ－20	23	43	L26	Ⅰ	Ⅵ	口縁部	剝落、摩耗	丁寧な調整	RL？縦走	縄刻み？	LR縄線文密に重ねる	黒褐	黒褐	砂粒	小型鉢形？
Ⅳ－20	23	44	I24	Ⅰ	Ⅵ	口縁部	やや摩耗	やや粗面	RL？縦走	丸い	R縄線文	橙褐	淡橙褐	砂粒	小型、薄手
Ⅳ－20	23	45	L35	Ⅰ	Ⅵ	口縁部	摩耗	やや粗面	LR縦走	LR縄刻み	LR縄線文横位、斜位	黒褐	暗茶褐	砂礫	
Ⅳ－20	23	46	F・N	Ⅱ	Ⅵ	口縁部	剝落、摩耗	丁寧な調整	不明		LR縄線文横位2条	黒茶褐	黒茶褐	砂粒、黒変	
Ⅳ－21	23	47	J24	Ⅰ	Ⅵ	口縁部	摩耗	ほぼ平滑		LR縄刻み	LR縄線文横位2条	黒	黒	砂粒、黒変	
Ⅳ－21	23	48	N33	Ⅰ	Ⅵ	口縁部	摩耗	摩耗		LR？縄刻み	LR縄線文横位4条	黒茶褐	赤茶褐	砂粒	
Ⅳ－21	23	49	L26	Ⅰ	Ⅵ	口縁部	摩耗	摩耗		LR？縄刻み	LR縄線文横位3条	黒褐	暗茶褐	砂粒	49・50は同一個体
Ⅳ－21	23	50	L26	Ⅰ	Ⅵ	胴部	摩耗	摩耗	不明		LR縄線文横位2条	黒褐	暗茶褐	砂粒	
Ⅳ－21	23	51	M34	Ⅰ	Ⅵ	口縁部	摩耗	摩耗		LR？縄刻み	LR縄線文横位、斜位	黒褐	黒灰	砂粒	縄線文太め
Ⅳ－21	23	52	N34	Ⅰ	Ⅵ	口縁部	摩耗	摩耗		縄刻み？	LR縄線文横位5条	赤茶褐	赤茶褐	砂粒	縄線文太め
Ⅳ－21	23	53	L35	Ⅰ	Ⅵ	口縁部	摩耗	剝落		LR？縄刻み	LR縄線文横位4条	赤褐	赤褐	砂粒	縄線文太め
Ⅳ－21	23	54	J30	Ⅰ	Ⅵ	口縁付近	摩耗	やや粗面	LR痕跡的		LR縄線文、縦に刻線	淡茶褐	淡茶褐	砂粒	P－10－1と同一
Ⅳ－21	23	55	N33	Ⅰ	Ⅵ	胴部	やや摩耗	摩耗	0段多条LR		横位のLR縄線文	黒灰	暗褐	砂粒	
Ⅳ－21	23	56	I24	Ⅰ	Ⅵ	胴部	摩耗	やや粗面	LR？		横位のLR縄線文	褐	黒	砂粒、黒変	内面に指痕
Ⅳ－21	23	57	J25	Ⅰ	Ⅵ	頸～胴部	やや摩耗	粗面			横位のLR縄線文	灰橙褐	灰橙褐	砂粒	
Ⅳ－21	23	58	M34	撹乱	Ⅵ	頸～胴部	摩耗				横位のLR縄線文	赤茶褐	黒	砂粒、黒変	
Ⅳ－21	23	59	L30	Ⅰ	Ⅵ	頸～胴部		丁寧な調整	LR斜行		横位のR縄線文	黄茶褐	暗茶褐	砂粒	
Ⅳ－21	23	60	排土		Ⅵ	胴部	摩耗	摩耗	LR縦走		横位のR縄線文	暗茶褐	暗茶褐	砂礫、橙褐	
Ⅳ－21	23	61	M30	Ⅰ	Ⅵ	胴部	摩耗	摩耗	LR？		横位のR縄線文	暗褐	暗褐	砂粒	
Ⅳ－21	23	62	I30	Ⅰ	Ⅵ	頸～胴部	摩耗	摩耗			横位のR?縄線文	褐	褐	砂粒	
Ⅳ－21	23	63	L27	Ⅰ	Ⅵ	胴部	摩耗	摩耗	LR？		横位のR?縄線文	灰茶褐	褐	砂粒	
Ⅳ－21	23	64	L35	Ⅰ	Ⅵ	頸～胴部	やや摩耗				LR縄線文密に重ねる	暗茶褐	暗褐	砂粒	
Ⅳ－21	23	65	J24	Ⅰ	Ⅵ	頸～胴部		やや粗面	0段多条LR		LR縄線文横～斜位	赤橙褐	茶褐	砂礫	
Ⅳ－21	23	66	N43・44	Ⅱ	Ⅵ	口縁～底部	やや摩耗	丁寧な調整	LR縦走	密に刻線	LR縄線文、縄端刺突列	暗茶褐	赤茶褐	砂粒、黒変	鉢形、平底
Ⅳ－21	23	67	J31	撹乱	Ⅵ	口縁部		丁寧な調整	LRやや斜行	密に縄刻み	縄端刺突列	黒茶褐	黒茶褐	砂粒、黒変	小型薄手、堅緻
Ⅳ－21	23	68	J31	撹乱	Ⅵ	胴部	一部剝落	丁寧な調整	RL縦走		竹管による刺突文	赤茶褐	炭化物	砂粒	
Ⅳ－21	23	69	J30	Ⅰ	Ⅵ	胴部	やや摩耗	やや粗面	LR縦走		隆起線、縄線、縄端刺突	黒褐、炭化物	暗茶褐	砂礫	
Ⅳ－21	23	70	K・L30	Ⅰ	Ⅵ	口縁～胴部	剝落、摩耗	横位に調整	RL斜行		突瘤文、縄線、縄端刺突	暗茶褐、炭化物	暗茶褐、炭化物	砂粒	
Ⅳ－21	23	71	N28	Ⅰ	Ⅵ	口縁付近	摩耗	摩耗	不明		突瘤文、LR短縄文	灰茶褐	暗褐	砂粒	
Ⅳ－21	23	72	J30	Ⅰ	Ⅵ	口縁部	摩耗	摩耗	RL縦走	縄文？	突瘤・刺突文、縄端圧痕	暗茶褐	暗赤褐	砂粒	72・73は同一個体
Ⅳ－21	23	73	L26	Ⅰ	Ⅵ	口縁部	摩耗	摩耗	RL縦走	縄文？	突瘤・刺突文、縄端圧痕	暗褐	暗褐	砂粒	
Ⅳ－21	23	74	J30	Ⅰ	Ⅵ	胴部	一部剝落	摩耗			LR縄線文、縄端刺突列	暗褐	暗茶褐	砂粒、黒変	
Ⅳ－22	23	75	J30	Ⅰ	Ⅵ	胴部		丁寧な調整	RL縦走		R縄線文、縄端刺突	黒褐	暗褐	砂粒	薄手、堅緻
Ⅳ－22	23	76	N32	Ⅰ	Ⅵ	胴部		丁寧な調整	RL縦走		R縄線文、縄端刺突	茶褐	暗褐	砂粒	

挿　図	図版	番号	遺　構 発掘区	層　位	分類	部　位	調整・保存状態		文様・特徴等			色調・胎土・付着物等			備　考
							器面(表)	内面(裏)	地　文	口唇部	器面(表)	器面(表)	内面(裏)	胎　土	
Ⅳ－22	24	77	Ｊ31	撹乱	Ⅵ	胴　部	やや摩耗	丁寧な調整	RL 縦走		L縄線文、縄端刺突	暗褐、炭化物	灰黒褐	砂粒	
Ⅳ－22	24	78	N33	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	摩耗	剝落、摩耗	LR 斜行？		縄線文、縄端刺突	黒茶褐	茶褐	砂礫	
Ⅳ－22	24	79	M30	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	やや摩耗		RL 縦走		縄端刺突２列	褐	炭化物	砂粒	
Ⅳ－22	24	80	Ｊ30	Ⅰ	Ⅵ	胴　部			RL 縦走		縄端刺突２列	暗赤茶褐	炭化物	砂粒、黒変	81と同一個体？
Ⅳ－22	24	81	L30	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	摩耗		RL 縦走		縄端刺突２列	赤茶褐	赤茶褐	砂粒、黒変	
Ⅳ－22	24	82	L30	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	剝落、摩耗	摩耗	不明		縄端刺突１列	灰黒褐	灰黒褐	砂粒	
Ⅳ－22	24	83	Ｊ30	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	摩耗	摩耗	不明		縄端刺突１列	茶褐	茶褐	砂礫	
Ⅳ－22	24	84	K31	撹乱	Ⅵ	胴　部	剝落、摩耗	摩耗	RL 縦走？		縄端刺突１列	赤茶褐	黒褐	砂粒、黒変	
Ⅳ－22	24	85	M41	Ⅱ	Ⅵ	口　縁　部	摩耗	摩耗	縄文		円形刺突文	茶褐	暗茶褐	砂粒、黒変	小型
Ⅳ－22	24	86	Ｊ30	Ⅰ	Ⅵ	口　縁　部	摩耗	横位に調整	不明	丸い	突瘤文	黒茶褐	炭化物	砂礫、黒変	
Ⅳ－22	24	87	L26	Ⅰ	Ⅵ	口　縁　部	剝落	剝落	不明		突瘤文	赤褐	暗褐	砂粒、黒変	
Ⅳ－22	24	88	L30	Ⅰ	Ⅵ	口縁付近	剝落、摩耗	剝落、摩耗	不明		突瘤文	暗褐	暗褐	砂粒、黒変	
Ⅳ－22	24	89	K25	Ⅰ	Ⅵ	口　縁　部	剝落	剝落	不明		突瘤文	黄橙～暗褐	赤橙～黒茶褐	砂粒	
Ⅳ－22	24	90	L30	Ⅰ	Ⅵ	口縁～胴部	剝落、摩耗	丁寧な調整	RL 縦走	RL 縄文	突瘤文	暗茶褐、炭化物	赤茶褐、炭化物	砂礫	
Ⅳ－22	24	91	H23	Ⅰ・Ⅱ	Ⅵ	口縁～胴部	一部剝落	やや粗面	RL 縦走	丸い	突瘤文	橙褐、炭化物	黒茶褐、炭化物	砂礫	推定口径20.6cm
Ⅳ－22	24	92	K37	撹乱	Ⅵ	口　縁　部		滑沢に調整	LR 斜行	LR 斜行		淡褐	黒褐	砂粒、黒変	薄手、堅緻
Ⅳ－23	24	93	L30	Ⅰ	Ⅵ	口　縁　部	摩耗	丁寧な調整		縦L縄線文	隆起線文、L縄線文	黒褐	暗褐	砂粒、黒変	山形突起
Ⅳ－23	24	94	K25	Ⅰ	Ⅵ	口　頸　部	剝落、摩耗	丁寧な調整			隆起線文、L縄線文	暗茶褐	黒褐	砂礫、赤橙褐	同心円文剝落
Ⅳ－23	24	95	Ｊ24	Ⅰ	Ⅵ	口縁付近	剝落、摩耗	やや粗面			隆起線文	褐	黒褐	砂粒、黒変	
Ⅳ－23	24	96	K25	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	摩耗	剝落			隆起線文の痕跡	褐	黒褐	砂粒、黒変	
Ⅳ－23	24	97	N33	Ⅰ	Ⅵ	口　縁　部	剝落	丁寧な調整	不明	RL 縄文	隆起線文、R縄線文	黒褐	黒褐	砂粒、黒変	同心円文剝落
Ⅳ－23	24	98	N33	Ⅰ	Ⅵ	口　縁　部		丁寧な調整		RL 縄文	隆起線文、L縄線文	褐	褐	砂粒、黒変	補修孔
Ⅳ－23	25	99	Ｊ31	撹乱	Ⅵ	口　頸　部	一部剝落				隆起線文、L縄線文	黒褐	黒	砂粒、黒変	
Ⅳ－23	25	100	K30	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	剝落、摩耗	剝落			隆起線文、L縄線文	暗茶褐	暗茶褐	砂粒、黒変	
Ⅳ－23	25	101	O28	Ⅰ	Ⅵ	胴　部		横位に調整	RL 縦走		隆起線文	赤茶褐、炭化物	炭化物	砂粒	
Ⅳ－23	25	102	O28	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	一部剝落		縦走縄文？		微隆起線文、L撚糸押捺	黄茶褐	黄茶褐	砂粒、黒変	同心円文
Ⅳ－23	25	103	L26・N28	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	剝落、摩耗	摩耗	RL 縦走？		隆起線文	橙褐	赤橙褐	砂粒、黒変	
Ⅳ－23	25	104	L25	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	やや摩耗		RL 縦走		R縄線文、隆起線文	橙褐	黒褐、炭化物	砂礫	
Ⅳ－23	25	105	L30	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	摩耗				擬縄貼付文	黄茶褐	炭化物	砂粒、黒変	
Ⅳ－23	25	106	O29	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	滑沢	滑沢	RL 縦走		刻みある微隆起線文	黒褐	黄茶褐	砂粒	
Ⅳ－23	25	107	Ｊ29	Ⅰ	Ⅵ	胴　部		やや粗面	LR 横走			暗褐	茶褐	砂礫	23と同一個体
Ⅳ－23	25	108	Ｊ30	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	やや摩耗	やや粗面	LR 横走			暗赤茶褐	暗赤茶褐	砂礫	23と同一個体
Ⅳ－23	25	109	Ｊ30	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	やや摩耗	やや粗面	0段多条LR			暗赤茶褐	茶褐	砂粒	
Ⅳ－23	25	110	K25	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	やや摩耗		LR 斜行			赤茶褐	茶褐	砂粒	
Ⅳ－23	25	111	K31	撹乱	Ⅵ	胴　部	摩耗	横位に調整	LR 斜行			黒茶褐	黒褐	砂粒	
Ⅳ－23	25	112	Ｊ25	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	剝落、摩耗	摩耗	LR 縦走			暗赤茶褐	黒茶褐	砂粒	
Ⅳ－23	25	113	M31	撹乱	Ⅵ	胴　部	摩耗	丁寧な調整	LR 縦走			赤茶褐	褐	砂粒	
Ⅳ－23	25	114	N29	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	摩耗		LR 縦走			黒、炭化物	茶褐	砂粒、黒変	
Ⅳ－23	25	115	F・N	Ⅱ	Ⅵ	胴　部	摩耗		LR 縦走			暗茶褐	黒茶褐	砂粒、黒変	
Ⅳ－23	25	116	M34	撹乱	Ⅵ	胴　部	摩耗	やや粗面	LR 縦走			暗赤茶褐	暗褐	砂礫	
Ⅳ－23	25	117	N33	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	摩耗	剝落	LR 縦走			赤褐	赤褐	砂礫	
Ⅳ－23	25	118	Ⅰ30	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	やや摩耗		LR 縦走		地文を網状に磨り消す	赤茶褐	赤茶褐	砂礫	
Ⅳ－23	25	119	Ⅰ30	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	摩耗	粗面	LR 縦走			黒褐、炭化物	暗茶褐	砂粒	
Ⅳ－24	25	120	N33	Ⅰ	Ⅵ	胴　部			LR 縦走			暗茶褐、炭化物	暗茶	砂粒	
Ⅳ－24	25	121	Ⅰ30	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	摩耗	摩耗	LR 縦走			暗茶褐	暗茶褐	砂粒、黒変	
Ⅳ－24	25	122	M31	撹乱	Ⅵ	胴　部	摩耗		LR 縦走			暗茶褐	黒茶褐	砂粒、黒変	
Ⅳ－24	25	123	排土		Ⅵ	胴　部	摩耗	やや粗面	LR 縦走			暗褐	暗灰茶褐	砂粒、黒変	
Ⅳ－24	25	124	Ｊ25	撹乱	Ⅵ	胴　部	剝落、摩耗	摩耗	LR 縦走			茶褐	褐	砂粒、黒変	
Ⅳ－24	25	125	排土		Ⅵ	胴　部	やや摩耗	やや粗面	LR 縦走			黄橙褐	褐	砂粒	
Ⅳ－24	26	126	排土		Ⅵ	胴　部		滑沢に調整	LR 縦走			赤茶褐	黒褐	砂粒	
Ⅳ－24	26	127	Ⅰ24	Ⅰ	Ⅵ	胴　部		滑沢に調整	LR 縦走			赤茶褐	黒褐	砂粒、黒変	
Ⅳ－24	26	128	Ｊ24	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	摩耗	滑沢に調整	LR 縦走			茶褐	茶褐	砂粒、黒変	
Ⅳ－24	26	129	K25	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	摩耗	やや粗面	LR 縦走			茶褐	灰黒褐	砂粒	薄手
Ⅳ－24	26	130	K25	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	やや摩耗	やや粗面	LR 縦走			茶褐	茶褐	砂粒	
Ⅳ－24	26	131	A・西側斜面	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	摩耗	ほぼ平滑	LR 縦走			赤橙褐	赤橙褐	砂粒	
Ⅳ－24	26	132	K26	Ⅰ	Ⅵ	胴　部			LR 縦走			茶褐	黒、炭化物	砂粒、黒変	
Ⅳ－24	26	133	K26	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	剝落、摩耗		LR 縦走			赤橙褐	黒、炭化物	砂粒、黒変	
Ⅳ－24	26	134	M28	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	やや摩耗	丁寧な調整	LR 縦走			赤橙茶褐	黒、炭化物	砂粒	
Ⅳ－24	26	135	M28	Ⅰ	Ⅵ	胴　部		やや粗面	0段多条LR			淡黄橙褐	淡黄橙褐	砂粒	
Ⅳ－24	26	136	L28	Ⅰ	Ⅵ	胴　部		やや粗面	LR 縦走			黄赤茶褐	黄茶褐	砂粒	
Ⅳ－24	26	137	N33	Ⅰ	Ⅵ	胴　部			LR 縦走			黒茶、炭化物	暗茶褐	砂粒、黒変	55と同一か
Ⅳ－24	26	138	N28	Ⅰ	Ⅵ	胴　部		やや粗面	0段多条LR			赤茶褐	赤茶褐	砂粒	
Ⅳ－24	26	139	L40	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	やや摩耗	摩耗	LR 縦走			赤茶褐	黄赤茶褐	砂粒、黒変	
Ⅳ－24	26	140	F・N	Ⅱ	Ⅵ	胴　部			LR 縦走			暗茶褐	暗茶褐	砂粒	
Ⅳ－24	26	141	F・N	Ⅱ	Ⅵ	胴　部			LR 縦走			褐	暗褐	砂粒	
Ⅳ－24	26	142	L40	Ⅱ層撹乱	Ⅵ	胴　部	やや摩耗	剝落	LR 縦走			灰黄褐	灰黄褐	砂粒	
Ⅳ－24	26	143	M35	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	剝落		R撚糸文			赤茶褐、光沢	黒褐	砂粒	
Ⅳ－24	26	144	Ｊ24	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	一部剝落	丁寧な調整	RL 縦走			褐	橙褐	砂粒	
Ⅳ－24	26	145	K25	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	剝落、摩耗	丁寧な調整	RL 縦走			黄橙褐	黄橙褐	砂粒	
Ⅳ－24	26	146	K25	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	剝落、摩耗		RL 縦走			茶褐	黒褐、炭化物	砂粒、黒変	
Ⅳ－24	26	147	K25	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	剝落、摩耗	剝落	RL 縦走			黒褐	黒茶褐	砂粒	
Ⅳ－24	26	148	K29	Ⅰ	Ⅵ	胴　部			RL 縦走			黄茶褐、炭化物	黒、炭化物	砂粒、黒変	焼成堅緻
Ⅳ－24	26	149	Ⅰ30	Ⅰ	Ⅵ	胴　部	やや摩耗		RL 縦走			黄茶褐	暗褐	砂粒	焼成堅緻
Ⅳ－24	26	150	Ｊ31	撹乱	Ⅵ	胴　部	やや摩耗		RL 縦走			茶褐	黒、炭化物	砂粒、黒変	
Ⅳ－24	26	151	K31	撹乱	Ⅵ	胴　部	摩耗		RL 縦走			暗赤茶褐	暗赤茶褐	砂粒、黒変	
Ⅳ－24	26	152	L41	Ⅱ	Ⅵ	胴　部	摩耗		RL 縦走			赤茶褐	黒褐、炭化物	砂礫	
Ⅳ－25	26	153	排土		Ⅲb	底部付近	摩耗	剝落	LR 斜行？			淡赤茶褐	黒褐	砂礫、繊維	
Ⅳ－25	26	154	N33	Ⅰ	Ⅵ	底　部	剝落、摩耗	丁寧な調整	不明			暗茶褐	黒褐	砂粒	丸底
Ⅳ－25	26	155	Ⅰ24	Ⅰ	Ⅵ	底　部	剝落、摩耗	剝落、摩耗	不明			黒褐	茶褐	砂粒	丸底に近い平底？
Ⅳ－25	26	156	L29	Ⅰ	Ⅵ	底　部	剝落、摩耗	摩耗	LR 縦走？			黒茶褐	暗茶褐	砂粒	小型、薄手、平底
Ⅳ－25	26	157	L26	Ⅰ	Ⅵ	底　部	剝落、摩耗	丁寧な調整	不明			暗褐	黒褐	砂粒、黒変	薄手、平底
Ⅳ－25	26	158	K25	Ⅰ	Ⅵ	底　部	やや摩耗	やや粗面	0段多条LR			暗茶褐	暗茶褐	砂礫	推定底径8.6cm
Ⅳ－25	26	159	N45	Ⅱ	Ⅵ	底　部	摩耗	剝落、摩耗	不明			黄赤茶褐	黄灰褐	砂礫	平底？
Ⅳ－25	26	160	L25	Ⅰ	Ⅵ	底　部	摩耗		LR 縦走			灰青褐色	黒褐	砂粒、黒変	揚底
Ⅳ－25	26	161	K25	Ⅰ	Ⅵ	底　部	やや摩耗	丁寧な調整	0段多条LR			赤茶褐	黒茶褐	砂粒、黒変	揚底
Ⅳ－25	26	162	L30	Ⅰ	Ⅵ	底　部	やや摩耗	やや粗面	0段多条LR		底近くにLR縄線文1条	黒褐	赤茶褐	砂礫	薄手、揚底
Ⅳ－25	26	163	Ｊ30	Ⅰ	Ⅵ	底　部	剝落、摩耗	やや粗面	LR 横走			暗褐	暗褐	砂礫	23と同一個体？
Ⅳ－25	26	164	N33	Ⅰ	Ⅵ	底　部	摩耗	摩耗				黒褐	暗茶褐	砂礫、黒変	推定底径7.8cm
Ⅳ－25	26	165	K26	Ⅰ	Ⅵ	底　部	摩耗	丁寧な調整	LR 縦走			黒褐	暗茶褐	砂粒	焼成堅緻、揚底
Ⅳ－25	26	166	Ｊ24	Ⅰ	Ⅵ	底　部	摩耗	摩耗	不明			黒	黒	砂粒、黒変	揚底
Ⅳ－25	26	167	K26	Ⅰ	Ⅵ	底部付近	剝落、摩耗	剝落、摩耗	縄文縦走？			黒茶褐	赤橙褐	砂粒	底部欠失

表Ⅳ－４　新野上２遺跡　掲載単品一覧

挿図	図版	番号	器　種　名	遺構名	発掘区	一括層位	遺物番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　質	接合番号	備　　考
Ⅳ－６	20	2	礫	Pit－１			1	155	202	40	1648.6	流 紋 岩		
Ⅳ－６	20	1	スクレイパー	Pit－２			1	(79)	(51)	24	(75.2)	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	1	石鏃	Pit－３			56	17	11	2	0.3	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	2	石鏃	Pit－３			9	(17)	12	2	(0.3)	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	3	石鏃	Pit－３			6	19	14	2	0.4	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	4	石鏃	Pit－３			37	20	14	2	0.4	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	5	石鏃	Pit－３			32	20	14	2	0.4	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	6	石鏃	Pit－３			38	21	14	2	0.4	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	7	石鏃	Pit－３			31	22	14	3	0.6	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	8	石鏃	Pit－３			16	23	14	2	0.5	黒曜石２		
Ⅳ－７	20	9	石鏃	Pit－３			13	26	14	3	0.7	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	10	石鏃	Pit－３			17	26	16	3	0.7	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	11	石鏃	Pit－３			28	20	14	3	0.6	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	12	石鏃	Pit－３			23	21	13	2	0.4	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	13	石鏃	Pit－３			24	21	14	2	0.4	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	14	石鏃	Pit－３			26	22	12	2	0.4	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	15	石鏃	Pit－３			5	22	13	2	0.4	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	16	石鏃	Pit－３			29	22	14	3	0.6	黒曜石４		
Ⅳ－７	20	17	石鏃	Pit－３			12	22	15	2	0.5	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	18	石鏃	Pit－３			25	(18)	15	2	(0.5)	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	19	石鏃	Pit－３			59	23	14	3	0.5	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	20	石鏃	Pit－３			18	23	14	2	0.5	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	21	石鏃	Pit－３			45	23	14	3	0.6	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	22	石鏃	Pit－３			2	23	15	3	0.6	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	23	石鏃	Pit－３			42	24	12	3	0.6	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	24	石鏃	Pit－３			21	25	13	3	0.6	黒曜石３		
Ⅳ－７	20	25	石鏃	Pit－３		Ⅰ	2	25	15	3	0.7	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	26	石鏃	Pit－３			19	(23)	15	3	(0.7)	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	27	石鏃	Pit－３		Ⅰ	1	25	15	3	0.7	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	28	石鏃	Pit－３			27	25	16	2	0.7	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	29	石鏃	Pit－３			4	26	14	2	0.6	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	30	石鏃	Pit－３			22	27	15	3	0.6	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	31	石鏃	Pit－３			20	27	15	3	0.7	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	32	石鏃	Pit－３			39	19	13	2	0.4	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	33	石鏃	Pit－３			41	21	14	3	0.6	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	34	石鏃	Pit－３			43	22	14	2	0.4	黒曜石１		
Ⅳ－７	20	35	石鏃	Pit－３			7	23	14	2	0.5	黒曜石１		
Ⅳ－８	20	36	石鏃	Pit－３		Ⅰ	3	22	15	2	0.5	黒曜石１		
Ⅳ－８	20	37	石鏃	Pit－３			14	23	15	2	0.5	黒曜石１		
Ⅳ－８	20	38	石鏃	Pit－３			8	23	15	2	0.5	黒曜石１		
Ⅳ－８	20	39	石鏃	Pit－３			30	24	14	2	0.5	黒曜石１		
Ⅳ－８	20	40	石鏃	Pit－３			33	24	14	3	0.7	黒曜石１		
Ⅳ－８	20	41	石鏃	Pit－３			15	25	15	3	0.8	黒曜石１		
Ⅳ－８	20	42	石鏃	Pit－３			40	26	14	3	0.8	黒曜石１		
Ⅳ－８	20	43	石鏃	Pit－３			46	20	16	3	0.5	黒曜石１		
Ⅳ－８	20	44	石鏃	Pit－３			11	21	16	3	0.6	黒曜石１		
Ⅳ－８	20	45	石鏃	Pit－３			34	21	18	3	0.7	黒曜石１		
Ⅳ－８	20	46	石鏃	Pit－３			3	24	18	3	0.8	黒曜石１		
Ⅳ－８	20	47	石鏃	Pit－３			1	25	21	3	0.9	黒曜石１		
Ⅳ－８	20	48	石鏃	Pit－３			44	27	20	3	0.8	黒曜石１		
Ⅳ－８	20	49	石鏃	Pit－３		Ⅰ	5	(18)	(12)	2	(0.4)	黒曜石２		
Ⅳ－８	20	50	石鏃	Pit－３			10	(22)	(12)	2	(0.4)	黒曜石１		
Ⅳ－８	20	51	石鏃	Pit－３		Ⅰ	4	(23)	(12)	2	(0.4)	黒曜石５		
Ⅳ－８	20	52	石鏃	Pit－３			47	(13)	12	2	(0.3)	黒曜石１		
Ⅳ－８	20	53	両面調整石器	Pit－３			51	56	33	7	14.6	め の う		
Ⅳ－８	20	54	つまみ付ナイフ	Pit－３			54	62	28	8	11.9	黒曜石１		
Ⅳ－８	20	55	つまみ付ナイフ	Pit－３			58	67	46	7	15.8	黒曜石１		
Ⅳ－８	20	56	ナイフ	Pit－３			57	110	33	10	33.4	黒曜石５		
Ⅳ－８	20	57	スクレイパー	Pit－３			35	62	42	5	10.1	黒曜石１		
Ⅳ－８	20	58	スクレイパー	Pit－３			55	60	50	9	27.7	黒曜石１		
Ⅳ－８	20	59	スクレイパー	Pit－３			48	99	83	17	11.0	黒曜石２	50048	
							49				19.4			
							52				76.9			
						Ⅰ	6				1.5			
						Ⅰ	7				0.2			
Ⅳ－８	20	60	二次加工ある剥片	Pit－３			50	57	46	7	11.3	黒曜石１		
Ⅳ－10	20	5	石鏃	Pit－４			3	(20)	(11)	3	(0.5)	黒曜石１		
Ⅳ－10	20	6	スクレイパー	Pit－４			28	31	21	6	3.7	黒曜石３		
Ⅳ－10	20	7	スクレイパー	Pit－４			71	57	42	15	41.1	黒曜石１		
Ⅳ－10	20	8	石核	Pit－４			18	59	35	37	90.3	黒曜石１		
Ⅳ－11	21	5	石鏃	Pit－５			7	24	14	2	0.6	黒曜石１		
Ⅳ－11	21	6	石鏃	Pit－５			6	26	19	7	3.1	黒曜石１		
Ⅳ－11	21	7	石鏃	Pit－５		Ⅰ	8	18	20	3	1.1	黒曜石１		
Ⅳ－11	21	8	両面調整石器	Pit－５		Ⅰ	3	(31)	(24)	8	(5)	黒曜石１		
Ⅳ－11	21	9	石槍	Pit－５			24	67	22	8	10.3	黒曜石１		
Ⅳ－11	21	10	掻器	Pit－５			1	54	26	6	7.6	黒曜石１		
Ⅳ－11	21	11	掻器	Pit－５			5	(68)	(47)	11	(30.5)	黒曜石１		
Ⅳ－12	21	1	礫	Pit－６			1	270	226	105	9065.1	安 山 岩		
Ⅳ－13	21	1	石鏃	Pit－９		Ⅰ	1	26	13	2	0.8	黒曜石１		

挿図	図版	番号	器　種　名	遺構名	発掘区	一括層位	遺物番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　質	接合番号	備　　考
Ⅳ－14	21	3	石槍	Pit－10			4	58	20	10	7.8	黒曜石５		
Ⅳ－14	21	4	スクレイパー	Pit－10			3	74	50	10	34.3	黒曜石１		
Ⅳ－15	21	4	石槍またはナイフ	Pit－11			5	(27)	27	8	(6.1)	黒曜石１		
Ⅳ－15	21	5	スクレイパー	Pit－11			3	80	31	12	23.5	黒曜石１		
Ⅳ－16	21	1	敲石	Pit－14			1	194	77	45	806.9	砂　　岩		
Ⅳ－18	21	1	石斧	Fc－３			3	96	35	15	92.6	片　　岩		
Ⅳ－18	21	2	石斧	Fc－３			1	97	35	12	48.3	片　　岩		
Ⅳ－18	21	3	剝片	Fc－３			2	87	40	14	78.9	片　　岩		
Ⅳ－18	21	4	石斧	Fc－３			4	75	29	12	32.0	片　　岩		
Ⅳ－18	21	5	石核	Fc－３			5	67	75	26	110.8	黒曜石１		
Ⅳ－18	21	1	スクレイパー	Fc－４		Ⅱ	1	91	41	13	41.8	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	1	石鏃		M29	Ⅰ	40	13	11	2	0.2	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	2	石鏃		M28	Ⅰ	102	15	10	2	0.3	黒曜石３		
Ⅳ－26	27	3	石鏃		L27	Ⅰ	60	16	11	2	0.2	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	4	石鏃		K28	Ⅰ	15	17	10	2	0.4	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	5	石鏃		K27	Ⅰ	23	19	8	2	0.3	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	6	石鏃		K25	Ⅰ	131	19	12	3	0.5	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	7	石鏃		L41	Ⅱ	18	20	13	2	0.5	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	8	石鏃		K26	Ⅰ	158	21	13	3	0.7	黒曜石３		
Ⅳ－26	27	9	石鏃		L30	Ⅰ	6	20	15	3	0.6	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	10	石鏃		M28	Ⅰ	19	21	14	3	0.6	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	11	石鏃		K25	Ⅰ	21	22	13	3	0.6	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	12	石鏃		K30	Ⅰ	51	24	12	2	0.6	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	13	石鏃		L41	Ⅱ	22	34	16	3	1.2	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	14	石鏃		L26	Ⅰ	18	17	13	2	0.5	黒曜石３		
Ⅳ－26	27	15	石鏃		L26	Ⅰ	23	19	12	2	0.3	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	16	石鏃		L27	Ⅰ	147	27	15	3	1.2	黒曜石４		
Ⅳ－26	27	17	石鏃		K26	Ⅰ	150	27	21	8	3.5	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	18	石鏃		M30	Ⅰ	21	34	24	5	3.5	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	19	石鏃		L27	Ⅰ	94	24	16	3	0.6	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	20	石鏃		I24	Ⅰ	24	27	17	3	0.9	黒曜石４		
Ⅳ－26	27	21	石鏃		M27	Ⅰ	129	24	8	2	0.4	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	22	石鏃		K26	Ⅰ	24	28	10	3	0.6	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	23	石鏃		M27	Ⅰ	28	33	11	3	0.8	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	24	石鏃		M28	Ⅰ	13	33	18	4	1.2	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	25	石鏃		M33	Ⅰ	2	35	13	3	1.2	黒曜石４		
Ⅳ－26	27	26	石鏃		L28	Ⅰ	25	37	16	5	2.2	黒曜石３		
Ⅳ－26	27	27	石鏃		L27	Ⅰ	53	40	18	7	3.8	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	28	石鏃		L27	Ⅰ	51	44	20	7	4.6	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	29	石鏃		L27	Ⅰ	131	48	18	6	4.2	黒曜石４		
Ⅳ－26	27	30	石槍		H24	Ⅰ	2	54	21	7	5.3	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	31	石槍		L29	Ⅰ	2	70	19	7	7.0	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	32	石槍		M28 M29	Ⅰ Ⅰ	17 48	71	26	10	7.4 5.4	黒曜石１	50009	
Ⅳ－26	27	33	石槍		J30	Ⅰ	17	76	23	8	10.7	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	34	石槍		M34	Ⅰ	4	74	23	8	11.7	黒曜石４		
Ⅳ－26	27	35	石槍		K25	Ⅰ	18	82	26	8	13.1	黒曜石３		
Ⅳ－26	27	36	石槍		L26 M26	Ⅰ Ⅰ	31 10	96	25	8	14.4 1.1	黒曜石１	50008	
Ⅳ－26	27	37	石槍		K28	Ⅰ	14	30	19	7	3.2	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	38	石槍 削片		L26 N32	Ⅰ Ⅰ	43 3	48	15	7	4.1 1.7	黒曜石１	1	
Ⅳ－26	27	39	石槍		L35	Ⅰ	126	90	26	9	21.3	黒曜石１		
Ⅳ－26	27	40	石槍		K24	Ⅰ	8	72	24	12	19.1	珪　　岩		
Ⅳ－26	27	41	石槍		M40	Ⅱ	4	71	25	10	16.3	黒曜石２		
Ⅳ－27	27	42	石槍		M44	Ⅱ	2	55	29	7	8.4	黒曜石１		
Ⅳ－27	27	43	石槍		K30	Ⅰ	12	63	28	8	11.1	黒曜石１		
Ⅳ－27	27	44	石槍		L35	Ⅰ	5	61	30	9	13.9	黒曜石３		
Ⅳ－27	27	45	石槍		L35	Ⅰ	131	67	34	8	14.2	黒曜石１		
Ⅳ－27	27	46	石槍		K25	Ⅰ	70	73	36	9	22.7	黒曜石１		
Ⅳ－27	27	47	石槍		H23 K25	Ⅰ Ⅰ	32 40	81	47	8	13.5 16.7	黒曜石１	50005	
Ⅳ－27	27	48	石槍		M39	Ⅰ	3	92	48	16	55.4	黒曜石２		
Ⅳ－27	27	49	石槍		J25	Ⅰ	25	43	41	6	8.2	黒曜石１		
Ⅳ－27	27	50	石槍		K25 K25	Ⅰ Ⅰ	8 86	(98)	(52)	9	(7.4) 28.6	黒曜石１	50006	
Ⅳ－27	27	51	石槍		K24 K25 K25	Ⅰ Ⅰ Ⅰ	5 65 66	132	49	8	10.7 22.4 15.6	黒曜石１	50018	
Ⅳ－27	27	52	石槍		K24 K25	Ⅰ Ⅰ	18 11	115	49	14	39.4 27.5	黒曜石５	50007	
Ⅳ－28	28	53	ナイフ		N29	Ⅰ	5	59	36	13	24.8	頁　　岩		
Ⅳ－28	28	54	石槍またはナイフ		M38	Ⅰ	12	29	42	10	13.0	黒曜石１		
Ⅳ－28	28	55	石槍またはナイフ		L35	Ⅰ	53	(25)	(27)	9	(6.2)	頁　　岩		
Ⅳ－28	28	56	つまみ付ナイフ		K30 L29	Ⅰ Ⅰ	28 41	99	29	9	12.8 9.2	黒曜石１	50004	
Ⅳ－28	28	57	つまみ付ナイフ		L27	Ⅰ	114	48	34	5	8.9	黒曜石１		
Ⅳ－28	28	58	つまみ付ナイフ		K25	Ⅰ	126	31	24	8	5.6	珪　　岩		
Ⅳ－28	28	59	両面調整石器		N29	Ⅰ	14	39	24	8	6.6	黒曜石１		

挿図	図版	番号	器　種　名	遺構名	発掘区	一括層位	遺物番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　質	接合番号	備　　考
Ⅳ－28	28	60	両面調整石器		L35	Ⅰ	58	44	29	7	8.2	黒曜石１		
Ⅳ－28	28	61	両面調整石器		L35	Ⅰ	48	57	35	9	15.5	黒曜石１		
Ⅳ－28	28	62	両面調整石器		M27	Ⅰ	17	55	29	12	22.1	黒曜石１		
Ⅳ－28	28	63	両面調整石器		L35	Ⅰ	110	53	35	14	31.5	黒曜石１		
Ⅳ－28	28	64	両面調整石器		L27	Ⅰ	103	67	36	14	35.9	黒曜石１		
Ⅳ－28	28	65	両面調整石器		M34	Ⅰ	17	70	39	12	33.2	黒曜石１		
Ⅳ－28	28	66	両面調整石器		L43	Ⅱ	4	66	32	13	18.1	め の う		
Ⅳ－28	28	67	両面調整石器		K25	Ⅰ	23	68	34	14	29.2	黒曜石１		
Ⅳ－28	28	68	両面調整石器		L30	Ⅰ	1	75	49	16	54.7	黒曜石１		
Ⅳ－28	28	69	両面調整石器		M31	Ⅰ	2	59	17	4	5.6	黒曜石１		
Ⅳ－28	28	70	両面調整石器		J25	Ⅰ	2	51	43	14	29.1	黒曜石３		
Ⅳ－28	28	71	両面調整石器		J30	Ⅰ	20	58	47	12	36.8	黒曜石１		
Ⅳ－29	28	72	両面調整石器		L26	Ⅰ	72	65	56	15	61.2	黒曜石１		
Ⅳ－29	28	73	両面調整石器		L35 L35	Ⅰ Ⅰ	25 128	64	65	14	13.3 44.1	黒曜石１	50002	
Ⅳ－29	28	74	両面調整石器		L25 L25	Ⅰ Ⅰ	3 4	111	58	22	56.3 90.8	黒曜石１	50001	
Ⅳ－29	28	75	両面調整石器		L26	Ⅰ	70	43	46	12	25.8	頁　　岩		
Ⅳ－29	28	76	両面調整石器		M38 D地区	Ⅰ Ⅰ	7 10	108	45	16	41.1 38.1	黒曜石２	50003	
Ⅳ－29	28	77	両面調整石器		F地区	Ⅱ	8	(65)	(49)	13	(30)	黒曜石３		
Ⅳ－29	28	78	スクレイパー		N39	Ⅰ	8	45	41	11	19.8	黒曜石１		
Ⅳ－29	28	79	スクレイパー		K26	Ⅰ	25	40	39	11	17.2	黒曜石１		
Ⅳ－29	28	80	スクレイパー		K31	Ⅰ	2	35	32	7	8.0	黒曜石３		
Ⅳ－29	28	81	スクレイパー		M31	Ⅰ	9	61	40	6	18.3	黒曜石３		
Ⅳ－29	29	82	スクレイパー		L30	Ⅰ	42	69	49	13	45.0	黒曜石１		
Ⅳ－29	29	83	スクレイパー		J30	Ⅰ	43	52	43	9	26.6	黒曜石１		
Ⅳ－30	29	84	スクレイパー		K26 L26	Ⅰ Ⅰ	127 173	70	29	11	1.7 15.5	黒曜石１	50012	
Ⅳ－30	29	85	スクレイパー		H23	Ⅱ	73	83	43	11	33.0	黒曜石１		
Ⅳ－30	29	86	スクレイパー		K25	Ⅰ	47	67	33	13	31.2	珪　　岩		
Ⅳ－30	29	87	スクレイパー		K25	Ⅰ	137	53	30	13	17.9	珪　　岩		
Ⅳ－30	29	88	スクレイパー		N33	Ⅰ	9	61	44	13	36.2	黒曜石１		
Ⅳ－30	29	89	スクレイパー		L43	Ⅱ	1	87	48	15	66.1	黒曜石１		
Ⅳ－30	29	90	スクレイパー		I30	Ⅰ	2	53	35	15	29.5	黒曜石１		
Ⅳ－30	29	91	スクレイパー		H23	Ⅰ	64	43	39	9	13.6	黒曜石１		
Ⅳ－30	29	92	スクレイパー		L28 L29	Ⅰ Ⅰ	8 9	63	35	13	11.9 13.1	安 山 岩	50011	
Ⅳ－30	29	93	スクレイパー		N37	Ⅰ	12	84	64	18	77.7	黒曜石２		
Ⅳ－30	29	94	スクレイパー		L35	Ⅰ	117	87	54	17	60.8	黒曜石１		
Ⅳ－30	29	95	スクレイパー		N45	Ⅱ	3	60	42	8	16.3	黒曜石４		
Ⅳ－30	29	96	スクレイパー		M46	Ⅱ	6	64	30	7	11.5	黒曜石３		
Ⅳ－30	29	97	スクレイパー		J25	Ⅰ	3	57	24	7	9.7	黒曜石３		
Ⅳ－30	29	98	スクレイパー		排土		102	67	19	6	7.6	黒曜石１		
Ⅳ－31	29	99	スクレイパー		H23	Ⅰ	59	81	35	8	25.3	黒曜石５		
Ⅳ－31	29	100	スクレイパー		K24	Ⅰ	9	82	33	7	15.3	黒曜石１		
Ⅳ－31	29	101	スクレイパー		J25	Ⅰ	19	43	22	9	7.6	珪　　岩		
Ⅳ－31	29	102	スクレイパー		L44	Ⅱ	3	59	20	4	5.6	黒曜石１		
Ⅳ－31	29	103	スクレイパー		K25	Ⅰ	38	96	30	12	32.0	黒曜石１		
Ⅳ－31	29	104	掻器		J30	Ⅰ	25	39	28	16	14.5	黒曜石１		
Ⅳ－31	29	105	掻器		L39	Ⅱ	3	51	36	8	14.7	黒曜石１		
Ⅳ－31	29	106	掻器		M37	Ⅰ	26	61	43	16	34.3	黒曜石１		
Ⅳ－31	29	107	掻器		I30	Ⅰ	8	73	54	9	39.7	黒曜石３		
Ⅳ－31	29	108	掻器		N33	Ⅰ	3	59	55	11	34.5	黒曜石３		
Ⅳ－31	29	109	掻器		L26	Ⅰ	139	52	52	6	16.5	黒曜石１		
Ⅳ－31	29	110	掻器		L35	Ⅰ	22	43	17	9	6.7	珪　　岩		
Ⅳ－31	30	111	掻器		O30	Ⅰ	6	55	30	8	14.9	黒曜石１		
Ⅳ－31	30	112	錐形石器		N46	Ⅱ	8	54	12	6	3.4	黒曜石１		
Ⅳ－31	30	113	楔形石器		L26	Ⅰ	123	36	32	12	13.4	黒曜石１		
Ⅳ－32	30	114	石核		M34	Ⅰ	14	63	50	26	76.4	黒曜石１		
Ⅳ－32	30	115	石核		K30	Ⅰ	59	69	54	21	64.7	黒曜石１		
Ⅳ－32	30	116	石核		K25	Ⅰ	121	89	71	25	129.0	黒曜石１		
Ⅳ－32	30	117	石核		M36	Ⅰ	2	68	45	24	82.7	黒曜石３		
Ⅳ－32	30	118	石核		N48	Ⅱ	1	45	58	18	41.3	黒曜石３		
Ⅳ－32	30	119	石核		L25	Ⅰ	2	79	95	23	158.3	黒曜石１		
Ⅳ－32	30	120	石核		K26	Ⅰ	55	34	54	19	27.8	黒曜石１		
Ⅳ－32	30	121	石核		M28	Ⅰ	23	34	54	27	52.8	黒曜石１		
Ⅳ－32	30	122	石核		L26	Ⅰ	33	49	80	22	83.8	黒曜石３		
Ⅳ－32	30	123	石核		N30	Ⅰ	1	45	58	31	86.8	黒曜石１		
Ⅳ－33	30	124	石核		J30	Ⅰ	45	53	76	30	144.8	黒曜石２		
Ⅳ－33	30	125	石核		L26	Ⅰ	55	53	37	32	39.7	黒曜石１		
Ⅳ－33	30	126	石核		N33	Ⅰ	11	38	34	29	39.4	黒曜石１		
Ⅳ－33	30	127	石核		M30	Ⅰ	4	71	57	44	163.4	黒曜石３		
Ⅳ－33	30	128	石核		N30	Ⅰ	5	47	46	36	79.8	黒曜石１		
Ⅳ－33	30	129	石核		O30	Ⅰ	14	50	59	30	89.9	黒曜石１		
Ⅳ－33	30	130	石核		M28	Ⅰ	36	39	83	22	78.1	黒曜石１		
Ⅳ－33	30	131	石核		M46	Ⅱ	1	39	71	45	134.8	黒曜石１		
Ⅳ－33	30	132	石核		H23	Ⅰ	29	98	66	49	300.8	黒曜石１		
Ⅳ－34	31	133	石刃核		K30	Ⅰ	24	37	36	32	38.4	黒曜石１		

挿図	図版	番号	器　種　名	遺構名	発掘区	一括層位	遺物番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　質	接合番号	備　　考
Ⅳ－34	31	134	石刃核		N47	Ⅱ	2	38	54	37	78.7	黒曜石３		
Ⅳ－34	31	135	石刃核		表採		1	33	50	38	65.1	黒曜石１		
Ⅳ－34	31	136	石斧		Ⅰ24	Ⅰ	17	67	42	16	66.9	緑色泥岩		
Ⅳ－34	31	137	石斧		Ｊ24	Ⅰ	52	79	31	9	29.1	片　　岩		
Ⅳ－34	31	138	石斧		Ｊ24	Ⅰ	36	104	45	16	107.1	片　　岩		
Ⅳ－34	31	139	石斧		Ｌ27	Ⅰ	178	118	53	23	249.1	片　　岩		
Ⅳ－34	31	140	石斧		Ｌ26	Ⅰ	108	67	39	9	30.8	片　　岩		
Ⅳ－34	31	141	石斧		Ⅰ30	Ⅰ	10	150	59	18	196.6	片　　岩		
Ⅳ－35	31	142	石斧		Ｊ31	Ⅰ	7	115	39	11	75.1	片　　岩		
Ⅳ－35	31	143	石斧		Ｋ25	Ⅰ	110	58	25	12	30.3	片　　岩		
Ⅳ－35	31	144	石斧		Ⅰ30	Ⅰ	9	59	30	11	38.8	片　　岩		
Ⅳ－35	31	145	砥石		N28	Ⅰ	32	62	40	9	24.4	砂　　岩		
Ⅳ－35	31	146	原石		Ⅰ30 Ⅰ30	Ⅰ Ⅰ	11 12	100	24	15	16.7 9.9	黒曜石１	50010	
Ⅳ－35	31	147	台石		Ｊ25 Ｊ25	Ⅰ Ⅰ	40 41	303	156	56	1532.5 1290.7	安 山 岩	50013	
Ⅳ－35	31	148	台石		Ｌ44	Ⅱ	1	258	222	103	9391.0	安 山 岩		

V　自然科学的分析等

1　放射性炭素年代測定結果

株式会社　加速器分析研究所

1）年代値の算出には、Libby の半減期5568年を使用しています。
2）BP 年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表しています。
3）付記した誤差は、次のように算出しています。
複数回（通常は 4 回）の測定値について χ^2 検定を行い、通常報告する誤差は測定値の統計誤差から求めた値を用い、測定値が 1 つの母集団とみなせない場合には標準誤差を用いています。
4）δ^{13}C の値は、通常は質量分析計を用いて測定しますが、AMS 測定の場合に同時に測定される δ^{13}C の値を用いることもあります。
δ^{13}C 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載しておきます。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表したものです。

$$\delta^{14}C=[(^{14}A_S-^{14}A_R)/^{14}A_R]\times1000 \qquad (1)$$

$$\delta^{13}C=[(^{13}A_S-^{13}A_{PDB})/^{13}A_{PDB}]\times1000 \qquad (2)$$

ここで、$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C 濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$ または$(^{14}C/^{13}C)_S$
$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C 濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$ または$(^{14}C/^{13}C)_R$

δ^{13}C は、質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}A_S=^{13}C/^{12}C$）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算します。

但し、IAA では加速器により測定中に同時に$^{13}C/^{12}C$ も測定していますので、標準試料の測定値との比較から算出した δ^{13}C を用いることもあります。この場合には表中に〔加速器〕と注記します。

また、Δ^{14}C は、試料炭素が $\delta^{13}C=-25.0$(‰) であるとしたときの^{14}C 濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値です。(1)式の^{14}C 濃度を、δ^{13}C の測定値をもとに次式のように換算します。

$^{14}A_N=^{14}A_S\times(0.975/(1+\delta^{13}C/1000))^2$（$^{14}A_S$ として$^{14}C/^{12}C$ を使用するとき）
または
$=^{14}A_S\times(0.975/(1+\delta^{13}C/1000))$（$^{14}A_S$ として$^{14}C/^{13}C$ を使用するとき）

$$\Delta^{14}C=[(^{14}A_N-^{14}A_R)/^{14}A_R]\times1000(‰)$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行なった年代値は実際の年代との差が大きくなります。多くの場合、同位体補正をしない δ^{14}C に相当する BP 年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致します。

^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC（percent Modern Carbon）がよく使われており、$\Delta^{14}C$ との関係は次のようになります。

$\Delta^{14}C = (pMC/100 - 1) \times 1000$　(‰)

$pMC = \Delta^{14}C/10 + 100$　(%)

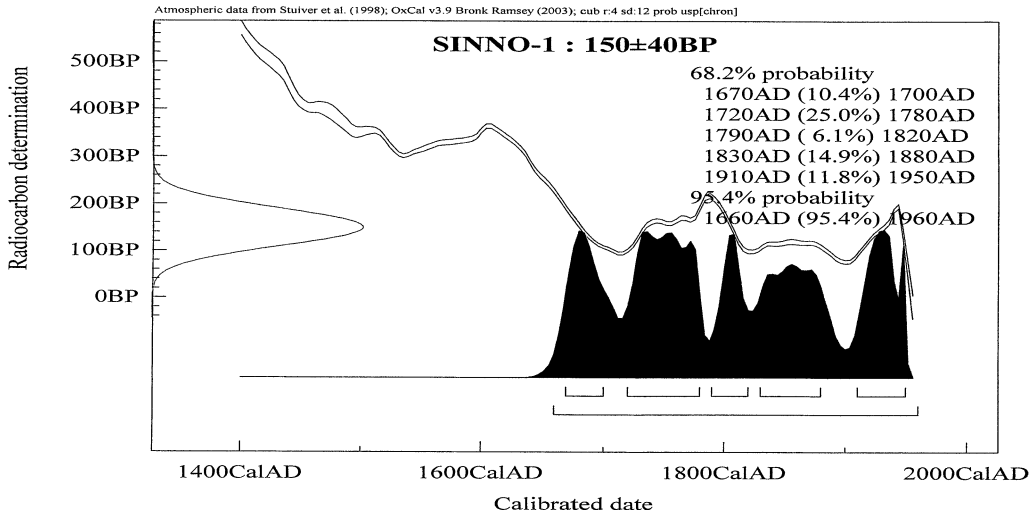
国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}C$ あるいは pMC により、放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age; yrBP）が次のように計算されます。

$T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}C/1000) + 1]$

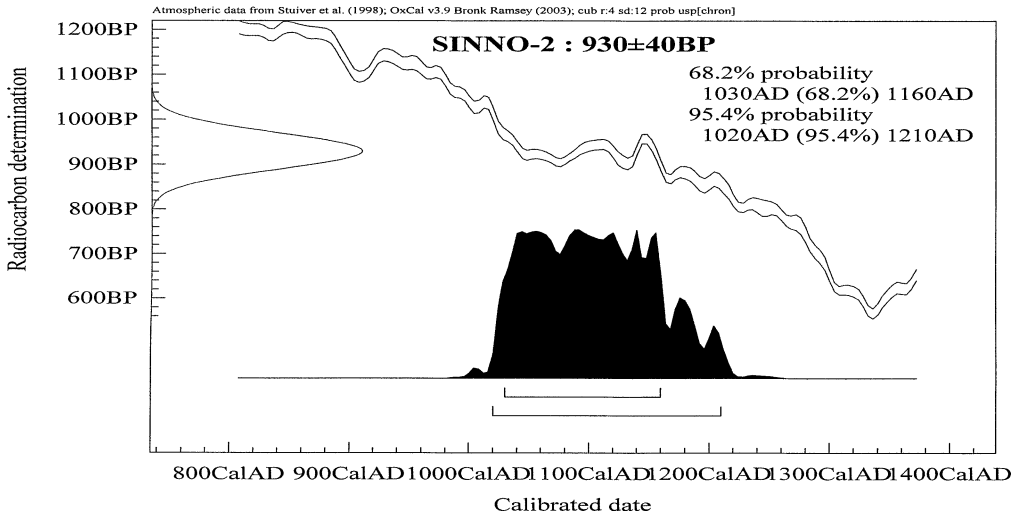
$= -8033 \times \ln(pMC/100)$

IAA Code No.	試　　料	BP 年代および炭素の同位体比
IAAA-41476 ＃720-1	試料採取場所：北海道紋別郡遠軽町栄野169-3 試料形態：木炭 試料名（番号）：SINNO-1	Libby Age(yrBP)：150±40 $\delta^{13}C$(‰)、(加速器)＝−20.47±0.96 $\Delta^{14}C$(‰)＝−18.5±4.2 pMC(%)＝98.15±0.42
	(参考)　$\delta^{13}C$ の補正無し	$\delta^{14}C$(‰)＝−9.4±3.8 pMC(%)＝99.06±0.38 Age(yrBP)：80±30
IAAA-41477 ＃720-2	試料採取場所：北海道紋別郡遠軽町栄野169-3 試料形態：木炭 試料名（番号）：SINNO-2	Libby Age(yrBP)：930±40 $\delta^{13}C$(‰)、(加速器)＝−23.32±0.84 $\Delta^{14}C$(‰)＝−109.2±4.1 pMC(%)＝89.08±0.41
	(参考)　$\delta^{13}C$ の補正無し	$\delta^{14}C$(‰)＝−106.1±3.8 pMC(%)＝89.39±0.38 Age(yrBP)：900±30
IAAA-41478 ＃720-3	試料採取場所：北海道紋別郡遠軽町栄野169-3 試料形態：木炭 試料名（番号）：SINNO-3	Libby Age(yrBP)：4,530±40 $\delta^{13}C$(‰)、(加速器)＝−19.90±0.81 $\Delta^{14}C$(‰)＝−431.2±3.1 pMC(%)＝56.88±0.31
	(参考)　$\delta^{13}C$ の補正無し	$\delta^{14}C$(‰)＝−425.2±2.9 pMC(%)＝57.48±0.29 Age(yrBP)：4,450±40

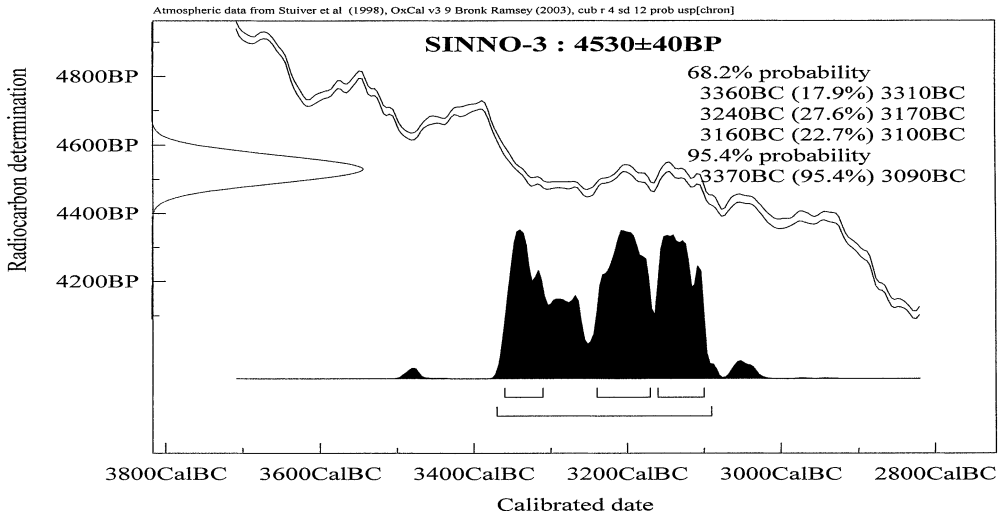
【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



２　新野上２遺跡から出土した炭化種実

新山雅広（パレオ・ラボ）

１．はじめに

新野上２遺跡は、紋別郡遠軽町栄野169－３に所在し、縄文時代・続縄文時代の遺構・遺物が検出された。ここでは、続縄文時代前半期と推定される土坑より出土した炭化種実を検討し、植物利用の推定を試みた。

２．試料と方法

炭化種実の検討は、既に抽出済みでスクリュー瓶に乾燥保存された合計３試料（２－１～２－３）について行った。これらの試料は、墓の可能性のあるＰ－３（土坑）の底面直上より出土している。これらを実体顕微鏡で観察し、同定・計数を行った。

３．出土した炭化種実

同定された分類群数は、木本４分類群、草本６分類群であり、木本はクルミ属、キハダ、タラノキ、マタタビ？(状態が悪く外形のみから推定)、草本はカヤツリグサ科、タデ属、タデ科？、シロザ近似種、スベリヒユ、オミナエシであった。シロザ近似種、スベリヒユが多産し、タデ属もやや目立ったが、他は稀であった。これら分類群の各試料からの出土個数は、表１に示した。

なお、上記分類群のうち、タラノキ、マタタビ？、カヤツリグサ科、タデ属、シロザ近似種、スベリヒユ、オミナエシは、表に示しはしたが、状態の新鮮な未炭化種実であった。これら微小種実は、乾いた酸化的な環境では、炭化していないと残り得ないことから、動物や昆虫により土中に運搬されて二次堆積したか、土壌回収時か洗浄時に風などにより混入した現生種子と考えられる。

表１　Ｐ－３埋土から出土した大型植物化石

数字は個数、( )内は半分ないし破片の数を示す

分類群・部位＼試料番号		２－１	２－２	２－３
クルミ属	炭化核			(1)
キハダ	炭化種子			(1)
タラノキ	核			1
マタタビ？	種子			1
カヤツリグサ科	果実			1
タデ属	果実	4	1	5(1)
タデ科？	炭化果実	1		
シロザ近似種	種子	38	27	31
スベリヒユ	種子	36	6	41(4)
オミナエシ	果実	1		

４．形態記載

⑴　クルミ属　*Juglans*　炭化核

出土核は、長径5.6mm、短径3.2mm 程度の小さな破片である。核壁は厚く、緻密で堅い。割れ口には光沢が見られる。小さい破片であり、表面の筋なども確認できないので、オニグルミとかヒメグルミとかの識別は困難である。

⑵　キハダ　*Phellodendron amurense* Rupr.　炭化種子

出土種子は破片であるが、完形であれば歪んだ狭倒卵形で一方の側面には細長い臍がある。表面全体には、微細な浅い網目紋がある。

⑶　タデ科？　Polygonaceae?　炭化果実

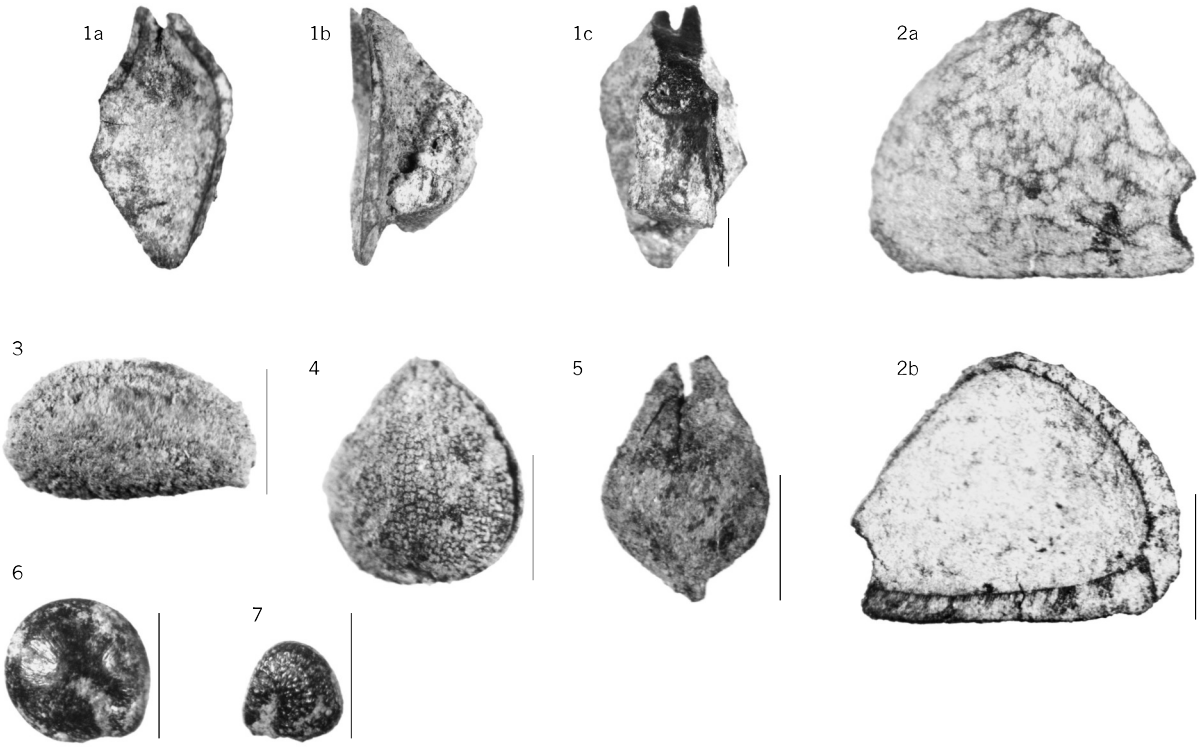
長さ2.0mm、幅1.2mm 程度の卵形。状態が悪いが外形からは、おそらくタデ科と思われる。

５．考察

先述したように、出土種実には、現生種実などが多く混入しており、当時の植物利用の可能性を示唆するのは、２－１のタデ科？、２－３のクルミ属、キハダのみである。クルミ属は、食用として利用される代表的な有用植物である。キハダの種子は、オニグルミなどの有用植物やイネなどの穀類と共に炭化してしばしば遺跡から出土する。内樹皮は、薬用や染色に用いるが、種子も何らかの形で利用されていた可能性が考えられる。タデ科？は、状態が悪く、確定はできなかったが、おそらくタデ科と思われる。土坑（Ｐ－３）周辺に生育していたものの果実が単に混入したのかもしれないが、タデ科やタデ属も有用植物や穀類と共に炭化して出土することがしばしばあり、実体の分からない種類ではあるが、何らかの形で利用されていた可能性が考えられる。

６．おわりに

続縄文時代の土坑（Ｐ－３）から出土した炭化種実を検討した結果、クルミ属、キハダ、タデ科？の利用の可能性が考えられた。



図版１　Ｐ－３埋土内出土種子（スケールは１mm）

１．クルミ属、炭化核、２－３　　２．キハダ、炭化種子、２－３　　３．タラノキ、未炭化核、２－３
４．タデ属、未炭化果実、２－３　　５．タデ科？、炭化果実、２－１　　６．シロザ近似種、未炭化種子、２－２　　７．スベリヒユ、未炭化種子、２－１

Ⅵ　まとめ

1　遺構

前章までに報告してきたとおり、栄野１遺跡からはフレイク集中が１カ所、新野上２遺跡からは15基の土壙と４カ所のフレイク集中が発見された。伴出遺物などから確実な時期や用途を特定できる遺構は少ないが、本節では遺構の特性について概観し、遺跡の性格についても簡単に触れておきたい。

フレイク集中は、多数の黒曜石の微細な剝片が、一定の範囲に集中的に遺存するもので、石器の製作や加工に伴って残された遺構と考えられる。剝片のほか、栄野１遺跡の Fc－１では石核や両面調整石器を、新野上２遺跡の Fc－３では石核や石斧を、Fc－４では石槍片やスクレイパーを伴っており、石器製作・加工作業の一端が窺われるが、いずれも比較的小規模で、接合資料も乏しい。時期的には、周囲の出土遺物の様相等から、続縄文期のものが主体と推定されるが、石斧や石斧の素材、未製品が検出された新野上２遺跡の Fc－３は、他とはやや趣を異にするもので、石斧の形態などからも、縄文期の所産である可能性が疑われている。フレイク集中に限らず、栄野１遺跡、新野上２遺跡における出土遺物の大半は、黒曜石製の石器類や剝片が占めている。とくに不定形の剝片に簡単な加工を施しただけの刃器が数多くみられ、両遺跡では、湧別川中流の河原に豊富に含まれる黒曜石の転石を素材に、手軽に石器類を製作していたことが知られる。しかし、例えば白滝村旧白滝８遺跡に見出された続縄文期のフレイク集中における接合資料から解明されたような、ナイフ類の集約的な製作や製品の搬出といった、いわば専業的な石器製作活動の様相（北埋文2004）は見受けられない。これは、湧別川中流域で採取できる転石の石器素材としてのサイズ的な限界性と、より黒曜石原産地に近い上流域での石器製作における卓越した優位性という、基本的な条件の相違に基づくものといえようか。

新野上２遺跡からは15基の土壙が発見されたが、時期や性格をほぼ確実に特定できるのは、Ｐ－３ただ一つである。そのＰ－３も上部は耕作によって削平され、壙底部も北西半は自然攪乱に破壊されるなど、遺構の保存状態は不良だったが、辛うじて残された壙底部から副葬品と思われる52点の石鏃をはじめとする石器類が検出され、墓壙と判定された。縄文晩期後半から続縄文期の墓では、多数の石鏃が副葬される例が多く、石鏃の形態的な変化から、細分された時期の判別が追究されている（内山1998、酒井2004）。Ⅳ章の報告や後節の石器のまとめにも説明があるように、Ｐ－３出土の石鏃は、常呂町常呂川河口遺跡ピット23（武田1996）やピット306（武田2000）、千歳市オサツ２遺跡GP－１・２・６（北埋文1995）など、後北Ｂ式土器を伴う墓壙に見出された石鏃の形態に極めて類似しており、Ｐ－３は後北Ｂ式期の墓壙と考えられる。後北Ｂ式は宇津内Ⅱb式の古段階に併行すると考えられているが（工藤2004）、宇津内Ⅱb式に伴う石鏃は、凹基のタイプが主流であり、後北Ｂ式がいわば客体として北見地方に分布を広げる過程を示す資料の一つに加えられよう。遠軽町内では、西町遺跡２－14、２－15ピットから後北C_1式に併行する宇津内Ⅱb式新段階の土器を伴う墓壙が発見されている（米村1979）。そこでは凹基のより狭長なタイプの石鏃が多数検出されており、土器や石器に、後北式の影響と在地の伝統が融合した状況が窺える。

Ｐ－３以外の土壙では、規模のやや大きいＰ－５が、或いは仮小屋的な施設の可能性があるかと思われたり、小規模ながら配石を伴うＰ－１・６が墓かも知れないとも推測されるが、いずれも積極的な根拠はなく、性格は不明である。栄野１遺跡、新野上２遺跡の遺構の在り方からは、ともに定着した集落跡の様相は窺えず、両遺跡は、狩猟・漁撈・採集といった生産活動や、石器作りなどの一時的な拠点として、断続的に利用されていた可能性が高いものと思われた。　（髙橋和樹）

2　土器

栄野１遺跡、新野上２遺跡からは、縄文時代早期末～後期初頭、続縄文時代前半期の土器が出土した。縄文期の資料は少なく、その大多数は宇津内IIa・IIb式など続縄文前半期の土器が占めている。宇津内式土器については、宇田川洋氏や熊木俊朗氏による細分案（宇田川1982・1985、熊木1997）が提示されているが、今回の資料は小破片が主体で、器形を復元できた例も少なく、器面の摩耗や剝落が進んで、十分に文様を観察できないものも多いため、型式学的な細分に立ち入るのは難しく、ここでは大まかな時期別に、出土土器の概要について、簡単にまとめておきたい。

縄文早期末の土器：新野上２遺跡出土の図Ⅳ－19－１は、文様構成や器厚などの印象から東釧路Ⅳ式と考えた。かなり摩耗した口縁片で、文様が真に撚糸文なのか、最終的には確信がもてず、続縄文期初頭の縄線文である可能性も完全には拭いきれない。すぐ隣の新野上１遺跡からも、東釧路Ⅳ式類似の小片が幾つか報告されているが（米村1989）、摩耗が進んで文様は不鮮明である。

縄文前期後半～中期前半の土器：新野上２遺跡出土の図Ⅳ－19－２・３は、押型文に似た矢羽根状の刻線文様がみられるもので、断片的ながら常呂町岐阜第二遺跡（東京大学文学部考古学研究室編1972、藤本・宇田川編1982）や岐阜第三遺跡（東京大学文学部考古学研究室常呂研究室編1977）などに類例が求められ、櫛状・棒状の施文具による刺突文が特徴的なシュブノツナイ式土器の範疇で捉えられている。胎土に繊維を含むものだが、図Ⅳ－19－４・５も湧別町長野遺跡のD類（遠藤1991）に近い手法で施文された仲間と考えたい。これらについては、現段階では時期的な限定を避け、中期前半に至る、やや大きな時間幅のうちに位置づけておきたい。

縄文中期末～後期初頭の土器：新野上２遺跡出土の図Ⅳ－10－１、図Ⅳ－11－１、図Ⅳ－19－６～22、図Ⅳ－25－153は、北筒式土器のグループと判断したものである。器形や文様構成の全容を窺える資料はないが、断面が三角状の口縁部肥厚帯を有し、胎土に多量の繊維を含むという、古手のトコロ６類はないようだ。口縁部肥厚帯は幅が広く、胎土の繊維もさほど多くはなく、トコロ５類に一般的な縦の沈線が加わる例も見当たらない。図Ⅳ－19－８は、横位の沈線文がみられる、より新しい可能性を秘めた資料だが、これを含めてトコロ６類の新しい段階の土器群とみておきたい。

続縄文時代前半期の土器：栄野１遺跡、新野上２遺跡の土器の主体は、本州の弥生時代にほぼ並行する続縄文前期（工藤2004）のものである。小片で、多くは器形や文様構成の全貌が不明なため、Ⅳ章３節では個々の文様要素を取り上げて、(a)貼瘤文を有するグループ、(b)刺突や押捺による文様を有するグループ、(c)隆起線文を主体とする文様を有するグループの３者に大別して報告した。栄野１遺跡出土土器の大半も(c)に含まれよう。この細分は記載の便宜を図ったもので、必ずしも土器型式を直接に反映するものではないが、大まかには(b)には宇津内IIa式及びそれ以前の土器群が、(c)には宇津内IIb式及びその新段階に併行する後北C_1式を含む土器群が、それぞれ配分されている。(a)の貼瘤文を有するグループは両者に跨るが、図Ⅳ－20－23のように、とくに貼瘤が単独で強調されるものは、宇津内IIa式直前の土器と思われる。(b)の主要な文様要素は縄線文や縄端圧痕文であり、そのうち突瘤文を持たないものの多くが宇津内IIa式以前に、突瘤文を持つものが宇津内IIa式に属する土器と判断される。刺突文と突瘤文が交互にめぐるP－４出土の図Ⅳ－10－２なども宇津内IIa式に含まれよう。(c)の大半は宇津内IIb式で、復元できた栄野１遺跡の図Ⅲ－３－１が代表例である。栄野１遺跡では円形文や同心円文が多く目につき、図Ⅲ－４－７・13のように後北C_1式に近いものや、19・20のように明らかに後北C_1式と判断される資料もみられるなど、全体として新野上２遺跡のそれよりも、やや新しい傾向が認められるように思われた。（髙橋和樹）

3　石器

前述の通り、栄野１遺跡では宇津内Ⅱb 式を主体として、一部後北C_1式の土器が出土し、新野上２遺跡では宇津内Ⅱa・Ⅱb 式などの続縄文前半期を主体として、一部縄文時代早期末～後期初頭、特に北筒式の土器がややまとまって出土している。これらの時期以外の明確な特徴をもつ石器が確認できないため、両遺跡から出土した石器類は土器によって比定される時期に対応する考えている。

（1）　栄野１遺跡

石器・石材組成　遺跡全体で56,250点、95,468.6g の石器類が出土した。定形的な石器は石鏃・石槍・ナイフ・つまみ付きナイフ・両面調整石器・スクレイパー・掻器・錐形石器・石核が出土している。特に、スクレイパー・両面調整石器・石鏃・石槍・石核が多く、それらには多くの加工途中のものが含まれ、遺跡内で量的な石器製作が行われていたと考えられる。石材は黒曜石１（79.0%）が最も多く、次いで黒曜石２（11.5%）、黒曜石３（6.9%）、黒曜石４（2.4%）、黒曜石５（0.2%）で、黒曜石全体で99.9%以上を占め、碧玉・珪岩・めのう・頁岩・安山岩・砂岩が0.1%以下である。黒曜石１には肉眼的に飴色・明瞭な縞状・灰色がかったものなど非白滝産と見られるものも含まれている。

石器製作技術　石器製作技術は石核素材の両面加工技術とその他の剥片剥離技術に大別される。前者からは比較的大型の石槍・両面調整石器等が製作され、後者からは剥片素材の石器が製作される。石器製作技術復元には本来接合資料や石器類・剥片の分析を必要とするが、攪乱の激しい遺跡の保存状態と時間的な制約からトゥールの折れ面接合を除く接合作業を行っていないため、ここでは主に石器類と石核類の観察によって行うこととする。

〈両面加工技術〉

素材面が残存せず大きさから石核素材と推定されるものは大型の石槍・ナイフ・両面調整石器がある。これらは両面を覆う平坦剥離面と縁辺の細かい剥離で構成される。

〈剥片剥離技術〉

石核は分類困難なⅥ類を除くとⅠ（42点、75.0%）・Ⅱ（３点、5.4%）・Ⅲa（５点、8.9%）・Ⅳa（５点、8.9%）・Ⅴ類（１点、1.8%）が出土している。Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ類は同一の剥片剥離技術の中で位置づけられるため、チョッパー状の剥離が行われるⅢa 類、単剥離打面から縦長剥片が剥離されるⅣa 類と併せて三種類の剥片剥離技術が認められる。

主体的な剥片剥離技術であるⅠ類は平坦な作業面で求心的な剥離が行われるもので、剥離される剥片は平坦な作業面形状を反映して平坦かつ薄手で、末端部がヒンジの特徴を持つ。薄手のものは石鏃の、厚手のものは両面調整石器・ナイフ・スクレイパー類・石核の素材になったと考えられる。Ⅴ類はⅠ類の初期段階と考えられるが、両極剥離によって転礫を分割した後、分割面を作業面に設定し、求心的な剥離が行われる。Ⅰ類石核には剥片素材のものがあり、初期の段階で剥離された比較的厚手の剥片は石核の素材となっている。また、作業面が両面に設定されるⅡ類もある。Ⅰ類の石核には10～15cm の原石が、Ⅲa・Ⅳa 類には10cm 程度の原石が利用される。

〈二次加工技術〉

石鏃は薄い剥片を素材として平坦な剥離で加工される。各類型の比率はⅠ類（22点、40.0%）・Ⅱ類（８点、14.5%）・Ⅲ類（４点、7.3%）・Ⅳ類（６点、10.9%）・Ⅴ類（２点、3.6%）・Ⅵ類（13点、23.6%）である。Ⅰ類は宇津内Ⅱa・b、Ⅱ類は後北Ｂ、Ⅲ類は後北C_1式土器に伴う石鏃に相当する（内山1998）。Ⅰ類は未成品と考えられるⅥ類と併せて64%を占め、粗い加工のものが多く、未成品や粗い加

工の折損品が多いことから遺跡内で主に製作されている。一方、II～Ⅳ・小型のⅤ類は精巧な作りであるため遺跡外から持ち込まれている可能性がある。大型のⅤ類は技術形態学的に石槍との連続性が認められる。

石槍は細長い形状のものと幅広のものがあり、前者は不明瞭な、後者は明瞭な基部が作出される。ナイフ・つまみ付きナイフは基部が四角く、先端部が斜めに尖頭状に作り出されるものが多い。両面調整石器は端部が尖頭状・四角・円形など形態的な変異が大きい。スクレイパーは尖頭状・縦長剥片素材のものがあり、掻器は厚手のラウンドスクレイパーや刃部が四角・円形のものがある。

（２）　新野上２遺跡

石器･石材組成　遺跡全体で219,685点、309,749.5g の石器類が出土した。土器は宇津内IIa 以前からIIb 式期にかけての続縄文時代前半期のものが最も多く、縄文中期末～後期初頭のものが少量ながらもややまとまって出土し、縄文早期末・前期後半～中期前半のものが極少量出土している。しかしながら、石器を技術要素から厳密に区分するのは困難であり、続縄文時代前半期を主体として部分的に縄文時代の石器が混在すると考えている。

定形的な石器は石鏃・石槍・ナイフ・つまみ付きナイフ・両面調整石器・スクレイパー・掻器・錐形石器・楔形石器・石刃核・石核・石斧・敲石・台石・磨石・砥石が出土している。栄野１遺跡同様スクレイパー・両面調整石器・石鏃・石槍・石核が多く、それらには多くの加工途中のものが含まれ、遺跡内で量的な石器製作が行われていたと考えられる一方、栄野１遺跡には組成されない石斧を含む礫石器が出土するのが特徴である。石材は黒曜石１（81.7%）が最も多く、次いで黒曜石３（11.8%）、黒曜石２（3.5%）、黒曜石４（1.7%）、黒曜石５（1.1%）で、黒曜石全体で99.8%以上を占め、安山岩・頁岩・珪岩・めのう・砂岩・碧玉・片岩・流紋岩・凝灰岩・緑色泥岩を併せて0.2%以下である。栄野１遺跡に比べ黒曜石２の比率が低く、栄野１遺跡同様黒曜石１には肉眼的に飴色・明瞭な縞状・灰色がかったものなど非白滝産と見られるものも含まれている。

石器製作技術　栄野１遺跡同様、石器製作技術は石核素材の両面加工技術とその他の剥片剥離技術に大別される。前者からは比較的大型の石槍・両面調整石器等が製作され、後者からは剥片素材の石器が製作される。また、礫石器では石斧の製作技術が認められる。

〈両面加工技術〉

素材面が残存せず大きさから石核素材と推定されるものは大型の石槍・ナイフ・両面調整石器がある。これらは両面を覆う平坦剥離面と縁辺の細かい剥離で構成される。

〈剥片剥離技術〉

石核は分類困難なⅥ類を除くとⅠ（35点、28.7%）・II（17点、13.9%）・IIIa（21点、17.2%）・IIIb（８点、6.6%）・Ⅳa（27点、22.1%）・Ⅳb（７点、5.7%）・Ⅳc（５点、4.1%）・Ⅴ類（２点、1.6%）が出土している。栄野１遺跡同様平坦な作業面で求心状の剥離が行われるⅠ・II・Ⅴ類、チョッパー状の剥離が行われるIIIa 類、単剥離打面から縦長剥片が剥離されるⅣa～c 類の三種類の剥片剥離技術が認められる。しかし、それらの比率は栄野１遺跡と異なりIIIa・Ⅳa～c 類が多い。IIIa・Ⅳa～c 類は美岬３遺跡（和田・米村1994）・大楽毛１遺跡（松田・石川2001）などで北筒式土器に伴い、縄文中期末～後期初頭に位置付けられる。IIIa 類から剥離される剥片は反りのある形状で図Ⅳ－30－95･96のような側縁の内湾するスクレイパーの素材となっている。また、Ⅳa～c 類から剥離される縦長剥片はスクレイパー・掻器の素材となっている。

原石は10cm 以下の小型のものから15cm 程度の中型のものが利用されているが、Ⅰ類の素材原石サ

イズは10cm 以下から18cm 程度と多様で、Ⅱ類は15cm 程度の中型の、Ⅲa・b・Ⅳb 類は10cm 以下の小型の、Ⅳa・c 類は10cm 程度の原石が利用されている。

〈二次加工技術〉

石鏃は遺跡全体で分類困難なⅦ類を除いてⅠ類（87点、34.7%）・Ⅱ類（56点、22.3%）・Ⅲ類（20点、8.0%）・Ⅳ類（10点、4.0%）・Ⅴ類（７点、2.8%）・Ⅵ類（71点、28.3%）である。しかし、Ⅱ類は墓壙と考えられるＰ－３から49点が出土し、偏った傾向を示し、それを除くとⅠ類（87点、43.1%）・Ⅱ類（７点、3.5%）・Ⅲ類（20点、9.9%）・Ⅳ類（10点、5.0%）・Ⅴ類（７点、3.5%）・Ⅵ類（71点、35.1%）である。このうちⅠ類は未成品と考えられるⅥ類と併せて78.2%を占める。Ⅵ類には図Ⅳ－26－14～16のような薄手の剝片を素材として縁辺への簡単な加工が施されるものと図Ⅳ－26－17・18のような相対的に厚手で大型の剝片を素材として両面の全面的な加工が施されるものがあり、Ⅰ類の素材として二種類の素材が利用されていたと考えられる。栄野１遺跡同様、Ⅰ類は粗い加工のものが多く、また、未成品や粗い加工の折損品が多いことから遺跡内で主に製作されている一方、Ⅱ～Ⅳ・小型のⅤ類は精巧な作りであるため遺跡外から持ち込まれている可能性がある。特に、墓壙であるＰ－３から出土したⅡ類の石鏃は精巧な作りである。宇津内Ⅱa 式土器に伴うと推定される元町３遺跡 GP1（荒生ほか1988）からはⅠ類の石鏃が111点出土し、それらは栄野１・新野上２遺跡に比べ非常に精巧であり、「石器製作地」と「墓」ないし「消費地」という性格に規定されたものと考えられる。この時期には常呂川河口遺跡にあるように散発的に後北Ｂ式の墓壙が道東地域に形成される。本遺跡でも主体的に製作している石鏃とＰ－３に副葬される石鏃の形態が異なり、常呂川河口遺跡と同様なあり方を示している。後北Ｂ～C_1にかけては道東部においては宇津内系の土器から劇的に変化する過渡期であり、その様相を示す資料と考えられる。有茎のⅣ類は小型の石槍と技術形態的な連続性があり、小型の石槍と見なすことができる。

石槍は狭長・幅広・大型の三種類があり、それぞれ茎部が作出されるものとされないものがある。多くは剝片素材である。狭長なものは基部が平行剝離で丁寧に作出されるものがあり、身部は断面凸レンズ状になるものが多い。幅広のものは平坦剝離で薄く加工されているものが多い。大型のものは縁辺部を除いて平坦剝離によって加工されており、表面に凹凸が無く滑らかで縁辺も直線的で整った形状である。

ナイフの基部は四角く整形され、先端部は円形のものがある。両面調整石器はほとんどが剝片素材で、石鏃Ⅵ類のさらに初期段階と見られる尖頭部のある小型のもの、長幅比が１に近い方形や円形のもの、細長いものなどがあり、形態的なばらつきが大きい。つまみ付きナイフは両面加工・片面加工・つまみ部のみの加工のものがある。スクレイパーは背面構成が多方向の剝片素材で５cm 以下のラウンドスクレイパー、背面構成が腹面と同一方向のみのやや縦長の剝片素材で５cm より大きいもの、平坦剝離によって尖頭状に加工されるもの、比較的厚手の剝片素材で平坦剝離によって加工されるもの、反りのある剝片素材で側縁が内湾するように加工されるもの、石刃・縦長剝片で縁辺に限定される加工の施されるものや平坦剝離の施されるものなどがある。掻器は剝片と石刃素材があり、刃部は円形のものと四角く整形されるものがある。錐形石器は直線的で細長く加工される。

石斧は擦り切り技法による緑色泥岩製の１点を除き全て片岩製である。特にFc－３からまとまって出土した資料から①素材剝離→②側縁の剝離による整形→③長軸方向の剝離による刃部整形→④研磨という石斧製作の一連の製作工程が復元される。また、これらの一括資料は遺跡内でほとんど片岩製の剝片が出土していないことから、それぞれの形態に近い形で搬入されたものと考えられる。つまり、石斧関連の石材は、一連の工程の内、素材・未成品・完成品というそれぞれ異なる段階の形態で保持されていた可能

性がある。これらは、明確な根拠はないが単剥離面打面の石核が伴うことから縄文時代の可能性がある。

（３） 石材消費戦略

本遺跡は攪乱を受け、複合遺跡である点で制約のある資料であるが、最後に本遺跡を中心にして当該期の石器研究の方向性と見通しについて述べたいと思う。

栄野１・新野上２遺跡では宇津内Ⅱａ・ｂ式期の石器群が主体的に出土している。これらは足下で採取された転礫を素材として剥片剥離が行われ、主にⅠ類の石鏃、石槍、スクレイパー、両面調整石器が製作されている。遺跡内で製作されているⅠ類の石鏃には他の類型に見られるような精巧なものがほとんど含まれていないため、製作されたものは搬出されたと考えられる。また、大型の両面調整石器や石槍は持ち込まれたと思われ、それらは旧白滝８遺跡（北埋文2004）で認められるように大型の石材が確保できる原産地付近で集約的に製作されていた可能性がある。また、肉眼観察によって非白滝産と推定される黒曜石や多段階表面変化（二重パティナ）が観察される石器もあり、石器単位で搬入されているトゥールがある。Ｐ－３に副葬された石鏃も多様な石材が利用されており、整った形状であり、共に完形品で搬入された可能性がある。

同時期の集落遺跡である常呂川河口遺跡（武田1996ほか）には石核類の出土が少なく、その点を重視すると石器はトゥールや剥片単位で搬入された可能性が高い。一方、遠軽町の両遺跡では石核類が多く出土し、剥片剥離が大量に行われている。このような石器製作を主体的に行う遺跡は集落遺跡に欠落した石器製作工程を補うものと考えられ、石材利用過程の一部を示しているものと考えられる。

ところで、常呂川河口遺跡では、幾つかの遺構出土の黒曜石製石器について原産地分析が行われている（武田2002）。宇津内Ⅱａ式期と推定されるPit263a出土石器のうち、原産地推定が行われた13点中12点が置戸産、１点が白滝産であった。以下同様に、宇津内Ⅱａ式期と推定されるPit267では20点中19点が置戸産、１点が白滝産、宇津内Ⅱｂ式土器を伴うPit24では21点中12点が置戸産、９点が白滝産、Pit132では９点中４点が置戸産、５点が白滝産、後北Ｂ式土器を伴うPit23では７点中６点が置戸産、１点が白滝産、後北C_1式土器を伴うPit22では15点全てが置戸産、Pit130では９点全てが置戸産であった。これらをまとめると宇津内Ⅱｂ式期には置戸産と白滝産がほぼ等量含まれる一方、宇津内Ⅱａ・後北Ｂ・C_1式期には置戸産がほとんどである。

栄野１・新野上２遺跡では宇津内Ⅱａ・ｂ式に伴うⅠ類の石鏃が足下で採集可能な白滝産の黒曜石で製作され、後北Ｂ式に伴うⅡ類の石鏃が肉眼による判定であるが非白滝産の黒曜石を含むことから、宇津内Ⅱａ式期を除いて常呂川河口遺跡における土器型式毎の利用石材の違いに対応している。

このことから、三遺跡を含む地域において白滝産の黒曜石を利用する宇津内Ⅱｂ式期と置戸産の黒曜石を利用する後北Ｂ・C_1式期では石材の供給ルートが異なる可能性が想定される。また、宇津内Ⅱａ式期は石材組成が一致せず、両地域間の石材消費上の関連性が薄い可能性が考えられる。

しかしながら石材産地の判定が肉眼観察によることや対象とする資料数が少ないことからこのような流通を含む石材消費システムが宇津内Ⅱａ・ｂ・後北Ｂ・C_1式の土器型式間で通時的に行われていたか、また、サンプル数が少ないながらも常呂川河口遺跡で認められる土器型式間での利用石材産地が変化していたのか、またその要因が何かについては今後とも検討する必要がある。

今後は通時的な後北式土器分布の拡散と同様に石器製作技術構造と石材獲得から消費に至る戦略の通時的な変化を検討し、具体的な社会変動を検討する必要がある。その際、データの信頼性を高めるためには対象地域を広げ、また、墓壙出土遺物以外の石器を含め検討しなければならないだろう。

（鈴木宏行）

引用・参考文献

秋葉　実　解読・松浦武四郎　1985　戊午　東西蝦夷山川地理取調日誌　中　北海道出版企画センター
秋山　洋　1998　H37遺跡　栄町地点　札幌市文化財調査報告書57
荒生健志・小林　敬・高山ゆかり　1988　元町３遺跡　美幌町文化財調査報告　Ⅲ
石川　朗　1994　釧路市幣舞遺跡調査報告書　Ⅱ　釧路市埋蔵文化財調査センター
石橋次雄・山口　敏・後藤秀彦・河村七五三喜　1975　十勝太若月―第三次発掘調査―　浦幌町教育委員会
伊藤せいち　2002　湧別川筋の中上流のチャシコツについて　北方探求４　北方懇話会
宇田川洋　編　1975　幾田遺跡　羅臼町文化財報告２　羅臼町教育委員会
宇田川洋　1982　道東の続縄文土器　縄文土器大成５　講談社
宇田川洋　1985　栄浦第一遺跡出土の宇津内式土器群に関する若干の考察　栄浦第一遺跡　東京大学文学部
内山真澄　1998　続縄文期における石鏃の変化　『時の絆　道を辿る』　石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会　北海道図書企画
内山真澄　2001　声問川右岸１・２遺跡　稚内市教育委員会
遠軽町役場　編　1957　遠軽町史　遠軽町
遠軽町　編　1977　遠軽町史　遠軽町
遠軽町　編　1998　遠軽町百年史　遠軽町
遠藤香澄　1991　湧別町長野遺跡の追加資料　北海道考古学27　北海道考古学会
大泉　溥　2004　先史時代への憧憬と情熱　㈳北海道家庭学校
大沼忠春　1982　道央地方の土器　２　続縄文文化　縄文文化の研究　６　雄山閣
大沼忠春　1982　後北式土器　縄文土器大成５　講談社
大沼忠春　1986　施文原体の変遷―東釧路式―　季刊考古学17　雄山閣出版
大沼忠春　1989　北筒式土器様式　縄文土器大観　１　小学館
大場利夫　1957　遠軽の古代史　遠軽町史
大場利夫・北村英夫　1957　上富美遺跡　古代學６－２　古代學協會
葛西智義　1994　北広里３遺跡　深川市教育委員会
加藤晋平　1985　清川Ｋ－４遺跡発掘調査報告書―清川地区（道営畑地帯総合土地改良事業）明渠排水工事に伴なう事前調査報告書―　遠軽町
金盛典夫・米村哲英　1973　宇津内遺跡　斜里町教育委員会
金盛典夫　1982　北見地方の土器　２　続縄文文化　縄文文化の研究　６　雄山閣
金盛典夫・村田良介・松田美砂子・葛西智義　1983　尾河台地遺跡発掘調査報告書　斜里町文化財調査報告　Ⅱ　斜里町教育委員会
工藤研治　2004　続縄文文化の土器　考古資料大観11　小学館
熊木俊朗　1997　宇津内式土器の編年―続縄文土器における文様割りつけ原理と文様単位(1)―　東京大学考古学研究室紀要15　東京大学考古学研究室
熊木俊朗　2003　道東北部の続縄文文化　野村　崇・宇田川洋　編　新　北海道の古代　２　―続縄文・オホーツク文化―　北海道新聞社
熊木俊朗　2004　続縄文文化（道東･道北部）　特集：北海道考古学の現状と課題　北海道考古学40　北海道考古学会
熊谷仁志　1991　シュブノツナイ式土器に関する一考察　北海道考古学27　北海道考古学会
児玉作左衛門・大場利夫　1957　遠軽町下社名淵（家庭学校）遺跡の発掘について　北方文化研究報告　12　北海道大学北方文化研究室
駒井和愛　編　1963　オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡　上巻　東京大学文学部
小山正忠・竹原秀雄　編　2002　新版　標準土色帖24版　日本色研事業株式会社
㈶北海道埋蔵文化財センター　1983　旭町１遺跡　㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書10
㈶北海道埋蔵文化財センター　1989　美沢川流域の遺跡群　Ⅻ　㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書58
㈶北海道埋蔵文化財センター　1995　オサツ２遺跡(1)・オサツ14遺跡　㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書96
㈶北海道埋蔵文化財センター　1998　滝里遺跡群　Ⅷ　㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書123
㈶北海道埋蔵文化財センター　2004　白滝遺跡群　Ⅴ　㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書210
酒井秀治　2004　北海道道央部における縄文晩期後葉から続縄文前葉の石鏃について―江別市対雁２遺跡の調査から―　北方島文化研究　２　北方島文化研究会
澤　四郎　編　1972　厚岸町下田ノ沢遺跡　厚岸町教育委員会

澤　四郎・西　幸隆　編　1976　釧路市三津浦遺跡発掘報告　釧路市立郷土博物館
澤　四郎　編　1979　釧路市興津遺跡発掘報告　Ⅲ　釧路市立郷土博物館・釧路市埋蔵文化財調査センター
澤　四郎　1982　釧路地方の土器　2　続縄文文化　縄文文化の研究　6　雄山閣
澤井健一郎　2002　えんがるの先史時代～湧別川中流域の原始・古代～［改訂］　遠軽町教育委員会・遠軽町先史資料館
杉浦重信・澤田　健　2002　無頭川遺跡―旧富良野工業高等学校地点―　Ⅲ　富良野市文化財調査報告　18　富良野市教育委員会
仙庭伸久・上野秀一　1995　H317遺跡　札幌市文化財調査報告書46
武田　修　編　1995　栄浦第二・第一遺跡　常呂町教育委員会
武田　修　1996　常呂川河口遺跡(1)　常呂町教育委員会
武田　修　2000　常呂川河口遺跡(2)　常呂町教育委員会
武田　修　2002　常呂川河口遺跡(3)　常呂町教育委員会
武田　修　2004a　常呂川河口遺跡(4)　常呂町教育委員会
武田　修　2004b　TK60 遺跡　常呂町教育委員会
武田　修　2004c　北海道縄文晩期･続縄文墓壙の一様相　宇田川洋先生華甲記念論文集刊行実行委員会　編　アイヌ文化の成立　北海道出版企画センター
筑波大学歴史人類学系・湧別川流域史研究会　1983　タチカルシュナイＭ１地点発掘調査概報―1983年度―
筑波大学人文学類先史学演習グループ・湧別川流域史研究会　1984　タチカルシュナイ　Ｍ１地点1984年度発掘調査概報
筑波大学・札幌大学・湧別川流域史研究会　1985　タチカルシュナイＭ１地点発掘調査概報―1985年度―
土肥研晶　1993　声問川大曲遺跡　稚内市教育委員会
東京大学文学部考古学研究室　編　1972　常呂　弥生会
東京大学文学部考古学研究室常呂研究室　編　1977　岐阜第三遺跡　東京大学文学部
東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・常呂実習施設　編　2001　トコロチャシ跡遺跡　東京大学大学院人文社会系研究科
東京大学文学部考古学研究室　編　1985　栄浦第一遺跡　東京大学文学部
豊原熙司　1981　北海道東部の土器　２．中期の土器　縄文文化の研究４　雄山閣出版
中田幹雄・中村　齋・山田悟郎・金盛典夫　1977　ウナベツ川遺跡　斜里町教育委員会
永田方正　1984　復刻（1891・明24初版）　北海道蝦夷語地名解　草風館
羽賀憲二　編　1996　H37遺跡　丘珠空港内　札幌市文化財調査報告書50
藤本　強　編　1976　トコロチャシ南尾根遺跡　常呂町
藤本　強・宇田川　洋　編　1982　岐阜第二遺跡―1981年度―　常呂町
㈱北開水工コンサルタント　2004　平成15年度　社名淵瀬戸瀬（停）線　特１工事（地質調査）報告書
前田　潮・松本建速・加藤博文　1990　西町２遺跡発掘調査報告書―北海道遠軽家政高等学校新増改築工事に伴う事前調査報告書―　遠軽町教育委員会
松田　功・荻野幸男・村上義直　1995　オシャマップ川遺跡発掘調査報告書　斜里町文化財調査報告　Ⅷ
松田　猛・石川　朗　2001　釧路市大楽毛１遺跡調査報告書　釧路市埋蔵文化財調査センター
宮　宏明　1983　開成４遺跡　北見市立北見郷土博物館
山田悟郎・椿坂恭代　1994　寒河江遺跡出土の植物遺体　寒河江遺跡―３・４・２停車場道路改良工事及び公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―　遠軽町教育委員会
湧別川流域史研究会　1978　タチカルシュナイＭ－１地点発掘調査概報―1978年度―
吉崎昌一　1971　昭和46年度　遠軽町弥生区（タチカルシュナイ）遺跡調査概報（手書）
吉崎昌一　編　1973　タチカルシュナイ遺跡 1972　遠軽町教育委員会
米村哲英　1972　寒河江遺跡―擦文文化期の遺跡―　遠軽町教育委員会
米村哲英　1978　遠軽町遺跡分布調査報告書―遠軽町東部・弥生・向遠軽・福路・豊里―　遠軽町教育委員会
米村哲英　1979a　遠軽町学田第１遺跡発掘調査報告書　遠軽町
米村哲英　1979b　昭和53年度　遠軽町遺跡分布調査報告書―西町・清川・栄野・若松・千代田・美山―（遠軽町管内遺跡分布範囲確認調査報告書　Ⅲ）遠軽町教育委員会
米村哲英　1980　遠軽町管内　昭和54年度　遺跡分布調査報告書―若咲内・古丹沢・湯の里・瀬戸瀬・野上地区―（遠軽町管内遺跡分布範囲確認調査報告書　Ⅳ）遠軽町教育委員会
米村哲英　1989　新野上１遺跡―道道社名渕瀬戸瀬（停）線凍雪害防止工事に伴う発掘調査報告書―　遠軽町教育委員会

米村哲英　1994　寒河江遺跡―３・４・２停車場道路改良工事及び公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―　遠軽町教育委員会
涌坂周一　1988　ポン春苅古丹川北岸遺跡　羅臼町文化財報告12　羅臼町教育委員会
涌坂周一・川内　基・豊原熙司　1989　幾田遺跡⑵　羅臼町文化財報告13　羅臼町教育委員会
和田英昭・米村　衛　1993　嘉多山３遺跡・嘉多山４遺跡　網走市教育委員会
和田英昭・米村　衛　1994　美岬３遺跡　網走市教育委員会
和田英昭・米村　衛　1999　浜藻琴神社遺跡　網走市教育委員会
和田英昭・米村　衛　2002　ブトセウシナイ遺跡　網走市教育委員会

栄野１・新野上２遺跡

図版２　遺跡遠景

１　遺跡遠景（南西から）

２　遺跡遠景（北から）

1　包含層調査（東から）

2　包含層調査（北東から）

図版４　調査状況⑵・土層断面・遺構

１　包含層調査（Ｊ12区、南から）

２　調査終了（北西から）

３　Ｋ12区東壁（西から）

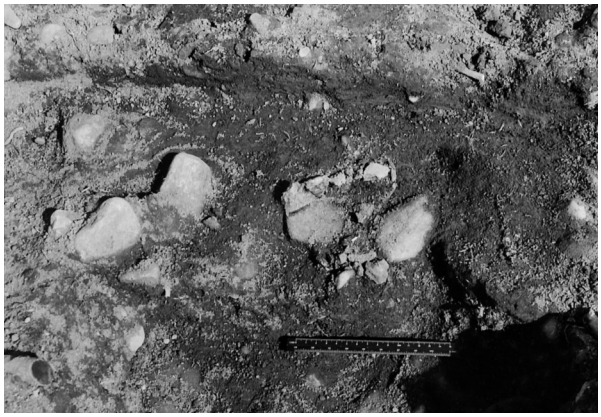
４　Fc－１検出状況（Ｌ16区、南東から）

５　Fc－１断面（Ｌ16区、北東から）

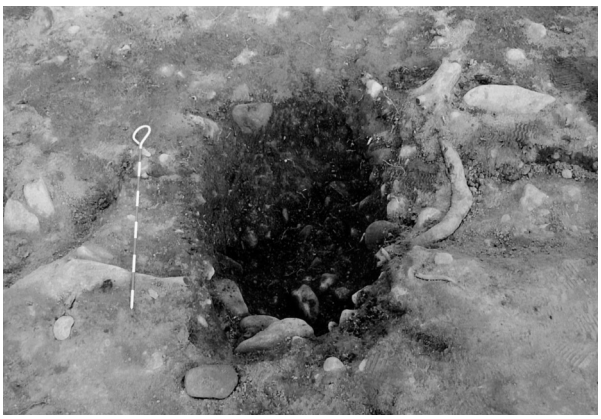
1　木根検出状況（K・L12区、北から）

2　木根断面（K・L12区、北から）

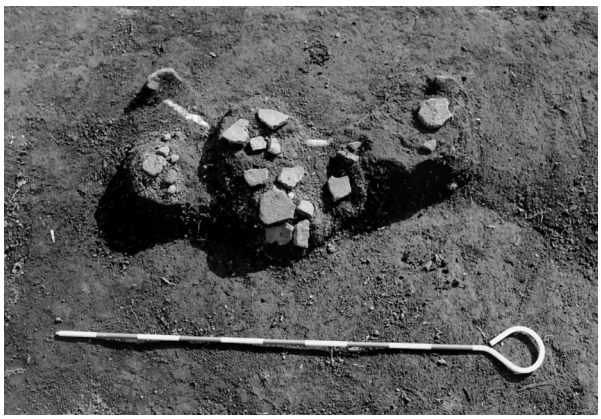
3　木根土器出土状況（K・L12区、北から）



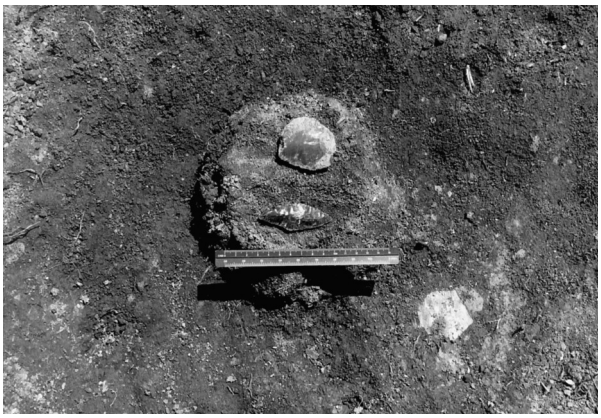
4　木根土器出土状況（K・L12区、北から）



5　木根完掘（K・L12区、北から）



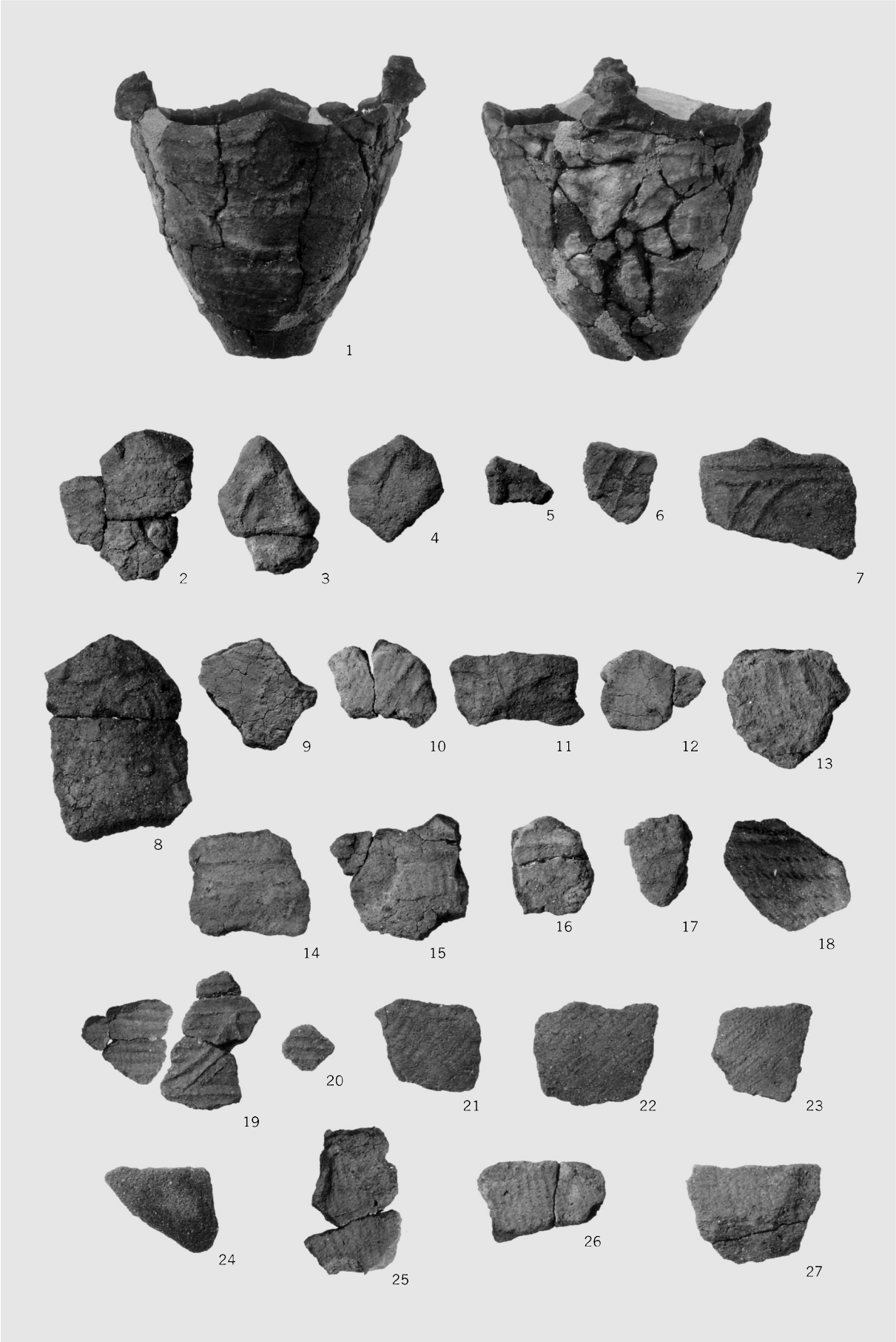
6　Ⅰ層土器出土状況（J13区、東から）



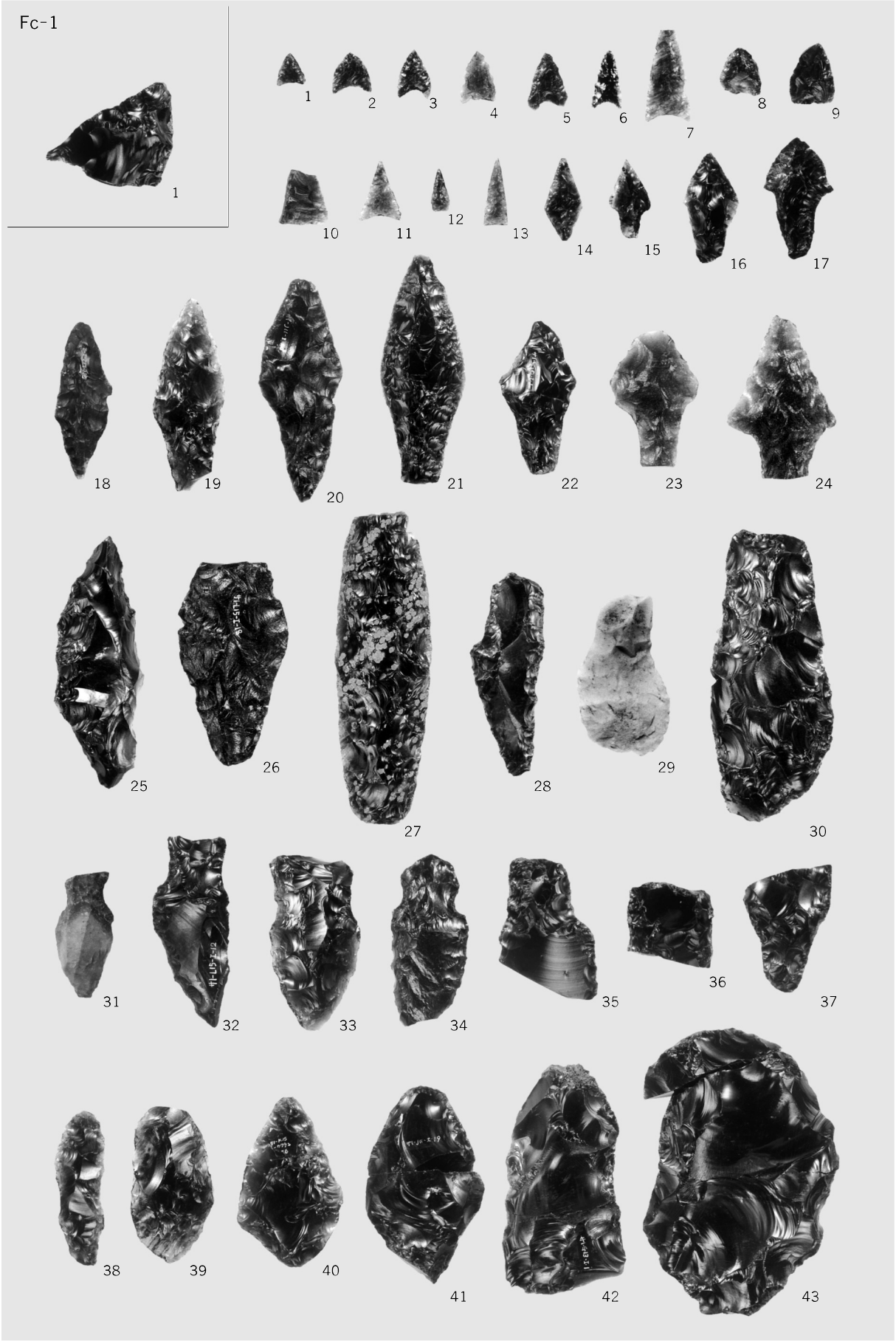
7　Ⅰ層石槍出土状況（K14区、西から）

8　台風18号による倒木（東から）

図版 6　発掘区出土土器

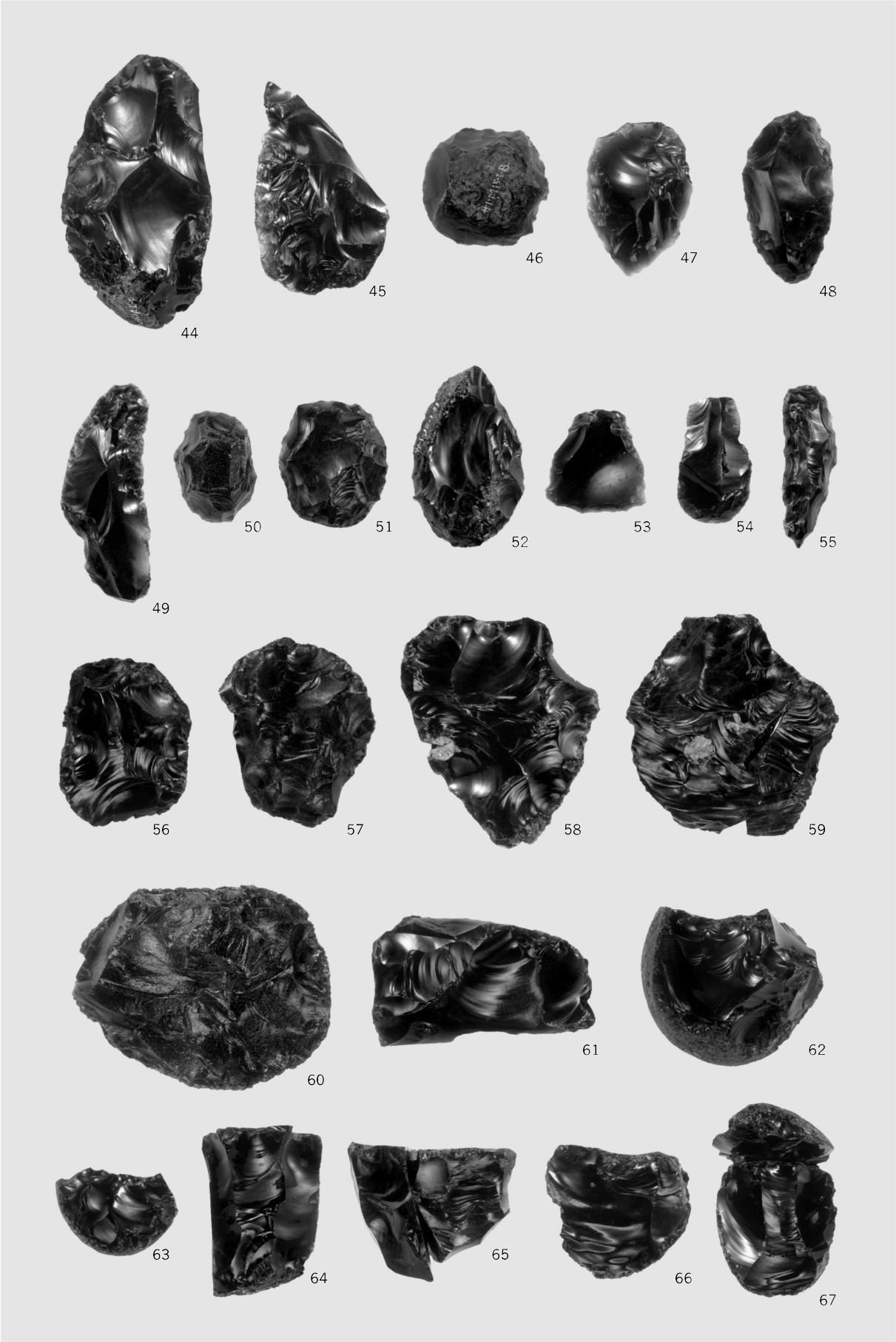


土器



石鏃・石槍・ナイフ・つまみ付きナイフ・石槍またはナイフ・両面調整石器

図版 8　発掘区出土石器(2)

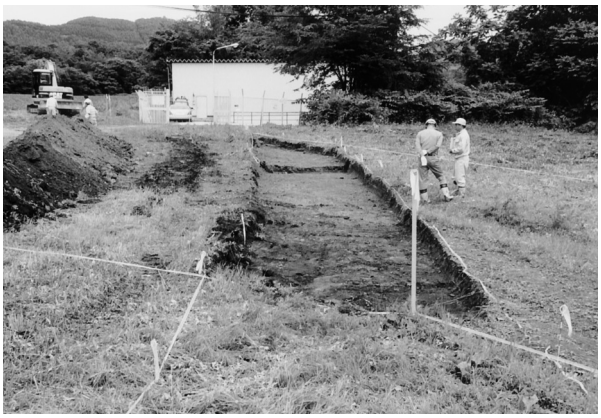


両面調整石器・スクレイパー・掻器・錐形石器・石核

1　調査前（西から）

2　調査前（50ライン以東、西から）

3　Ⅰ層調査（50ライン以東、東から）



4　北電水路部調査（西から）

5　東側包含層調査（43～50ライン、西から）

図版10　調査状況(2)

1　調査終了（43～50ライン、北西から）

2　Ⅰ層調査（33～40ライン、西から）

3　最終面検出状況（33～40ライン、西から）

4　Ⅰ層調査（22～31ライン、東から）

5　遺構調査（西から）

6　Ⅰ層遺物採集状況（北東から）

7　Ⅰ層遺物採集状況（東から）

8　栄野会館解体作業（北から）

1　最終面検出状況（22～31ライン、南東から）

2　最終面検出状況（29～42ライン、西から）

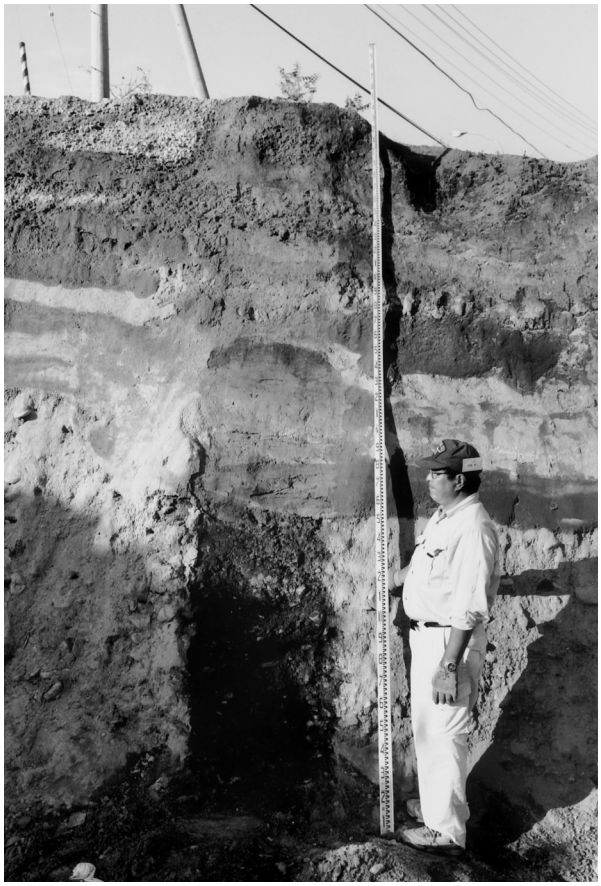
3　調査終了（西から）

4　埋め戻し終了（西から）

図版12　土層断面・遺構(1)

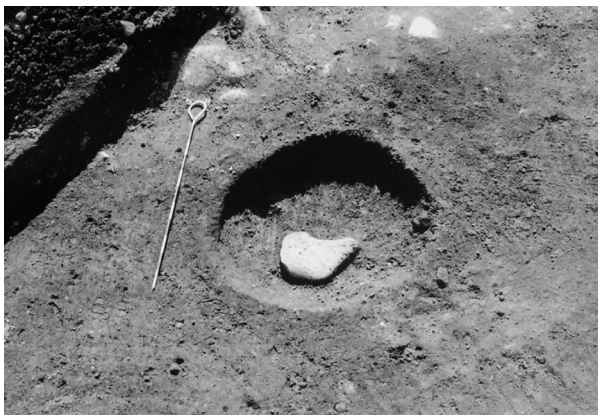
1　Ｋ40区北壁（南から）

2　Ｍ46区北壁（北から）



3　調査区西端露頭（西から）

4　Ｐ－１断面（M43区、南から）



5　Ｐ－１完掘（M43区、南東から）

6　Ｐ－２断面（Ｌ44区、西から）

7　Ｐ－２完掘（Ｌ44区、南西から）

1　Ｐ－３検出状況（Ｉ24区、東から）

2　Ｐ－３検出状況（Ｉ24区、東から）

3　Ｐ－３完掘（Ｉ24区、北から）

4　Ｐ－３石器出土状況（Ｉ24区、北東から）

5　Ｐ－３断面（Ｉ24区、東から）

6　Ｐ－３壙底（Ｉ24区、北から）

7　Ｐ－４断面（Ｐ28区、西から）

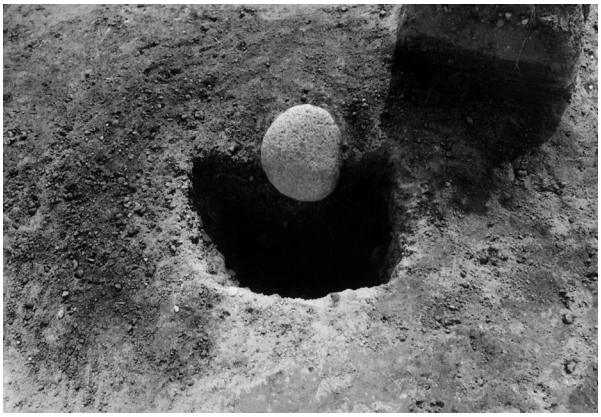
図版14　遺構(3)

1　Ｐ－４土器出土状況（Ｐ28区、西から）

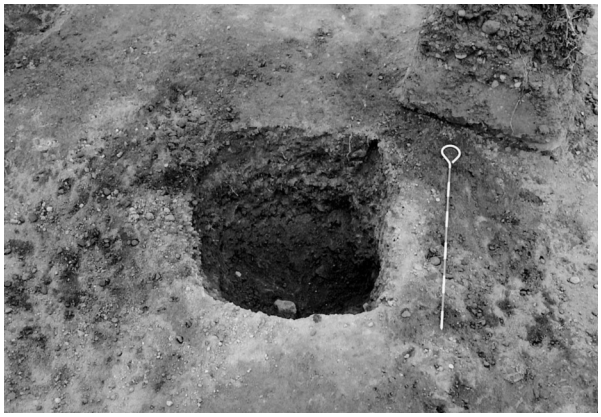
2　Ｐ－４完掘（Ｐ28区、東から）

3　Ｐ－５断面（Ｋ25区、北から）

4　Ｐ－５完掘（Ｋ25区、西から）



5　Ｐ－６断面（Ｉ30区、北から）



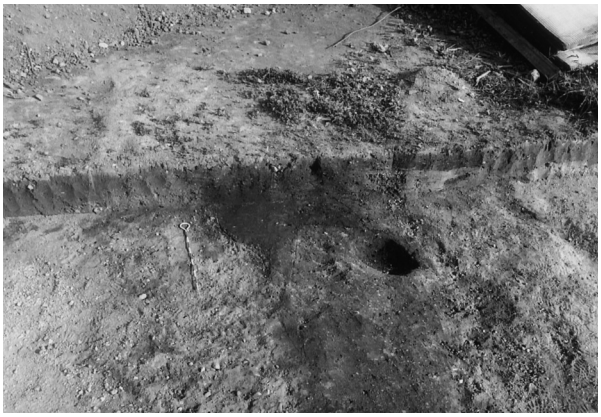
6　Ｐ－６完掘（Ｉ30区、北から）

7　Ｐ－７断面（Ｌ35区、西から）

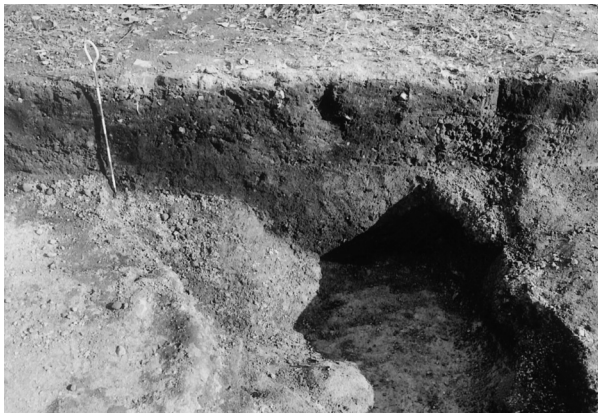
8　Ｐ－７完掘（Ｌ35区、東から）

1　Ｐ－８断面（M35区、西から）

2　Ｐ－８完掘（M35区、東から）



3　Ｐ－９検出状況（O29・30区、北から）

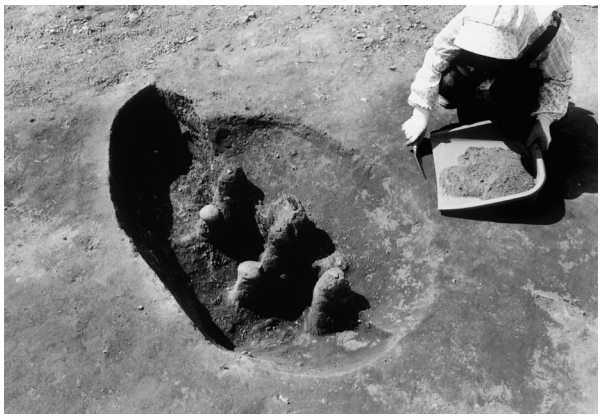


4　Ｐ－９完掘（O29・30区、北から）

5　Ｐ－10断面（Ｉ30区、西から）

6　Ｐ－10完掘（Ｉ30区、東から）

7　Ｐ－11断面（Ｋ・Ｌ30区、南から）



8　Ｐ－11完掘（Ｋ・Ｌ30区、東から）

図版16　遺構(5)

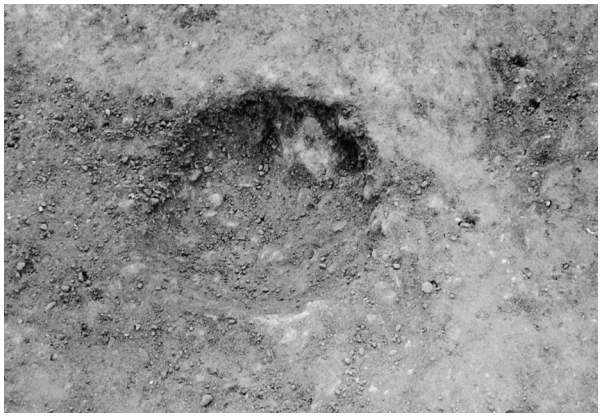
1　Ｐ－12～15検出状況（M・N33区、北から）

2　Ｐ－12断面（N33区、北から）

3　Ｐ－13断面（M33区、北から）

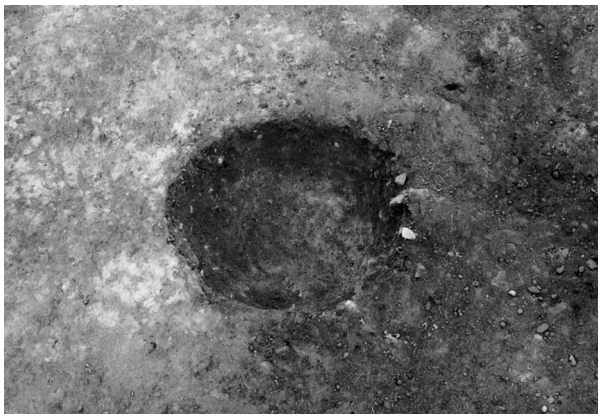
4　Ｐ－12・13完掘（M・N33区、東から）

5　Ｐ－14断面（M33区、西から）



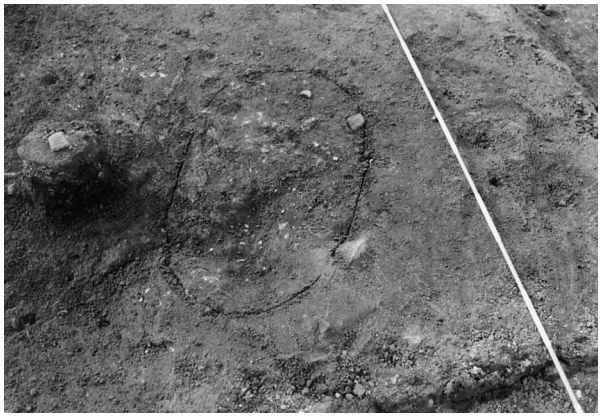
6　Ｐ－14完掘（M33区、北から）

7　Ｐ－15断面（M33区、北から）

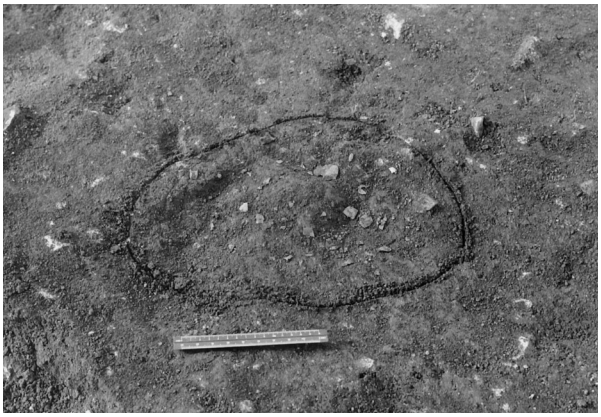


8　Ｐ－15完掘（M33区、北から）

1　Ｐ－12～15完掘（M・N33区、北から）



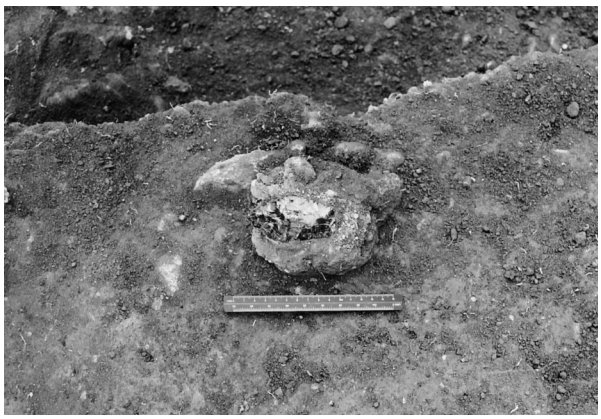
2　Fc－１検出状況（M46区、南から）



3　Fc－２検出状況（M46区、南西から）

4　Fc－３石斧・石核出土状況（N47区、北から）

5　II層土器出土状況（H23区、北西から）



6　II層ナイフ出土状況（H23区、南から）

7　遠軽町親子体験発掘

8　台風18号による倒木（北から）

図版18　遺構出土土器(1)

P-1

1

P-5

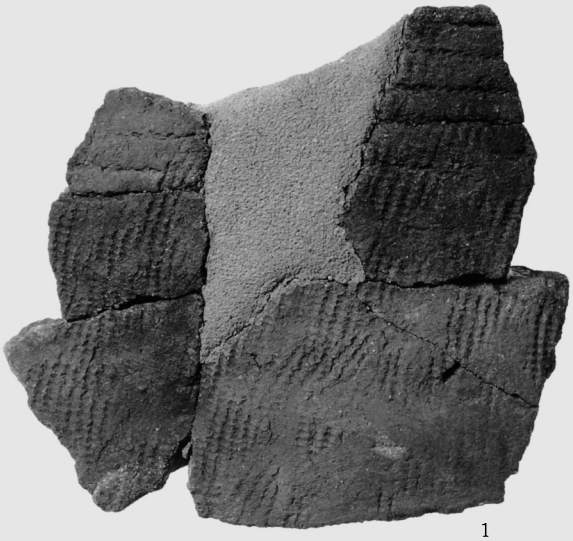
1

2

3

4

P-10



1

2

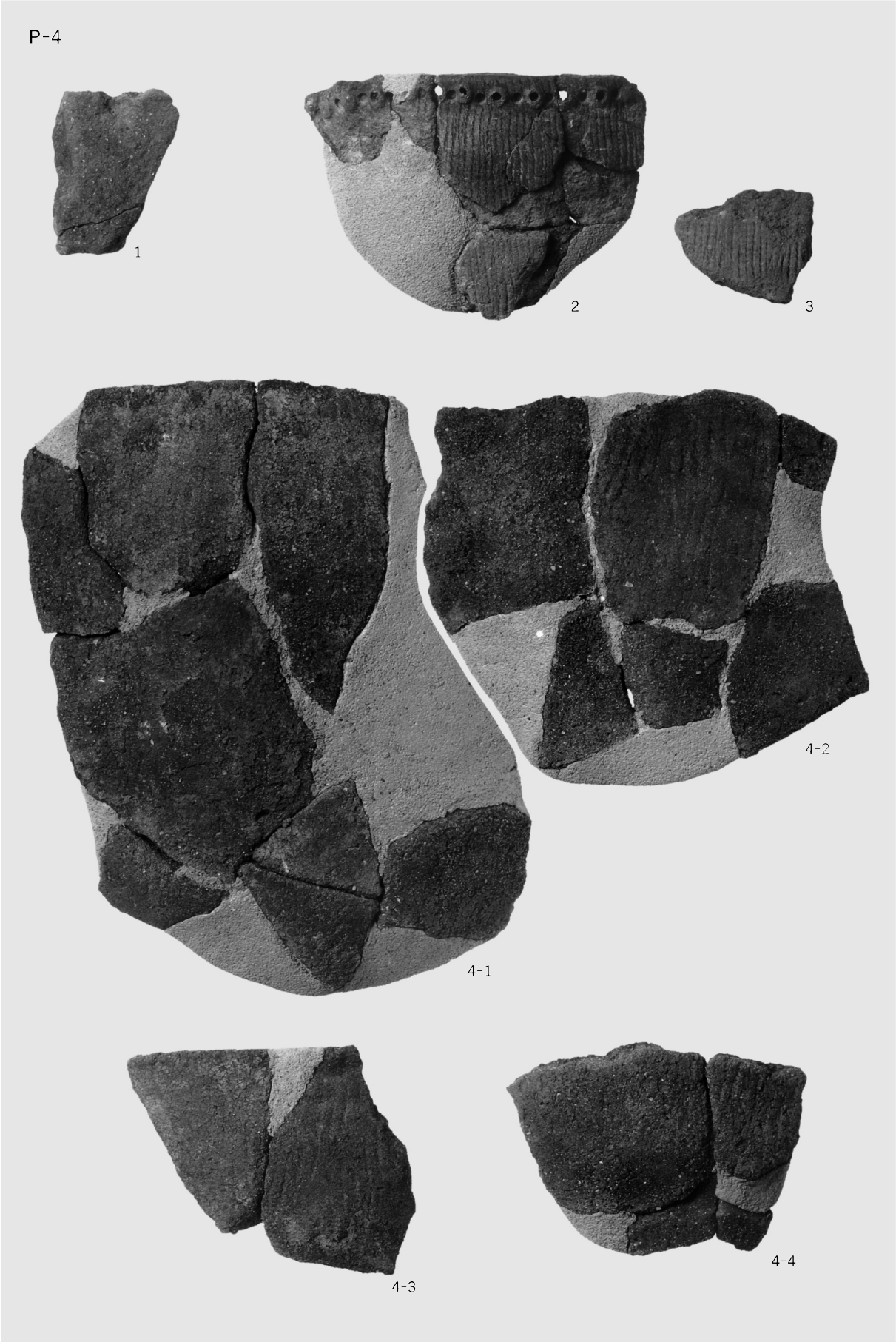
P-11

1

2

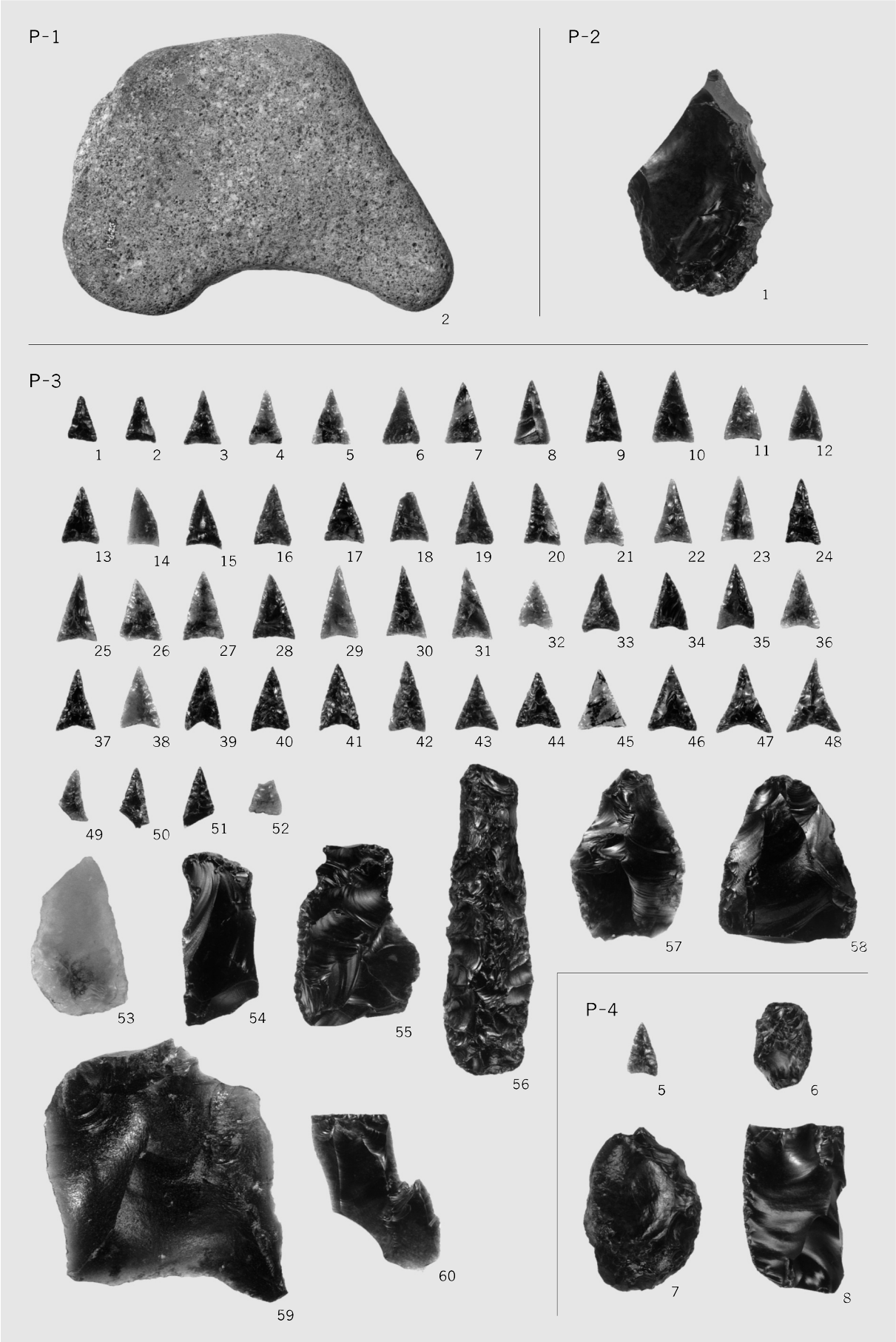
3

P－1・5・10・11出土土器

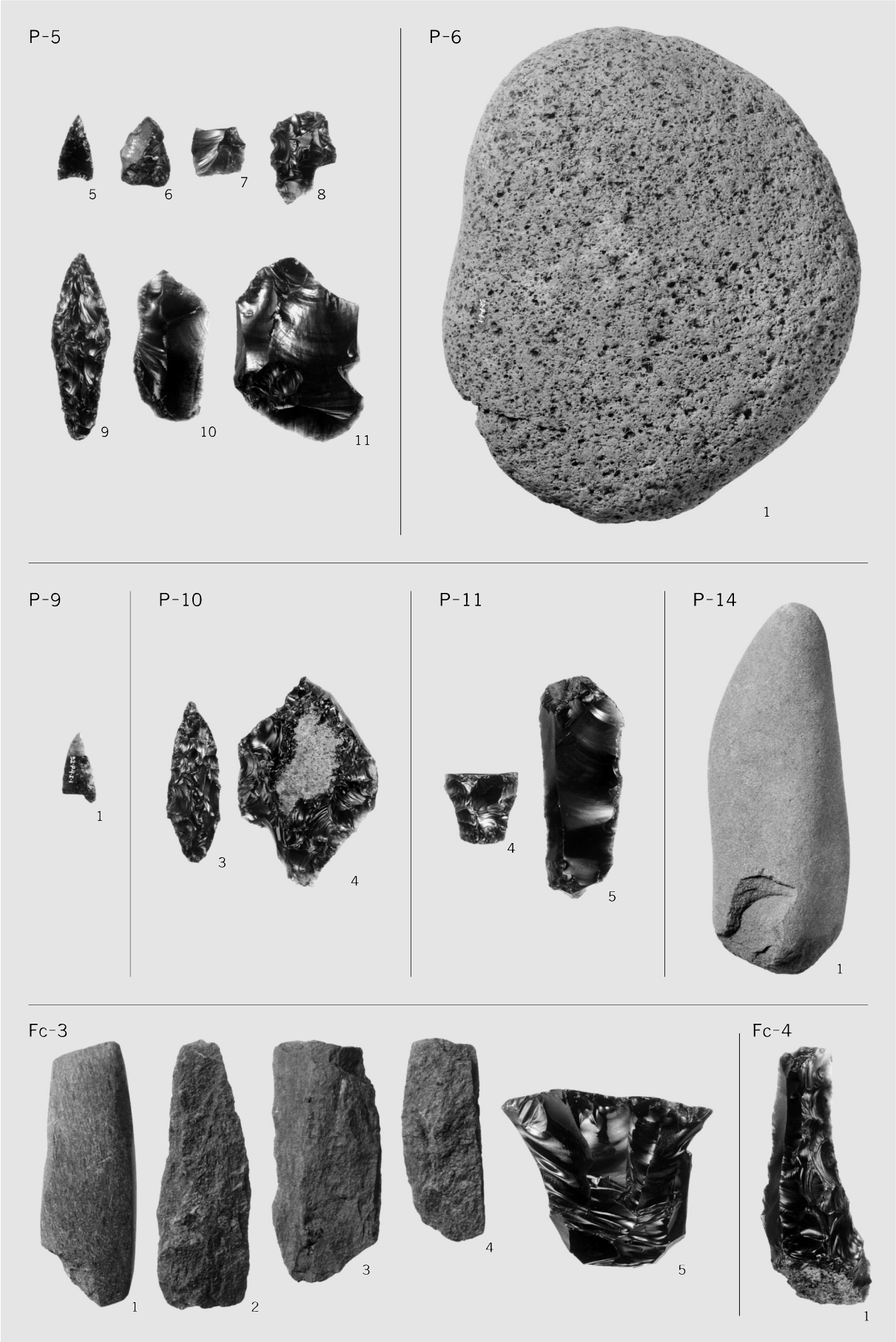


P－4出土土器

図版20　遺構出土石器(1)

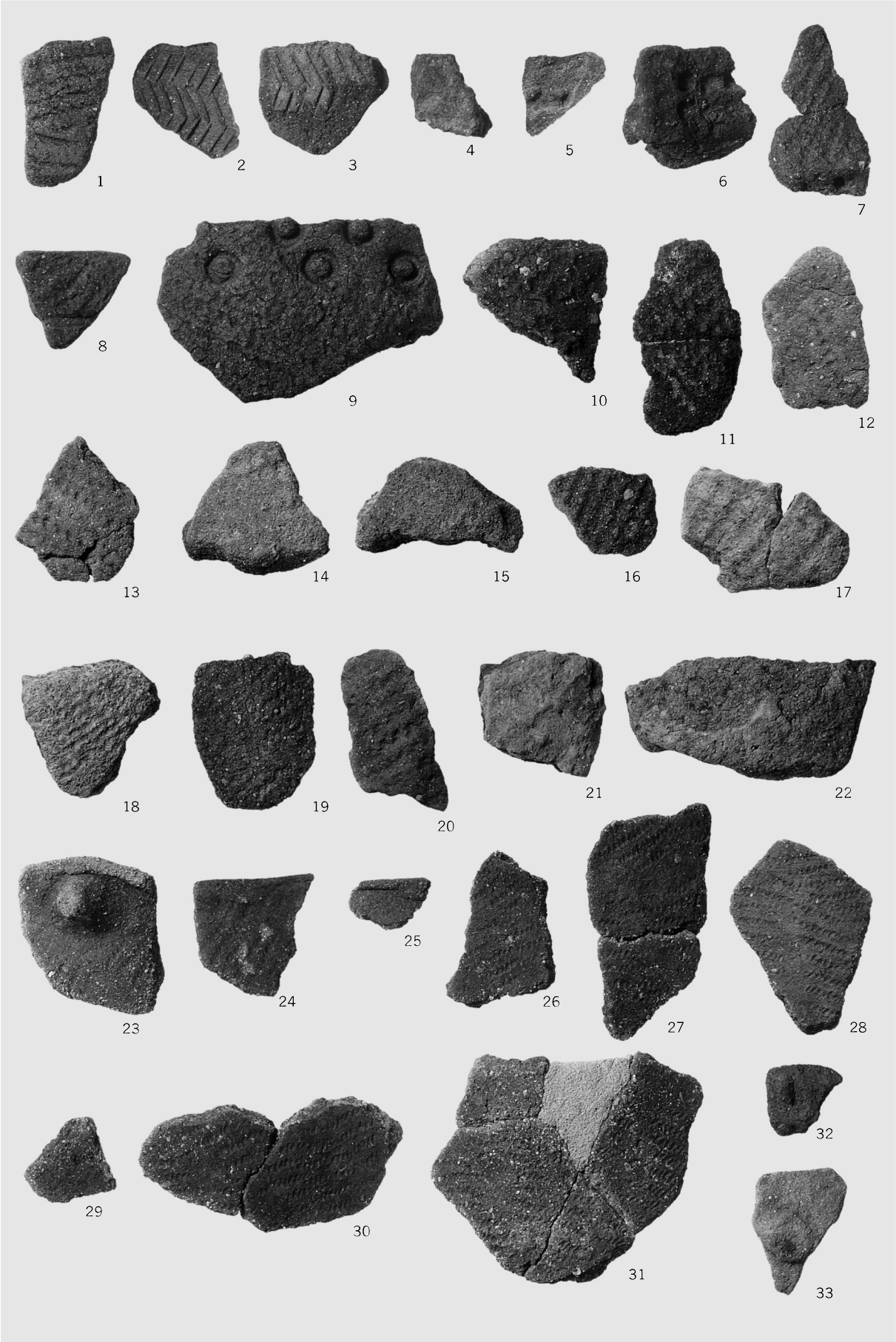


P－1～4出土石器

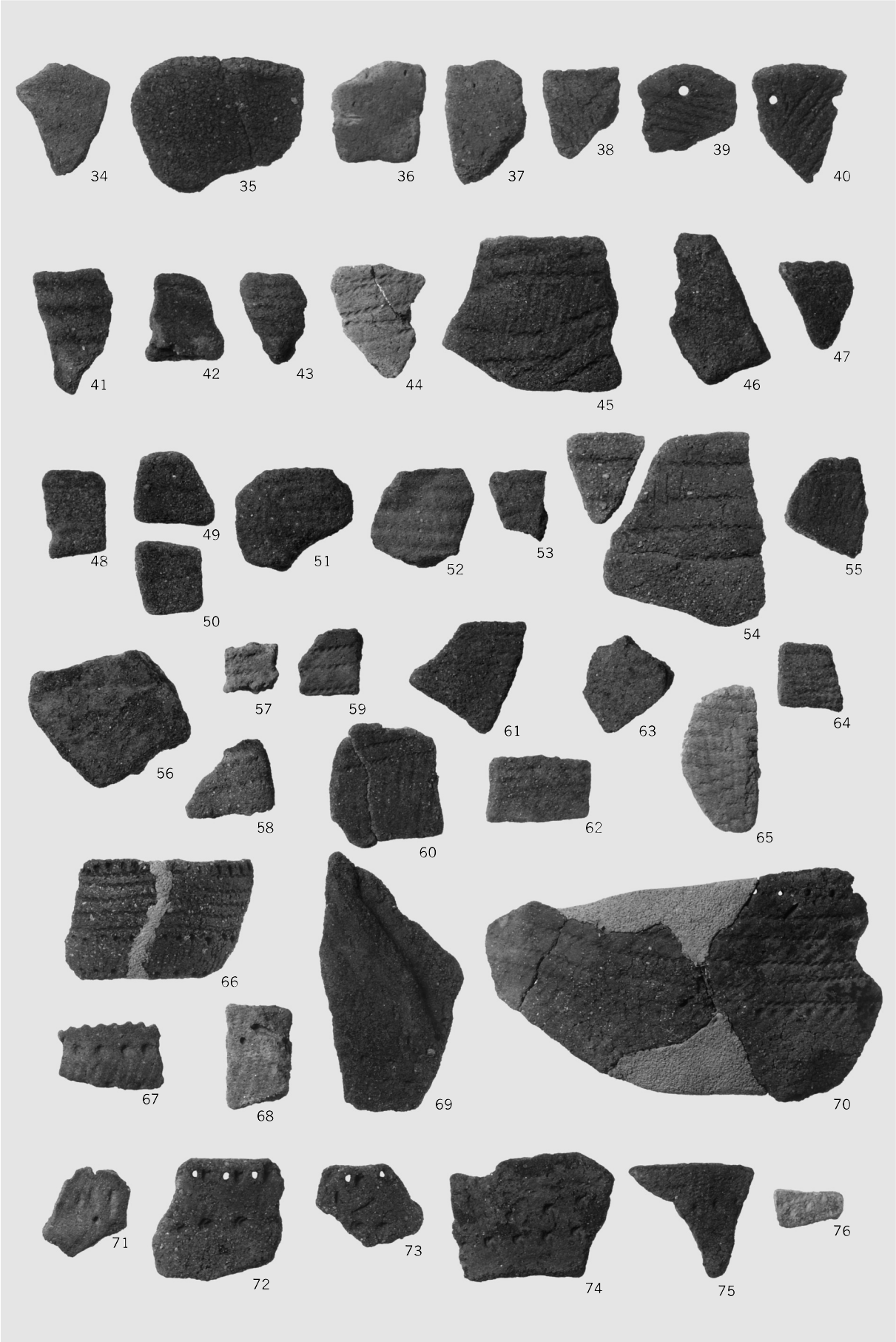


P－5・6・9～11・14、Fc－3・4出土石器

図版22　発掘区出土土器(1)

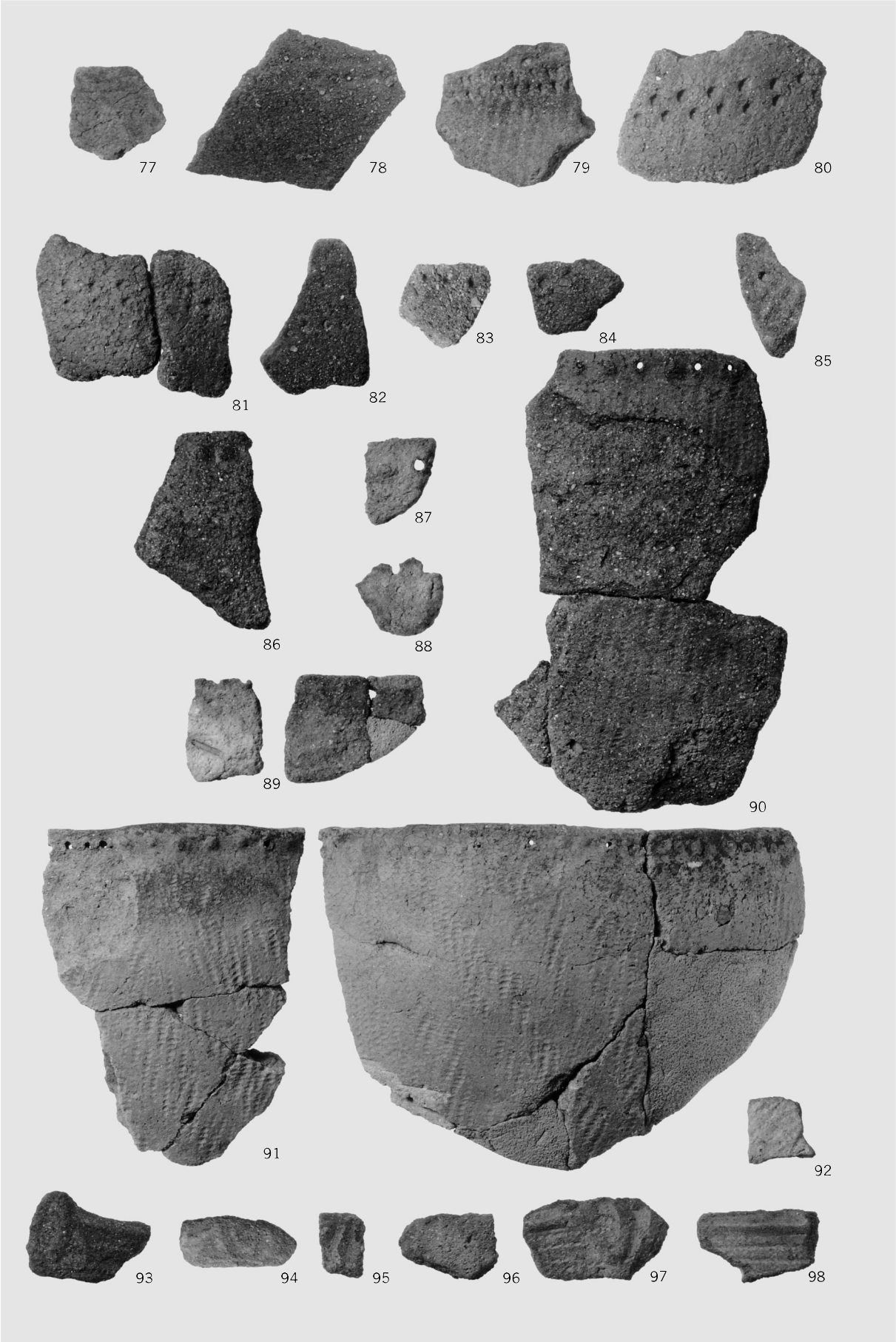


土器

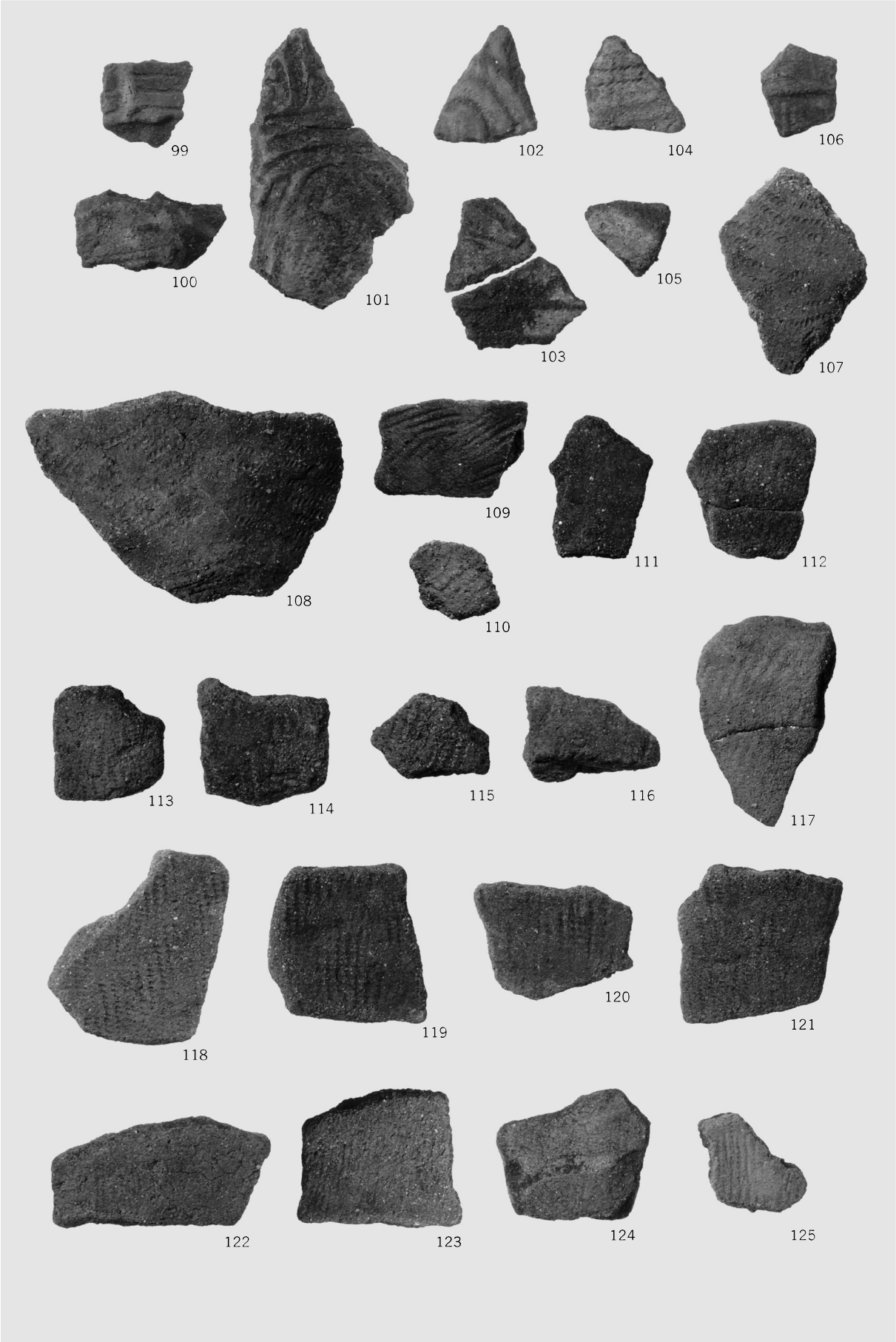

34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76

土器

図版24　発掘区出土土器(3)

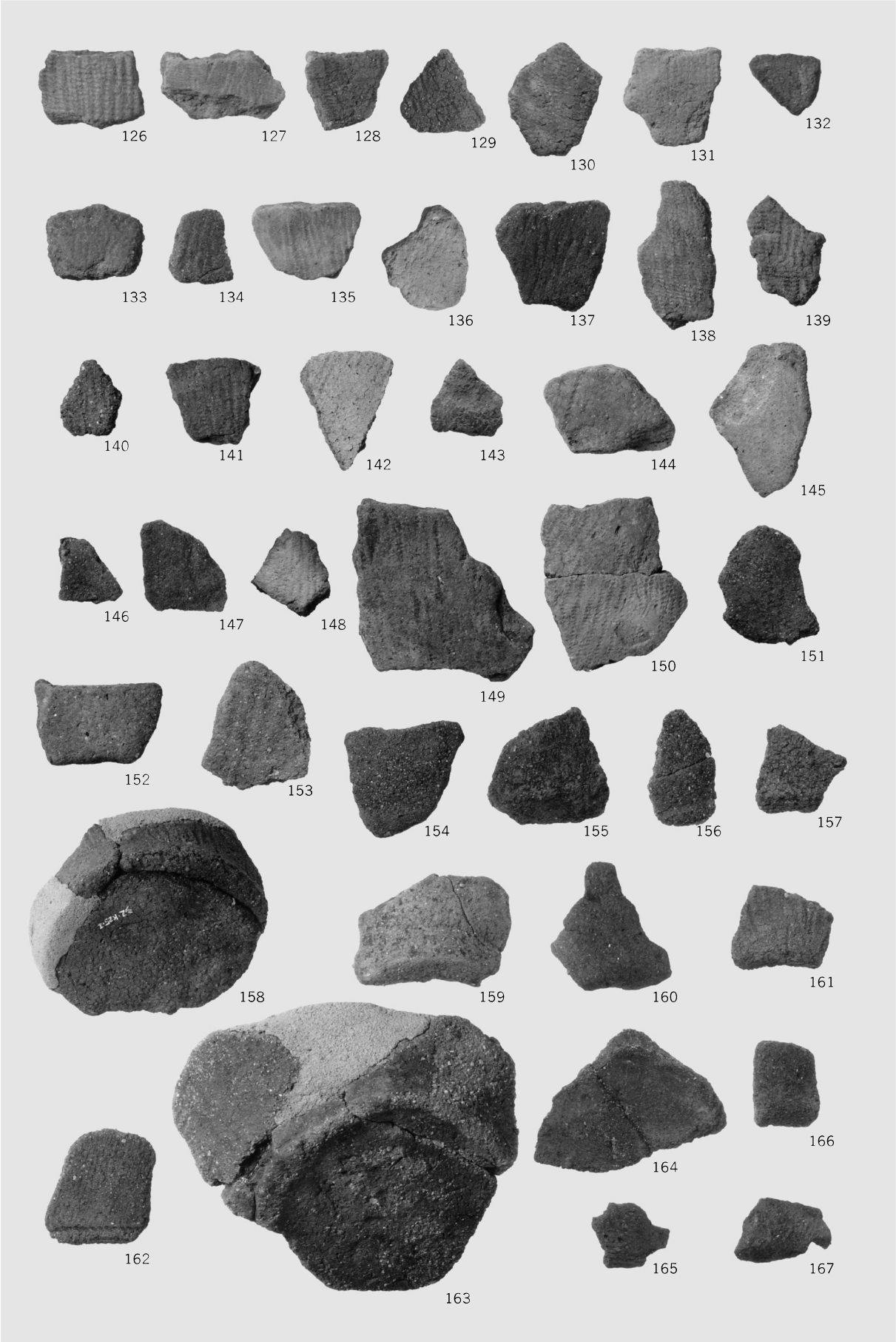


土器

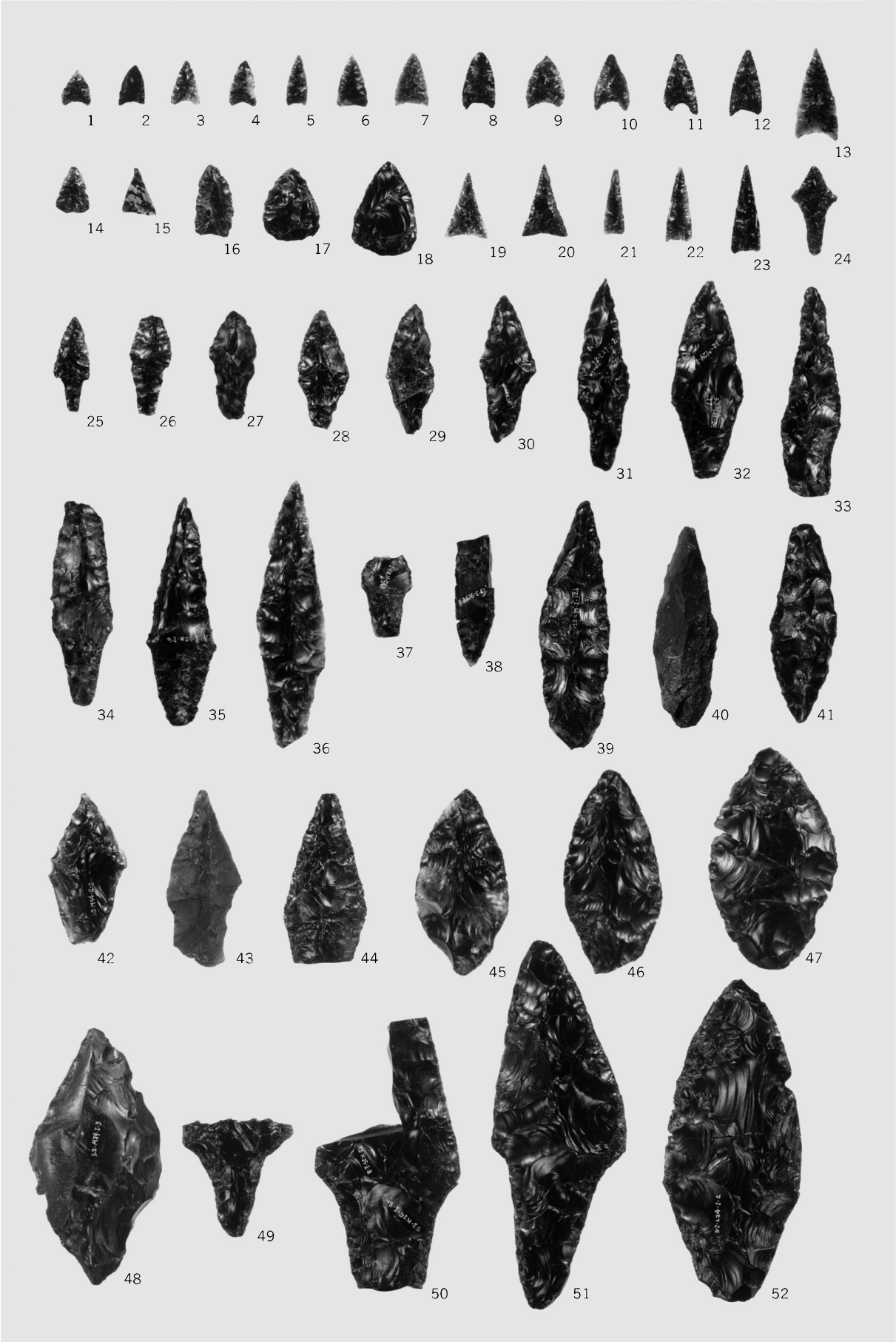

99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125

土器

図版26　発掘区出土土器(5)



土器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52

石鏃・石槍

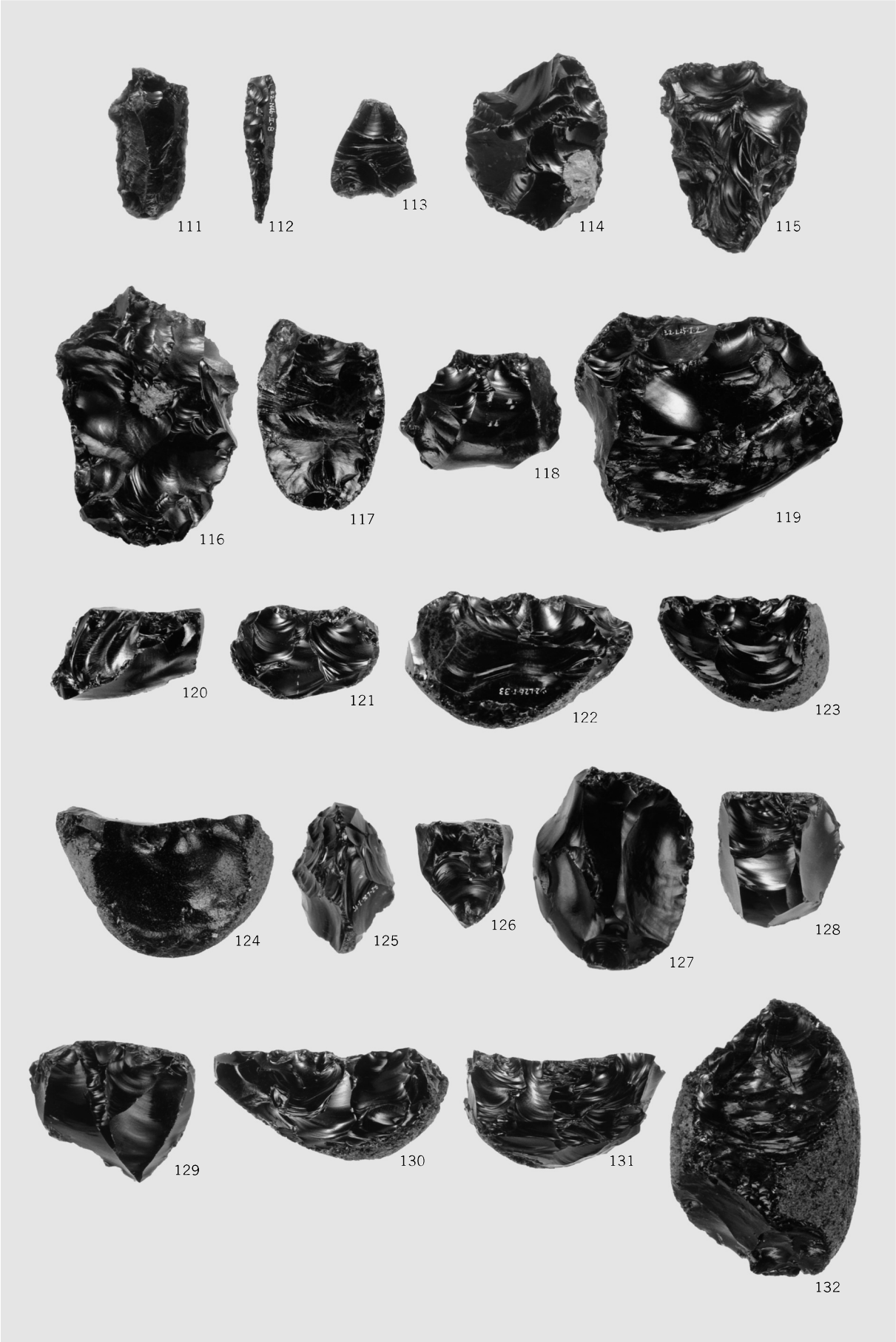
図版28　発掘区出土石器(2)

ナイフ・石槍またはナイフ・つまみ付きナイフ・両面調整石器・スクレイパー

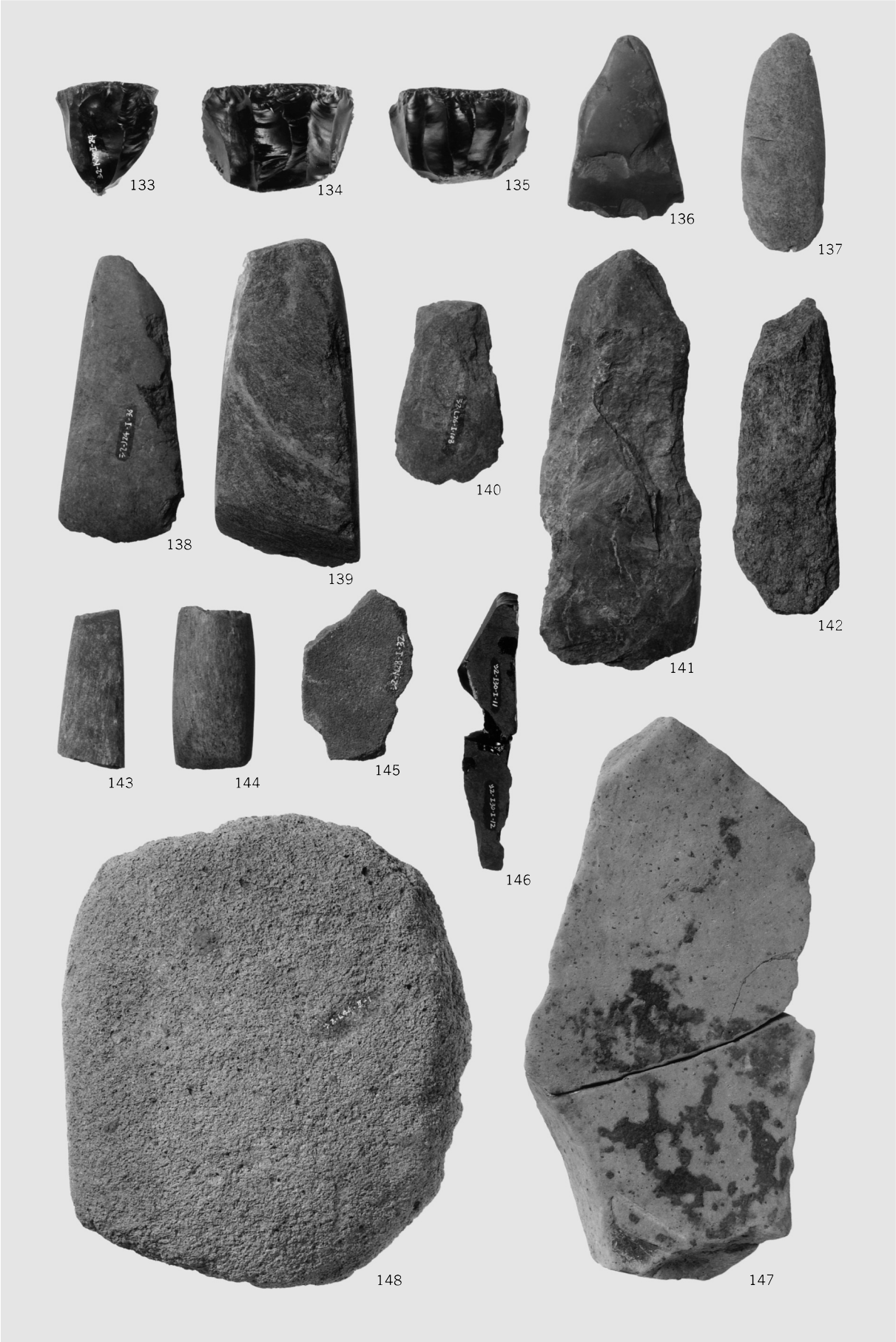
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110

スクレイパー・掻器

図版30　発掘区出土石器(4)



掻器・錐形石器・楔形石器・石核



石刃核・石斧・砥石・原石・台石

報　告　書　抄　録

ふりがな	さかえのいちいせき・しんのがみにいせき
書名	栄野１遺跡・新野上２遺跡
副書名	社名淵瀬戸瀬（停）線（Ｂ７-10）局改工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第213集
編著者名	髙橋和樹・鈴木宏行・直江康雄
編集機関	(財)北海道埋蔵文化財センター
所在地	〒069-0832　江別市西野幌685番地１
発行年月日	2005年３月25日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
栄野１遺跡（さかえのいちいせき）	紋別郡（もんべつぐん）遠軽町（えんがるちょう）栄野（さかえの）402	01555	Ｉ-18-29	44°01′10″	143°27′10″	20040702～20040930	600m²	道路改良に伴う事前調査
新野上２遺跡（しんのがみにいせき）	紋別郡（もんべつぐん）遠軽町（えんがるちょう）栄野（さかえの）411		Ｉ-18-10	44°01′15″	143°27′20″	20040702～20040930	2,140m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
栄野１遺跡	散布地	続縄文時代	フレイク集中　1	続縄文土器 （宇津内Ⅱb式） （後北C_1式） 石鏃、石槍、ナイフ、つまみ付きナイフ、両面調整石器、スクレイパー、掻器、石核	
新野上２遺跡	散布地	縄文時代 続縄文時代	土壙　15 フレイク集中　4	縄文土器 （早～後期） 続縄文土器 （前半） （宇津内Ⅱa式） （宇津内Ⅱb式） 石鏃、石槍、ナイフ、つまみ付きナイフ、両面調整石器、スクレイパー、掻器、錐形石器、楔形石器、石核、石斧、砥石、台石	墓壙１ （後北Ｂ式）

㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第213集

栄野１遺跡・新野上２遺跡

社名淵瀬戸瀬（停）線（Ｂ７-10）局改工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

平成17年３月25日
編集・発行　財団法人　北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832　江別市西野幌685番地１
TEL 011(386)3231　FAX 011(386)3238
印　　刷　株式会社アイワード
〒060-0033　札幌市中央区北３条東５丁目５-91
TEL 011-241-9341　FAX 011-207-6178